

ニコチンハ總テノ植物性神経節ヲ麻痺ス。

アドレナリンハ交感神経末梢ヲ刺戟ス。

アトロピチハ副交感系末梢ヲ麻痺ス。

ムスカリン屬ハ副交感系末梢ヲ刺戟ス。

腸管運動ト藥物トノ關係 腸管ノ運動ハ胃ノ如クアウエルバッフ氏自律神経叢 *Auerbachsche Plexus* 及ビ迷走神經・骨盤神經ヨリ興奮性刺戟ヲ受ケ、交感系ニ屬スル内臟神經ヨリ抑制作用ヲ受クルモノナリ、又副交感系ノ毒物タルヒロカルピン・フゾスチグミンニヨリテ迷走神経末梢ハ刺戟ヲ受ケ運動旺盛トナリ、時ニ強直性收縮ヲ來スニ至ルコトアリ。

アトロピチハ此等交感系ニ關係ナクシテ能ク亢奮セル運動ヲ抑制ス、サリチルサン酸フゾスチグミンハ〇・〇〇五—〇・〇〇一ヲ皮下ニ注入シテ急速ニ腸ノ内容ヲ排除セシムルコトヲ得ベシ、以上記載ノ毒物ハアウエルバッフ氏神經叢及ビ交感系ニ關係ナク單ニ迷走神経ノ末梢ニ於ケル働キニ歸スルモノナリ。

アウエルバッフ氏神經叢ハ刺戟高度ナルモ痙攣ヲ起スニ至ラズ單ニ運動強度且ツ急速トナルノミ、又アトロピチ、ニコチン・アトロピチノ少量ニテハ亢奮シ大量ニテハ麻痺ス。

アトロピチノ腸管ニ於ケル作用ハ特別ノ關係ヲ示スモノニシテ、アウエルバッフ氏神經叢ノ刺戟ト一方迷走神経末梢及ビ骨盤神経末梢ノ麻痺トニヨリ其ノ結果ハ時ニ全ク反對ノ成績ヲ示スコトアリ、又迷走神経ノ緊張高度ナラザルノ場合ニアリテハアトロピチニヨリ週期的ニ又反射的ニアウエルバッフ氏神經叢ノ刺戟ヲ増加シ活潑ナル腸ノ蠕動亢進ヲ見ルモ、之レニ反シテ迷走神経及ビ骨盤神経ノ緊張高度ナル時例之ハ腦刺戟或ハヒロカルピンニヨリテ惹起セル末梢性痙攣、又ハ炎症性刺戟ノ存在スルガ如キ際少量ノアトロピチヲ與フ

ルトキハ異常ノ強直性蠕動ヲ除去シ、傍ラ腸管弛緩及ビ靜止ヲ見、次デ安靜ヲ來スモノナリ。

又腸アトニーノ如キハ袁若越幾斯ノミヲ或ハ之ニ下劑ヲ混用シテ其ノ目的ヲ達スルコトアリ、或ハ強直性便秘即チ腸管ノ一局部ニ於ケル異常收縮例之ハ内肛門括約筋ノ異常收縮、又ハ局部處の腸管ノ痙攣即チ「イレウス」ノ如キ惹テ反射的ニ腸管ノ全般ニ及ボス急性交通不能ノ場合ニアトロピチヲ投ジテ奏效スルモノナリ。モルヒチ及ビ阿片ノ便秘ヲ來スコトハ既知ノ事實ニシテ其原因ハ甚ダ多種多樣レドモ、畢竟胃ノ閉塞ハ爲メニ食餌ノ腸管ニ入ルヲ妨止シ、從テ腸管蠕動ノ減弱、一時的胃及ビ腸分泌ノ抑制ト、竝ニモルヒチニヨル迷走神経末梢及ビ腸管壁知覺神經ノ亢奮性減退及ビ抑制作用ヲ有スル内臟神經ノ緊張亢進ニ基ヅクモノナリ、以上ノ理論ニ徴スレバモルヒチハ腸管ヲ靜止セシムルノ作用ヲ有シ、又阿片ハ急性腹膜炎及ビ急性腸炎ニ際シ缺クベカラザル治療劑トナス、其他モルヒチハ腸ノ分泌ヲ減少セシメ由テ以テ便秘・腸管靜止ヲ助クルモノナリ、終ニ臨ミ臨牀家ノ注意ヲ促サント欲ス、即チ腸管靜止ノ目的ニハ阿片・パントポン及ナルコホン等ハモルヒチニ勝ルモ、鎮痛劑殊ニ注射麻酔ニアリテハモルヒチヲ以テ最良トナスノ點ナリ。

第二節 鎮痛藥 Analgetica.

阿片及ビ其誘導體ハ屢々婦人科疾病ニ使用セラル、疼痛ノ原因末梢ニアルノ際ニハ知覺神經ノ末梢ヲ麻痺セシメ以テ其目的ヲ達シ得ベキモ、婦人科の疾患ニアリテハ炎症ノ爲メ腹膜ヲ刺戟シ或ハ子宮ノ攣縮ニヨリ機械的ニ腹膜ヲ牽引シ以テ疼痛ヲ起サシムルコト尠ナカラズ、從テ是等鎮痛ノ目的ニハ中樞神經ノ亢奮性ヲ減弱セシムルコトナク只疼痛感受能力ヲ脱却セシムルヲ以テ足レリトス、然レドモ是等目的ニ使用スル藥品ハモルヒチ類ナルモ其大量ヲ與フルニ於テハ遂ニ延髓殊ニ呼吸中樞ヲ犯シ未ダ脊髓ノ反射作用ノ全ク消失セザ

ルニ先ダチ生命ヲ危険ナラシム。

(一)阿片類 Opium. 阿片ハ殆ド婦人科疾患ノ藥物療法中缺クベカラザル藥品ト稱スルコトヲ得ベシ、阿片ハ未
熟罌粟 Papaver somniferum 殼ノ乳汁ヲ乾固セシメタルモノニシテ多クノアルカロイドヲ含ミ其有效成分ハ略
々モルヒチニ相當ス、是等藥品ノ作用ハ動物ニヨリ其趣ヲ異ニスルモノニシテ人體ニアリテハ比較的少量ニ
テ安靜トナリ睡眠ヲ來シ又呼吸緩徐トナリ其深度ヲ増ス、故ニ脚氣ニ於ケル呼吸困難ノ場合ニ使用シテ效ア
ルコトアリ、大量ナレバ遂ニ意識ノ混濁ヲ來スニ至ル、其量〇・〇一以下ニアリテハ意識尙ホ醒覺スルニ關ラ
ズ、疼痛ニ對スル知覺ハ既ニ著シク鈍麻シ其他疲勞・痛覺感等ヲ除却セシメ、又少量ニテハ呼吸ヲ靜止シ且
ツ反射性ニ來ル咳嗽中心ニ働キテ之レヲ鎮靜ス、約〇・〇三量ヲ與フレバ腸胃ノ運動ヲ靜止セシムル働キヲ有
スルモノニシテ殊ニ骨盤結締織炎・子宮周圍炎ノ場合ニ缺ク可カラザル藥品ナリ。本劑ヲ以テ睡眠ノ目的ヲ
達セント欲セバ比較的大量ヲ與ヘザルベカラズ。

子宮運動ハ少量ニテハ却テ亢奮セラレ大量ヲ與フル時ハ麻痺セシム。
急性中毒ハ毒ノ侵入後二十分乃至三十分ニシテ漸次酩酊狀ヲ呈シ次第昏睡ヲ來シ呼吸ハ其數ヲ減ジ不正トナ
リ遂ニ間歇スルニ至ルコトアリ、皮膚ハ蒼白冷却シ脈搏緩徐トナリ緊張尙ホ強キモ次第ニ其度ヲ減ジ顔面「チ
アノーゼ」ヲ呈シ瞳孔縮小、體温下降、遂ニ呼吸ノ靜止ヲ來ス。

小兒ニハ極メテ強ク反應スルモ胎兒ハ比較的其抵抗力強キガ如シ、然レドモ分娩直前ニ母體ニ使用スルトキ
ハ胎兒ニ影響ヲ及ボスモノナリ、中毒ニ對シテハ胃洗滌ハ時期ノ如何ニ關セズ必ズ行フベキモノトス、皮下
注射ノ場合モ一度吸取セラレシ後胃中ニ排泄セラルルモノニシテ注射後十五—十八時間後ニ於テモ尙ホ能ク
胃中ニ證明ス、殊ニ〇・四%ノ過マンガン酸加里溶液ハ屢々使用セラル、尙ホアトロヒチハ高度ニ呼吸中樞ヲ

刺戟スルモノナレバ之ヲ極量迄注射シテ解毒ノ效ヲ奏スルコト尠ナカラズ。

慢性中毒ハ屢々婦人ニ見ル所ニシテ殊ニ月經困難ノ患者ニアリテハ本劑ノ連用ニヨリ之ニ罹レルモノ尠ナカ
ラズ、而カモ一度其使用ヲ中止センカ禁斷現象トシテ胸内苦悶・不眠・虛脫等ニ陥ルコトアリ、然レドモ中毒
高度ニ達センカ高度ノ貧血ヲ來シ衰弱シテ遂ニ致死ス。

普通吾人ノ使用スルハ鹽酸モルヒチナリ、本劑ハ絲狀ノ光澤アル結晶ニシテ水又ハ酒精ニ溶解ス。

斯ノ如ク習慣シ易ク殊ニ皮下注射ハ内服ニ比シ更ニ一層習慣ヲ來シ易ケレバ成ルベク其使用ヲ避ケザルベカ
ラズ、余ハ急性脚氣ニシテ血行ノ障礙ニヨリ呼吸中樞ニ血量ノ不足ヲ來シ爲メニ中樞亢奮セラレ呼吸ノ困難
ヲ來セシ場合竝ニスコボラミン混合麻酔ノ場合ニ使用スル外、成ルベク之ガ使用ヲ避クルコトニ力メタリ。

鹽酸モルヒチ Morphinum hydrochloricum

極量一回〇・〇三—一日ノ極量〇・一

注射用トシテハ一%ノ溶液ヲ用フ。

シユナイデルリン氏麻酔ニハ

鹽酸モルヒチ〇・一、臭素水素酸スコボラミン〇・〇〇三、蒸餾水一〇・〇ノ原液ヲ製シ其一ccヲ一回ノ注射量トス、是レ兩者ノ

共同作用 Synergismus ヲ利用シテ鎮痛作用ヲ増加セシメ一方兩者ノ反對作用 Antagonismus ヲ利用シテ呼吸中樞ヲ犯サシメ
ザランガ爲ナリ。但シ四日以上ヲ經タル原液ハ使用スベカラズ。

注意 シユナイデルリン氏ハ理論上理想的ナルガ如キモ時ニ呼吸著シク減少シ或ハ全ク靜止セル例ナキニアラザレバ、使用中呼吸ノ
状態ニ留意シ若シ變動ヲ認ムル場合ハ直ニアトロヒチノ注射ヲ行ヒ傍ラカンフルヲモ注射シ人工呼吸ヲ行フベシ、余ハ此ノ際
アトロヒチノ注射ヲ行ヘリ。

(二)磷酸コデイン Codinum Phosphoricum. (白色ノ結晶ニシテ水ニ溶解ス極量一回〇・一、一日〇・三)モルヒチノ代用品

ニシテ其毒力ハモルヒ子ニ比シ二十分ノ一ナリト云フ且ツ習慣性ヲ來スコト少ナシ、然レドモ時ニ個人的特異性アルヲ知ルベシ、主トシテ鎮靜ノ作用ヲ有スルヲ以テ手術後ニ來リシ肺炎ノ鎮咳藥トシテ使用セラルルコト尠ナカラズ。

ゼネガ(五〇)浸一〇〇〇 磷酸コデイン〇・一 單含八〇〇 三回ニ分服セシム。

(三) **チオニン** *Dionin*. モルヒ子ノエチールエステルニシテ僅微ノ苦味ヲ有スル白色ノ結晶粉末ナリ水ニ溶解ス、作用ハコデインニ類ス、殆ンド習慣スルコトナシ、月經困難・子宮周圍炎等ノ疼痛ノ際使用ス。

チオニン〇・一 蒸餾水一〇〇トシ此一ccヲ皮下注射用トス。

(四) **鹽酸ヘロイン** *Heroinum hydrochloricum*. 白色ノ結晶性粉末ニシテ水及ビアルコホルニ溶解ス、少量ニテ呼吸中樞ニ働キ呼吸ヲ緩徐ナラシメ且ツ深呼吸ヲ營マシムルノ働キヲ有シ其他鎮咳ノ效アリ、然レドモ少量ニテ既ニ延髓ヲ犯シ連用スル時ハ習慣性ヲ來スコトアリ。

極量一回〇〇・一。一日〇〇・三。

注射用トシテハ一%ノ液ヲ用ヒ、内服トシテハ〇・〇一ヲ散劑トナシ用フ。

(五) **阿片** *Opium*. 褐色ノ無結晶體ニシテ其味苦ク一種ノ臭氣ヲ有ス、現今其中ヨリ二十種ノアルカロイドヲ分離セリ、凡テノアルカロイドハ五%ノモルヒ子、六%ノナルコチンヲ主トナシ他ハババウエリン・コデイン等ナリ。阿片中ニハ一〇%モルヒ子ヲ含ミ其作用略々モルヒ子ニ一致スルモ阿片中ニ含マル植物性粘液ノ如キハアルカロイドヲ抱合シテ以テ其吸收ヲ緩慢ナラシムルニヨリ、内用ニヨリアルカロイドヲ腸ノ深部ニ達セシメ腸ノ運動ヲ靜止セシムルノ働ハモルヒ子ニ優ルモ、神經中樞ニ働キ以テ疼痛ヲ鈍麻セシムルノ作用ハ却テモルヒ子ニ劣ルモノト云フベシ、是レナルコチンノ如ク呼吸中心ニ興奮性ニ作用スル副アルカロイドヲ含有スルヲ以テナリ。

極量一回〇・二五。一日〇・五。

婦人科的疾患ニハ必要缺クベカラザル藥品ニシテ子宮及ビ附屬器竝ニ腹膜ノ炎症ノ際、其ノ急性時期ニ普ク使用セラル、其他盲腸周圍炎ノ如キニハ殆ンド特效劑ト見做シ得ベシ。

余等ハ阿片〇・一。乳糖一〇ヲ一日三回ニ分服セシム。

阿片丁幾。阿片一〇、酒精、水各五〇ノ割合ノ液ニシテ赤褐色ヲ呈シ少シク臭氣ヲ有シ、苦味アリ。

極量一回一・五。一日五〇。

阿片ノ坐藥トシテ販賣セラルルモノハ一箇中〇・〇六ノ阿片ヲ含メルモノト知ルベシ。

(六) **ナルコチン** *Narkotin* **ババウエリン** *Papaverin*. 腸運動ノ靜止作用強クシテ腦ニ於ケル働キハ著シカラズト又近來ノ研究ニヨルトキハナルコチンハ呼吸中樞ヲ亢奮セシムルノ作用アリト云フ。

(七) **パントポン** *Pantopon*. 阿片中ノ全アルカロイドヲ析出シテ鹽酸鹽トナシタルモノニシテ其一半ハモルヒ子、残り四〇%ハ他ノアルカロイド、其他ハ結晶水及ビ鹽酸ニシテ褐色ノ結晶性粉末ナリ、水ニ溶解スルモグリセリンヲ加フレバ溶解一層可ナリ、而シテモルヒ子竝ニ阿片ノ兩特性ヲ兼有スト云フ、尙ホパントポン〇・〇二ハモルヒ子〇・〇一ニ相當ス、而シテ鎮痛・鎮咳・催眠ノ作用強キモ、腸ニ於ケル靜止ノ働キハ却テ阿片ニ劣レルガ如シ、又呼吸中樞ニ於ケル働キハモルヒ子ニ比シ甚ダ弱シ。

近時環球中ニ入レスコボラミントノ混劑ヲ製シ注射用トシテ販賣セラル。

故ニ余ノ教室ニテハ手術時ニ於ケル麻酔竝ニ單ニ鎮痛ノ目的ニハ本劑ヲ使用シ、腸蠕動ヲ靜止セシムル爲メニハ阿片ヲ使用セリ。

(八) **スコポラミン** Scopolamin $C_{17}H_{19}NO_4$ [同極量0.0005 日極量0.0015] Atropa Belladonna 中ニ少量ニ、又此等ノ種屬中ニ

含有セラルルアルカロイドニシテ、往時ハヒオスチン Hyoscin ト稱セシガ現時ハスコポラミントシテ知ラルルニ至レリ、本劑ハ瞳孔及分泌ニ關スル末梢作用ハアトロヒチニ酷似スト雖モ、治療上ニ於ケル意義ハ大ニ腦ノ或ル中樞ニ原發性麻痺ヲ起スノ點ニアリ、是レアトロヒチニ勝レル處ニシテ正ニ治療上ニ應用セララルノ基礎タリ、又興奮期ニシテ他ノ睡眠劑及ビ阿片等ノ無効ナル場合ニ能ク奏效スルモノナリ。

動物試驗上家兔ハ何等麻痺作用ヲ見ザルモ犬ニ有效量ヲ注入スルトキハ暫次ニシテ稍々深キ睡眠ヲ來スモノナリ、然レドモ睡眠前既ニ不安トナリ、錯覺及ビ倒錯ノ状態ヲ現シ歩行モ亦不安トナリ、振動ヲ來シ粗暴ノ極遂ニ疲勞ト共ニ睡眠ヲ來ス、人體ニアリテハ中樞作用過敏ナルヲ以テ〇・〇〇〇五ニテ既ニ安靜トナリ、瞳孔開大・調節不能、口腔・咽頭ニ乾燥ノ感ヲ覺ユルニ至ル。

又睡眠ノ原因ニ就テハ爾他睡眠劑トハ自ラ其ノ作用ヲ異ニス、即チ運動中樞ノ興奮ヲ除去シ以テ睡眠ヲ促スモノニシテ、初メ筋肉ノ弛緩ヲ來シ運動ノ不安ヲ靜メ患者ハ受働ノ位置ヲ取り呼吸ハ聲門ノ弛緩ニヨリ喉鳴ヲ發シ言語・運動障礙セララル、然レドモ此ノ期ニアリテハ尙未ダ精神意識ヲ存シ之レヨリ意識ノ倒錯・錯覺 Delirium ヲ起シテ漸次睡眠状態トナルモノナリ。

本劑使用上ニ伴フ危險ハ呼吸中樞ヲ過度ニ犯シテ麻痺ヲ來シ或ハ心臟ノ虛脱ヲ招クコトナリ、然レドモ一般的ニ論ズレバ睡眠量ト致死量トノ間隔甚ダ遠ク從テ以上ノ危險ハ比較的稀レニ遭遇スルニ過ギザルベシ、犬及ビ人體ノ有效最小限量ハ一mgニシテ致死量ハ一瓦トナスモ、尙多量ニ耐ヘ得ルモノナリ、然レドモ個人的差異アルヲ以テ患者自己モ該藥ニ對スル抵抗力ニ甚ダシキ差アルノミナラズ、其作用ニ不同アル所以モ亦理解スルニ難カラザルベシ。

ペラドンナハスコポラミント共ニアポアトロヒント稱ス、此ハ瞳孔ヲ擴張スルノ力弱クシテ中樞ニ毒力強キアルカロイドヲ含有シ、以テスコポラミント不純トナス、斯ク不純物ヲ混合セル場合ハ過滿飽和里液ノ二三滴ヲ加フルトキハ還元作用ニヨリテ褐色ヲ呈スルニ至ル。

(九) **酸化樟腦** Oxycamphora 白色ノ結晶性粉末ニシテ冷水ニハ僅カニ、熱水ニハ比較的大量ニ、アルコホルニハ容易ニ溶解ス、五〇%ノアルコホル溶液ハオキサホールのトシテ販賣セララル、心臟機能ヲ亢進セシメ傍ラ呼吸中樞ノ興奮性ヲ鎮壓ス、往々呼吸困難ノ場合ニ使用セララル。

オキサホール一・〇ヲ三回ニ分服セシム。

第三節 利尿藥 Diuretica.

利尿劑ハ婦人科並ニ産科的疾病ニ屢々使用セララル藥劑ナリ、從テ是等藥品ノ作用ヲ研究スルコト亦徒勞ニアラザルベシ。

尿ノ成分タル水及ビ血中ニアル晶様質ハ、一度腎臟皮質ノ絲綫體ニヨリ濾出セラレ之ガ主トシテ髓質中ノ直細尿管ヲ通過スル間ニ水及ビ糖分ハ再ビ吸取セラレ、傍ラ皮質ノ曲細尿管及ビ上行直細尿管ノ上皮細胞ヨリ尿酸・磷酸・鹽酸及ビ重金屬ノ鹽類ヲ分泌シ爰ニ甫メテ尿ノ性質ヲ得ルニ至ルモノナリ。

尿量ヲ増加セントセバ絲綫體ノ濾出ヲ増シ傍ラ細尿管ノ吸收ヲ抑制セザルベカラズ、尿ヲ濾出スルニハ水銀壓ニテ約四十密迷以上ノ腎動脈ニ於ケル血壓ヲ要シ之ヨリ以下ノ血壓ニテハ其濾出不可能ナリ、然レドモ腎靜脈ノ閉鎖スルガ如キコトアランカ、血壓ハ如何ニ亢進スルモ絲綫體ニ來ルベキ血液ノ交代ナキガ爲メ濾出作用ハ自ラ停止セララルニ至ル、故ニ縱令血壓ハ高カラザルモ腎動脈ト腎靜脈トニ於ケル血壓ノ差著ルシケレ

血液ノ灌流速カニシテ絲絨體ニ來ルベキ血液ノ更流旺盛シテ濾過作用モ亦著ルシ、其他血液粘稠度ノ下降モ亦同様ノ働キヲナスモノナリ、血液中ニ水分増加セシ場合ニハ血液中ノ膠樣質ノ濃度稀薄トナルヲ以テ比較的低キ血壓ニテ水分ノ濾過ヲ許スモノニシテ是レ亦尿量ノ増加ヲ來スモノナリ。

若シ細尿管上皮ニヨリ吸収セラレザルカ若シクハ吸収セラレ難キ物質ノ尿中ニ存在セルトキハ、尿ノ水分ハ吸収セラレ難ク從テ尿量ノ増加ヲ來スベシ。

吾人ノ屢々使用スルカフェイン・テオブロミンノ如キプリン誘導體ハ他部ノ血管ニ關係ナク主トシテ腎臟ノ血管ヲ擴張セシムルノ働キアリ、從テ利尿ヲ來スニ至ルベシ。

(一)カフェイン Caffeinum. ハ咖啡豆中ニ二%、茶中ニ四%含有セラレ、白色ノ光輝アル鍼狀結晶ヲ形成シ八十分ノ水ニ溶解シ其味少シク苦味ヲ帶ビ反應ハ中性ナリ。

一回極量〇・五。一日一・〇

カフェインノ作用ハ大略左ノ如ク解釋スルコトヲ得ベシ。

- 一、血管運動神經中樞ヲ興奮セシメ動脈ノ收縮ヲ來シ血壓ヲ亢進ス。
- 二、心臟ニ對スル働キハ多樣ナリ。
 - a、心臟ノ抑制神經ナル迷走神經中樞ヲ刺戟シテ脈搏ヲ緩徐ナラシム。
 - b、末梢性心臟神經節細胞ヲ刺戟シテ脈搏ヲ増加セシム、此a b兩様ノ作用ハ場合ニヨリ個人的ニ差異アルモノニシテ或ハ前者ノ如ク或ハ後者ノ如ク表ルルモノナリ。
 - c、心筋ニ働キテ擴張性ヲ減ジ收縮ヲ増シ脈搏小且ツ血壓ヲ下降ノ見ルコトアリ。
 - d、冠狀動脈ノ擴張ヲ見ルコトアリ。

主トシテ腎臟血管其他腦及ビ心臟冠狀動脈ヲ擴張シ他部ノ血管ハ寧ロ之ヲ收縮セシム、故ニ血液ハ是等擴張セル血管中ニ集注シテ腎臟皮質中ノ絲絨體ノ濾過作用ヲ増進シ以テ利尿ノ働キヲ顯スモノナリ、故ニ絲絨體ニ病變アリトセバカフェインノ働キハ亦望ムベカラズ、其他カフェインハ細尿管ニ於ケル吸收ヲ抑制スルノ働キヲ有スト稱スル人アリ。

カフェインハ時トシテ利尿ノ效ヲ現ハサザルコトアリ、是レ血管運動中樞ニ働キ全身血管・腎臟血管何レモ共ニ收縮ヲ來タスニ由ルナリ、斯カル際ニハ抱水クローラールノ如キ藥物ヲ併用シテ利尿ノ目的ヲ達スベシ、其他カフェインハ尿中ニアルカリ鹽類ノ排泄ヲ多カラシム。

心臟ニ對シテハ迷走及ビ心臟運動催進神經ノ末梢ヲ刺戟スルヲ以テ時ニハ速脈トナリ時ニハ遲脈ヲ來タス、心臟機能衰弱セル際カフェインヲ與フルトキハ血管中樞ヲ刺戟シ、内臟神經配下ニアル血管ヲ收縮セシメ此部ノ血液ヲ驅除シテ心臟ニ來タラシメ冠狀動脈ノ擴張ニヨリ其榮養ヲ復セシメ、又一方ニハ心筋自己ニ働キテ其收縮ヲ増進シ心機能ヲ回復セシメ血壓ヲ高メ傍ラ利尿ノ働キヲナス。

吾人ノ普通使用スルカフェイン誘導體ハ大略左ノ如シ。

サリチル酸ナトリウムカフェイン Caffeino-Natrium salicylicum.

極量一回一・〇。一日三・〇

白色無結晶ノ粉末ニシテ二分ノ水ニ溶解ス。

注射用トシテハ二〇%ノ液トシテ用フ。

(二)安息香酸ナトリウムカフェイン Caffeino-Natrium benzoicum. 白色無結晶體ニシテ僅微ニ苦味ヲ感ズ、水ニ溶解シ易キガ故ニ注射ニ適ス、余ハ屢々大手術後心臟機能ノ微弱トナリシ場合ニ之ガ注射ヲ行ヘリ。

極量一回一〇〇。 一日三〇〇。

(三) **テオブロミン** Theobromin. 中樞ヲ刺激スル作用ナキヲ以テ利尿作用ハカフェインニ比シ確實ナリ、然レドモテオブロミン其物ハ水ニ溶解シ難ケレバ其ノ鹽類ヲ用フ。
 サリチール酸ナトリウムテオブロミン Theobrominum natriosalicylicum. チウレチン Diuretin. ハ白色ノ粉末ニシテ水ニ溶解シ有力ナル利尿劑ナリ、腎臟實質ヲ刺激スルコトナク主トシテ腎臟血管ニ働キ之ヲ擴張セシムルヲ以テ、實質炎ノ場合ニモ亦之ヲ使用スルコトヲ得ベシ。
 用量一日一〇一五〇。

妊娠腎・脚氣・腎孟炎等ノ場合ニ使用スルモ時ニ嘔氣嘔吐ヲ來シ食慾ヲ減退セシムルコトアリ。
 (四) **テオフィリン(テオチン)** Theophyllin(Theocin.) 無色ノ結晶體ニシテ水ニ溶解シ難ク利尿速カナルモ時ニ中樞刺激ノ作用アルコトアリ、〇・五ヲ常量トシ持長ヲ避クベシ、醋酸加里モ亦屢々利尿劑トシテ使用セラ、本劑ハ體內ニテ碳酸鹽類トナリ組織内ニ竄入スルコト難シ、之ニ反シ組織中ヨリ水分ヲ奪取シ腎臟ニテ濾過モラルルヤ細尿管ノ吸收作用ヲ抑制シ利尿ヲ來スベシ。

第四節 下劑 Kathartica.

産婦人科ニハ緩下劑 Laxativa. ヲ應用スベキ場合甚ダ多ク從テ其性質ヲ研究スルコト亦必要ノ事項ニ屬ス、下痢ハ腸蠕動ノ昂進セル場合或ハ腸管ノ吸收作用ノ抑制セラレタル場合若シクハ兩者ノ共働作用ニ因ルモノナレバ、下劑ハ是等ニ對スル働キヲ有セザルベカラズ。

産婦人科ニテ屢々使用セラ、ルル藥品ハ鹽類下劑中硫酸マグネシヤ・人工カルルス泉・假性マグネシヤ等ナリ、是等鹽類ハ腸壁ヨリノ吸收惡シク且ツ自己ノ溶解水ヲ分離セシメズ或ハ體內ヨリ水分ヲ奪取シ而シテ吸收ヲ抑制スルガ故ニ腸ノ内容ヲ流動性ナラシメ以テ下痢ヲ起サシム。
 以上ノ鹽類ハ腸管粘膜炎ニ蛋白ヲ沈澱セシメ或ハ粘膜炎ニ薄皮ヲ形成シ以テ其吸收力ヲ妨グルモノナルベシ
 (一) **硫酸マグネシウム(瀉利鹽)** Magnesium sulfuricum. 無色ノ結晶ニシテ水ニ溶解シ易ク苦味アリ、普通使用ノ方箋ハ

- 硫酸マグネシヤ一〇〇 苦丁一〇 單舎五〇 水一〇〇〇
 - 硫酸マグネシヤ一〇〇 稀鹽酸一〇 單舎五〇 水一〇〇〇
 - (二) **人工カルルス泉鹽** Sal. Carolum factum. (乾燥硫酸ナトリウム四七、硫酸カリウム二、食鹽一五、重碳酸ナトリウム三六) 白色ノ粉末ニシテ鹹味アリ、食鹽ヲ含ムヲ以テ利尿ノ效アリ、一回二・五—一五・〇ヲ使用ス。
 - (三) **煅製マグネシヤ** Magnesia usta. 白色ノ輕キ粉末ニシテ水ニ溶解シ難シ、常習性便秘アル婦人ニハ左方ヲ處ス。
- 煅製マグネシヤ一・五、チアスターゼ〇・五ヲ三回ニ分服セシム、本劑ハ甚ダ多量トナルヲ以テ苦味丁糖二三滴ヲ加ヘ混和スルトキハ其容量ヲ減ゼシメ服用シ易カラシム。

植物性下劑 Vegetabilische Abführmittel.

局處刺激ノ比較的僅微ナルモノヲ選ミ之ヲ腸粘膜炎ニ働カシメ之ニ依テ其蠕動ヲ亢進シ以テ下痢ノ目的ヲ達セシム、而シテ吾人ノ理想トスベキハ局處的刺戟ヲ腸壁ニ於テ甫メテ行ハシムベキノ點ナリ、故ニ内服藥品ハ胃酸ニヨリ分解溶解セラ、ルルコトナク腸管ニ達シテ溶解スルカ若シクハ腸管内ニテ分解セラレ甫メテ其刺戟

性ヲ發起スルモノナラザルベカラズ、且亦其分解ノ緩慢ナルモノタルヲ要ス、然ラザレバ其效力單ニ腸管ノ上部ニ止マリ下劑ノ作用ヲナサザルコトアリ、其他藥劑ハ吸收セララルトモ其毒作用甚シカラズ且ツ其刺戟ノ可成の緩和ナルモノヲ選ムベシ。

(四)蓖麻子油 Oleum Ricini 澄明淡黄色ノ濃厚液ニシテ一種ノ臭氣アリ、服用後嘔吐嘔氣ヲ來スコトアリ、是レ一ハ其惡臭ニヨルモノナルモ一ハ胃中ニテ既ニ分解シ蓖麻子油酸ヲ出シテ胃粘膜ヲ刺戟スルニ因ル。

蓖麻子油ハ腸中ニテ腴液ニヨリ鹼化セラレ蓖麻子油酸ヲ遊離シ腸ノ蠕動ヲ亢進セシメ以テ下痢ヲ起サシム、本劑ハ根本的ニ腸ノ内容ヲ除クニ適セリ、綿馬チモール等ヲ服用セシ際ニハ是等ヲ溶解吸收セシメテ中毒ヲ來セシ例アリ、臨牀家ノ注意ヲ要ス、普通一五・〇—三〇・〇ヲ内服セシムル時ハ軟便ヲ通シ腹痛ヲ起スコト稀レナリ、手術前ニ腸ノ内容ヲ除去スルノ目的ニ之ヲ使用ス。

(五)巴豆油 Oleum Crotonis 帶黄色濃厚ノ液ニシテ不快ノ臭氣ヲ有スル脂肪油ナリ、刺戟甚ダシク腸ニ入り腸液ニヨリ鹼化セラレ巴豆油酸ヲ分離シ激シキ水様ノ下痢ヲ來タス、婦人科的疾患ニ用ユルコト稀レナルモ、産科ニテ妊娠脚氣ノ場合ニ爾他下劑ノ奏效セザル際ニ使用スルコトアリ。

一滴ヲ乳糖ニ混ジ頑固ナル便秘ニ使用ス。

(六)ヤラツバ根 Radix Jalapae 小腸ニ至リ胆汁ニヨリ分解セラレテ其效力ヲ表ハスモノナリ、故ニ胆汁ノ缺乏スルトキハ效ナキモノトス、産科・婦人科ニ於テハ之ヲ單獨ニ用フルコト少ナク蘆薈・鐵ト配合シテ通經劑トセリ。

ヤラツバ〇・二 蘆薈〇・二 乳酸鐵〇・五 爲丸一日三回服用。

蘆薈ハ大腸ノ下部ニ働キ腹痛ハ比較的輕シ、婦人常習便秘ニ效アルモ大量ニ用フルトキハ骨盤内充血ヲ來ス

ヲ以テ附屬器炎症ノ場合ニハ之ヲ避ケザルベカラズ。

(七)アペリトール Aperitol アペリトールハフェニールフタレインノ異性縮草酸エステルト醋酸エステルトノ等量ヨリ成リ、白色水晶様ノ粉末ニシテ水ニ溶解シ難クアルコホル・エーテルニ良ク溶解ス、全ク無味無臭ニシテ之ニ稀鹽酸ヲ加フルトキハフェニールフタレインヲ遊離ス。

アペリトールハ他ノ下劑ト其性ヲ異ニシ、腸ノ蠕動ヲ鎮靜セシムベキ縮草酸ト竝ニ獨リ大腸ニ於テノミ働キ而カモ比較的顯著ノ催下作用ヲ有スルフェニールフタレイントノ結合ニヨリテ生成セラレタル藥劑ナルヲ以テ、内服ニヨリ敢テ激シキ腹痛ヲ惹起スルコトナク緩下ノ目的ヲ達シ得ルモノナリ。

本劑ハ一個〇・二瓦入ノ錠劑トシテ販賣セラル、余ハ就眠前ニ該錠二個ヲ頓服セシム、多クハ翌日多量ノ便通アルモノトス、時ニハ多少ノ腹痛ヲ訴フル者アリ、又一回ニテ效ナキトキハ第二日ニ同量ヲ與フルトキ多クハ奏效スルガ如シ、近時ラキサトール Laxadol トシテ本邦ノ製品アリ。

(八)イステチン Istinin (Dioxyanthracinon) 本劑ハ腸内ニ於テナトリウム鹽トナリ溶解シテ緩下ノ作用ヲナス腸管ヨリ吸收セラレ難ク約八〇%ハ便ト共ニ排泄セラル、内服後四時間乃至六時間ニシテ排便作用アリ、通常一錠(〇・三)ヲ用フ。

注意。服用後尿ハ一時赤色ヲ呈スルヲ以テ誤メ患者ニ警告シ置クベキモノトス。

下劑使用上二二ノ注意

下劑ノ作用ニハ三種アリ、第一ハ腸ノ蠕動ヲ旺盛ナラシムルモノ、第二ハ腸ノ水分吸收ヲ制止スルモノ、第三ハ腸ノ分泌ヲ増加セシムルモノナリ、以上三者ハ相互其關係ヲ有スルモノニシテ、腸ハ其蠕動亢進シ爲メ

ニ吸收スルノ暇ナキニ至ルモノノ如シ、其他下劑ニハ重ニ小腸ニ作用スルモノト或ハ主トシテ大腸ニ作用スルモノトアリ。

急速ニ腸ノ内容ヲ排除スルニハ硫酸マグネシウム、硫酸ナトリウム等ヲ可成稀薄ノ液トシテ大量ニ與フベシ、五〇%ノ硫酸ナトリウムノ溶液ハ其溶水多量ナルヲ以テ是レ以上組織内ヨリ水分ヲ吸收スルノ必要ナク多量ノ水様内容ノ爲メ腸ノ蠕動ヲ促シ約一二時間ノ後水瀉ヲ起スベシ、之ニ反シテ鹽類下劑ノ濃厚液ハ腸ヲ刺戟シテ分泌ヲ増加セシメ之ニヨリ自己ノ稀釋ヲ促シ以テ下劑ノ作用ヲ起スガ故ニ、内服後十時乃至二十時間ヲ要スルコトアリ從テ體組織内ノ水分ヲ吸收ス、故ニ浮腫ノ場合ニハ一〇乃至二五%ノ溶液ヲ用フベシ。下劑ノ用量少ナキカ若シクハ阿片等ヲ與ヘテ腸ノ蠕動ヲ抑制スルトキハ徐々ニ吸收セラレ、下劑ノ作用ヲ表ハサズ却テ利尿作用ヲ見ルコトアリ。

重質煨製マグネシヤハ制酸緩下ノ作用アリ、腸内ニテ炭酸瓦斯ト結合スルヲ以テ鼓腸ノ場合ニ效果アルコトアリ。

甘汞ハ鹽類下劑ノ作用アリ、之レハ消化管中ニテ徐々ニ溶解シ腸液ノ分泌ヲ促シ傍ラ腸壁ノ神經節ヲ刺戟シ腸ノ蠕動ヲ起シ下劑ノ目的ヲ達シ其他腸ノ内容防腐ノ働キアリ、若シ内服後五、六時間ニシテ奏效セザルトキハ速ニ他ノ下劑ヲ與ヘザレバ吸收セラレ中毒スルコトアリ、殊ニ梅毒ニ甘汞ヲ與ヘテ口内炎ヲ起セシ例少ナカラズ、其他腸ノ蠕動ヲ抑制スベキ藥品例ヘバアトロヒチ、ペラドンナノ如キヲ與フベカラズ、又アンチピリンヲ與フルトキハ其作用ヲ失フノミナラズ時ニ有毒體ノ生ズルコトアリ。

リチネ油・クロトン油・ヤーラバハ主トシテ小腸ニ働クモノニシテ、ヤーラバハ小腸内ニテ膽汁ニヨリ分解セラレ以テ作用ヲ起スモノナルガ故ニ膽汁ノ缺乏セル場合ニハ效ナキモノナリ、センナ・大黃・蘆薈・カスカラ

等ハ凡テ「アントラキノーン」ノ誘導體ニシテ腸液又ハ膽汁ニテ分解セラレ主トシテ大腸ニ至リ作用スルモノナリ、是等ノ藥物ハ吸收セラレルトキハ乳汁ニ分泌セラレルヲ以テ時ニ乳兒ニ下痢ヲ起サシムルコトアリ、尿中ニハウリソファン酸トナリ排泄セラレルヲ以テアルカリヲ加フルトキハ赤色ヲ呈ス。

第五節 局所麻醉藥 Lokale Anästhetica.

局所麻醉ハ或一局所ノ知覺麻痺ヲ起サシムルモノナレバ部域比較的大且ツ深部ニ達スベキ手術ニアリテハ多クハ效果不十分ナリ、從テ婦人科ノ手術ニ應用ノ範圍廣カラズ。

(一) 厥冷麻酔 婦人科手術ニ用フルコト極メテ稀ナリ、只神經性ノ婦人ニ腰椎麻酔ヲ施スニ際シ腰部ノ穿刺部域ヲ一時麻痺セシムルニクロールエチール Aethylum Chloratum ヲ使用スルコトアリ、本劑ハ開閉自在ナル金屬製ノ栓ヲ有スル硝子壺ニ入レ販賣セラレルモノニシテ、其沸騰點僅カニ十二度位ナレバ皮膚ニ噴出セシムレバ速ニ蒸發シ以テ其部ノ組織ヨリ温ヲ奪取シテ冷却セシメ、其部域ニ於ケル知覺神經ヲ一時性ニ麻痺セシメ穿刺ノ際無痛ニ手術ヲ遂行セシム。

(二) コカイン Cocain. コカイン屬中最屢々吾人ニ使用セラレルハ酸鹽コカイン Cocainum hydrochloricum ナリ、本劑ハ白色ノ稜柱狀結晶ニシテ水ニ溶解シ易シ、該溶液ヲ粘膜面ニ塗布スル時ハ一時性ニ痛覺ヲ失ハシム、然レドモ温覺ヲ奪フコト比較的小ナシ、其他局部ニ貧血ヲ來タシ分泌ヲ減少ス、食鹽水ニ溶解シ之ヲ皮下ニ注射スル時ハ一時知覺神經ノ末梢ニ働キ該部ノ知覺ヲ脱却セシムルモ、血行淋巴流ニヨリ洗去セラレルヤ忽チ知覺恢復ス、而シテ吸收セラレタルコカインハ中樞ニ働キ初メハ呼吸頻數・皮膚蒼白・瞳孔散大・速脈トナリ次ギニ呼吸ノ靜止ヲ來タス、若シ一時ニ〇・〇五以上吸收セラレルコトアラバ致死スルコトアリ。

コカインノ働キ大略上記ノ如クナルヲ以テ注射浸潤部ニ成ルベク長時留マラシメ吸收作用ヲ防グトキハ、組織内ニテ分解シ中毒ヲ防ギ且ツ比較的長時ニ亘リ局所麻酔ノ效力ヲ強カラシム、故ニ注射部ノ上部ニ於テ血管ヲ壓迫スルカ或ハアドレナリンヲ加ヘテ血管ヲ收縮セシムルノ法ヲ執ルヲ可トス、コカインハ神經幹ノ周圍ニ注射スルトキハ主トシテ知覺纖維ノ麻痺ヲ來シ、比較的廣ク該神經ノ分布區域ニ於テ知覺ヲ脱却セシム、其他神經幹ノ周邊ニ比較的濃厚液例之バ一%ノ液ヲ注射スル時ハ該神經分布區域ニ於テ知覺麻痺ヲ來スベシ之ヲ傳導麻酔ト稱ス、其理ニヨリ外陰部神經幹ノ周圍ニ注射シ以テ外陰部並ニ會陰部ノ手術ヲ行フ、之ニ類スルモノハ硬脊髓膜外ニ使用シ以テ脊椎麻痺ヲ行フモノトス。

シユライヒ Schleich 氏ハ浸潤麻酔トシテ次ノ三液ヲ用ヒタリ。

第一液 鹽酸コカイン〇・二 鹽酸モルヒチ〇・二五 食鹽〇・二 水一〇〇・〇

第二液 鹽酸コカイン〇・一 鹽酸モルヒチ〇・二五 食鹽〇・二 水一〇〇・〇 一回ノ用量五〇・〇以内

第三液 鹽酸コカイン〇・〇一 鹽酸モルヒチ〇・〇〇五 食鹽〇・二 水一〇〇・〇

通常第二液ヲ用ユ、廣汎部ノ手術ニシテ大量ヲ要スル時ハ第三液ヲ用ユ、是等ノ溶液ハ長時貯藏スルトキハ分解シテ無効トナルベシ。

内用トシテハ惡阻ノ場合ニ使用ス、余ハ左方ヲ處セリ。

鹽酸コカイン〇・〇五 蔞酸セリウム〇・〇三 乳糖〇・五 右三回ニ分服(注意 用量少キモ却テ奏效ス)

(鹽酸コカインハ一回極量〇・〇五 一日極量〇・二) 一%ノコカインハ一回ノ用量五・〇以内トス

外陰部癢痒症ニハ二%コカインラノリン軟膏ヲ塗抹シ尿道炎ノ疼痛ニハ一〇%溶液ヲ注入ス。

(三)鹽酸トロバコカイン Tropacocainum hydrochloricum 無色ノ結晶ニシテ水ニ溶解ス、毒性ハコカインニ比

シ弱ク浸潤麻酔ニ適セズ主トシテ脊髓麻酔ニ用ユ、其效力ニ關シテハ麻酔ノ條下ニ詳記セリ。

(四)鹽酸ストヴァイン Stovainum hydrochloricum 白色ノ結晶ニシテ水ニ溶解シ易ク其毒性ハコカインノ約半ニシテ煮沸ニ耐ユルト稱ス、浸潤麻酔ニ適セズ余ハ主トシテ脊髓麻酔ニ使用セリ。

用量〇・〇五ヲ蒸餾水一・〇ニ溶解シテ脊髓内ニ注入ス

(五)ノウオカイン Novocain (一回ノ極量〇・六乃至七) 無色ノ結晶ニシテ水ニ溶解シ易ク百二十度ニ熱スルモ分解セズ煮沸ニ耐ユ、コカインニ比シ其毒力甚ダ弱ク局所麻酔及ビ脊髓麻酔ニ適ス、クレニヒ氏ハ主トシテ之ヲ使用セシモ其效ストヴァインニ劣レルガ如シ、脊髓麻酔ニハ通常〇・一ニアドレナリンノ二、三滴ヲ加ヘテ使用ス、局所麻酔ハ體重十四貫位ノ本邦人ニアリテハ一瓦以下ヲ使用スルトキハ何等危險ナル副作用ヲ見ザルモノナリ。

通常吾人ハ一%ノボカイン溶液一回量ハ六〇・〇以内ヲ、〇・五%ナルトキハ一二〇・〇以内ヲ以テス、又五〇・〇ccニ對シテハ千倍アドレナリン溶液五滴ヲ加ヘテ使用セリ但シアドレナリンハ使用直前滴瓶ヨリ滴下スルヲ要ス若シ兩液混合後長時ヲ經ルトキハ赤色ヲ呈シ使用ニ耐ヘザレバナリ、尙本邦製品タルネオカインハノボカインニ代用スルコトヲ得ベシ。

第六節 吸入麻酔藥 Inhalationsanaesthetica.

(一)クロロフォルム Chloroformium CHCl₃ (比重一・四九沸騰點六〇・一六二度) 澄明揮發性ノ液ニシテ微ニ甜味ヲ帶ビ一種ノ香氣ヲ有セリ、クロロフォルム瓦斯ヲ空氣ト共ニ吸入スルトキハ肺毛細管ヨリ吸收セラレ遠達作用ヲ現ハスモノナリ、即チ初メ大脳皮膚ノ知覺機能鈍麻シテ意識漸次朦朧トナリ次デ全ク消失シ運動モ亦靜止

ス、之レヨリ其作用脊髄ニ及ビ脊髄ノ反射作用麻痺セラレ遂ニ全ク消失ス、筋ノ緊張減弱シ漸次ニシテ全ク弛緩スベシ、諸筋中最後ニ弛緩スルモノハ咬筋ニシテ、反射中最後ニ消失スルモノヲ角膜反射トス、此時期ニ於テ其機能ヲ保持スルモノハ獨リ延髓ニシテ呼吸トニヨリ生活現象ヲ示スモノナリ、更ニ麻酔ノ作用持續セバ遂ニ延髓ヲ襲ヒ血管運動神經中樞ニ働キ血壓下降シ脈搏柔軟トナリ呼吸靜止ス、此際心臟ハ尙其搏動ヲ維持スルモ遂ニ麻痺ヲ來スモノナリ、之ニ反シ未ダ麻酔ノ初期ニ於テ俄然心臟麻痺ニ陥ルコトアリ、是レ多クハクロロフォルムト空氣トノ混和ニ充分ニシテ比較的濃厚ナルクロロフォルム瓦斯ガ一時ニ心臟ノ自働神經ヲ犯スニ由ルナラン、是レ吾人ノ注意ヲ要スルノ點ナリ、然レドモ完全ノ麻酔状態ニ達センハ血液中ニクロロフォルムノ含量〇・〇三五%ナラザルベカラズ、然ルニ左室ノ血液ニシテ〇・〇五八%ノクロロフォルムヲ含有スルトキハ心臟ノ運動靜止ヲ來スト云フ、由之觀之有效量ト致死量トノ差甚ダ僅少ナリト云フベシ。クロロフォルムハ光ヲ遮リ貯藏セザレバ日光ノ作用ニヨリ空氣中ヨリ酸素ヲ取りフオスゲン *Hydrogen* 及ビ鹽酸ヲ生ズ、其他不純ナルモノハ鹽化炭素ヲ含有セリ。

鹽酸ノ存在ハ水ヲ加ヘテ振蕩セバ水ハ酸性ニ反應スルニヨリテ知ルコトヲ得。
鹽化炭素ヲ含有セバ比重重ク沸騰點高ク、フオスゲンヲ含有セバ蒸發後惡臭アリ。

(二)エーテル *Aether* $C_2H_5OC_2H_5$ (比重〇・七二沸騰點三十五度) 無色ノ揮發性液ニシテ之ヲ皮膚ニ塗布スルトキハ急速ニ蒸發シ局所厥冷シ知覺鈍麻ス、吸入麻酔ニエーテルヲ用ユルトキハ其作用略ボクロロフォルムト同様ニシテ麻酔ノ經過亦同ジ、只ダクロロフォルムニ比シ血管運動中樞及ビ呼吸中樞ヲ犯スコト微弱ナルヲ以テ顔面潮紅血壓下降セズ心臟ノ機能旺盛ナリ、一見エーテルハクロロフォルムニ比シ良好ナル吸入麻酔藥ナルガ如キモ、エーテルニアリテハ吸入スベキ空氣ニ混ズル含有量濃厚ナルガ爲メ氣管粘膜炎ヲ刺戟シ分泌増加

シ所謂異物性肺炎ヲ招クコトアリ、故ニ氣管枝炎ニ罹レル患者ニ使用スベカラズ、又エーテルノミニテハ完全ナル麻酔ヲ望ミ難キモノナリ。

尙ホ兩者麻酔藥ノ優劣ニ關シテハ麻酔編ニテ之ヲ詳述セリ。

第七節 尿防腐藥 *Harnantiseptica*.

尿防腐藥トハ内服セシモノガ腎臟ヲ通過シテ尿中ニ出デ防腐ノ作用ヲ表スモノヲ云フ、然レドモ其效力強勢ナラズシテ尿中ノ細菌ヲ一定度迄防遏シ尿ノ分解ヲ抑制スルニ過ギズ。

尿防腐藥ノ多クハ腎臟ヲ刺戟シ以テ充血ヲ來タシ、尿量ヲ増加シ且ツ尿ヲ稀薄ナラシム、故ニ腎盂膀胱尿道ノ細菌性疾患ニ使用スル時ハ厳密セル粘膜炎ノ刺戟度ヲ弱クシ一方ニハ細菌ノ發育ヲ防禦シ且ツ尿量増加ノ爲メ其通路ヲ洗掃スルノ效アリ。

(一)ヘキサメチレンテトラミン *Hexamethylenetetramin* (ウトロピン) *Urotropin* ハフォルムアルデヒドトアンモニアノ化合物ニシテ白色ノ結晶ナリ、臭氣ナク水ニ溶解シ弱アルカリ性反應ヲ呈ス、内服スル時ハ尿ニ出デフォルムアルデヒドヲ遊離セシメ以テ防腐ノ働キヲナス。
内服トシテハ〇・五乃至一・〇ヲ散藥トシ又ハ次ノ處方ヲ用フ。

烏華烏爾兒(一〇〇)煎一〇〇〇 ウトロピン〇・五 藥膏五〇 右三回分服
時ニ食慾減退・嘔氣・嘔吐ヲ來スコトアリ、故ニ健胃劑ヲ併用スルノ要アリ。

(二)ヘルミトール *Helmitol* 枸橼酸ナトリウムニフォルムアルデヒドヲ働カシメ而シテ得タルモノハ所謂チタリンニシテ之トウトロピント化合セシメシモノヲヘルミトールトス、無色ノ結晶ニシテウトロピント

チタリンノ效ヲ兼有シ尿酸鹽類ヲ溶解シ且ツ尿防腐ノ效アリ、一日二・〇一三・〇ヲ服用シ又ハ一・二%ノ溶液ヲ以テ膀胱洗滌ヲ行フコトアリ、本劑モ亦内服後嘔氣・嘔吐ヲ來タシ食慾ヲ減退セシムルコトアリ。

(三) **ボロヴェルチン** Borovetin ウロトロピント硼酸ヨリ成リ無色ノ結晶ニシテ水ニ溶解シ易ク酸性ヲ呈ス、膀胱加答兒ニ對スル實驗ニ就テハ田中博士ノ報告アルモ余ハ未ダ之ニ關スル實驗ニ乏シ、一日一・〇乃至四・〇ヲ用フ。

(四) **ヘキサール** Hexal ハ白色ノ結晶ニシテ水ニ溶解シ易ク酸味ヲ帶ブ、本劑ハズルフオサリチル酸ヘキサメチレンテトラミンニシテ内服スル時ハ尿ハ酸性ノ度ヲ増シ尿量増加シ細菌發育ヲ防禦スルノ效アリト云フ、其實驗ハ大正二年四月婦人科學會ニ報告セリ、之ヲ持長スルモ胃ノ障礙ヲ來スコトナシト稱スル人アルモ往々之ガ障礙ヲ來シ嘔吐・嘔氣ヲ起スコトアリ、今左ニ鈴木氏ノ實驗ヲ記サン。

ヘキサール 二・〇一三・〇 單含 五・〇 水 一〇〇・〇

ヘキサール Hexal ニ關シ當教室鈴木正二氏ノ試驗成績

近來新藥ト稱シ種々ナル名稱ヲ附セルモノ續出シテ其數枚舉ニ違アラズ、眞ニ實地家ヲシテ其名稱ダニ記憶スルニ苦シマシムルノ狀況ヲ呈セリ、故ニ若シ一新新聞雜誌上ノ注意ヲ緩クセンカ途ニ多數ノ新藥發見ヲ看過シテ所謂時代遅レノ醫師ト見做サルガ如キ觀アリ、然ドモ其新藥ナル者ハ果シテ彼等ノ言フガ如キ絶大ナル効力アリヤ否ヤハ甚ダ疑問ノ存スル所ナリ、是等ノ點ヨリスレバ彼ノサルブルサンノ如ク否、重曹ノ如ク卓越セル効力アル者ハ蓋シ甚ダ僅少ナリト云ハバルベカラズ。

然シテ新藥ヘキサール Hexal 即チ硫基サリチル酸ヘキサメチレンテトラミン Sulfosalicylates Hexamethyleneamin 如キモ其効力如何ニ就キテハ龔キニ氏等ガ行ヘル細菌的試驗並ニ臨牀的實驗ニヨリテ明カナリトス、故ニ今其要領ヲ略記シ聊カ以テ參考ノ資ニ供セントス。

ヘキサールハヨツト、リーデル會社(伯林) Firma J. Reidel ヨリ製造發賣セラレタル硫基サリチル酸 $\text{HSO}_3\text{C}_6\text{H}_4(\text{OH})$

COOH トヘキサメチレンテトラミン $(\text{CH}_2)_6\text{N}_4$ ノ各一分子宛ノ化合物ニシテ $(\text{CH}_2)_6\text{N}_4\text{SO}_3\text{H}\cdot\text{C}_6\text{H}_4(\text{OH})\cdot\text{COOH}$ ナル化學式ヲ有シ、前者ハ收斂及ビ鎮靜作用、後者ハ殺菌作用ヲ有ス。

ヘキサールハウロトロピンノ如ク體內ニテ分解シフォルムアルデヒドヲ生ジ其殺菌力ニヨリテ尿道炎・膀胱炎ノ治療ニ適シ、又尿酸ト結合シテ之ヲ溶解スル作用アルヲ以テ尿酸結石其他病的素質ヨリ起ル痛風患者ニモ特效アルモノノ如シ、而シテ酸性反應ヲ呈シ、白色無臭ノ結晶ニシテ拘攣酸様ノ味ヲ有スル藥劑ナリ。

氏ハ本劑ノ効力ヲ試驗スルニ當リ從來廣ク實用セラレシウロトロピンノ効力ヲ試驗シ同時ニ兩者ヲ比較スルヲ以テ最モ適當ノ順序ナリト信ジタレバ、左ニ氏ノ試驗シ得タル成績表ト其方法トヲ記載シ之ヲ比較シテ以テ其優劣ヲ論ゼント欲ス。

試驗順序トシテハヘキサール及ビウロトロピンノ内服以前ニ先ヅ探尿シテ細菌聚落發生ノ度ヲ検査シ次デ本劑ヲ服用セシメ然ル後一定時間ヲ經テ再ビ探尿シタル尿ノ試驗成績ニ比較シ尙ホ臨牀上、ヘキサール、ウロトロピンヲ尿道炎及ビ膀胱炎患者ニ應用シテ得タル成績及ビ之ヲ各自異狀ナキ尿中ニ混ゼシ液體ノ殺菌力等ニ就キ試驗シ而シテ兩者ノ比較ヲナセリ。但シ細菌ハ大腸菌ヲ用ヒ、其ノ「エーゼ」ヲ尿五^〇cc中ニ混ジ之ヲ五時間解卵器中ニ收メ然ル後遠心器ニヨリ得タル沈渣ヨリ「ゲラチン」平板及ビ「アガール」培養基面ニ培養シ、然ル後其聚落發生ノ有無ヲ檢シ傍ラ聚落ノ數ヲ計算セリ。

尿中ノヘキサール、ウロトロピンヲ證明スルニハ臭素水ヲ用キフォルムアルデヒドハフクシン亞硫酸及ビ鹽酸一、二滴ヲ滴加スルコトニヨリ證明シ(但シフクシン液ハ二%位ノモノヲ用フ本液ハ之ニ亞硫酸ヲ飽和セシモノナリ)硫基サリチル酸ハ鹽化鐵ヲ以テ證明セラル、酸性度ハ¹/₁₀₀規定ナトロン滴汁ヲ用キ五・〇ccノ尿ヲ中和スルニ要セシ量ヲ以テ表ハセリ。

先ヅ第一表ニ就キテ見ルニ第一回試驗ニ於テハヘキサールハ其服用後二時ニシテ尿中ニ表ハレ六時間ニシテ反應消失ス其反應陽性ノ時間ハ約四時間ナリ、其間ニ於ケル「ゲラチン」平板面上ノ發生細菌聚落數ハ平均二・二五ニシテ「アガール」培養基面上ニ於テモ略ホ之レニ一致シタル成績ヲ示セリ、第二回ニ於テハ服用後四時間後ニ於テ陽性トナリ寒天培養基面上ニ於テハ二時間目ヨリ細菌發育阻害セラレ六時間ニシテ消失シ、持續時間ハ約二時間餘ニシテ細菌ノ發育モ亦之ニ一致シタル結果

第 (一) 表

採尿時間	透明或濁	性	尿量	蛋白	糖	インデックス	比重
一分内服 八月八日午前十時二十五分 〇・七回	I	午前十時二十分	透明酸性	400.0	—	少量	1018
	II	午前十一時二十五分	透明酸性	70.0	—	少量	1022
	III	午後十二時二十五分	透明酸性	100.0	550	少量	1018
	IV	午後二時廿五分	透明酸性	250.0	平均	少量	1025
	V	午後四時廿五分	透明酸性	200.0	137.5	少量	1027
	VI	九日午前六時廿五分	透明酸性	500.0	—	痕跡	1024
一分内服 十月十日午前十時二十五分 〇・七回	I	午前十時二十分	透明稍濃厚酸性	450.0	—	稍多	1017
	II	午前十一時二十五分	透明稍濃厚酸性	80.0	—	稍多	1020
	III	午後十二時二十五分	透明稍濃厚酸性	170.0	—	稍多	1020
	IV	午後二時廿五分	透明稍濃厚酸性	200.0	410.0	稍多	1024
	V	午後四時廿五分	透明稍稀薄酸性	210.0	205.0	稍著明	1025
	VI	十一日午前九時廿五分	透明稍稀薄酸性	300.0	—	稍多	1014
一月十四日午前九時十分内 〇・七回	I	午前九時十分	透明酸性	450.0	—	痕跡	1015
	II	午前十一時十分	透明酸性	100.0	—	痕跡	1020
	III	午後十二時十分	透明酸性	80.0	530.0	痕跡	1020
	IV	午後一時十分	透明酸性	120.0	平均	痕跡	1024
	V	午後三時十分	透明酸性	230.0	132.5	痕跡	1025
	VI	午後四時十分	透明酸性	130.0	痕跡	痕跡	1027
	VII	十五日午前九時十分	透明酸性	330.0	—	痕跡	1014
一月十四日午前九時十分内 〇・七回	I	午前九時十分	透明酸性	350.0	—	少量	1019
	II	午前十一時十分	透明酸性	220.0	425.0	少量	1023
	III	午後十二時十分	透明酸性	120.0	平均	少量	1022
	IV	午後一時十分	透明酸性	85.0	141.6	少量	1026
	V	午後三時十分	透明酸性	210.0	—	少量	1027
	VI	午後四時十分	透明酸性	95.0	—	少量	1020
	VII	十五日午前九時十分	透明酸性	880.0	—	少量	1018

第二章 婦人科錠ニ産科ニ使用スベキ主ナル藥品

表 (ル 試験 表)

臭素水=對スル反應	酸性度	培養時間	寒天斜面=集落發生	ゲラチン平板面上=於ケル集落發生
陰性	2.1	午後三時二十分	大腸菌大集落+++ (三時後)	一日午後11時平均視野計 8.5個
陰性	2.8	午後四時廿五分	大腸菌+++但小集落	同 3.5個
陽性(僅微)	3.0	午後五時廿五分	大腸菌++	同 2.6個
陽性(著明)	3.5	午後七時廿五分	大腸菌+	同 2.0個
陽性(僅微)	4.0	午後九時廿五分	大腸菌++	同 2.1個
陽性	1.9	午後十一時二十五分	大腸菌+++	同 3.8個
陰性	1.5	午後三時二十分	大腸菌++	同 12.0個
陰性	1.7	午後四時廿五分	大腸菌+++	同 5.0個
陰性	2.5	午後五時廿五分	大腸菌++	同 3.8個
陽性(著明)	2.8	午後七時廿五分	大腸菌+	同 2.1個
陽性(僅微)	3.0	午後九時廿五分	大腸菌++	同 3.0個
陰性	1.2	十一日午後二時廿五分	大腸菌+++	同 4.1個
陰性	2.5	午後二時十分	大腸菌+++	同 6.5個
陽性(稍著明)	3.0	午後四時十分	大腸菌+++	同 3.4個
陽性(著明)	1.6	午後五時十分	大腸菌+	同 1.6個
陽性(著明)	2.0	午後六時十分	大腸菌+	同 1.0個
陽性(痕跡)	3.3	午後八時十分	大腸菌++	同 2.3個
陰性	1.6	午後九時十分	大腸菌+++	同 1.6個
陰性	1.8	十五日午後二時十分	大腸菌+++	同 5.2個
陰性	1.0	午後二時十分	大腸菌+++	同 11.0個
陽性(稍著明)	1.5	午後四時十分	大腸菌+r	同 6.0個
陽性(著明)	4.4	午後五時十分	大腸菌+	同 4.7個
陽性(稍著明)	3.5	午後六時十分	大腸菌+	同 2.2個
陰性	1.9	午後八時十分	大腸菌+	同 2.5個
陰性	3.0	午後九時十分	大腸菌+	同 3.3個
陰性	1.5	十五日午後二時十分	大腸菌++	同 8.2個

第七節 尿防菌薬

第二
二
第
(ウ ロ ト ロ ビ)

採尿時間	透明或濁	性	尿量	蛋白	糖	インヂカン	比重
二月二十七日午前	透明	酸性	300.0	—	—	痕跡	1017
二月二十七日午前	透明	酸性	100.0	—	—	少量	1012
二月二十七日午前	透明	酸性	85.0	—	—	少量	1020
二月二十七日午前	透明	酸性	120.0	—	—	少量	1021
二月二十七日午前	透明	酸性	50.0	—	—	同	1022
二月二十七日午前	透明	酸性	70.0	—	—	同	1017
二月二十七日午前	透明	酸性	500.0	—	—	痕跡	1015
二月二十七日午前	透明	酸性	420.0	—	—	少量	1012
二月二十七日午前	透明	酸性	95.0	—	—	少量	1007
二月二十七日午前	透明	酸性	100.0	—	—	少量	1012
二月二十七日午前	透明	酸性	50.0	—	—	痕跡	1015
二月二十七日午前	透明	酸性	45.0	—	—	少量	1015
二月二十七日午前	透明	酸性	130.0	—	—	少量	1016
二月二十七日午前	透明	酸性	420.0	—	—	少量	1010
二月二十七日午前	透明	酸性	93.0	—	—	同	1018
二月二十七日午前	透明	酸性	80.0	—	—	痕跡	1020
二月二十七日午前	透明	酸性	85.0	—	—	痕跡	1020
二月二十七日午前	透明	酸性	100.0	—	—	痕跡	1015
二月二十七日午前	透明	酸性	280.0	—	—	僅痕跡	1017
二月二十七日午前	透明	酸性	100.0	—	—	—	1021
二月二十七日午前	透明	酸性	76.0	—	—	—	1018
二月二十七日午前	透明	酸性	93.0	—	—	—	1015
二月二十七日午前	透明	酸性	120.0	—	—	—	1011
二月二十七日午前	透明	酸性	520.0	—	—	僅痕跡	1020
二月二十七日午前	透明	酸性	73.0	—	—	—	1021
二月二十七日午前	透明	酸性	82.0	—	—	—	1022
二月二十七日午前	透明	酸性	115.0	—	—	—	1021
二月二十七日午前	透明	酸性	410.0	—	—	—	1023
二月二十七日午前	透明	酸性	50.0	—	—	—	1025
二月二十七日午前	透明	酸性	150.0	—	—	—	1027
二月二十七日午前	透明	酸性	250.0	—	—	—	1027
二月二十七日午前	透明	酸性	400.0	—	—	—	1026
二月二十七日午前	透明	酸性	32.0	—	—	僅痕跡	1018
二月二十七日午前	透明	酸性	48.0	—	—	僅痕跡	1017
二月二十七日午前	透明	酸性	63.0	—	—	僅痕跡	1019
二月二十七日午前	透明	酸性	500.0	—	—	僅痕跡	1027
二月二十七日午前	透明	酸性	130.0	—	—	僅痕跡	1032
二月二十七日午前	透明	酸性	200.0	—	—	僅痕跡	1033
二月二十七日午前	透明	酸性	100.0	—	—	僅痕跡	1025
二月二十七日午前	透明	酸性	320.0	—	—	僅痕跡	1018

第二章 婦人科産科ニ使用スベキ主ナル藥品

三八七

表
ン 試 驗 表)

奥素水=對スル反應	酸性度	培養時間	試験=用キシ細菌ノ種類	寒天斜面=集落發生	グラツン平板面上=於ケル集落發生
陰性	2.1	午後三時	大腸菌	廿四時間後+++	12.5
陽性	1.4	午後四時	大腸菌	+	10.1
陽性(著明)	2.5	午後四時三十分	大腸菌	-	7.2
陽性(著明)	4.0	午後六時	大腸菌	-	1.3
陽性	5.2	午後八時	大腸菌	-	2.1
陽性	9.5	午後十時	大腸菌	-	3.0
陰性	1.2	二十七日午後三時	大腸菌	-	2.1
陰性	1.4	午後三時	大腸菌	+++	10.2
陰性(著明)	1.2	午後四時	大腸菌	-	3.3
陽性(著明)	2.6	午後四時三十分	大腸菌	-	3.0
陽性(著明)	4.0	午後六時	大腸菌	-	1.1
陽性(著明)	2.6	午後八時	大腸菌	-	—
陰性	1.1	二十七日午後三時	大腸菌	+	5.0
陰性	1.2	午後四時	大腸菌	+++	18.2
陽性	3.2	午後五時	大腸菌	-	小 12.0
陽性	2.1	午後六時	大腸菌	七十二時間後++	3.0
陽性	2.3	午後八時	大腸菌	七十二時間後++	1.2
陽性	2.7	午後十時	大腸菌	七十二時間後++	2.2
陰性	2.9	午後四時	大腸菌	++	15.0
陽性(中等度)	3.0	午後五時	大腸菌	+	3.0
陽性(著明)	2.2	午後六時三十分	大腸菌	同上一	1.0
陽性(著明)	2.1	午後八時	大腸菌	同上一	1.1
陽性(著明)	2.4	午後十時	大腸菌	同上一	2.1
陰性	2.2	午後三時三十分	大腸菌	+++	15.5
陽性(中等度)	1.8	午後四時三十分	大腸菌	++++	11.5
陽性(中等度)	2.3	午後五時三十分	大腸菌	++++	12.0
陽性(中等度)	2.7	午後六時三十分	大腸菌	+	1.2
陽性(中等度)	3.5	午後七時三十分	大腸菌	+	5.0
陽性(中等度)	3.8	午後八時三十分	大腸菌	— (七十二時間後)	—
陽性(中等度)	4.0	午後九時三十分	大腸菌	— (七十二時間後)	—
陽性(中等度)	6.0	午後十時三十分	大腸菌	— (七十二時間後)	—
陰性	3.6	午後十一時三十分	大腸菌	++	13
陰性	2.0	午後二時三十分	大腸菌	+++	13.8
陰性	1.1	午後三時三十分	大腸菌	++	6.2
陽性	1.4	午後四時三十分	大腸菌	+	1.4
陽性	6.4	午後五時三十分	大腸菌	+	1.3
陽性	11.0	午後六時三十分	大腸菌	+	1.1
陽性	9.0	午後七時三十分	大腸菌	++	2.0
陽性	7.8	午後八時三十分	大腸菌	+++	4.0
陰性	4.4	午後九時三十分	大腸菌	+++	12.0

第七節 尿防腐藥

三八六

ヲ示シ其間ニ於ケル聚落發生ノ數ハ平均二・二五ナリ。
 第三回ニ於テハ二時間ニシテ臭素水反應顯著ニ陽性トナリ七時間ニシテ陰性トナル、持續時間ハ四時間ナリキ、而シテ寒天斜面及ビ「ゲラチン」平板培養基上ニ於ケル聚落發生ノ數モ亦一致セリ、陽性ノ間ニ於ケル聚落數平均一・八九ナリ。
 第四回ニ於テハ二時間ニシテ其反應陽性トナリ四時間ニシテ消失シ二時間ノ陽性持續時間ヲ示シ細菌ノ發育亦一致セリ、其間ニ於ケル「ゲラチン」平板面ニ於ケル聚落數ハ平均四・三ナリキ。

第一表ヲ通覽スルニ尿量ハ第一回ヨリ第四回ヲ通ジ尿中臭素水反應陽性ノ間ニ於テハ大差ナク何レモ等シク増加セルヲ認ム、一時間ノ平均尿量ハ一七・九ヲ示ス、蛋白ハ第一回及ビ第三回ニ於テハ充分ナル反應ヲ認メザリシモ兎ニ角證明セラレタリ、是レ恐ラクヘキサール内服ニヨリ腎臟刺戟ニ基因スルモノナルベシ、糖ノ反應ハ凡テ陰性ニシテインヂカンニ於テハ何等著シキ變化ヲ認メズ、臭素水ニ對スル反應ハ服用後約二時間ニシテ表ハルモノノ如ク五時間目迄即チ三時間強持續シ其間寒天培養基上ニ於ケル細菌ノ發育ハ甚ダ不良ニシテ且ツ其間ノ「ゲラチン」平板面上ニ一視野ニ於ケル聚落數ハ平均二・六九五ヲ示ス、比重ハ臭素水反應ノ陽性ノ間漸次増加シ其消失セントスル時期ニ於テ最高ニ達シ平均一〇・二二・五四ナリ、酸性度ハ比重ニ一致シテ増加スルヲ見ルモ陰性トナルニ從テ重ビ舊ノ酸性度ニ近ヅキ而シテ陽性中ノ平均酸性度ハ一・九八ヲ示ス、是ニ由リ中性或ハアルカリ性尿モ酸性ヲ呈シ來ルニ至ルモノナルベシ。

ヘキサールヲ單ニ内服前探尿セシモノニ混ジ殺菌力ノ有無ヲ試驗シタルニ其力確實ナルヲ認ム、ウロトロピンヲ以テスルモ亦同様ナル結果ヲ得タリ、然レドモ是レ單ニ尿中ニ兩藥ヲ混ジ以テ試驗セルモノニシテ内服後ニ於ケル成績ニ一致セルモノニアラザルベシ。

第二表即チウロトロピン試驗表ニ就テ見ルニ蛋白ハ第一回ニ痕跡ヲ說明シタルモノノミニシテ腎臟ノ刺戟症狀ヲ呈スルコトヘキサールヨリ少ナキガ如シ、糖及ビインヂカン検査上ニハ何等記述ス可キ變化アルヲ認メズ、比重ハウロトロピン服用直後ニ於テ多少減少シ一時間目即チ臭素水反應陽性トナル頃ヨリ漸次増加シ約十二時間目ニ於テ最高ニシテ即チ一〇・三三・〇ニ

達セリ、陽性ノ間ノ平均比重ハ一〇・一九・三ナリ、酸性度モ亦比重ニ一致シ服用後約一時間ニ於テ減少シ漸次増加シ七時間乃至十四時間ニシテ最高ニ達スルモノノ如ク甚ダシキハ一・〇ヲ算シ陽性ノ間ニ於ケル平均數ハ九・七八ナリ、臭素水ニ對スル反應ハ服用後一時間ニシテ表ハレ最モ長キハ十八時間持續シ寒天培養上ニ於テハ第一回ヨリ第四回ニ至ル迄ノ間ニ於テハ發育甚ダ微弱ナルヲ知ル、「ゲラチン」平板上ニ於テモ始メ之レニ一致シタル成績ニシテ平均「コロニー」數ハ二・七八ナリ、是レ氣候ノ關係ニヨリ多少細菌ノ發育佳良ナルト服用後一時間ノ頃ニ於テ發育充分ナラザル小コロニー多數發生シタルトヲ計算シタルノ結果ナルベシ(但シ「ゲラチン」平板ハ氣温ニ放置シタリ)。

今此兩表ヲ對照比較スルニ尿量ハヘキサールニ於テハウロトロピン内服セシ場合ニ比シ増加スルガ如ク、ウロトロピンニ比シテハ強ク腎臟ヲ刺戟スル作用アルモノナルベク服用後尿中ニ往々蛋白ノ證明セララルヲ見ル、比重ハ平均數ニ於テ大差ナク、臭素水ニ對シテハヘキサール服用後二時間目ヨリ尿中ニ其反應ヲ表ハシウロトロピンヲ用キタル時ハ一時間目ヨリ陽性トナリ其持續時間ハ前者ヲ服用セシ場合ニハ平均三時間、後者ヲ用キシ時ニハ長キハ十六時間、平均九・七五時間持續スベク、寒天培養上ニ於テハヘキサール内服セシ場合ノ尿ヨリウロトロピン内服セシ時ニ於ケル尿ハ細菌發育ノ阻害セラレルヲ見ル、又「ゲラチン」平板上ニモ略ボ同様ナル成績ヲ示セリ、又臨牀上ニハヘキサールノ服用ニヨリ瀉瀉セル尿ハ次第ニ透明トナリ、「アルカリ」性或ハ中性ノ尿ハ弱酸性ヲ呈シ酸性ノモノニアリテハ其度ヲ増加シ、尿量ヲ増シ排尿時ニ於ケル疼痛ヲ減ジ尿意頻數亦輕快シ大ニ病症ノ輕減スルヲ認ムルモウロトロピンヲ服用セシ場合ニ比シテ特別ナル卓效アルヲ認ムルコトヲ得ザリキ。

結 論

ヘキサールハウロトロピンニ比シ殺菌力稍微弱ナルモ多少鎮靜作用ニ富ムモノノ如クウロトロピン服用時ニ於ケル時ノ如ク嘔氣・頭痛・倦怠等ノ副作用ヲ起サズ且ツ服用シ易キモ尿中ニ於ケル證明時間甚ダ短ク加之腎臟ノ刺戟性ヲ有スルモノノ如クニシテ從來實用セシウロトロピンニ比シ其效力優レリトハ云ヒ難カルベシ。

(五) **ウワウルジ葉** *Folia Uvae Ursi* 鍼狀葉ニシテアルブチン *Arbutin* ヲ含有ス、アルブチンハ腎臟ニテヒドロキノーン *Hydrochinon* ヲ發生シ以テ尿ニ防腐ノ働キヲ與フルモノナルベシト云フ、其他利尿作用アリ、本劑ハアルカリ性反應ヲ呈シ潤濁セル尿ヲ排泄スル場合ニ效アリト、余ハ細菌性膀胱加答兒ニワウチン療法ヲ行ヒ症狀全ク消散スルニ關ラズ尿中長時間細菌ノ存在スル場合ニ之ヲ使用シ以テ細菌除去ノ目的ニ供セリ。

ウワウルシ葉浸(一〇〇)一〇〇〇 ヂウレチン二〇 單含五〇 右三回分服

(六) **コバイバルサム** *Isisammum Copaiva* 透明黃褐色ノ濃厚液ニシテ少シク苦味ヲ帶ブ、内服後往々胃痛・下痢ヲ起スコトアリ、大量ヲ用ユレバ蛋白尿ヲ來タスコトアリ、コバイバ酸ト稱スル樹脂酸トテルペン及ビテルペンアルコール等ヲ含有シ就中尿ニ防腐性ヲ與フルモノハテルペンニシテ、其他コバイバ酸モ亦クロール酸及ビ硫酸ト化合シ尿ニ多少ノ防腐性ヲ與フルモ粘膜ノ刺激ヲ免レズ、服用後ノ尿ハ永ク細菌ノ蕃殖ヲ防禦ス。

一日一〇ヲ膠囊ニ入レテ與フ。

(七) **白檀油** *Oleum Santali* 黄色ノ濃厚液ニシテ香氣アリ、テルペン及ビアルコールヨリ成リ刺激性ナル樹脂酸ヲ含有セザルガ故ニコバイバルサムニ比シ使用上便ナリ、且ツ尿道ノ分泌及ビ疼痛ヲ減ジ又尿ヲ透明ナラシム。

三〇―四〇ヲ膠囊ニ入レ服用ス。

(1) **ゴノロール** *Gonorol* ハ白檀油ヨリ製出セル無臭ノ液ニシテ白檀油ニ比シ更ニ刺激性少ナク一層有效ナリト。

一〇―一五ヲ膠囊ニ入レ服用。

(2) **ゴノサン** *Gonosan* ハ油狀黃綠色ノ液體ニシテ白檀油ニカワヲ含有ス、白檀油ノ作用ト並ニカワノ作用ニヨリ尿道粘膜知覺ヲ麻痺シ以テ尿道ニ於ケル灼熱ノ感ヲ去ルノ效アリ。

二〇ヲ膠囊ニ入レ内服ス。

(3) **サンチール** *Santyl* 白檀油ノサリチル酸エステルヨリ成レル淡黄色ノ油液ニシテ嘔氣・嘔吐ヲ來スコト少ナシ。

二〇―三〇ヲ膠囊ニ入レ内服セシム。

尿ノ化學的成分ハ新陳代謝及ビ營養狀態ニ關係スルコト勿論ナリト雖モ、時ニ故意又ハ無意味ニ體內ニ侵入セル物質ガ其儘或ハ一定ノ變化ヲ受ケテ腎臟ヨリ排泄セラルルニヨリ爲メニ尿ノ性質ヲ變化セシムルコトアリ。

腎臟實質ニ於ケル分解作用ハ尿防腐藥ノ働キニ一定ノ意義ヲ有スルモノナリ、即チ此等ノ藥品ハ身體中ニ入り腎臟ニ至リテ分解作用ヲ受ケ、爰ニ甫メテ其働キヲ現ハスモノナリ、既述セル如クウワウルジ葉煎ヲ與フルトキハ此内ニ含有セルアルブチンハ腎臟ニ於テ糖及ビ尿ノ防腐作用ヲナスベキヒドロキノーンニ分解ス、サロール *Salol* コバイバルサム *Copaivabalsam* サントリ油 *Oleum Santali orientalis* サンデル油 *Sandeldl* 等亦同様ノ分解作用ヲ營ムモノナリ、ジヨルダン *Jordan* 氏ノ調査ニ依レバサンデル油ハ葡萄狀球菌ノ傳染ニハ效果最モ顯著ニシテ、其ノ他ノ傳染ニ對シテハウトロピン *Urotropin* 效アルモノトセリ、其ノ作用ハフオルムアルデヒドノ分解ニヨル、ウトロピンハ中性尿中ニハ徐々ニ分解シ、酸性尿中ニアリテハ急速ニ分解シテ其ノ作用ヲ現ハスモノナルモ、亞爾加里性尿中ニテハ分解セラレズ、從テ其ノ作用ヲ現ハサザルモノナリ、又亞爾加里ヲ加フルトキハ其ノ作用ヲ抑制シ酸ニヨリテ強メラル、然ルニ膀胱加答兒ノ場合ニ於ケル尿

ハ亞爾加里性ナルモ通常膀胱ニテ微生體ノ分解ニ依リ、初メテ亞爾加里性トナルモノナレバ腎臟中ニテハ未ダ酸性ナルヲ以テウロトロピンハ分解シテフォルムアルデヒドヲ出シ能ク防腐作用行ハルモノナリ、之レニ反シヒツホル Hippol ハ亞爾加里尿中ニテ分解ス、今ウロトロピン又ハヒツホルノ〇・五—一・〇ヲ一日四—六回服用スルトキハ確實ニアンモニア性酸酵ヲ防ギ、磷酸鹽類ノ製出ヲ抑制ス。

又酸性尿ヲ亞爾加里性トナサンニハ亞爾加里鹽類又ハ植物性酸性鹽類ヲ與フルカ又ハ單ニ植物性食物ヲ攝取スベシ、尿中ニ來レル碳酸鹽類ハ尿中ノ酸ヲ中和スベシ、又尿ヲ亞爾加里性トナシ同時ニ濃度ヲ薄メンニハ吸收シ難キ石灰又ハ煨製マグネシヤ等ヲ用ユルトキハ酸ハ腸ニテ中和セラレ、次テ尿中ニ入り爲メニ尿ハ亞爾加里性ヲ呈スルニ至ル。

第八節 催眠藥 Hypnotica. 及 鎮靜藥 Sedativa.

一般ニ婦人ハ神經過敏ナルヲ以テ不眠ヲ訴フルモノ尠ナカラズ、其頑固ナルモノニアリテハ爲メニ患者ヲ衰弱セシムルコトアリ。

生理的睡眠ハ輕度ノ麻醉ニ比スベク、其原因タルヤ現今未ダ不明タルモ恐ラク神經系統ノ勞作ニヨリテ生ジタル或ル疲勞物質ノ蓄積ニ歸スルモノナルベシ、而カモ是等疲勞物質ハ絶ヘズ蓄積シツツアルニ關ラズ反對ニ不眠ヲ來スハ抑々如何ナル理由ナルヤ、恐ラク是レ外來刺激ニ對スル大脳興奮性ノ亢進ニヨルカ、或ハ疼痛・咳嗽ノ如キ激シキ刺激ニ因ルモノナラン、故ニ疼痛・咳嗽等ノ刺激ニアリテハ鎮靜劑ヲ投ズベク、前者ニアリテハ大脳皮質ノ興奮性ヲ鎮靜スベキ藥劑即チ催眠劑ヲ投ズルノ必要アリ。

催眠藥ノ作用ハ吸入麻醉藥ト同ジク初メ大脳、次デ脊髓、終リニ延髓ニ働キ遂ニ呼吸停止ヲ來スモノナルモ、

睡眠ヲ催サシムルニハ少量ニテ足レリ即チ僅カニ大脳皮質ノ興奮性ヲ減退セシムレバ可ナリ、然レドモ睡眠時間ハ六時間ヲ持續セシムルノ要アルヲ以テ之ニ用ユル藥品ハ瓦斯體ノ如ク吸收早ク排泄ノ速ナルモノハ不可ナリ、宜シク吸收徐々ニシテ排泄モ亦緩徐ナルモノヲ選バザル可カラズ。

現今催眠藥ノ種類多ク比較的其效力確實ニシテ無害ノモノアルモ若シ之レヲ使用セズシテ睡眠セシムルコトヲ得バ最モ可ナリ、即チ就寢前ニ入浴シ頭部ヲ冷却シ又ハ頭部ニ電氣ヲ通ズルガ如シ、是等ノ方法ニテ效ナクバ催眠藥ヲ用ユルノ止ムヲ得ザルニ至ルベシ。

(一)抱水クロラール Chloratum Hydratum 無色透明ノ結晶ニシテ水ニ溶解ス、一種ノ臭氣ト僅微ノ苦味ト有シ粘膜ヲ刺激ス、故ニ之レヲ一定度ニ稀釋セザルベカラズ、今二〇ヲ與フル時ハ徐々ニ就眠スルモ外來ノ刺激ニヨリ容易ニ醒覺ス、此間呼吸ハ僅カニ緩慢トナリ瞳孔縮小シ體温少シク下降スルモ頭痛・嘔吐・嘔氣等ノ來ルコト稀レナリ、大量ニアリテハ反射全ク消失・知覺脫失・筋肉弛緩シ、脈搏減少且ツ其緊張減ジ、體温下降シ、遂ニ心臟麻痺ヲ來スニ至ル。

本劑ニ對スル危險ハ心臟及ビ血管ニ及ボス作用ニシテ其ノ狀恰モクロフォルムヲ多量ニ服用セシトキニ酷似シ血管神經ノ中樞及ビ心臟ヲ初期ニ犯スモノナリ、殊ニ脂肪過多・心筋變性・動脈硬化症等ノ患者ニアリテハ藥用量ニアリテモ呼吸血行障礙ヲ來シ多量ナルトキハ遂ニ死亡スルニ至ル、又藥用量ニアリテモ血管運動神經ノ麻痺ニヨリ血壓下降シ脈搏柔軟・脈波ノ振間擴大ス、又血液中ニ於ケル有效量ノ濃度ト血行障礙ヲ來スベキ濃度トノ差違甚ダ近接ス、アルシヤンゲルスキー Archangelsky 氏ノ研究ニ依レバ犬ヲ深キ睡眠ニ陥ラシムルクロラールノ量ハ血液中ニ〇・〇三%—〇・〇五%ヲ要シ而シテ〇・〇五六%ニテハ血壓ハ普通ノ半トナリ〇・〇七%ニ至ルトキハ呼吸停止ス、又血管ノ弛緩ハ血行ヲ緩徐ナラシメ若シ此狀態ヲ持續セバ呼吸器

疾患ヲ有スル者ニアリテハ「チャノーゼ」ヲ現シ加之肺浮腫ヲ來スコトアリ、其他本劑ハ患者ヲシテ習慣性トナサシメ大量ヲ用ヒザレバ其效ヲ見ズ、遂ニ慢性中毒ヲ來シ消化不良トナリ實質性臟器ノ變化ヲ招キ遂ニ羸瘦セシムルニ至ル、又急性中毒ヲ起ストキハ體温ハ下降シ若シ急速ニ吸收セラレタル際ハ直ニ心臟麻痺ヲ起スベク、徐々ニ吸收セラレタルトキハ昏睡状態トナリ知覺ハ脱却シ反射モ亦消失シ遂ニ心臟機能衰弱シテ呼吸ノ停止ヲ見ル、又之レヲモルヒネ中毒ニ比スレバ瞳孔ノ擴大甚ダシク且ツ血行障礙ヲ初期ニ來スモノナリ、斯カル際ハ胃ノ洗滌・人工呼吸・カンフル又ハストロヒニンノ注射ヲ試ムベシ、致死量ハ一定セザルモ先ヅ一〇・〇トセバ誤謬ナカラシ。

極量一回一〇 一日六・〇

大手術後ニ來ル不眠ハ多クハ疼痛ノ爲メナルベク從テ抱水クロラールヲ與フルヨリ寧ろ鎮靜藥ヲ投ズルヲ以テ其目的ヲ達スルガ如キモ時ニ睡眠劑ヲ要スルコトアリ、成書ニ依レバ普通使用量ニアリテハ心臟ニ及ボス障礙ナキガ如キモ大手術後ニアリテハ少量ニテモ急ニ心臟麻痺ヲ來セシ例アリ、故ニ少ナクとも非常ナル注意ノ下ニ使用セザルベカラズ。子細ニ使用スル場合ハ二％ノ溶液トシ一回一〇・〇cc宛一日數回反復注射スルコトアリ。

(二) **ノイロナール** Neuronal $\text{C}_6\text{H}_5\text{-C}(\text{NH}_2)\text{-CO-NH}_2$
無色結晶ノ粉末ニシテ緩カニ水ニ溶解ス、ノイロナールハ約半量ノ臭素ヲ含ミ大脳皮質ノ興奮性ヲ減少シ傍ラ鎮靜ノ作用アリ且ツ副作用ナシト云フ。

大手術後ノ不眠ニ用ヒテ效アリ、其他「ヒステリー」神經衰弱並ニ神經性月經困難ニ使用ス、催眠薬トシテハ〇・五ヲ就寝時ニ内服セシメ、官能性神經症ニハ一・五―二・〇ヲ用フ。

(三) **ブロムラール** Bromural $\text{CH}_3\text{-CH}_2\text{-C}(\text{CO-NH}_2)\text{-CH}_2\text{-H}$
臭素ト尿素トヲ含有スル白色ノ結晶ニシテ水ニ溶解シ難ク臭刺ニ反シ散薬トシテ使用シ得ルノ便アリ且ツ副作用ヲ右

セズ、余ハ屢々重症患者ニ使用セシコトアルモ未ダ障礙ノ認めベキモノナシ、エックホート Eckhout 氏ノ動物試験ニテハ深キ麻酔作用ヲ表スベキ量ニアリテモ尚血行及ビ呼吸ニハ何等ノ障礙ヲ來サザルモノナリ。

一・五ヲ三回ニ分服セシム。(本邦製品カルモチンハブロムラールニ代用スルコトヲ得)

單ニ睡眠劑トシテハ〇・六―一・〇ヲ就寝一時間前ニ服用セシム。

(四) **アタリン** Adalin $\text{C}_6\text{H}_5\text{-C}(\text{CO-NH}_2)\text{-CO-NH}_2$
無色ノ結晶粉末ニシテ水ニ溶解セズ催眠並ニ鎮靜ノ作用アリ、睡眠ノ目的ニハ〇・五ヲ、官能性神經疾病ニハ一日一・二ヲ三回ニ分服セシム。

ノイロナール・ブロムラール・アタリンハ共ニ臭刺ニ比シ使用上便ニシテ且ツ殆ンド消化障礙ヲ來スコトナシ、然レドモ當時尙ホ價格甚ダ廉ナラザルヲ以テ一般ノ需要ニ適セズ、余ハ子癇發作ノ靜止後屢々來ル精神障礙ニフロムラール・アタリンヲ使用シ精神状態ノ速カニ回復セルヲ實驗セシコト尠ナカラズ。

又頑固ノ不眠ニアリテハアタリン〇・五、バントホン〇・〇一、乳糖〇・五ヲ或ハフロムラール〇・三、アタリン〇・二ヲ頓服セシメラ安眠ヲ來セシ例亦尠ナカラズ。

(五) **スルフォナール** Sulfonalum $(\text{CH}_3)_2\text{C}=\text{C}(\text{SO}_2\text{C}_6\text{H}_5)_2$ 無色・無臭・無味ノ結晶ニシテ冷水ニハ緩カニ、熱水ニハ比較的容易ニ溶解ス、服用後二時間以内ニ安靜ナル睡眠ヲ促ガシ持續五六時間ニ互ルコトアルモ、時ニ睡眠ヲ來サズシテ服用後七八時ノ後單ニ精神昏朦ヲ遺スコトアリ、普通量ニテハ呼吸・血行ニ何等ノ障礙ナキヲ以テ多クハ精神性不眠症ニ使用セラル、疼痛ニヨル不眠ニアリテハバントホン併用スルヲ可トス、往々頭痛・眩暈、稀レニ嘔氣・嘔吐・下痢ヲ來シ或ハ發疹ヲ見ル、連用スル時ハ精神障礙ヲ來タシ遂ニ虚脱ニ陥ルコトアリ。

本劑ハ睡眠ノ度深カラズ、幻夢多ク睡眠中ニ屢々醒覺スルガ如キ場合ニ適セリ。
使用ノ際ハ一〇ヲ多量ノ湯ニ溶解シ就眠ニ時間前ニ頓服セシム、然レドモ之ガ連用ヲ避クベキモトス、故
ニ連用ノ必要アル婦人科疾患ニハ余ハ成ルベク之ヲ用キズ。

極量一回二〇 一日四〇

(六) **メチールズルフオナール** Methylsulfonyl (トリオナール Trional) 無色無臭且ツ光輝アル結晶ニシテ熱

湯ニハ容易ニ溶解シ冷水ニハ僅カニ溶解ス、分解シ易キヲ以テ注意保存スベシ、極量一回二〇、一日四〇。
作用ハズルフオナールト同ジ、吸收早ク排泄モ亦ズルフオナールニ比シ速ナルヲ以テ使用シ易ク且ツ中毒作
用少ナシ、然レドモ往々ズルフオナール同様ノ危険アルコトヲ記憶セザルベカラズ。

・睡眠劑トシテハ一〇ヲ用フ又疼痛ノ爲メ不眠ヲ來セシ場合ニハ左方ヲ處ス。

トリオナール一〇 ハントボン〇〇一、右頓服

余ハ手術後ニ於ケル不眠ニ對シテハ上記二藥ノ使用ヲ欲セズ。

(七) **ヴェロナール** Veronal CC1(C)C(=O)N(C1)C(=O)O 一回極量〇・七五、一日極量一・五 無色ノ結晶ニシテ纔カニ水ニ溶

解ス服用後通常半時間—一時間ニテ睡眠ヲ催スモノナリ、一般ニ尿素誘導體ハ呼吸中樞ヲ興奮セシノ傍ラ血
壓ヲ高メ麻酔ノ作用アルヲ以テ、手術後ノ不眠ニアリテハ藥物學上合理的ノモノニシテ他ノ麻酔藥ニ比シ不
快ノ影響少ナク從テ多クノ場合ニ使用シ得ベシ、然レドモ大量竝ニ連用ハ之ヲ避ケザルベカラズ。

使用量ハ〇・五—一〇ヲ頓服セシム。

ヴェロナールナトリウム 水ニ溶解スルノ性質ヲ有スルヲ以テ使用簡易ナリ、致死量ハ四・五—五・〇ニシテ
之レニ伴フ中毒症ハ知覺ノ全ク脱失セル場合ト雖モ呼吸及ビ心臟機能ニハ何等ノ影響ヲ認メズ、瞳孔ハ縮小

シテ光ニ對スル反應アリ、且ツ角膜ノ反射消失ス、高度ノ中毒症ハモルヒチニ於ケルガ如ク瞳孔ノ縮小及ビ
光ニ對スル反應消失スルニ至ル、此際カヒーチ子及ビエーテルヲ用フルトキハ呼吸ヲ佳良ナラシム。

(八) **プロポナール** Proponal ヴエロナールニ比シ更ニ有效ニシテ惡影響少ナク用量モ〇・二ニテ足ルト云フ、
然レドモ余ハ未ダ之ニ對スル經驗ヲ有セズ。

(九) **ルミナール** Luminol C6H5C2H4C(=O)NH2 無色ノ結晶ニシテ水ニ溶解シ難キ強力ナル新催眠藥ナリ、
用量〇・二—〇・四。

之ノナトリウム鹽類ハ水ニ溶解ス、然レドモ分解シ易シ、余ハ手術後興奮シテ不眠ヲ來セシ場合ニルミナール
ルナトリウム液〇・三—〇・五ヲ注射シ好果ヲ得タルコト多シ。

(十) **アダモン** Adamon (Dihromilhydrozinnimtsäureester) 無味無臭白色ノ結晶性粉末ニシテ水ニ溶解セズ、
臭素固有ノ作用トホルチオールニ屬スベキカンフル劑ノ作用トヲ併用スルト云フ、催眠力ハ弱キガ如シ。
麻酔藥ト催眠藥トノ作用ノ本態ニ至リテハ何等異ナル所ナシ、即チ先ヅ大腦皮質ノ興奮性ヲ減退セシメ更ニ
進シテ腦底ノ神経節ヲ侵シ次デ脊髓ノ反射機能ヲ麻痺セシメ最後ニ延髓ノ機能ヲ奪フモノナリ、麻酔藥ハ皆
メタン CH₃ノ誘導體ニシテ所謂脂肪體ニ屬スルモノナリ、而シテ是等ノ物質ト神經細胞成分トノ間ニハ其
作用早晚經過シテ神經機能ヲ再ビ復舊スルヲ見レバ兩者ノ間ニ化學的反應ノ行ハレザルハ想像スルニ難カラ
ズ。

Hans Meyer, Ovarion ノ學說トシテハ麻酔ニ使用スベキ藥品ハクロロフォルム・エーテルノ如ク水ニ難溶ノモ
ノナルモ、アルコール・ケトン・アルデヒド・エーテルノ如キ睡眠ヲ來スモノハ水及ビ脂肪質ニ溶解スルモ
ノナリ、故ニ是等ノ藥品ハ脂樣質ヲ有スル細胞内ニ攝取セラレ、從テ細胞内ニアル脂樣質ノ多寡ニヨリ其攝

取量ニ差違アルハ明カナリ、生体内ニテ最多ク脂様質ヲ含ムモノハ脂肪組織ヲ除キテハ實ニ中樞神経系ナリ、クロロフォルムノ最多ク體中ニ止マルハ大脳・脊髄・大網・腎臟ノ周圍等ナリ。
二種ノ催眠藥ヲ併用スルトキハ其效力甚ダシク増大スルモノニシテ、例ヘバモルヒントスコホラミン若シクハモルヒントウレタントノ合劑ニ於ケルガ如シ。

第九節 強心藥 Cardiotonica.

強心藥ハ心臟機能ノ衰弱ニ對シテ使用セララルル藥品ニシテ婦人科ニアリテハ大手術後屢々其適用ヲ見ルベシ。

(一) **チギタリス葉** Folia Digitalis, Digitalis Purpurea ノ開花時ノ初期ニ其葉ヲ集メ乾燥セシモノニシテ、有效成分ハシユミールデベルグ氏ニ據レバチギトキシシン・チギタリン・チギタレインナリト云フ。

チギタリスヲ使用スルトキハ初メ心臟ハ擴張收縮共ニ旺盛トナリ脈波増大シ且ツ迷走神經ノ刺戟ニヨリ心働緩慢トナル、之ヨリ迷走神經ハ其末梢麻痺セラレタルガ如ク心働不整速脈トナリ遂ニ多クハ擴張期ニ靜止スルニ至ル。

心臟機能ノ不全ナル患者ニチギタリスヲ與フル時ハ其擴張收縮ヲ整調セシム。

其他チギタリスハ少量ニテハ内臟神經分佈ノ臟器就中腸壁・肝臟ノ血管ヲ收縮セシメ、他部殊ニ腎臟皮質ノ血管ハ代價的ニ擴張セラレ從テ利尿作用ヲ來スベシ、然レドモ大量ナルトキハ是等ノ血管モ遂ニ收縮シ血壓昇騰ス、故ニ心臟機能不全或ハ血管麻痺ニ基因スル血行障礙モ共ニチギタリスニヨリ其障礙ヲ除去スルコトヲ得ベシ。

チギタリスノ心臟作用ハ服用後約二晝夜ニシテ甫メテ徐々ニ表ハレ且ツ長續スルヲ以テ慢性心臟衰弱ニヨル

血行障礙ノ場合ニ效アルモノナリ。

心臟瓣膜病ノ代償障礙・肺鬱血・急性熱性病又ハ手術後ニ來ル心臟衰弱ハ急劇ニ起ルヲ以テ本劑ノ奏效スルコト少ナキモ、急性肺炎ニアリテハ心臟ノ動力ヲ昂メ以テ肺ノ鬱血ヲ除キ其經過ヲ良好ナラシム。

チギタリスノ服用後ニ嘔氣・嘔吐ヲ來タシ消化障礙ヲ起スコトアリ、其他連用スルトキハ所謂蓄積作用ヲ起シ脈搏甚ダ緩慢或ハ突然速脈・不整等トナリ體温下降シ虚脱ニ陥ルコトアリ。

極量一回〇・二一日一〇〇 連用スルトキハ全量四〇ヲ越ユベカラズ

注意 チギタリス葉ハ貯藏一年以上ナル時ハ效力著シク減退ス

(1) チギタリス浸(〇・三)一〇〇〇 單含五〇〇 三回分服

(2) チギタリス末〇・五 チウレチン一〇〇 分三

(3) チギタリス浸(〇・三)一〇〇〇 醋割四〇〇 單含五〇〇 三回分服

以上ノ如ク全量四〇〇ニ至ルトキハ一時休止シ約二・三週間ノ後反復使用スルモ可ナリ。
消化不良ヲ來セシ場合ニアリテハ浸劑ヲ注射スルモ可ナリ。

(二) **チガール** Digitalin 褐色ノ液體ニシテ一立仙中ニチギトキシシン〇・〇〇〇三ヲ含有ス、吸收速ニシテ且ツ蓄積作用ナシト云フモ全ク之ヲ缺クト云フベカラズ、殊ニ小兒ニハ注意ヲ要ス、本劑ハ内服又ハ皮下靜脈内注射ニ適ス但シ皮下注射ハ稍々高度ノ疼痛アルモノナリ。

一日ノ極量四〇トセルモ、連用セザレバ六〇迄ヲ用ヒテ其障礙ヲ見ルコトナシ、持續連用ノ場合ニアリテハ全量三〇〇以上ニ及プトキハ注意セザルベカラズ。

(三) **ストロファンツス丁** Tinctura Strophantii **ストロファンツス子**ノ十倍亞爾簡保兒浸出劑ニシテ吸收速ナ

ルヲ以テ使用後速カニ其效力ヲ現ハシ蓄積作用ヲ來スコトナシト云フ、然レドモ其作用持續セズ且ツ其效力亦チギタリスニ及バズ。

極量一回〇・五—一日一・五

妊娠腎臓炎ノ場合ニハ

沃度加里〇・五 ストロファンツス丁幾一〇 苦味丁幾一〇 水一〇〇・〇トシ使用ス。

ストロファンチント稱スル藥品ハ硝子球中ニ入レ販賣セラル、一個中ニストロファンツス屬ノ糖原質〇・〇

〇一ヲ含有ス、静脈内ニ其半量ヲ注射ス、往々致死セシ例アリト云フ、余ハ屢々手術後心臓衰弱ニ使用セシモノ不幸ニシテ未ダ特效アリト思惟セラルル例ヲ知ラズ。

(四)硫酸スバルテイン Sparteinum Sulfuricum. 無色ノ結晶又ハ白色ノ粉末ニシテ二分ノ水ニ溶解ス、心臓機能ヲ整調セシメ收縮ヲ強メ脈搏ヲ整ヘ加フルニ利尿ノ效アリ、脚氣ニテデギタリスノ效ナキ場合ニ用キテ奏效スルコトアリ。

硫酸スバルテイン〇・三 爲丸一日三四分服

注射用トシテハ硫酸スバルテイン〇・三 蒸餾殺菌水一〇〇 一回ノ注射量ヲ各一ccトシ反復ス。

(五)樟腦 常態ニアル心臓ニハ其作用著明ナラザルモ、心臓ノ收縮不完全トナリ心働ノ微弱ナル時之ヲ與フレバ收縮再ビ旺盛トナル、今試ニ蛙ニ抱水クローラールヲ與ヘテ心臓ノ擴張靜止ヲ起サシメ然ル後樟腦食鹽水ヲ注入スル時ハ再ビ搏動ヲ始ム之ニ由リ其效ノ大ナルヲ知ルベシ、其他擴張セル血管ヲ收縮セシメ血液ヲ心臓ニ集ムルノ働キアリ、手術後等ニ來ル急性心臓衰弱ノ場合ニ特效ヲ現ハスコト尠ナカラズ。

大量ヲ與フル時ハ精神興奮・搐搦又ハ癲癇様發作ヲ起スコトアリ、樟腦ハ其吸收セラルルヤグリクロン酸ト化

合シテ其毒性ヲ失フヲ以テ大害ヲ遺スコト少ナシ、致死量トシテハ約四・〇—一五・〇トセラル、一〇%ノカ
ンフルオレフ油ハ每一時毎ニ一晝夜注射スルモ特別ナル中毒症狀ヲ見ザルコト普通ナルモ往々精神ノ興奮ヲ
見ルコトアリ。

(六)精製樟腦 Camphora depurata. 無色或ハ白色ノ結晶或ハ白色ノ大小不同ノ顆粒トナレルモノアリ水ニ溶解
セズ。

一〇%樟腦オレフ油

一〇%樟腦エーテル

一〇%樟腦エーテルアルコール溶液トシテ用フ

外用トシテハ肉芽ノ發生惡シキモノニ樟腦ワゼリント混ジ用フルコトアリ。

(七)樟腦酸 Acidum Camphoricum. 其作用樟腦ト全ク異ナリ主トシテ制汗ノ作用アリ、無色無臭ノ結晶ニシテ
僅カニ水ニ溶解ス、多量ニ使用スルモ障礙ヲ來スコトナシ、普通三・〇—四・〇ヲ三四分服セシム、盜汗ノ
場合ニハ一・五ヲ就眠前ニ服用セシム。

(八)アドレナリン Adrenalin. 病的ニ末梢血管擴張シ血壓下降セル場合ニ之ヲ用ユレバ、心臓ノ收縮ヲ昂メ心
臟搏動ヲ整調シ血管ヲ收縮シ血壓ヲ昂ムルノ效アルモ是レ一過性ナリ、故ニクロロフォルム中毒ノ如キニハ
效アルモ其他ニハ著效ヲ見ズ、衝心性脚氣ニ於テモ之レガ注射ニヨリ脈搏一時其數ヲ減ジ緊張増大スルモ之
ヲ以テ心臓麻痺ヲ救フコトヲ得ザルモノナリ。

第十節 興奮藥 Analeptica.

(一) **アルコホル** Alcohol. 急性傳染性熱性病・腹膜炎或ハ大手術後又ハ分娩等ニ基因スル大出血ニヨリ脈搏細小頻數・呼吸微弱・顔面蒼白・四肢厥冷・失神等ノ如キ所謂虚脱ニ陥レル際使用セラルルコト極メテ屢々ナリ、亞爾簡保兒ノ主作用ハ中樞性ニシテ神經中樞ニ働キ其機能ヲ亢進セシム、然レドモ其作用ノ本態ニ至リテハ大脳機能ノ亢進ニアラズ寧ロ大脳制止機能ノ麻痺ニ基因スルモノノ如シ、其他呼吸血行ノ中樞ヲ刺戟亢進セシムルノ性アルヤ否ヤ知ルベカラズ。

亞爾簡保兒ノ適量ヲ内服スルトキハ脈搏大且ツ頻速トナリ、顔面潮紅シ働作活潑トナリ、更ニ其度ノ進ムニ從ヒ所謂酩酊状態トナル。

亞爾簡保兒ハ初メ皮膚血管ヲ擴張セシム、此時期ニハ未ダ血壓及ビ體温ノ下降ヲ見ズ、其度ノ進ムヤ内臟ノ血管ハ擴張シ血液ハ内臟ニ輸送セラレ血壓下行シ且ツ中樞麻痺ニヨリ體温モ亦下降スルニ至ル、然レドモ普通ノ場合ニアリテハ心臟ニハ大ナル障礙ヲ來サザルモノノ如シ、心臟機能衰弱セル者ニ之ヲ與フルトキハ末梢血管ノ擴張ニヨリ心臟ハ努力ヲ要セザルト、一ハ冠状血管ノ擴張充血スルニヨリ自己ノ機能ヲ回復スベシ。亞爾簡保兒ヲ内服スルトキハ大部分ハ體中ニテ酸化セララルモノナリ、是レ燃燒セララルベキ物質即チ含水炭素脂肪ニ代リテ消費セララルガ故ナルベシ、然レドモ大量ナルトキハ蛋白質ノ分解ヲ來スコト明白ナリ。

亞爾簡保兒ヲ持長スルトキハ精神機能爲メニ害セラレ、肝臟硬化・萎縮腎・血管硬化症等ニ陥リ、心臟ハ腎臟血管ノ變化ニ從ヒ續發的ニ障害ヲ蒙リ且ツ心臟自己ハ脂肪變性ニ陥リ一見何等異狀ナキガ如キモ、クロロフォルム麻酔ニ對シ急ニ心臟麻痺ヲ來タシ或ハ急性熱性病ニ對シ急ニ其抵抗力ヲ失フニ至ル。

(二) **葡萄酒** Vinum. 普通葡萄酒ハ七一〇ノ%エチールアルコホルヲ含有ス。

ポトワインハ其量二〇%ナリ、吾人ハ産褥熱ノ場合ニポトワイン三〇〇、單舎一〇〇、水二〇〇ヲ一日數回ニ分服セシメ、又ポトワイン五〇〇、水二〇〇ヲ注射スルコトアリ。

虚脱ノ際或ハ分娩中氣力沈衰ノ場合ニハ成ルベクアルコホル含量ノ多キモノヲ選ブベシ。

(三) **コニニアク** Cognac. 葡萄酒ヲ蒸餾シテ製セシモノニシテ黄色ヲ呈シ三五―三九ノ純アルコホルヲ含有ス。

産褥熱患婦ニハ内用トシテ一日五〇〇ヲ用ヒ注射トシテハ一回五〇〇ヲ使用ス。

産褥熱ニハ特效藥トモ稱スベキモノニシテ或ハ少量ヅツ持續スルノ可ヲ唱ヘ或ハ大量ヲ與フルヲ可トスル人アリ、何レモ一利一害ヲ免レザルモ余ハ比較的大量ヲ與ヘ十日以上ノ持長ヲ避クルヲ以テ得策ナリト思惟ス、又注意スベキハ常ニ酒量ナキ婦人モ産褥熱ノ場合大量ニ耐ユルモノニシテ、亞爾簡保兒ニヨリ顔面潮紅シ興奮ノ状態ヲ表ハス時ハ其豫後ニ嚙望スルコト多シトス。

(四) **ホフマン液** Liqueur Hoffmanni. エーテル一〇、亞爾簡保兒三〇ヨリ成ル。

(五) **硝酸ストリキニーネ** Strychninum nitricum. 無色ノ結晶ニシテ大量ノ水ニ溶解ス、ストリキニーネハ中樞神經系ニ於テ末梢ヨリノ刺戟ニ對スル反應ヲ亢進セシム、故ニ外來ノ刺戟ナクバ何等ノ反應ヲ表ハサザルモノナリ、其他血管中樞ニ働キ血管ヲ收縮セシメ從テ血壓ヲ昂メ傍ラ心臟制止中樞ニ及ボシ心働ヲ緩慢ニシ呼吸中樞ニ進ミテ呼吸ヲ強大ナラシム。

大量ヲ用フル時ハ中毒症トシテ全身ノ反射性强直性痙攣ヲ起シ呼吸停止シ死亡スルカ或ハ發作反復シ衰弱ニヨリ死スルモノナリ、又少量ヅツ持長スルモ神經系トノ接著強ク爲メニ蓄積作用ヲ表ハスコトアリト。

極量一回〇・〇〇五 一日〇・〇一五 致死量ハ普通〇・〇三以上ナリトス。
クロロフォルム又ハ抱水クロラールニヨリ中樞麻痺ヲ來サントスルニ際シ〇・〇〇五ヲ皮下ニ注射シテ其效ヲ見ルコトアリ。

運動麻痺即チ脚氣麻痺ニ屢々之ヲ使用ス。

〇・〇〇一ヲ大腿皮下ニ注射シ二、三日ノ間隔ヲ以テ次第ニ増量反復ス、余ハ稍々長時ニ亘リ試ミシモ未ダ恐ルベキ蓄積作用ヲ見ザリキ。
内服トシテハ
沃度加里一〇〇 蕃木酸丁幾一〇〇 水一〇〇〇〇
食間三回ニ分服セシム

(六)麝香 Moschus. 虚脱症ニ使用ス、動物試験ニテハ其作用不明ナリト云フモ場合ニヨリテ奏效スルコトアリ。
〇・五—一〇ヲ酒精ニテ溶解シ注射用ニ供ス。

第十一節 防腐藥 Antiseptica.

細菌ヲ撲滅シ或ハ其繁殖力ヲ防遏スルモノナリ。

(一)昇汞 Hydrargyrum bichloratum. (Sublimat) 白色ノ結晶ニシテ緩ニ水ニ溶解スルモ食鹽ヲ加フル時ハ容易ニ溶解スベシ、此種ノモノニアリテハ化學的抱合ニテ殺菌力ヲ有スルノ外、其電離性ノ大ナルモノハ從テ殺菌力大ナリ、バウル及クレーニヒ氏ノ實驗ニ據レバ昇汞ノ電離性ヲ減セシムル爲メ昇汞ト同ジキクロール、

イオンヲ含メル食鹽ヲ加フルトキハ其殺菌力ノ著シク減少スルヲ見ルト云フ。

昇汞ハ水銀化合物中最モ強キ殺菌力ヲ有ス、多クノ細菌ハ〇・〇〇五ニテ既ニ其發生ヲ抑制シ、〇・〇一ニテハ之ヲ殺滅ス、然レドモ芽胞ヲ殺滅スルニハ更ニ濃厚ナル液ヲ要スルモノナリ、昇汞ハ毒力劇甚ニシテ皮膚ノ薄弱ナル者ニアリテハ普通消毒用ニ供スルモノニテ既ニ濕疹ヲ起スコトアリ、又吸收スルトキハ激シキ中毒症狀即チ腹痛・嘔吐・下痢ヲ起シ虚脱ニ陥ルコトアリ、致死量ハ約〇・二ナリト云フ、斯カル吸收作用ハ内服ノミナラズ粘膜ニ外用的ニ使用スル際モ亦吸收中毒ヲ來スコトアルヲ以テ注意ヲ要ス。

(二)昇汞錠 錠劑一箇中ニ昇汞〇・五ヲ含有ス、故ニ五百ccノ水ニ溶解スルトキハ一千倍ノ昇汞水ヲ得ベシ。

(三)スフランミン Sublimin. 白色針狀ノ結晶體ニシテ水ニ溶解ス、昇汞ノ代用品ニシテ金屬ヲ腐蝕セズ、又蛋白質ヲ沈澱セシメザルニヨリ比較的深部ニ侵入シテ殺菌ノ作用ヲ逞ウス、防腐力ハ水銀劑ニ比シ深達性ナルモ其殺菌力ハ昇汞ニ劣ル。

〇・三%ノ溶液ヲ用フ

(四)プロテイン銀(プロタルコール) Argentum Proteinum. (Protargol) 淡黄色ノ粉末ニシテ初メ少量ノ水ヲ加ヘ粥狀トナシ後冷水ヲ徐々ニ加フル時ハ容易ニ溶解シ光ニ遇ヘバ分解ス、本劑ハ銀ト蛋白トノ化合物ニシテ深達性ヲ有ス。

〇・五%ノ約一〇〇ccヲ淋毒性膀胱炎患者ノ膀胱内ニ注入シテ其效ヲ見ルコトアリ。
初生兒淋毒性腔加答兒ニハ一%ノ溶液ヲ用フ。

(五)コラルコール Collargol. (Argentum Colloidale) 黑色ヲ呈セル塊狀ノ物體ニシテ光輝アリ五%ノ割ニ水ニ溶解シ暗褐色透明ノ液トナル、著色瓶中ニ貯フル時ハ長時分解セズ、分解セシモノハ蒸留水中ニ滴下セバ白

色ノ濁濁ヲ生ズベシ。

本劑ノ甫メテ現ハレシ當時ハ產褥熱ノ特效藥トシテ一時稱用セラレタルモ其效確實ナラズ、少ナクトモ余ノ動物試驗ニテハ敗血症毒症ニ何等ノ效ヲ見ルコトヲ得ザリキ。

靜脈内注射ハ有效ナリト稱セラル、二%ノ溶液ヲ一回ニ一〇ccツツ反復注射ス。(本邦製品エレクトロ銀ハ之ニ代用シ得ベシ) 一五%ノ軟膏ヲ三〇ツツ皮膚ニ塗擦ス、又五%溶液ヲ注射スルコトアリ。

往々小兒ノ加答兒性肺炎ニ三%ノ軟膏ヲ二〇ツツ塗擦シ奏效スルコトアリ。

(六) **イトロール** Irol. (Argentum Citricum.) 白色ノ粉末ニシテ防腐力強ク且ツ無刺戟性ナルヲ以テ使用上甚ダ便ナリ、惡シキ肉芽ノ場合ニ少量ヲ創面ニ撒布スルトキハ佳麗ナル肉芽ノ再生ヲ見ルコトアリ。

(七) **フォルマリン** Formalinum. **フォルムアルデヒド液** Formaldehydum Solutum. 無色透明ノ液ニシテ竝透性臭氣甚ダシク吸收作用ヲ缺キ細菌ニ對スル殺菌力極メテ強ク脾脫疽菌ノ芽胞モ〇・一%ノ溶液中ニ一時間ニテ撲滅セラル、以テ其殺菌力ノ如何ニ旺盛ナルカヲ知ルベシ、然レドモ婦人科の疾病ニハ之ヲ使用スルコト稀レニシテ多クハ組織硬化ニ使用ス、三―四%ノ溶液ヲ以テ腔洗滌ヲナスコトアリ。

又腋臭ヲ防グ爲メ一%溶液ヲ用フルコトアリ。

(八) **フォルマリリン水** フォルマリリン一分、水三十四ヨリ成ル。

(九) **リゾフォルム** Lysoform. **フォルムアルデヒド**ノ加里石鹼、亞爾崗保兒ノ飽和溶液ニシテ淡黃透明、局所ノ刺戟ナク防腐制臭ノ效アリ、手指ノ消毒ニハ二―三%ノ溶液ヲ、腔洗滌ニハ一%ノ溶液ヲ用フ、然レドモ腔洗滌使用後分泌却テ増加シ粘膜ノ發赤ヲ見ルコトアリ。

(10) **硼酸** Acidum boricum. 光輝アル無色葉狀ノ結晶ニシテ温水ニ溶解ス、酸度微弱ナルヲ以テ局所ヲ刺戟ス

ルコトナキト同時ニ殺菌力モ亦甚微弱ナリ、其濃厚液ニアリテハ只細菌ノ發育ヲ抑制スルニ過ギズ、大量ヲ吸收スル時ハ往々嘔吐・嘔氣・下痢・蛋白尿ヲ來タシ昏睡ニ陥ルコトアリ。

三%溶液トシテ腔洗滌料又ハ巻法料トス、又一―二%溶液トシテ膀胱ヲ洗滌スベシ但シ溶液ノ大量膀胱内ニ殘留セザル様注意スベシ。

(二) **硼酸軟膏** Urgentumacidi borici. (硼酸一〇、バラフヰン軟膏九〇)

(一) 硼酸〇・五 ラノリン五〇〇 ワゼリン一八〇

(二) 硼酸五〇 グリセリン五〇 ヘルバルサム一〇 ラノリン適宜全量三〇トス。

肉芽ノ表皮被覆ヲ早カラシメン際ニ使用ス。

(三) **硼砂** Borax. 弱キ防腐力ヲ有シ皮膚ヲ清淨ナラシム、内服スルトキハ尿ノ酸性ヲ弱メ尿酸鹽類ノ排泄ヲ防グノ效アリ。

(一) 五%硼砂グリセリン

(二) 燒キ硼砂ヲ細粉末トナセシモノ

何レモ初生兒又ハ妊婦ノ口内炎ニ於ケル口腔粘膜ノ潰瘍ニ塗布又ハ撒布ス。

(三) **石炭酸** Acidum Carboricum. 無色ノ結晶又ハ白色結晶性塊ニシテ四十度以上或ハ水ニモ亦溶解ス、極量一

回〇・一、一H〇・III。

石炭酸ハ一時使用ノ範圍廣汎ナリシモ、近時無毒處置ノ行ハルルニ至リ漸次其應用ヲ減ズルニ至レリ、石炭酸ノ殺菌作用原理ハ未ダ不明ナルモ脂樣質ニ可溶性ナルヲ以テ細胞又ハ細菌體內ニ侵入シ以テ其作用ヲ及ボスモノナルベシ、而シテ各種微生物ノ種類ニヨリ其殺菌力ニ強弱ノ差アルモ概シテ極メテ強キ殺菌力ヲ有ス、

稀釋液ハ血管ヲ收縮セシメ、濃厚液ハ却テ皮膚ニ炎症ヲ起スモノニシテ其防腐作用ハ極メテ微弱ナリ。
少量ヲ内服セシムルトキハ腸ノ腐敗ヲ防ギ食欲ヲ増進シ腸ノ蠕動ヲ亢進セシム、婦人科ニテハ子宮頸管加答
兒・内膜炎周圍炎等ニ一〇%ノグリセリン溶液トシ單保トシテ用フ、腔坐藥トシテハ

イヒチオール

〇・三

莖若越幾斯

〇・〇一五

カカオ酪

三・〇

鹽酸モルヒ子

〇・〇一

右腔坐藥一箇ノ量トス。或ハ

〇・三

カカオ酪

三・〇

イヒチオール

内用トシテハ〇・八ヲ三四ニ分服セシム、又一―三%溶液ヲ尿道加答兒ノ場合ニ注入ス。

(八)チゲノール Thigonal. 人工的ズルフォ酸ノナトリウム鹽ニシテ無臭・褐色・舍利別様ノ液ナリ水ニ溶解

ス、防腐・吸收催進・鎮靜ノ作用アリ、イヒチオールノ代用品ニシテ内服スル時ハクレオソートノ代用ヲナス
ト云フ。

一〇%チゲノールグリセリン溶液

腔内單保用

(九)チオール Thiol. 褐炭テールヨリ製シ硫黄ヲ含有ス、流動性ト乾燥性ノモノアリ、流動性ノモノハ黒褐色

ニシテ一〇%グリセリン溶液又ハ二〇%ノ水溶液トシテ腔内單保ニ用ヒ、乾燥性ノモノハ澱粉ヲ加ヘ撒布料
トス。

(二〇)沃度仿護 Iodofonium. 小ナル光輝アル六角形板狀又ハ黄色ノ結晶性粉末ニシテ一種特異ノ臭氣アリ、百

二十度ニテ溶解シ水ニハ殆ンド不溶解性ナリ、多量ノ冷アルコホル又ハ十分ノ沸騰酒精ニ溶ケ六分ノエーテ

ルニ溶解ス、クロロフォルムニハ容易ニグリセリンニハ僅カニ溶解ス。

沃度仿護自己ハ殺菌作用ナク細菌ハ沃度仿護粉末中ニアリテ長ク其繁殖力ヲ失ハズ、然レドモ粘膜又ハ創面
ニ撒布スルトキハ化膿ヲ防ギ一期癒合ヲナサシムルノ效アリ、此有力ナル防腐作用ハ沃度仿護ガ血清又ハ脂
肪質アル創面分泌液ニ溶解シテ徐々ニ分解シ沃度ヲ遊離セシムルニ由ル、細菌中還元性物質ヲ發生スベキ結
核菌ノ如キハ沃度ヲ分離セシムルコト一層盛シナルヲ以テ從テ殺菌作用ヲ受クルコト亦強シトス、且ツ沃度
仿護ハ沃度ヲ分離シ分解セラレタル沃度ハ殺菌毒素ト結合シテ之ヲ無害ナラシム、其他創面ノ分泌ヲ制減シ
多少ノ鎮痛作用ヲ有ス、然レドモ沃度仿護ノ吸收セラルルヤ少量ナレバ大害ヲ胎サザルモ大量ナルニ於テハ
嘔氣・嘔吐ヲ來タシ頭痛・嗜眠・譫語・幻覺・脈搏細小頻數・體温下降・肺浮腫等ヲ來シテ死亡スルコトア
リ。

重症中毒ハ比較的稀ナルモ撒布後局所又ハ全身ニ濕疹ヲ發スルコトハ屢々吾人ノ遭遇スル所ナリ、心臟及ビ
腎臟疾患アルモノニハ之ヲ避クルヲ安全ナリトス。

第十二節 子宮緊縮藥 Uterus-tonica

子宮運動ト藥物トノ關係 子宮ハ腸管ノ如ク生活狀態、又殘遺生活狀態ニアリテモ多少ノ週期ヲ以テ振子動
及ビ蠕動ヲ營ミ、此運動ハ人工的血行或ハ酸素瓦斯ヲ以テ飽和セルリングル氏液ニ依リ殘遺生活狀態ヲ維持
セル場合ニ於テモ尙一時間ニ亘リテ觀察シ得ルモノナリ、是レ子宮ニ於ケル自律中心ノ存在スル所以ニシテ、
其運動型ハ該臟器ノ狀態如何ニ關ス、即チ妊娠初期ニ於テハ最モ活潑ヲ極メ其ノ進ムニ從ヒ次第ニ緩徐トナ
ル又長キ弛緩期ニ至ルモ收縮ノ度ハ著明ナルモノナリ。

爾他平滑筋纖維ノ臓器ト等シク子宮モ亦神經中樞ヨリ亢奮性刺激ト抑制的衝動トヲ受クルモノニシテ、此等ノ神經纖維ハ交感系及ビ骨盤神經中ニ存在スベク、而シテ骨盤神經ハ既述セル如ク第二乃至第四薦骨神經根ヨリ起リ直腸・肛門・膀胱・外生殖器或ハ恐ラク子宮ニ迄分布セラレ、又交感系ニ屬スル下腹神經ハ下腸間膜神經節ヨリ出デ、精系神經ハ精系神經節ヨリ起ル、其他フランゲンホイゼル氏ノ頸部神經節細胞アリテ其ノ支配ヲ受クル等複雑ナル作用ヲ有ス、加之動物ノ種類ニ依リ其現象多種多様ナルヲ以テ概念的説明ヲ下スコト難シトス。

ラングレー Langley アンデルソン Anderson 氏ノ調査ニ依レバ猫ノ下腹神經ヲ刺激スルトキハ初メ抑制的ニ後亢奮性ニ作用シ、家兎ニテハ初メヨリ亢奮性ヲ現ハスモノナリト、而シテアドレナリンノ子宮ニ及ボス働作用モ亦如上記載ノ刺激作用ト同一ノ結果ヲ得ルモノニシテ、其他下腹神經ハ子宮ニ血管收縮神經ヲ送ルモノナリ。

骨盤神經ノ子宮ニ於ケル作用ハ未ダ確實ナラザルモノノ如シト雖モ、之レヨリ子宮ニ血管擴張神經ヲ送リ、而シテ其ノ神經幹ヲ刺激スルトキ子宮運動ヲ起サシムルモノトセラレ、ラングレー氏等ノ説ニ依レバ此ノ神經幹ノ有スル刺激作用ハ下腹神經纖維ノ混在セルガ爲メナリト、然レドモ之ヲ毒物學的ニ檢索セバ子宮ニハ薦骨自律神經ニヨリ運動神經纖維ノ來ルコトヲ想像シ得ベク、此關係ハ一般ニ薦骨自律神經ノ末梢ヲ犯スベキ藥物例之ヒロカルピン・フネソチグミンノ如キハ子宮ニ強直性收縮ヲ來シ、又アドロヒネノ少量ハ亢奮性ヲ、大量ハ麻痺ヲ起サシムル等ノ事實ニヨリ之ヲ説明シ得ルモノナリ。

ニコチンハ動物ノ種類及ビ妊娠ノ有無ニヨリ其作用ヲ異ニス、非妊ノ猫ニハ初メ抑制的ニ後チ亢奮性ニ作用シ、妊娠動物ニアリテハ初メヨリ亢奮性ニ作用ス、此作用ノ變化ハアドレナリンニヨルモノ、或ハ前述セル下

腹神經ノ刺激ニヨルモ皆同一ノ現象ヲ呈スルモノトス、一般ニ妊娠子宮ノ運動ハ容易ニ之ヲ起シ得ル者ナリ。フランク、ホッホワルト v. Frank-Hochwart 及ビア、フレイリヒ A. Fehlich 氏ノ研究ニ依レバ腦下垂體ノ漏斗部ヨリ製セル越幾斯ビツイトリンハ家兎ノ子宮筋ヲ極度ニ收縮セシメ、以テ來ル神經刺激ニ對シ亢奮性ヲ増加セシムト云フ。

ヒロカルピンハ陣痛催進薬トシテ用キラル、其他子宮ニ於ケル神經末梢ヲ刺激スル毒物ニ種々アリ、ヒニンノ如キ之レニ屬シ、モルヒチノ少量ハ刺激性ニ大量ハ麻痺性ニ作用ス、スコホラミンハ子宮運動ニハ何等ノ影響ヲ及ボサズト云フ。

子宮運動ハ管ニ末梢神經ノ影響ヲ蒙ルノミナラズ、腰髓ニ於ケル中樞神經ノ影響ヲモ受ルモノニシテ、例之室息ニ基ク中樞ノ貧血ハ子宮收縮ヲ促進スルガ如キ是ナリ、又脊髓中樞ハ之レヨリ上部ノ中樞腦皮質ヨリ刺激セラレ、或ハ又鼻粘膜ヨリ反射的ニ刺激セラルルコトアリ。

又化學的ニ腸粘膜ノ刺激ハ腸ノ蠕動ヲ増進セシムルト同時ニ反射性ニ子宮運動ヲ招クコトアリ、アロイノ如キハ此作用ノ爲メ流産ヲ起スコトアリト云フ、其他イワキク Tanacetum vulgare ニホヒバ Thuya occidentalis イチヤ類 Taxus baccata Juniperus サビナ Sabina Aloin 蘆會素 Aloe Capensis 喜望峯蘆會等ハ子宮ニ特殊ノ作用アルモノノ如シ、又サリチル酸ヲ大量ニ與フルトキハ子宮出血ヲ來シ流産早産ヲ起スコトアルモ其由ヲ來ル所以ハ未ダ明ナラズ。

(一) 麥角 Coruntum, Mutterkorn. 麥角ハ Claviceps Purpurea ナル菌ノ保續形ニシテ大麥ノ穗ニ寄生シ穀粒間ニ發育セルモノヲ微温ニテ乾燥シタルモノニシテ其ノ形長紡錘形ヲ有シ、長サ二〇—四〇mm 少シク彎曲シ縱溝ヲ有シ暗紫色ヲ呈ス、麥角ノ或一定量ヲ鷄ニ與フルトキハ鷄冠及ビ腮葉ハ血行停止ノ徵トシテ先ヅ青色ヲ呈

シ漸次黒色トナリ乾燥遂ニ脱落スルニ至ル、其他兩翼ノ全ク壞死離脱セシ例アリ、以上ノ部域ヲ組織的ニ檢スルニ血管ハ硝子様血栓ヲ以テ殆ンド填塞セラレ、是レ血管ノ痙攣ト血管内膜ノ變化トニ基因スルモノニシテ爲メニ末梢血行ノ杜絶セララルルニ因ルナルベシ、以上ノ作用ハ全ク末梢性ニシテ頭髓ヲ切斷セル動物ニアリテモ尚ホ同様ナリ、大量ヲ與フルトキハ初メ間代性、後ニ強直性痙攣ヲ起シ、胃腸モ亦痙攣ニ與カリ爲メニ吐瀉ヲ起シ甚ダシキハ呼吸ノ靜止ヲ來スコトアリ。

以上記載ノ中毒症狀ヲ來サザルニ先ダチ子宮ヲ收縮セシムルノ效アリ、殊ニ妊娠子宮ニアリテハ其作用一層著明ナリ、而シテ其收縮ノ状態ハ多クハ強直性ニシテ稀レニ生理的陣痛ノ状態ニ類スルコトアリ。

麥角越幾斯ハ複雑ニシテ且ツ不定ノ混合物ヲ含有シ少クモ之レヨリ三種ノ性分ヲ分離スルコトヲ得ベシ、而シテ其ノ一ツハエルゴチニン、Ergonin ト稱シタムレー氏 Tournier ノ分離セル結晶性アルカロイドニシテ子宮ニハ何等ノ作用ヲナサズ、他ノ一ツハ無結晶ノモノニシテクラフト 氏 Kraft ハヒドロエルゴチニン Ergogonin ト稱シ、パーシヤー、デーブル氏 Rager u. Dale ハエルゴチキシント命名セリ、グール氏ノ研究ニ依レバ之ヲ皮下又ハ靜脈内ニ注射スルトキハ滑平筋、殊ニ子宮ニ收縮ヲ起シ、且ツ動脈ノ收縮ニヨリ血壓亢進シテ遂ニ麥角固有ノ壞疽ヲ見ル、此ノ血壓亢進ハ末梢性ニシテ持續永シ、其ノ現象ハ初メ血管運動神經ノ末梢ヲ刺戟シ、大量ナル時ハ後チ總テノ交感系神經ヲ麻痺セシムルヲ以テ血壓下降ス、而シテ一度血壓ノ下降ヲ來スヤアドレナリンヲ以テスルモ再ビ之ヲ亢進セシメ得ザルモノナリト云フ。

麥角ノ水性越幾斯中ニハ二種ノ鹽基アリ、酸酵素及ビ細菌ニヨリテ蛋白質ハ分解セラレアミノ酸ヨリ成レル



ハ血管ニ高度ノ收縮ヲ促シ、ヒスタミンハ血管ヲ擴張シ血壓下降ヲ來ス、其他多クノ滑平筋殊ニ子宮收縮ヲ促スノ力甚ダ顯著ナリ。

其他往時麥角ノ主成分ノ一ニ算セラレタルコルヌチン Cornutin ハ單純ナルアルカロイドニ非ズ、種々ノアルカロイドノ混合物ニシテパーシヤー、デーブル氏ハ之レヨリエルゴトキシナヲ發見セリ、但シ治療上ニ用ユベカラズ、又コルヌチント稱セルアルカロイドハ麥角内ニ存スル痙攣ヲ起スベキ物質ノ分解物ナルベク、是ニ由テ痙攣ヲ起シ、中樞及ビ子宮ニ働キ又分離セル子宮ニモ收縮ヲ來スモノトセラル、是レ恐ラクエルゴトキシナヲ含ムニヨルナラント云フ。

樹脂様ノ物質ナルスバセリン酸 Spacelinsäure スバセロトキシシン Spacelotoxin 等ヲ麥角ノ成分トセルモ、近時ノ研究ニヨレバ之ハエルゴトキシント同種屬ニシテ、壞疽ヲ起スモノナリト云フ。

子宮收縮ヲ促スベキ麥角中ノ成分ハ麥角ノ水性浸出中ニハ容易ニ移行スルモ、亞爾爾保兒越幾斯中ニハ之ヲ攝取シ難シトス、又此ノ物質ハ甚ダ分解シ易ク大麥ノ成熟前ニ於テ最モ有效ナルヲ示シ、之ヲ貯藏スルトキハ次第ニ效力減弱シ一年以内ニ於テ最初ノ效力ノ七分ノ一乃至八分ノ一トナリ二年ニシテ十五分ノ一トナルベシ、而シテ壞疽ヲ起スベキ新鮮ナル麥角ノ成分ハ一ヶ月間存在シ翌年ニ至レバ全ク消滅ス。

麥角ノ浸出液ハリンゲル氏液中ニ於ケル遺殘生活状態ノ子宮ニ作用ス、即チ緊張及ビ自働性收縮ヲ増加シ大量ヲ與フル時ハ持續的收縮ヲ來ス、此ハ麥角ノ有効性分ヲ生活動物ノ靜脈内ニ注射シタルト全ク同様ナリ、エルゴトキシシン及ヒスタミンハ從來分離セラレタル純粹ナル有效成分ナリ。

麥角浸出液ハ血管ノ平滑筋ニ作用ス、即チ血管運動神經ノ末梢ニ働キ血管爲メニ收縮シ血壓亢進ス、是等ノ作用ハ末梢性ニシテエルゴトキシシン・チラミン等ニ依リテ起ルベキモノナリ。

麥角ハ産科婦人科の疾病ニハ屢々應用セラルルモ時ニ濫用ノ傾向アリ、依テ左ニ其適應症ヲ記サン。

胎盤娩出後ニ於ケル無力性子宮出血ノ場合ニ應用スベシ、分娩ノ第一期第二期又ハ胎盤娩出前ニ使用スルトキハ往々痙攣性或ハ強直性收縮ヲ來シ殊ニ子宮内口狭小トナリ爲メニ分娩ヲ妨グルニ至ルコトアリ、其他産褥ニアリテ子宮ノ收縮不良ナル場合ニ使用スベキモノトス。

筋腫ニ本劑ヲ用キテ其發育ヲ停止シ或ハ筋腫ノ萎縮ヲ來シ得ベキヤハ甚ダ疑ハシ、只手術ヲ承諾セザル患者ニアリテハ出血ヲ可及的減少スルノ目的ヲ以テ使用スルコトアルモ、其效果ニ至リテハ是レ亦疑問ナリト云ハザルベカラズ。

本劑ハ墮胎ノ目的ニ使用スベキモノニアラズ、時ニ之ニヨリ妊娠中絶ヲ來セシ例ナキニアラザルモ是レ餘ヲニ大量ヲ使用シ急性中毒ノ結果ナリト云フベキナリ。

麥角ノ極量一回一〇 一日ノ極量五〇〇

通常左ノ處方ヲ用フ

麥角浸(五〇)一〇〇〇 稀鹽酸一〇 單含五〇〇
右五回ニ分服セシム

又收獲ノ時期惡シク其效力弱キモノハ一〇〇〇ヲ使用スルコトアリ。

一〇〇麥角浸 石炭酸一滴ヲ加ヘ注射用トス

麥角越幾斯 Extractum Secalis Cornuti

極量一回〇・一 一日〇・六

通常九劑トシテ使用ス、又グリセリン溶液トシテ筋肉内注射ヲ行フコトアリ。

(イ) **ボムベロン流動エルゴチン** Ergotinum Bombelon fluidum. 暗褐色ノ溶液ニシテ一乃至二・〇ヲ内服セシメ、

注射ニハ普通倍量ニ稀釋スルモ、分娩後ノ出血ニハ其儘一、二筒ヲ注射スルモ障害ヲ見ズ。

(ロ) **エルゴチン、フロム** Ergotinum-Frohm. 〇・五—一・〇ヲ内服又ハ注射用ニ供ス。

(ハ) **セカコルニン** Scaconin. 麥角ノ主成分ヨリスブアツエリン酸ヲ除キタル麥角製劑ニシテ壞疽ヲ起スコトナク且ツ其效力麥角ニ四倍スト云フ、内服トシテハ一・〇—二・〇ヲ、注射用トシテハ〇・五乃至一・〇ヲ使用ス、他ノ麥角劑ニ比シ其效力比較的確ナルガ如シ、産褥子宮ノ收縮不良ナルノ際麥角ヲ連用シテ效ナキ場合ニ麥角トセカコルニンノ少量ヲ併用スルトキハ一方ヲ多量ニ用ユルヨリ其奏效顯著ナリ。

(ニ) **ヒドラスチス屬** ヒドラスチス根中ニアルヒドラスチン Hydrastin 及ビ此分解産物タルヒドラスチニン Hydrastinin ハ少量ニテハ血管運動中樞ニ働キ血壓ヲ高メ、大量ニアリテハ中樞性麻痺ヲ來ス、其他子宮ニハ末梢性ニ作用シテ其收縮ヲ促スノ働ヲ有ス。

(イ) **ヒドラスチス流動越幾斯** Extractum Hydrastis fluidum. 暗褐色ノ液體ニシテ其味甚ダ不快ナリ、月經困難ノ患者ニ使用シテ見ルコトアリ。

ヒドラスチス流動越幾斯 一〇〇〇
單含 一〇〇〇
蒸餾水 一〇〇〇〇

右一日量。六回ニ分服セシム、本劑ハ月經一週間前ヨリ使用セシム。

(ロ) **鹽酸ヒドラスチニン** Hydrastinum hydrochloricum. 帶黄色ノ結晶體ニシテ其效力ハ流動ヒドラスチスニ同ジト、近來錠劑トシテ販賣セラル、使用量一日〇・一

(ハ) **スピプチチン** Syptichin. コタルニンノ鹽酸鹽類ナリ、コタルニンハ阿片中ノアルカロイドナルコチンノ

分解セシモノニシテ血管ヲ收縮セシメ、子宮ニハ末梢性ニ働キテ之レヲ收縮セシムルノ働ヲ有ス。

本劑ハ無色ノ結晶ニシテ水ニ溶解ス、以上ノ働ノ外多少鎮靜作用ヲ兼ヌ、骨盤内充血ノ結果トシテ子宮出血

ヲ來セシ場合・月經困難・經歇期ニ於ケル子宮出血等ニ使用シテ效ヲ見ルコトアリ。

普通錠劑トシテ販賣セラレ一個中〇・〇五瓦ヲ含有ス、余ハ常ニ一日四錠ヲ與フルモ場合ニヨリ六錠ヲ投ゼシ

コトアリ、本邦製品スタフチンハ其ノ效力スピプチチント大差ナキモノナリ。

(ニ) **スピブトール** Syptol. フタル酸、コタルニンニシテ黄色ノ結晶體ナリ、水ニ溶解シ、其作用スピブチ

チンニ類似ス、同ジク錠劑トシテ販賣セラレ用量ハスピブチチンニ同ジ。

(三) **アドレナリン** Adrenalin. ハ高度ニ子宮收縮ヲ促スモノナルモ、生活體中ニテ容易ニ分解スルヲ以テ子宮

内ニ用ユルモ其ノ作用著シカラズ、又皮下ニ注射スルトキハ少量ノ分解セザル部分ノミ作用シテ刺激性トナ

レル妊娠子宮ノ收縮ヲ促スモノナリ。

(四) **ピツイトリン** Pituitin. ピツイトリンハ今ヤ産婦人科ニ於テ多大ノ趣味ト注意トヲ以テ迎ヘラレ從テ之ガ

研究ハ單ニ生理學及ビ藥物學ノ範圍ニ止マラズ、進ンデ臨牀治療ノ方面ニ及ビツツアリ、今爰ニ本劑ニ對ス

ル余等ノ實驗ヲ略記シ以テ諸氏ノ參考ニ供セントス。

ピツイトリンノ原料越幾斯ヲ製スル腦下垂體ハ前後ノ兩葉ヨリ成リ前葉ト後葉トハ胎生學上ノ起原ヲ異ニセ

ルノミナラズ組織學上其構造亦同ジカラズ從テ之ヨリ得タル越幾斯モ亦全然其作用ヲ異ニセリ、而シテ此中

最モ普通用キラルルハピツイトリン及ビピツグランドールナリ、ピツイトリンハ後葉所謂漏斗狀部ヨリ得タ

ルモノニシテ牛ノ腦下垂體後葉ヨリ水様越幾斯ヲ製シ之ヲ殺菌シタルモノニクロレトナラハタルモノナリ。

本劑ハ一九〇九年ブレイル、ベル *W. Bleyer, Bell* 氏ノ研究ニヨリテ子宮筋肉ニ作用シ以テ子宮ヲ收縮セシム

ルコトヲ確メ、續テ同氏及ビ獨逸ノフオーゲス *A. Fogaes* 及ビポーフステッテル *K. Hofstetter* 氏等ハ産後

出血ニ、ポーフパウエル氏ハ陣痛微弱ニ使用シ共ニ豫想外ノ好果ヲ收メ得タリト云フ、爾來相爭テ之ガ臨牀

的實驗ヲナシ以テ各地ノ學會ヲ賑ハシ又諸雜誌ハ一日ト其報告ヲ齎ラスルノ盛況ヲ見ルニ至レリ。

本邦ニ於テハ余及ビ藤村氏ノ報告恐ラクハ嚆矢ナランカ、爾來陸續多數ノ實驗報告ヲ見ルニ至レリ。

今主要ノ諸點ヲ擧グレバ左ノ如シ。

(一) 子宮筋ノ收縮ヲ起ス、(二) 膀胱ノ收縮ヲ起ス、(三) 血壓ヲ亢進セシム、(四) 心臟機能ヲ強盛ナラシメ又之ヲ緩徐ナラシ

ム、(五) 利尿作用ヲ有ス、(六) 腸蠕動機能ヲ興奮ス

産科ニ於ケル應用 陣痛催進藥トシテノピツイトリンニ關スル余等ノ實驗ヲ略述セン、余等ハ爾來多數ノ場

合ニ該藥ヲ使用セシガ、要スルニピツイトリンハ陣痛ヲ催進スル性質アルハ確實ナルモ之ヲ治療上ニ應用セ

シニハ分娩ノ時期ニ注意セザル可カラズ、即チ開口期ニ於テハ強盛ナル陣痛又速カニ子宮筋肉ノ強直性攣縮

ヲ來タシ分娩却テ休止シ胎兒ハ酸素缺乏ノ爲メ假死ニ陥リ易キ傾向アリ、又子宮内口ノ却テ縮小スルニ至ル

等變角ノ作用ニ類スル點アルガ如シ從ツテ之レガ使用ヲ避クベキモノトス、適應症ト認ム可キ場合ハ破水後

附言 該薬ニ類スルヒツグラントール Hinglandol "Roche" ハ理論上ヨリ觀レバヒツイトリンヲ更ニ精選セ

シモノノ如キモ實際吾人ガ使用セシ場合ニアリテハ其效却テヒツイトリンニ劣ルモノノ如シ。

以上吾人ガ述ベシ適應症ノ外他ノ場合ニ之ヲ應用シテ充分ナル效果ヲ見ルコト蓋シ尠ナルベシ。

ヘックスト會社ヨリ發賣セルヒホフ井ジン Hypopolysin ハ化學的純粹ナル結晶ニシテ一定ノ成分ヲ有ス。

中島耕夫氏ノ製品タルゲブルチン Geburin ハ牛ノ腦下垂體後葉ノ水性越幾斯ニシテヒツイトリンノ代用トナ

シ得ベシト、近時製法其ノ宜シキヲ得ザルカ或ハ材料保存ノ悪キガ爲メカ其ノ作用不確實ノモノアリ増本氏

ノ檢定アルモノノ外信ヲ置キ難キニ至レリ。

(五)新止血劑コアグレイン Coagulin 本劑ハコッヘル氏ノ創製ニ係ハルモノニシテ動物ノ血液形成器官中ニ

アル凝固促進性物質ヨリ製出セシモノナリ、坊間販賣セルルモノハ褐色ノ粗穢ナル粉末ニシテ使用ノ際ハ

蒸餾水又ハ生理的食鹽水ニテ一〇%ノ溶液ヲ作り之ヲ煮沸シ充分ニ振盪シ滅菌ガ―ゼニ潤ホシ之ヲ用ヒテ

創面ヲ壓迫ス、實質性出血ニ際シテハ從來ノ如キ長時ノ壓迫單保ヲ要セズ短時ニ止血スルモノナリ、婦人科

的手術ニ絶對的必要缺クベカラザル藥品ニアラザルハ勿論ナルモ、余ノ經驗ニテハ廣靱帶内ニ發育セル腫瘍

ヲ剝離摘出セル場合、又ハ骨盤結締織内ノ淋巴腺ヲ犯セル癌腫摘出ノ際或ハ實質性出血ニテ手術時間ノ長時

ニ及ブガ如キ場合ニ之ヲ使用セバ、速カニ止血ノ目的ヲ達シ手術部位ヲ明瞭ナラシメ且ツ再出血ノ憂ナク以

テ手術ノ期間ヲ短縮シ得ルノ便アリ。

(六)オオホリン Oophorin 一八九六年エルランダウ氏ハ無月經竝ニ經歇期ニ於ケル際即チ所謂脱落症ニ對

シ卵巢ヲ使用シテ之ヲ治療シ得ベキコトヲ報告セリ、爾後マインツエル氏ハランダウ氏「クリニク」ニ於テ

多數ノ材料ニ就キ調査シ以テランダウ氏ノ説ヲ確定セリ。

卵巢物質ノ治療上ノ價值ハ製品ノ如何ニアルコト勿論ニシテ同氏ノ實驗ニテハオオホリンヲ以テ最效アルモ

ノトセリ、之ハ豚ノ卵巢ヨリ其實質ヲ取り乾燥セシモノニシテ錠劑トシテ販賣セラレ、一錠中該物質ノ〇・三

―〇・五ヲ含有セリ、之ヲ用ユル時ハ一ハ新陳代謝ノ障礙ニ歸スベキ脱落症ヲ輕快セシメ、一ハ卵巢機能ノ

消失ニ因スル神經障礙ヲ治療スルモノナリ、尙ホ彼ノ經歇期ニ來ル脂肪過多症ニ本劑ヲ持續的ニ使用スルト

キハ脂肪ヲ減少セシメ體重ノ減少ヲ來スニ至ルト、而シテ此體重ノ減少ハ蛋白質ヲ破壞スルニアラズシテ無

窒素物ヲ消却スルニアリト云フ、其他血管運動ニ關スル脱落症タル過度ノ情慾竝ニ顔面ノ潮紅又ハ往々激

シキ發汗等ヲ治療シ、加之一般性神經症狀タル頭痛・不眠・眩暈等ニ對シ殊ニ治療上ノ價值アリト云フ。

余ハ本劑竝ニオオハラ―ゲン等ヲ持長的ニ使用シタルモ不幸ニモ未ダ吾人ヲシテ注意ヲ惹起スルニ足ルベキ奏

效ヲ認メタルコトナシ。

第三章 血清竝ニ「ワクチン」 Serum und Vakzin.

第一節 血清療法 Serotherapie.

免疫血清中抗毒性血清ハ血中ニ遊離スル毒素ト化學的結合ヲナシ毒素ノ作用ヲ消滅セシメ、抗菌性血清ハ病

原菌ト結合シ傍ラ「コンプレメント」ヲ取り溶菌セシメ以テ其效ヲ現ハスモノナルベシ。

細菌毒素ノ生體內ニアルヤ漸次生體內細胞ト強固ナル結合ヲ營ムモノニシテ、此結合ハ初期ニ於テハ抗毒性

血清ニヨリ分離中和シ得ベシト雖モ、強固ナル場合ニ於テハ如何ナル多量ノ抗毒性血清ヲ用フルモ之ヲ分離

セシムルコトヲ得ズ、此關係ハ當ニ抗毒性血清ノミニ止マラズ抗菌性血清ニ於テモ亦然リ、傳染ノ初期ニハ

血中未ダ菌數少ナク從テ中毒症狀ノ僅少ナルトキノミ其效ヲ顯ハスモノナリ。
人體内ニ注入セラレタル血清ハ約二週日存留スルモノト思考セラル、從テ免疫血清ノ效力ハ此時期ニアラザ
ルベカラズ。

注射スベキ血清ノ用量ハ其種類ニヨリ異ナルモ一般ニ抗菌性血清ハ一回ニ多量ヲ用フルハ甚ダ危険ナリ、之
ニ反シテ抗毒性血清ハ多キニ失スルモ此虞レ少ナシ。

婦人科並ニ産科的治療ニ關係アル血清ノ種類 破傷風血清・「デフテリ」血清ハ其ニ抗毒性ニ屬シ連鎖球菌血
清・葡萄球菌血清・結核血清・淋疾血清等ハ其ニ殺菌性血清ニ屬スルモノトス。

過敏性及アナフィラキシー Ueberempfindlichkeit, Anaphylaxie. 異種動物ノ血液ヲ動物ニ、或ハ動物ノ血液

ヲ人體ニ注入スルトキハ危険ナル症狀ヲ起シ遂ニ死ヲ來スコトアリ、又血清若シクハ細菌蛋白質ヲ反復注射
スル時ハ一種ノ不快ナル反應ヲ觀ルコトアリ、斯カル性ヲ過敏性ト稱シ此狀態ヲ「アナフィラキシー」ト稱ス。

血清注射ニ當リ屢々遭遇スルハ産褥熱ニ對スル連鎖球菌血清ニヨル血清病トス、血清病ハ抗毒素ニヨリ起
ルモノニアラズシテ血清自己ヨリ發スルモノナリ、稀ニハ唯一回ノ注射ニヨリテ起ルコトアルモ多クハ反復

注射ノ際ニ起ル、發疹ハ最モ屢々見ル所ニシテ注射後一二日ヲ經テ注射部ニ發疹シ四五日ニシテ全身ニ瀰漫
シ一見蕁麻疹様ナルコトアリ、又ハ麻疹或ハ猩紅熱様様ナルコトアリテ屢々發熱ヲ伴フモノトス、其他關節

痛・關節腫脹・筋痛等アリト雖モ吾人ノ實驗セシ場合比較の少數ナルガ如シ、尙ホ一時性蛋白質尿ヲ起スコト
アリト云フモ褥婦ニ於テハ此關係明カナラズ、發疹ハ注射ヲ中止スル時自然治癒スベキモ硼酸或ハ醋酸藥士

ノ濕布ヲ要セシコトアリ。
「アナフィラキシー」ハ動物ノ血清ニ存スルヲ以テ一度「アナフィラキシー」トナシタル動物ノ血清ヲ健康動物ニ

注射スル時ハ健康動物ハ亦其性ヲ享受スルモノトス。
アルツース *Althus* 氏ノ實驗ニ據レバ健康馬ノ血清ヲ兎ニ注射シ、第二回ノ注射ヲ十日乃至十四日ヲ隔テ行

フ時ハ兎ハ虚脱ニ陥リテ斃死スト、而シテ之ヲ「アナフィラキシー」ト命名セリ、尙ホ「アナフィラキシー」ハ特
異性ニシテ馬血清ニ對シ「アナフィラキシー」ヲ得タルモノハ牛血清ニハ異狀ヲ呈セザルガ如シ、第二回ノ注射

ニテ「アナフィラキシー」ヲ發シ之ニ耐ユル時ハ更ニ血清ヲ用フルモ何等不快ノ症狀ヲ來サザルガ如シ。
一般ニ「アナフィラキシー」ハ人體ニハ比較的其反應微弱ナルモ、發疹等ハ屢々見ル所ナルヲ以テ、血清療法ヲ

行フニ當リテハ先ヅ血清注射ヲ受ケシヤ否ヤヲ確メ、而シテ第二回ノ注射ヲナスニ當リテハ殊ニ注意ヲ要ス
ベク、且ツ第一回ノ注射後一二週日ノ後再注射ヲ行フガ如キハ之ヲ避クルヲ萬全ノ策トス。

第二節 「オプソニン」及「バクテリオトロピン」

Opsone u. *Bakteriotropine*

白血球ニ喰菌作用アルハ是レ主トシテ血清中ニ其力アルガ故ナリト論ゼシハ實ニ一八九五年デニス及ビレ
ックレン *Dings und Leick* 氏ニシテ、同氏ハ試験管内ニテ白血球ノ喰菌作用ハ該菌ノ免疫血清ヲ加ヘタル時
其作用最モ旺盛ニシテ、且ツ其作用ハ健康動物ノ白血球ナルト免疫動物ノ白血球ナルトニ關セザルコトヲ知
レリ。

之ヨリ先メチニコフ *Mitchnikoff* 氏ノ唱導セシ喰菌作用ハ或ル種ノ球菌血清ノ抗體ト是等球菌ト結合シテ白
血球ノ喰菌作用ヲ充進セシムルモノニシテ、白血球自己ハ何等結合ニ關與セザルコトヲ證明セリ。

然ラバ斯ク血清中ニアル或ル物質ハ彼ノ免疫體即チ「アンボツエブートル」ト同一ナルヤ否ヤト云フニ、コハ

直チニ判定シ難キモ血清中ノ或ル物質ハ「バクテリオトロピン」Bakteriotropin ナリト稱セリ。

一九〇三年ライト Wright 氏ハ單獨ニ之ヲ研究シ白血球ノ喰菌作用ハ血清ニヨリ亢進セラルルコトヲ知リ進
ンデ人血清ノ喰菌作用ヲ研究シ、該物質ハ五十五度乃至六十度ニシテ其作用ヲ失フコト、即チ易熱性ノモノ
ナリトシ之ヲ「オプソニン」Opsonin ト命名セリ、而シテデニース氏ノ所謂「バクテリオトロピン」ナルモノ
ハ耐熱性ノモノナリトス、又其後ノ研究ニ據リ「オプソニン」ナルモノハ人血清ノミナラズ動物血清ニモ亦此
作用ヲ有スルコトヲ知レリ。

オプソニン ハ白血球ニ刺戟ヲ與フルコトナク細菌ニ對シテ直接ノ働キヲ有スルコトハ之ヲ疑フノ餘地ナキ
ニ至レリ。

「オプソニン」作用ハ毒性ノ減弱セル細菌ニアリテハ健康血清若シクハ食鹽水ニテモ喰菌現象現ハルルモ、強
毒ノ細菌ハ免疫血清ニアラザレバ喰盡セラルルコトナシ。

「オプソニン」ハ六十度ニ三十分熱スル時ハ非働性トナルモ、更ニ新鮮血清ノ微量ヲ加フル時ハ之ヲ復活シ得
ベシ。

「オプソニン」ハ「コンプレメント」ト「アンボツエブトール」トノ共同作用ナルヲ以テ溶菌作用ニ類似スルガ如
ク、白血球ハ死滅或ハ瀕死ノ細菌ノミヲ喰菌スルニ過ギズトノ説ヲナス人アルモ、實際上溶菌作用ナキ血清
ニ「オプソニン」作用ノ著シキモノアルヲ知レリ、而シテ生體ニ侵入セル幾多ノ病原菌ヲ無害ニナスハ主トシ
テ「オプソニン」作用ノ力ナリト云フベシ、故ニ白血球ニ攝取セラレタル細菌ノ運命室扶斯菌ヲ「モルモット」
ノ脈管内ニ注射シ五分乃至十分ノ後檢セシニ菌ノ大部分ハ白血球ニ攝取セラレテ崩潰セラレタルヲ見タルニ
木氏ノ實驗アルモ、未ダ細菌ノ全部ニ互リ果シテ同様ノ結果ヲ來スベキヤ否ヤヲ知ルベカラズ。

バクテリオトロピン ハ免疫血清中ニアル一種ノ耐熱性物質ニシテ白血球ノ作用ヲ増進セシムルモノナリ、
元來主トシテ喰菌作用ヲ營ムベキ白血球ハ多核白血球ニシテ、單核白血球ニアリテハ其作用甚ダ僅微ナリト
云フ。

白血球ニヨリ攝取セラレタル細菌ノ多クハ溶解セラレ白血球内ニテ死滅スルモノナルベシ（但シ葡萄狀球菌
ト結核菌ハ例外ナルガ如シ）、白血球ノ喰菌作用ハ血清ニヨリテ刺戟ヲ受ケ其結果起ルモノナルヤニ就テハ
ノイフェルド Neufeld 氏之ヲ試験セリ、氏ハ白血球ニ免疫血清ヲ加ヘ三十七度ニ二十分間放置シ遠心器ニ懸
ケ、更ニ食鹽水ヲ以テ洗滌シ血清ヲ除キ之ニ連鎖菌ヲ加ヘシニ喰菌作用起ラザルモ、反之豫メ連鎖菌ニ免疫
血清ヲ加ヘ遠心器ニテ分離スルコト上述ノ如ク次ニ血清ヲ除キ、之ニ白血球ヲ加フル時ハ明カニ喰菌作用ノ
起ルヲ見タリ、是レ血清ガ細菌ニ働クコトヲ證スルモノナリ。

「オプソニン」ト「バクテリオトロピン」トノ差異ハ「オプソニン」ハ易熱性ニシテ且ツ「コンプレメント」ヲ加ヘ
テ働性トナシ得ルモ、「バクテリオトロピン」ハ耐熱性ニシテ「コンプレメント」ヲ加フルモ働性トナシ得ザル
ノ點ナリ、而シテ葡萄狀菌ヲ兔ニ注射スルトキハ注射後一時「オプソニン」ノ減少ヲ來タスモ反之「バクテリ
オトロピン」ハ暫時ニシテ増加スルヲ見ル。

次ニ來ルベキ問題ハ「オプソニン」ハ果シテ免疫ト直接ノ關係アルヤ否ヤノ點ナリト雖モ菌ガ白血球内ニテ死
滅スルノ確證ナキ以上此疑問ハ解決シ得ザルベシ、尙ホ「オプソニン」ノ量ト免疫ノ度トハ平行スルモノニア
ラザルガ如シ、其他「オプソニン」ノ増減ハ疾病ノ豫後ヲ定ムルニ大ナル價值ヲ有セザルモノノ如ク且ツ其係
數ノ檢定タル其成績甚ダシキ差誤ヲ生ズルモノナリ。

「オプソニン」ノ働キハ「コンプレメント」ノ量ニ關スルモノナレバ免疫作用ヲ「オプソニン」ノミニテ説明セン

コトハ甚ダ難カルベシ。

第三節 「オプソニン」試験法並ニ「オプソニン」療法

Untersuchungsmethode der Opsonine und Opsonintherapie.

ライト氏ハ試験管内ニテ白血球ノ喰菌數ヲ算シ之ヲ喰菌數ト稱シ、健康血清ト患者若シクハ特異療法ヲ受ケタル者ノ血清トノ喰菌數ニ比シタルモノヲ「オプソニン」率 Opsonindexト名ケタリ、例ヘバ

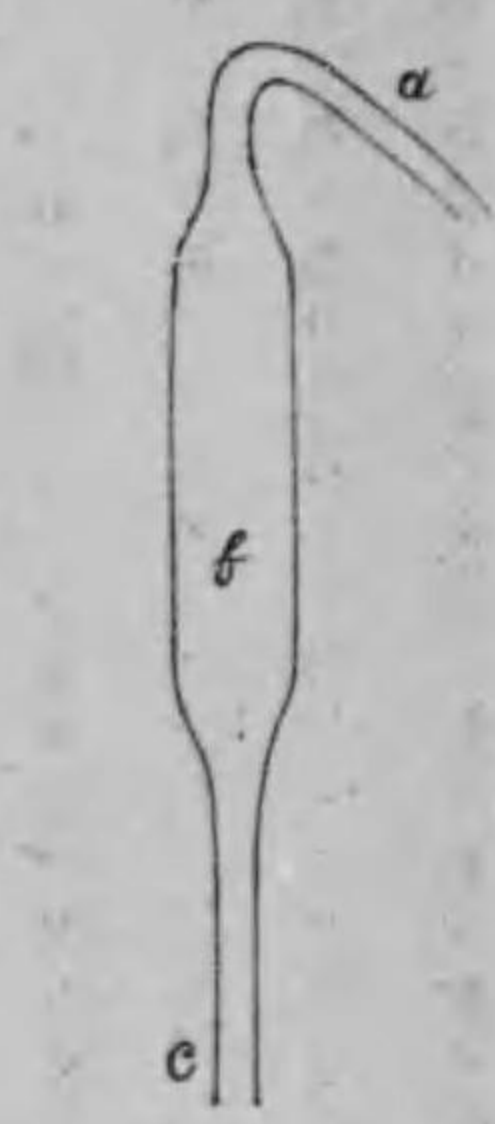
O₁ヲ以テ健康者血清ノ喰菌數トシ、O₂ヲ以テ患者血清ノ喰菌數トセバ

「オプソニン」ヲ檢スルニハ

- (一)「ビベット」硝子管ノ一端ヲ引キ延バシ毛細管トナシ其先端ニ護膜帽ヲ附シ吸引ノ用ニ供ス
 - (二)洗滌白血球。小硝子管ニ
- 1.00.0 } 加ヘタル液ノ
- 0.85 } 食鹽

約五ccヲ取り、而シテ豫メ亞爾爾保兒ニテ清拭シタル指頭ニ刺針シ壓搾ヲ加フルコトナクシテ湧出スル血液二、三十滴ヲ滴下セシメ血液ヲ充分該液ニ混和シ遠心器ヲ以テ沈澱セシム、斯クスル時ハ赤血球ハ管底ニ白血球ハ其上面ニ沈降層ヲナスベシ、是ニ於テ上清ヲ「ビベット」ヲ以テ吸ヒ取り更ニ0.85%食鹽水ヲ加ヘ再ビ遠心器ヲ以テ沈澱セシム、之ヲ二三回反復スル時ハ「ビベット」ヲ以テ白血球ヲ吸取スルコトヲ得ベシ。血清ハ第六十三圖ノ如キ小硝子管ヲ取り以上述ベシ方法ニテ指尖ヨリ流出スル血液ヲ(a)ニ受ケ(b)ヲ少シク暖

圖四十六第



メ(c)端ヲ密封ス、(d)ノ冷却スルニ從テ(a)ヨリ血液ハ吸取セラレ(c)ニ集マルベシ、之ヲ二三時間孵卵器中ニ置ク時ハ血清析出シ更ニ之ヲ遠心器ニ懸クルトキハ上層ニ血清ノ上澄ヲ生ズルヲ以テ之ヨリ「ビベット」ニテ血清ヲ採取スベシ。

細菌混液ハ新鮮ナル細菌ノ寒天培養ヲ取り之ヲ食鹽水ニ混合シ輕度ニ潤濁セルヲ度トス。

検査法トシテハ初メ「ビベット」ニ血球ノ一定量ヲ取り次ニ細菌液血清ヲ吸ヒ「オプエクト」硝子ノ上ニテ混和シ之ヲ「ビベット」ニテ吸引シ其兩端ヲ火焰ニテ熔封シ三十七度ノ孵室中ニ入レ適度ノ時間ヲ經テ之ヲ取出シ「オプエクト」硝子ニ平等ニ塗布シテ空氣中ニ乾燥ス、而シテ一度飽和昇汞水ニ浸シ固定セシ後左ノ液ニテ染色ス。

- 1.00.0 } 1%石炭酸水
- 0.25 } 「チオニン」

計算スルニ當リテハ多核白血球五十個以上ニ就キ其包喰セル細菌數ヲ算シ平均一個白血球ノ喰菌數ヲ求メ之ヨリ「オプソニン」率ヲ算定ス。

例ヘバ患者血清ニ於ケル「オプソニン」率ヲ2トシ健康者血清ノ「オプソニン」率ヲ1トスル時ハ2:1ハ當ニ「オプソニン」率ナリトス。

ライト氏ハ細菌或ハ其產生物ヲ豫メ人體ニ注射シ然ル後其血清ヲ採リテ檢スル時ハ注射後二十四時乃至四十八時間ハ「オプソニン」率減少シ即チ所謂陰性期 Negative Phaseヲ呈シ、其後再ビ「オプソニン」率ノ増進スルヲ陽性期 Positive Phaseトセリ、同氏ハ「オプソニン」療法ヲ施スニ當リテハ必ズヤ「オプソニン」率ノ如何ヲ調査シ常ニ其率ノ陽性ナルコトニカムルニアリト云ヘリ。

第四節 所謂「ワクチン療法」ノ原理

傳染病經過中ニ該被傳染體ニ施ス自働免疫法ヲワクチン療法ト云フ、本法普及ノ功ハライト氏ニ歸セザルベカラズト雖モ、之ヨリ以前既ニツベルクリン療法アリシコトヲモ忘ルベカラズ、即チ該療法ハ慢性傳染病タル結核ニ對スル一ノワクチン療法タリシナリ。

ライト氏ハ「フルンケル患者ノ血清ハ健康者血清ニ比シ葡萄狀化膿菌ニ對スル喰菌力遙カニ減少シ又慢性疾患・結核ニモ同一現象アル事ヲ認メ、若シ是等患者血清ヲシテ喰菌力ヲ増加セシメナバ該疾患ノ治療ヲ迅速ナラシムルコトヲ得ベシトノ想像ヲ起セリ、斯クノ如ク局所ニ化膿竈又ハ結核竈ヲ有スル患者ノ血清ニ喰菌力缺乏セルハ、畢竟病竈ヨリ抗體元ノ吸收サルコト不十分ナルガ爲メニシテ免疫抗體就中「オプソニン」ノ產生充分ナラザルニヨルモノナリトシ、若シ是等病竈ヨリ抗體元ノ吸收ヲ催ストキハ自然「オプソニン」ノ新生ヲ來シ慢性疾患ノ治療ヲ見ルコトアリ、是レ即チ自働免疫ヲ遂行セシメシモノト見ルヲ得ベシトセリ、是ニ由リテ推論セバ慢性ニシテ治療ノ傾向ナキ傳染性疾患ヲ治療センニハ抗體特ニ「オプソニン」產生ヲ旺盛ニシ且ツ是等產生抗體ヲシテ盛ニ病竈ニ集中セシメザルベカラズ、即チワクチン(死菌其他ノ菌成分)ヲ注射シ血中「オプソニン」量ノ増加ヲ企テ且ツ病竈ニ充血ヲ起サシメ或ハ其他ノ方法ニヨリテ血液淋巴ノ運行ヲ盛ニシ以テ「オプソニン」ノ集中ヲ圖ルコト必要ナリ、要スルニライト氏治療法ノ要點ハ血中「オプソニン」量ヲシテ常ニ高キニアラシメントスルニアリ、是レ「オプソニン療法」Oposintherapieノ別名アル所以ナリ。

元來細菌其他抗體元ヲ注射スル時ハ血中ノ抗體ハ消費セラレ一時抗體量ノ減少ヲ來スベクライト氏ハ之ヲ陰性期。negative Phaseト稱シ、注射セル抗體元量ノ多少ニヨリ或ハ速ニ或ハ徐々ニ増量シテ遂ニ舊態ニ復スル

アリ或ハ復セザルアリ又ハ復シテ後更ニ健康率以上ニ増量スルモノアリ、此増量期ヲ陽性期。Positive Phaseト名ヅケ便宜上之ヲ三種ニ區別セリ。

- (一) 抗體元即チワクチンノ注射量少量ナレバ、注射後直ニ喰菌率増加シ二三日間持續シ然ル後舊態ニ復スルモノナリ
 - (二) 注射量中等ナラバ、注射後直ニ其喰菌率僅カニ減少シ二十四―三十六時ノ後漸次再ビ増加シテ健康率ヲ超過シ七―九日ノ後甫メテ舊態ニ復ス。
 - (三) 注射量大ナレバ、其喰菌率ハ直ニ減少ヲ始メ數日ノ後其極ニ達シ次デ舊態ニ復スルモノナリ。
- ライト氏ハワクチン注射ニヨリ「オプソニン」陰性期ヲ短クシ或ハ之ヲ避ケ成ルベク大ナル陽性期ヲ得、以テ其治療免疫作用ヲ良好ナラシメントシ左ノ條項ニ就キ注意ヲ與ヘタリ。

- (一) 注射量ヲ成ルベク少クシ
 - (二) 反復注射ハ常ニ陰性期ヲ避ケ陽性期中ニ於テ之ヲ行フコト。
- 此要項中特ニ第二項ヲ嚴守センニハ日々患者ノ血清ヲ採取シ該病原菌ニ對スル喰菌率ノ表ヲ製シ次回ノ注射時日注射量ヲ定メザル可カラズ、是レ該療法ノ原理ナランモ其實行甚ダ困難ナリト言ハザルベカラズ。
- 斯カル「オプソニン」本位ノ自働免疫法ハ多數ノ慢性局所性傳染病ニ用ヒテ效果アルベキハ疑ナシト雖モライト氏ノ法ハ理論ニ偏セルノ嫌アリ、近時ワクチン療法ヲ試ムルノ士ハ多クハ單ニ喰菌率ヲ唯一ノ指針トセズ他ノ臨牀的觀察(彼ノ體溫昇騰ノ度等)ヲ以テ之レニ代フルニ至レリ、ライト氏自身モ亦既ニ其舊套ヲ棄テ「オプソニン」計測ヲ行ハザルニ至レルモノノ如シ。

然レドモ今尚ホ舊方ヲ墨守シ「オプソニン」率ヲ計算スルニアラズンバ以テワクチン療法ノ效ヲ舉グル能ハズトシ徒ニ喰菌計算ニ腐心スル者アリ。

疾患ニヨリテハ「オプソニン量ニ就テ病機消長ノ度ヲ測知セズトモ、他覺的及ビ自覺的症候ニヨリ容易ニ之ヲ證シ得ベシ。

ワクチンニヨル治療ノ原理ニ就テハライト氏ハ「オプソニン」ヲ以テ唯一治療力ノ本態トセルモ多少偏見ノ觀ナキ能ハズ、自働免疫ニヨル抵抗力増加及ビ舊病變治療ノ原理ハ決シテ一食菌作用ヲ以テノミ説明スベキモノニアラザル事ハ既ニ免疫學ノ示教スル所ニシテ、是レ恐ラク抗毒性ニ對シテ、菌性ニ作用ス可キ抗體ノ共働作用ナルベシ、ワクチン療法ハ一ツノ自働免疫法ニ違ギザルモ尙ホ此法ニヨリ病竈反應トシテ局所ニ輕度ノ充血ヲ來シ局所治療機轉ヲ催進助長スルモノナルコトヲモ知ラザル可カラズ。

ワクチン療法ガ病者ニ對シテ餘リ短時日内ニ急劇ニ奏效シ、人ヲシテワクチン注射ハ普通ノ自働免疫法ト其原理ヲ異ニスルモノニアラザルナキヤヲ疑ハシムルコトアリ、然レドモ福原博士ハ是レ毫モ不可思議ノ現象ニアラズトシ、局所病竈ノ狀況ガ菌成分ノ連續吸收ヲ難カラシムル者ニアリテハ病者ノ體細胞ハ病菌ノ諸種抗體元成分ニ對シ一旦固定攝取ヲ新生増加スルモ抗體ノ連續刺戟少キ爲メ未ダ之ヲ血中ニ放ツニ至ラザルコトアリ、斯カル際人工的ニ同一抗體元ヲ血中ニ送り固定備受含有抗體細胞ヲ刺戟スル時ハ即時的若シクハ催進的ニ抗體ノ遊離トナリ急劇ニ病竈ニ集注シ病原菌局所作用ノ一頓挫ヲ來スコトアルベシ、故ニワクチン療法ノ急劇奏效ハ一種ノ催進反應ト見ルベキモノナリトセリ。

皮膚ノ慢性葡萄狀化膿菌症・皮膚結核・慢性淋毒性尿道炎・喇叭管膿瘍等ハ實ニ所謂オプソニン療法獨占ノ領域ナリトス。

本法ハ混合傳染ノ場合ニアリテハ各病原ニ對シ各別ノ細菌療法ヲ施ス可ク、手術後ノ療法トシテハ手術ノ際完全ニ菌芽ヲ除去シ得ザリシ場合ニ之ヲ行ヒ、又手術前豫防的ニ之ヲ試スベキアリ。

ワクチン製法 ワクチンハ普通皮下注射トシテハ一回ノ菌數ヲ五百萬乃至二千萬トス、即チ注射液一立仙中ニ二千萬乃至三千萬ヲ有スルヲ以テ適量トス、斯クノ如ク菌數ヲ計算シテ製造スルヲ正式ノワクチン製法トス、然レドモ菌數ノ計算タルヤ甚ダ煩雜ナルヲ以テ吾人ハ一斜面又ハ一白金耳中ニ於ケル菌數ノ概數ヲ知リ以テワクチンヲ製シ患者ノ反應狀態如何ニヨリ其量ヲ加減セバ左程ノ大過ナキモノトス。

ワクチンハ初メ各菌ノ純培養ヲ作り一定度マデ發育スルヲ待チテ之ヲ製ス、而シテ培養スベキ時間ハ約左ノ如シ。

連鎖狀球菌ハグリセリン加寒天乃至血清・腹水寒天ニ四十八時間、葡萄狀菌ハ普通寒天ニ二十四時間

淋菌ハ血清・腹水寒天・卵黃寒天ニ四十八時間

大腸菌ハ普通寒天ニ二十四時間

培養後白金耳ヲ以テ菌ヲ取り之ニ殺菌生理的食鹽水ヲ加フ、殊ニワクチンヲ靜脈内ニ注射スル場合ニハ食鹽水ノ代リニ殺菌蒸留水ヲ用フレバ菌ハ平等ニ液中ニ混和セラレ凝固物ヲ作ラズ。

菌數ノ計算ハ内徑一ミリメートルノ白金耳ヲ標準トス、即チ一白金耳ノ菌數ハ大腸菌屬ニアリテハ十億、球菌屬ニ於テハ三十億ニ當レリ、故ニ一白金耳ノ菌ヲ五立仙ノ液ニ溶シ之ノ一立仙ヲ用フルトキハ約菌數二千萬乃至六千萬トナルベシ、靜脈内注射ニハ普通菌數七十萬位ヲ用フベシ。

前記液中ニ菌ノ平等ニ浮游スルヲ待チ四・五時間三十七度ノ孵卵器内ニ入レ六十度ノ溫度ニテ一時間加温殺菌シ、然ル後一白金耳ノ液ヲ取り適當ナル培養基ニ塗布シ菌ノ死滅又ハ發育不能ヲ確メタル後注射ニ使用スベシ、又之ヲ貯藏スルニハ〇・五%ノ割ニ石炭酸ヲ加フルヲ可トス。

感作ワクチン ワクチンヲ感作(ゼンヂビリジールン)セシメテ之ヲ使用セシハ一九〇二年ノ頃ベスレドカ

Reverdin 氏ヲ以テ嚆矢トス、氏ハ之ヲ腸室扶斯豫防ノ目的ニ應用セリ、爾後諸學者ノ研究ニヨリ腸室扶斯・赤痢・結核・肺炎・淋疾・連鎖菌・葡萄球菌ニヨル傳染ニ使用セラレ一定ノ效果ヲ示スニ至レリ。

諸氏研究ノ成績ヲ總合スルニ、生活細菌ヲ其免疫血清ニテ一定時處置スルトキハ菌ノ毒性ハ著シク減削セラレモ、注射後體內ニ於ケル抗体ノ形成ハ却テ増進シ從テ臨牀上ノ效果ヲ現ハシ時ニ疾患ノ頓挫ヲ見ルモノアリ。

○ワクチンノ製法ハ先ヅ菌ノ培養一白金耳ヲ採リ之ニ免疫血清一ccヲ加ヘ一晝夜孵卵器中ニ入レ、後テ電氣遠心沈澱器ニカケ沈澱セシメ上澄ヲ捨テ殺菌蒸餾水ニテ二三回洗滌シ、更ニ一〇ccノ殺菌蒸餾水ヲ加ヘ充分攪拌シ菌ヲ平等ニ瀰漫セシム、而シテ之ヲ皮下ニ一cc或ハ靜脈内(〇・二―〇・三)ニ注射ス、市川定吉氏ノ腸室扶斯ニ於ケル實驗ニ據レバ患者ハ注射後暫時ニシテ二三時間乃至六時間ニ互リ高度ニ發熱シ次デ急ニ分利スルモノニシテ稀ニ反復注射ヲ要スルコトアリト。

余ハ未ダ眞ノ感作ワクチンヲ試用スルノ機會ヲ有セザルモ、膿毒症狀ヲ來シ一進一退何等下熱ノ狀態ヲ認メザリシ者ニ自家ノ惡露ヲ培養シ、之レニ自己ノ血清ヲ加エ一晝夜孵卵器中ニ置キ沈澱器ヲ以テ上澄ヲ去リ、殺菌蒸餾水ヲ以テ二三回洗滌シ、更ニ殺菌蒸餾水ヲ加ヘ菌ヲ平等ニ混和シ、之レヲ靜脈内ニ注射セシニ一時惡寒戰慄ヲ來シ高度ニ發熱セシモ、翌日ニ至リ全ク無熱トナリ遂ニ恢復セシ數例ヲ實驗セリ、然レドモ未ダ研究中ニ屬スルヲ以テ是非ノ判定ヲ下スニ至ラズ。

感作ワクチンハ心臟機能未ダ衰弱セザルニ先ダチ使用スルニアラザレバ時ニ心臟麻痺ヲ來スノ憂ヒナシトセズ、殊ニ靜脈内注射ニ當テハ更ニ一層ノ注意ヲ要スルモノナリ。

ワクチン療法ノ補助 ワクチン療法ノ原理ハ血中抗体ノ増加ニアリ、ナレバ此抗体ニ富メル血液ヲシテ瘡ニ病

竈ニ流注セシムルハ是レ該療法ノ效果ヲ顯著ナラシムル所以ニシテ、例之局所ノ熱氣療法・ピール氏瘡血療法ノ如キ或ハ同時ニ抗体ニ乏シキ膿汁・滲出液等ヲ除去スルガ如キハ、亦以テ其ノ目的ヲ達セシムルノ一法タリ。

第四編

第一章 外陰部ノ疾病 Die Krankheiten der Vulva.

Maladies des organes génitaux externes.

第一節 外陰部ノ畸形 Bildungsfehler der Vulva

Malformations des organes génitaux externes.

既述セルガ如ク胎生第十四週ニ於テハ總排泄溝ハ外皮ノ陥入竝ニ腸管ト泌尿生殖道トノ中間ニ位スル中隔ノ下降ニヨリ前後二孔ニ分離ス、而シテ前方ハ泌尿生殖道、後部ハ肛門、其ノ前者ノ中間ハ會陰トナル、今爰ニ上皮ノ陥入不全ニシテ「クロアカ膜穿孔」セザルトキハ肛門及ビ陰門ハ完全ニ閉塞 Arteria ani et vaginae completa セラル、管ニ之レノミナラズ腸管ト泌尿生殖道中隔ノ形成不全トナリ、兩者ノ間ニ交通アルトキハ真ノ肛門ハ缺如シ腸管ハ反テ泌尿生殖道ニ開口ス之ヲ腔性非自然肛門 Anus praeternaturalis vaginalis ト云フ、而シテ之ヲ精査スレバ腸管ハ處女膜ノ外方即チ前庭ニ開口セルコト多ク斯カル場合之ヲ前庭性非自然肛門 Anus praeternaturalis vestibularis ト稱ス。

直腸及ビ外陰部ハ完成セルニ係ラズ直腸腔中隔不全ナルトキハ、此間ニ先天性直腸腔瘻 Congenitale Rectovaginalfistel ヲ遺殘シ、又直腸腔ノ中隔ハ完全ニ形成セラルルモ終腸ノ末端ニ向テ進ムベキ外皮ノ陥入ナキトキハ腸ノ下端ハ外界トノ交通全ク杜絶ス之ヲ鎖肛 Arteria ani ト云フ、又之ニ兼スルニ外陰部ノ共ニ閉鎖スルモノアリ、之ヲ外陰部肛門完全閉鎖 Arteria ani et vaginae completa ト云フ。

療法 單純ナル

鎖肛ハ生後四五

日ニシテ腸下端

ノ膨脹スルニ伴

ヒ會陰亦爲メニ

膨隆シ外部ヨリ

容易ニ發見シ得

ルニ至ル、此ノ

期ニ當リ會陰ヲ

其下端ヲ縫合スベシ。

シ、時日ヲ待テ更ニ成形手術



1、膀胱
2、陰
3、直腸
4、前庭
5、處女膜
鎖肛ハ生後四五日ニシテ腸下端ノ膨脹スルニ伴ヒ會陰亦爲メニ膨隆シ外部ヨリ容易ニ發見シ得ルニ至ル、此ノ期ニ當リ會陰ヲ其下端ヲ縫合スベシ。シ、時日ヲ待テ更ニ成形手術

腔管ト尿管トノ間ニ存スル中隔ノ下降不全ナルトキハ膀胱ハ直接ニ泌尿生殖道ニ開口スベシ、此際尿道ハ全ク缺損スルコトアリ、或ハ僅カニ前壁ノミヲ存スルコトアリ、同時ニ外陰部及ビ内生殖器ノ發育不全ナルコト少ナカラズ、尿道上裂ハ稀レニ見ル畸形ニシテ尿道上壁缺損ス此際往々縛裂骨盤・膀胱及ビ挺孔縛裂等ヲ合併ス。

第三節 半陰陽及假性半陰陽

Hermaphroditismus et Pseudohermaphroditismus. l'hermaphroditisme, le pseudo-hermaphroditisme.

眞ノ半陰陽トハ一個體ニテ男女兩性ノ生殖腺即チ卵巢及ビ辜丸ヲ組織的ニ證明セザルベカラズ、然レドモ眞ノ半陰陽ナルモノハ人類ニハ未ダ嘗テ確實ナル例證ナシ、之レニ反シテ假性半陰陽即チ外陰部ノ形態ガ男女ノ區別明確ナラズ然カモ生殖腺ハ男女何レカノ一方ノミヲ有スル者ニ至リテハ時ニ吾人ノ遭遇スル所ニシテ稀ニ法醫學上ノ問題トナルコトアリ。

而シテ假性半陰陽ハ之ヲ男性及ビ女性ノ二種ニ分ツ。

男性假性半陰陽 Pseudohermaphroditismus masculinus

陰莖小ニシテ挺孔ニ類似シ且ツ尿道下裂セバ陰莖左右相癒合セズシテ其狀恰モ大陰唇ノ外見ヲ呈シ同時ニ辜丸潛伏セバ一層女子外陰部ニ類似スルニ至ル。

女性假性半陰陽 Pseudohermaphroditismus femininus 陰核非常ニ大ニシテ左右大陰唇ハ一部癒著シ陰莖ノ外見ヲ呈ス、陰核ノ下部ニハ泌尿生殖竇多ク小孔ヲナシテ開口シ、以テ男性外陰部ノ外觀ヲ具フ、此ノ際卵巢「ヘルニア」ヲ兼ネ、陰唇ノ膨隆セシモノハ恰カモ男性外陰部ニアラザルカヲ疑ハシム。

第四節 急性陰門炎 Vulvitis acuta. Vulvie aiguë.

一般ニ急性並ニ慢性陰門炎ハ他部生殖器ノ炎症ニ比シ比較的稀レニ見ルモノニシテ多クハ腔及ビ子宮内膜ノ炎症ト合併ス、是レ腔及ビ子宮ヨリノ分泌物ハ此部ニ於ケル上皮ヲ軟化シ以テ細菌ノ侵入ニ機會ヲ與フルニヨルナリ、即チ腔加答兒・子宮内膜炎・子宮及ビ腔ニ於ケル新生物ノ破潰ニヨル分解産物ノ刺戟其他尿瘻及ビ糞瘻等ニヨル尿屎ハ常ニ有菌且ツ腐蝕性ヲ有シ從テ炎症ヲ起スニ至ル、單純性膀胱加答兒ニアリテハ陰門炎ヲ來スコト稀レナルモ糖尿尿病者ノ尿ハ種々ノ細菌殊ニ驚口瘡菌及ビ「レプトトリキ」種ノ發育ニ適シ炎症ノ原因ヲナスコトアリ、糞瘻或ハ會陰裂創等ニアリテハ大腸菌ニヨル炎症ヲ起シ易シ、元來該部位ハ強韌ナル上皮ノ被覆アルヲ以テ炎症ニ對スル防禦力比較的強ク從テ上皮ノ損傷若シクハ軟化ヲ來スニアラザレバ炎症ヲ起スコト稀ニシテ、淋毒菌ノ如キモ成人ニアリテハ原發性陰門炎ヲ起スコト甚ダ稀レナルガ如シ。

症候 陰門ノ發赤・腫脹・分泌・疼痛等ニシテ發赤ハ汎發性ニ或ハ斑點狀ニ現ハル殊ニ斑紋狀ノ潮紅ハ急性時期ノ經過後ニ見ル所ナリ、急性淋毒症ニ於テハ腫脹著シク粘膜ハ光澤ヲ有シ觸接ニヨリ出血シ易ク、就中處女膜及ビ小陰唇甚シク腫脹シ尙小陰唇ニアリテハ乳嘴ノ増殖ニヨリ散在性ニ赤色柔軟ナル小結節ヲ發生シ一見

恰カモ尖圭コンヂロームノ外觀ヲ呈ス、稀レニ陰核及ビ陰核包皮ノ腫脹ヲ來ス事アリ、此際陰核ハ包皮ニヨリテ被包セラレ全ク外露ヨリ見ル能ハザルニ至ル、分泌物ハ粘液様或ハ全ク膿汁様ノコトアリ、其色ハ白黄色ニシテ重症ノ場合殊ニ淋毒症ニアリテハ綠色ヲ帶ベリ、性質ハ屢々稀薄ナルモ時ニ粘稠ニシテ陰唇ヲ粘著セシムルコトアリ、疼痛ハ初期ニ激シク耻骨部ニ重感及ビ灼熱ノ感アリ、殊ニ排尿・觸接・歩行ニヨリテ其度ヲ加フ、時ニ分泌物ノ爲メ下衣ヲ外陰部ニ粘著セシメ歩行ノ際剝離シテ創傷ヲ來シ疼痛ニ耐ヘザルニ至ル、而シテ患者ハ屢々陰門ノ頑固ナル瘙癢ニ苦惱シ搔破ニヨリ膿疱疹及ビ癬疽ノ發生ヲ促スコトアリ。

診斷 以上臨牀上ノ所見ヨリシテ其診斷容易ナリ、只陰門炎ガ原發性ナルカ續發性ナルヤヲ判定スルコト困難ナルコトアリ、然レドモ他部生殖器ヲ檢シ傍ラ既往症ニ注意セバ原發竈ヲ知ルニ難カラザルコト多シ。

第五節 淋毒性陰門炎 *Vulvitis gonorrhoeica. Vulvite blennorrhagique.*

急性陰門炎ノ約七十五%ハ淋毒性ニシテ處女又ハ薄弱ナル上皮ヲ有スル婦人ニアリテハ該部ハ淋毒ニ對スル唯一ノ好發部位ナリ、經産婦ニシテ上皮ノ肥厚セルモノニアリテハ續發性ニ子宮竝ニ尿道ヨリノ腐蝕性分泌ニヨル刺戟ニ基因スルコト多シ、臨牀上急性淋毒性陰門炎ニアリテハ甚ダ多量ノ膿様分泌物ヲ出シ其色或ハ黄色時ニ綠色ヲ帶ビ屢々尿道炎及ビバルトリン腺炎 *B Bartholinitis* 合併ス、バルトリン腺ハ偏側或ハ兩側共ニ梅毒乃至鶏卵大ニ腫脹シ暗赤色ヲ呈シ壓痛ヲ伴ヒ硬度固ク排泄管ノ開口部ハ紅斑ヲ呈ス、ゼンゲル氏ハ之ヲ淋毒性斑點 *Macula gonorrhoeica* ト稱セリ、膿汁ハ排泄口ヨリ又ハ小陰唇ニ穿孔スルコトアリ、化膿ハ獨リ淋菌ノミニヨラズ葡萄菌・連鎖狀菌稀レニ大腸菌ノ續發性傳染ニヨルモノナリ、時ニバルトリン腺ノ化膿ニアラズシテ其排泄管中ニ蓄膿セララルコトアリ、腺ト排泄管トハ自然其位置ヲ異ニシ形ハ長紡錘形ヲ呈

欠

欠

分泌物ハ傳染力甚ダ強シ、又合併症トシテ附近淋巴腺化膿シテ所謂有痛性便毒 (painful bubo) ヲ伴フモノトス。好發部位ハ尿道口・處女膜縁・會陰繫帶・大小陰唇等ナリトス。

診斷 上記記載ノ諸點ニ留意シ尙疑ハシキ際ハ分泌ヲ取り石炭酸「フクシン」メチレン「青」ニテ染色スル時ハ膿球中ニ又ハ其間ニ「デユクレ」(Ducrey) 氏連鎖桿菌ヲ發見ス、該菌ハ「グラム陰性」ニシテ又血液加寒天培養基ニ培養スルトキハ約二日ニシテ小ナル圓形ノ「コロニー」ヲ形成ス、凝水中ニモ亦多數發育ス、而シテ此ノ培養ヨリ他ニ移植セシメ得ルモノナリ。

又粟粒結核ノ際此部ニ稀レニ結節ノ發生ヲ見ルコトアリ、尙ホ實扶の里・猩紅熱・麻疹・肺炎等ハ幼兒期ニ於テハ陰門炎ヲ起シ其結果トシテ陰門閉鎖症ヲ貽スコトアリ、實扶の里ハ屢々吾人ノ遭遇スル所ニシテ被膜ヲ形成シ傍ラ潰瘍ヲ發生シ固有ノ實扶の里菌ヲ證明ス、然レドモ咽頭實扶の里ハ必ずシモ合併スルニ限ラザルガ如シ、其他實扶の里・室扶斯・虎列拉等モ亦陰門ニ潰瘍ヲ發生スルコトアリ、殊ニ虎列拉・實扶の里ニアリテハ陰門ニ壞疽ヲ來スコトアリ。

陰門ノ贅口瘡ハ小兒ノミナラズ大人殊ニ妊婦ニ之ヲ實見スルコト多シ、「レンス大」ノ屢々癒合セル白色ノ斑點ヲ生ジ僅カニ發赤スルノ外他ニ粘膜ノ異常ヲ來サズ、疑ハシキ場合ニハ「ゾール」菌ヲ檢索スベシ、該菌ハ上皮ノ間ニ發育シ組織ノ深部ニ侵入セザルノ傾向アリ、又放線菌ニヨル陰門炎等アルモ比較的稀レナリ、只丹毒ハ往々吾人ノ實驗スル所ニシテ之ヨリ激シキ蜂窩織炎ヲ續發セシムルコトアリ。

第七節 急性陰門炎ノ療法

豫防法トシテハ是等原因タルベキモノヲ避ケザルベカラズ、又疾病ノ原因ヲ探知セバ其ニ對スル療法ヲ講ゼ

ザルベカラザルハ勿論ナルモ、急性期ニアリテハ煮沸温水ニテ外陰部殊ニ其皺襞間ヲ清淨ニシ、急性刺戟症狀アル間ハ絶對的安靜ヲ命ジ醋酸礬土・硼酸水ノ濕布ヲ施シ、疼痛ニ對シテハ鉛糖水ノ濕布ヲ行ヒ或ハラノリン軟膏又ハ亞鉛華軟膏ヲ塗布シ以テ外來刺戟ヲ防ギ或ハテルマトール・キセロフォルムヲ撒布スルモ可ナリ。

淋毒性陰門炎 ノ急性期ニアリテハ安靜臥牀ハ絶對的必要ニシテ傍ラ上記ノ濕布ヲ施スベシ、バルトリーン氏腺炎ニナリテハ初メ先ヅ保守的療法トシテ鉛糖・アルコホル・醋酸礬土・過酸化水素等ノ濕布ヲ試ムベシ、若シ化膿セシ時ハ可成大ナル切開ヲ加ヘ排膿ヲ試ムルカ或ハ出來得ベクバ全腺ノ摘出ヲ施スベシ、急性炎症既ニ去リ腔ヨリ多量ノ分泌アル場合ニハ硫酸亞鉛又ハ醋酸礬土水ヲ以テ洗滌スベシ、其他乾燥療法トシテ殺菌白陶土ヲ撒布スルモ可ナリ。

少女ノ陰陰門炎ニアリテハ第一傳染ノ根原ヨリ隔離シ傍ラ綑帶ヲ施シ以テ眼炎ヲ防禦セザルベカラズ、又稀薄ノ硝酸銀又ハプロタルゴール液・過酸化水素・過滿俺酸加里ヲ以テ局部ヲ洗拭スベシ、腔加答兒ノ合併セザルトキハ腔洗滌ヲ施スノ要ナキモ、合併アル場合ニハロイコフエルマンチン Leukokermatin ノ注入ヲ以テ良法トス、本劑ハメルク社ノ販賣ニ係ハルトリフシテ馬ヲ免疫シテ得タル抗素ナリ。

初期ノ硬結ハ之ヲ切除スベク扁平贅肉ニハ甘朮ヲ撒布スベシ。

軟性下疳ニハ二三日毎ニ結晶石炭酸ヲ以テ之ヲ腐蝕シ然ル後〇・二%硫酸銅液又ハ二%醋酸アルミニウム液ノ濕布ヲ施スベシ、濃厚ナル過酸化水素ヲ塗布スルモ可ナリ、又電氣燒灼ヲ行ヒ後二一〇%テルマトール軟膏ヲ貼シ更ニ濕布ヲ施スモ宜シ、横痃ハ初メ消炎法ヲ行ヒ化膿セシトキハ切開ス。

實扶的里ニアリテハ血清ヲ用ヒ局部ニハ沃度丁幾ヲ塗布ス、瘻口瘡ニハ硼砂グリセリンノ反復塗布ヲ行フ。

第八節 外陰部ニ於ケル皮膚病 Hautkrankheiten in Bereiche der Vulva. (Maladies des peaux des organes génitaux externes.)

濕爛 Ekzema interitigo ハ大陰唇及ビ陰股ノ皺襞間ニ起ルモノニシテ白帶下ノ多キ場合、局部ノ不潔ナル者竝ニ脂肪多キ人ニ(夏季ノ候ニ生ズ)屢々實見セラレ疼痛・癢痒ノ感激シキコトアリ。

汗疹 Schorfhoe ハ皮脂腺ノ強キ發育ニヨルモノニシテ、小陰唇ニ起リ白色ノ脂肪ヲ以テ小陰唇ヲ被覆スルニ至ルコトアリ。

瘡瘡 Akne ハ不潔ノ人ニ發生スルコト多ク之ヨリ疔疽ヲ生ズルコトアリ、稀レニ匂行疹 Herpes・鱗屑疹 Poriastis・傳染性軟疣 Molluscum Contagiosum ヲ見ルコトアリ。

瘡瘡及ビ疔疽ニハ初メ沃度丁幾ヲ塗布シ、傍ライヒチオール・硫黃・亞鉛華軟膏(イヒチオール一〇、沈降硫黃一〇〇、亞鉛華軟膏二五・〇)ヲ貼用ス。

濕爛ニハ硼酸水又ハ一・二—一・四%レゾルチンアルコホルニテ洗滌シ亞鉛華又ハワゼノールヲ塗布シ、陰唇ノ汗疹ニハレゾルチンアルコホルヲ塗擦スベシ。

第九節 慢性陰門炎 Vulvitis chronica.

急性炎症ノ結果即チ急性時期ニ際シ其處置ヲ誤リ或ハ處置ノ不充分ナル場合ニ慢性ノ經過ヲ執ルコトアリ、炎症ノ原因ノ持續セシ場合殊ニ淋毒症ニ於テ然リトス、急性淋毒症ハ短時ニ經過スベキモノナルモ時ニ炎症全ク消滅セズ或ハ月經直前又ハ直後ニ再發スルコト尠ナカラズ、是レ淋毒症ニアリテハ病竈單ニ外陰部ニ限

局スルコト少ナク菌ハ更ニ生殖器ノ上部ニ上昇シ殊ニ頸管淋毒症ニアリテハ數月ニ互リ治療ヲ加フルニ關ラズ時々刺戟性ノ分泌物ヲ出シ外陰部ヲ刺戟シ以テ炎症ヲ反復セシム、或ハ其有菌者タル夫ヨリ隔離スルコトヲ得ザルモノハ感染常ニ反復シ慢性刺戟状態ハ持續シ遂ニ外陰部ノ肥厚ヲ來スニ至ル、小兒ニアリテハ大小陰唇ヲ著セシムルコトアリ。

第十節 陰門結核 Tuberkulose der Vulva.

狼瘡 Lupus vulvae ハ稀レニシテ特異ノ小結節・浸潤・表皮結痂及ビ醜痕ヲ來ス、本症ハ結核菌ノ發見ニヨリテ診斷シ得ベシ、時トシテ侵蝕性潰瘍 Ulcus rodens・象皮病 Elephantiasis ト鑑別シ難キコトアリ、此際結核菌ノ證明ト動物試験トニヨルニアラザレバ確診シ難シ。

第十一節 慢性刺戟性加答兒 Der chronische Reizkatarrh der Vulva.

原因ハ淋毒又ハ他ノ傳染ノ結果ニシテ其症狀ハ疼痛ヲ缺キ主トシテ劇シキ癢痒感アリ分泌之ニ加ハル、炎症症狀ヲ呈スルコト少ナク粘膜ハ赤色ノ斑點ヲ呈スルニ過ギズ、搔爬ノ爲メ瘡瘡及ビ疔疽ノ發生ヲ見ル、慢性加答兒ノ原因ニ就テハ持續的充血ノ原因トシテ反復性ノ刺戟ヲ探求スベク殊ニ手淫ノ如キハ主ナルモノニシテ小陰唇皮脂腺ノ増殖之ニ由テ生ズ、療法ハ主トシテ原因ノ除去ニカメ且ツ坐浴等ヲ命ズベシ。

第十二節 陰門癢痒症 Pruritus vulvae.

組織的ニハ乳嚢體中ニ於ケル結締組織ノ増殖ト上皮下ニ於ケル圓形細胞ノ浸潤竝ニ皮脂腺ノ増殖ニシテ炎症性

局處性上皮ノ増殖ハ必發ノ症狀タラザルガ如シ、故ニ炎症ハ本病ノ本體ニアラズシテ寧ロ結果狀態ト思考スベシ、癢痒ハ凡テノ炎症ニ起ルベキ症狀ナルモ、本症ニアリテハ陰門及ビ陰門周圍ニ限局シ且ツ持續性ニシテ殊ニ暖氣ニヨリ其度増劇シ殆ンド耐ユル能ハザラシムルコトアリ。

精細ニ検査スルトキハ多クノ場合子宮又ハ尿道ヨリノ分泌・膀胱加答兒其他手淫等之ガ原因タルヲ發見シ得ベシ、又糖尿病患者ニ主症候トシテ陰門癢痒症ヲ起スコトアリ或ハ膀胱腎臟結石・黃疸・便秘ニヨル骨盤内嚢血・其他腸寄生蟲等之ガ因タルコトアリ、或ハ單ニ精神ノ障礙ニヨリテ起ルコトアリ之ヲ真正癢痒症 *genuine Pruritus* ト稱ス、稀レニ子宮後屈症ノ患者ニテ後屈ヲ整復シ頓ニ癢痒ノ消失セシ例アリ、外見上陰門ノ粘膜ハ灰白色ヲ呈シ必ズ深淺種々ノ裂傷アリテ其結果トシテ炎症ヲ伴フ、甚ダシキハ癢痒ノ爲メ憂鬱症ニ陥ルアリ或ハ不眠ヲ來シ刺戟性トナリ時ニ自殺ヲ企ツルモノアリ。

療法 ハ先ツ疾病ノ原因全身病ニ存スルカ、或ハ局處ノ刺戟性分泌ニヨルカヲ探究シ以テ其方針ヲ定メザルベカラズ、病原ニ對スル療法ハ勿論局處ノ清潔ハ又以テ本病治療ニ對スル第一要義タリ、輕度ノモノニアリテハ反復坐浴ヲ行ハシムベシ、高度ノモノニハ腔及ビ外陰部ヲ石鹼ヲ以テ嚴重ニ洗滌シ次テ三―五%石炭酸水ヲ以テ洗滌スベシ、尙有效ナルハ陰毛ヲ剃リ石鹼水ヲ以テ根本的ニ皸裂間ヲ洗滌シ次テ三%石炭酸水又ハ二―三%硝酸銀水或ハメソタン Mesotan (メソタン)・〇阿列布油二〇%ヲ塗布スベシ、二十五%亞鉛華過酸化水素軟膏ヲ用フ、又根本的ニ洗滌ノ後テ三%石炭酸ワセリンヲ塗布シ或ハ沃度丁幾ヲ反復使用スルモ可ナリ、頑固ノ場合ニハ一〇―二〇%硝酸銀水又ハ硝酸銀棒ヲ以テ腐蝕シ五%古加因ラノリン・ワセリン各等分ノ者ヲ貼用ス、時トシテ五%メソタン阿列布油ヲ塗布シテ效ヲ見ルコトアリ、又次ノ塗布藥ヲ賞用スル者アリ。

サリチル酸

〇・五

レゾルチン
アルコール

一〇〇
五〇〇

其他生理的食鹽水ヲ皮下ニ注入シテ效ヲ奏スルコトアリ。

佛國ノ臨牀家ハ主トシテ左ノ處方ニ依リ軟膏及ビ塗布料ヲ製セリ。

(一) ワゼリン	一〇〇	イヒチヨール	一〇〇
ラノリン	一二〇	(三) 石炭酸	一〇〇
炭酸ビスミット	一〇〇	鹽酸モルモネ	〇・四
(二) ワゼリン	一八〇	千倍青酸	三一〇〇
ラノリン	一二〇	グリセリン	五〇〇
亞鉛華	一〇〇	水	一一〇〇

是等治療法ニシテ其效ナクンバレントゲン放線ヲ用ヒ特效アルコトアリ即チ癢痒部ノミヲ照射シ他ハ十分ニ防禦スベシ、人ニヨリ軟線ヲ用ユ、又ハ三mmアルミニウム板ニテ濾過シ硬線ヲ通ジテ效果ヲ見タルコトアリ、切除法ハ現今廣ク用ヒラズ、其他一般療法ハ之ヲ等閑ニ附スルコトナク且ツ精神症狀ニモ注意ヲ怠ルベカラズ。

注意 余ハラチウム療法ヲ受ケ高度ノラチウム潰瘍發生セルニ關ラズ癢痒輕快セズ疼痛之レニ加ハリ一層苦悶ノ度ヲ増セル一患者ヲ實驗セリ。

第十三節 陰門硬變症

Kraurosis vulvae. (Leukoplakia vulvae)

一千八百七十五年ローソン、テイイト Lawson, Tait 氏小陰唇及ビ處女膜ノ萎縮ヲ記載シ爾後一千八百八十五年

ブライスキー *Briskey* 氏ニ至リテ甫メテ精細ニ記載セラレタル極メテ稀有ノ疾病ニシテ外陰部ニ一種特異ノ變化ヲ起スモノナリ、小陰唇ハ萎縮シ殆ンド認識シ難キニ至リ時ニ全ク消失スルコトアリ、大陰唇ハ固キ脂肪少ナキ扁平ナル皺襞トナリ腔口狭小シ皮膚ハ固有ノ著色ヲ來シ側方ハ股間ニ、後方ハ肛門ニ互リテ灰白青色ヲ呈シ色素ヲ失ヒ屢々蒼白赤灰白色ヲ呈スルニ至ル、皮膚ハ乾燥シ裂傷ヲ生ジ時ニ擴張セル靜脈ヲ透視セシム、以上ノ變化ハ前庭ニ及ブコトアリ、皮脂腺ハ減少又ハ消失シ大陰唇ノ近傍ニアリテハ毛囊ヲ缺如スルニ至ル、本症ノ輕度ナルモノハ何等症候ヲ呈スルナク偶然之ヲ發見スルコトアリ、他ノ場合ニハ排尿時ニ當リ灼熱竝ニ癢痒ノ感アリ其他又疼痛・癢痒相混ジテ來リ爲メニ耐ヘ難キニ至ルコトアリ。

本症ノ本體ニ關シテハ今尙ホ不明ニ屬ス、組織的ニハ乳頭ハ扁平トナリ一部消滅スルモノアリ、結締組織増殖シ癩痕萎縮ヲ來スノ状態ヲ呈ス、真皮ノ上層竝ニ上皮ニハ輕度ノ浮腫ヲ有シ、彈力組織ノ變性ヲ來ス、以上ノ所見ハ必ズシモ臨牀上ノ症候ト一致スルモノニアラズ例ヘバ臨牀上ノ症候高度ナルニ關ラズ顯微鏡的所見ノ甚ダ輕微ナルコトアリ、其他後來之ヨリ癌腫ノ發生ヲ見ルコトアルモ是等ノ關係ハ未ダ不明ナルガ如シ、療法モ亦不明ニシテ只罹患部域ヲ切除スルノ外術ナキガ如シ。

第十四節

外陰部侵蝕性潰瘍 *Ulcer rodens vulvae.*

外陰部ニ於ケル頑固不治ノ傾向ヲ示セル潰瘍形成ニシテ多クハ舟狀窩又ハ陰唇間皺襞ニ發生スル比較的稀有ノ疾病ニ屬ス、而シテ潰瘍ハ次第ニ擴大シ遂ニ外陰部全部ヲ破壊スルニ至ル、潰瘍面ハ脂肪様ニシテ邊緣不規則鋸齒狀ヲナシ、且浮腫ヲ呈シ周圍ハ象皮病様ノ所見ヲ示ス、障害ハ比較的輕度ナリ、潰瘍ヲ伴フガ故ニ象皮病トノ區別甚ダ困難ナリ、或ハ微毒性・癌腫性稀レニ結核性潰瘍トノ鑑別ヲ要スルコトアリ。

疾病ノ本體ハ今尙ホ不明ニ屬ス、腐蝕劑ヲ試ムルモ效ナキコト多ク潰瘍切除ノ外術ナキガ如シ、ラヂウム療法等ハ試ムベキモノナランカ。

第十五節 外陰部ノ腫瘍 Geschwülste der Vulva (Tumeurs de la vulve)

A 良性腫瘍 Gutartige Geschwülste (Tumeurs bénignes)

(一) 乳頭腫・尖圭贅肉 Condylomata acuminata 乳頭ノ簇生ニシテ其大サ鶏卵大ニ達スルコトアリ、組織的ニハ乳頭ノ肥大ニシテ各乳頭ハ異常ニ高ク且ツ樹枝狀ニ分枝セリ、贅肉ハ初メ普通大小陰唇殊ニ陰唇間ノ皺襞或ハ陰唇繫帶ニ發生シ全陰唇・外陰部ノ皮膚・肛門・陰阜・側方股間ニ及ブコトアリ、殊ニ妊娠期ニアリテハ腫瘍ハ繡花狀ヲ呈シ一見上皮癌ニ類似スルガ如キモ腫瘍ノ基底部分軟ニシテ其表面磨滅セララルモ破潰スルコトナシ、又周圍ニハ必ず小ナル贅肉ノ發生ヲ見ルベク且ツ刺激性分泌アルヲ知ルベシ、殊ニ屢々淋疾ヲ證明ス、然レドモ本症ハ淋毒症ニ固有ナルモノニアラズ他ノ疾病ニ於テモ亦其發生ヲ促スコトアリ、妊娠時ニハ殊ニ甚ダシク妊娠經過後ハ直ニ消退ス。

療法 クローム酸(四倍ノ者)ニテ腐蝕スルカ或ハサビナ末・甘汞等分ノモノヲ撒布スベシ、クローール、エチールヲ噴霧器ヲ以テ撒布シ次デ燒灼スルモ可ナリ。

「テレアンギエクタジー」 Telengektaze ノ手拳大腫瘍ヲ形成スルコトアリ、多クハ妊娠中ニ來ルモ産褥ニ至リ消失ス、稀ニ陰核ノ近傍陰唇等ニ長時殘留スルコトアリ。

(二) 外陰部象皮膚 Elephantiasis vulvae. 小陰唇ノ單純性肥厚ハ屢々手淫ノ結果トシテ吾人ノ目撃スル所ニシテ小陰唇ハ長キ規則正シキ皺襞トナルモ、象皮膚ニ在テハ大小陰唇ヨリ發生シテ巨大ノ腫瘍ヲ形成シ偏側或ハ

又屢々兩側ニ來ル、外見ハ種々ニシテ、表面平滑ナルモノ、結節様又ハ乳頭様多數ノ突起ヲ有スルモノアリ、其形不規則ニシテ時ニ巨大ニシテ重量三〇ポンドニ達セシ者アリト云フ、腫瘍ノ陥入部ニハ潰瘍ヲ有シ之ヨリ腸ニ達スル瘻孔ヲ見ルコトアリ、一般ニ象皮膚トシテノ障礙ハ少ナキモ續發的傳染ニヨリ全腫瘍ハ刺激性トナリ疼痛ヲ起シ遂ニ交接不能ニ陥ルコトアリ或ハ稀レニ淋巴漏ヲ起スコトアリ、組織的ニハ慢性肥厚性結締織ノ増殖ト淋巴管ノ擴張ヲ見ル、結締織ハ細胞ニ乏シク組織ハ淋巴液ニヨリ粗介セラレ血管周圍ノ浸潤ヲ生ジ全ク淋巴管周圍ノ慢性間質性炎症ト見ルベク、乳頭及ビ上皮ハ疾病ニ關與セザルモノノ如シ。原因ニ關シテハ未ダ確實ナラザルモ、「フヒラリア」ハ重視セララルモノナルベク微毒モ亦原因ニ關與スト云フ、療法トシテハ傳染ニ對スル嚴格ナル注意ノ下ニ切除スルノ一法アルノミ。

(三) 囊腫 Cysten 囊腫ハバルトリン氏腺ヨリ發生スルコト稀レナラズ、或ハ炎症經過後分泌物滯溜シ又ハ炎症ノ徵候ナクシテ生ズルコトアリ、而シテ其大サ胡桃實大ヨリ鳩卵大ニ達シテ大陰唇ノ後三分ノ一ノ部ヲ占位ス、故ニ脱腸又ハ軟性纖維腫ト誤診シ易シ、療法トシテハ摘出術ヲ行フベシ。

其他粉瘤 Atherom 又ハ小ナル粘液囊腫ノ發生ヲ見ル、其位置側方ニアリ、又腔ニ達スル如キ囊腫ハガルトネル氏腺ノ殘遺ヨリ發生スルモノナリ。

(四) 纖維腫又ハ脂肪腫 Fibrome und Lipome 纖維腫ハ殆ンド大陰唇ノ部域ニ限リ發生ス、大サハ鶏卵大ノモノ最モ多ク一般ニ其發育緩慢ニシテ稀レニハ兒頭大ニ至ル、組織的ニハ其原質大陰唇ノ結締織ニシテ周圍ヨリ容易ニ境界スベキ腫瘍ヲ構成シ屢々其重量ノ爲メ皮膚ヲ牽引シ以テ莖ヲ形成スルニ至ル、多クハ結締織束中ニ筋纖維ヲ混ズルモノニシテ、其中ニ小ナル囊腫様空洞ヲ有スルモノニアリテハ其發生ノ圓鞞帶ニアルコトヲ想像セザルベカラズ、斯カル場合之ヲ注意スルトキハ腫瘍ノ莖ハ鼠蹊管内ニ及ベルヲ發見ス、又此腫瘍ノ

主血管ノ圓形帶ヨリ來ルコトヲ知ルベシ、稀レニ腫瘍表面ニ潰瘍ヲ見ルコトアリ。主症候トシテノ障礙ハ比較的多ク、歩行及ビ交接ノ際最モ著シク殊ニ月經前ニ當リ腫脹ノ度ヲ増シ又重量ノ爲ニ牽引セラレテ疼痛ヲ起スコトアリ、療法トシテハ腫瘍ヲ摘出スベシ、莖ヲ有スルモノニアリテハ切除スレバ可ナリ。

脂肪腫ハ大陰唇及ビ陰阜ニ來リ比較的稀レニ見ル處ノモノナリ、外見上纖維腫ニ類似スルモ其硬度ノ柔軟ナルニヨリ纖維腫ト鑑別スルヲ得ベシ、組織的ニハ中ニ結締組織ノ混ズルモノ少ナク却テ粘液様變性ヲナスモノアリテ囊腫ト誤診スルコトアリ、療法ハ摘出術ヲ施スニアリ。

B 悪性腫瘍 Bösartige Geschwülste. (Tumours Malignes)

(一) 陰門癌腫 Das Karzinom der Vulva. (Cancer de la vulve) 婦人ノ癌腫發生部中最モ稀レニ見ルモノニシテ其頻度ハ三十五乃至四十ノ子宮癌ニ對シ一回ヲ示シ、年齢ニ關シテハ、五十五歳ヨリ七十歳ノ間ニ多ク或ハ其ノ以前ニモ亦發生スルコトアリ、部位ハ陰核・外尿道口・陰唇皺襞稀レニバルトリン氏腺ニ發生ス、今其ノ發生部位ヲ統計的ニ示セバ三百二十七例中

大陰唇	一〇五	陰核ト兩側陰唇	一一一
小陰唇	三五	尿道周圍	六
大小陰唇	二九	會陰連合	六
陰核	六二	バルトリン氏腺	一七
陰核及一側ノ陰唇	四一		

トナリ、組織的ニハ殆ンド扁平上皮癌ニシテ甚ダ稀レニ子宮癌ノ轉移ヲ見ルベシ、初メハ常ニ一側ニシテ不規則ナル移動シ難キ結節ヲ形成ス、屢々陰門硬變ノ部位ヨリ發生ス、初期ニハ何等ノ自覺症狀ナク表面ノ潰瘍ニ陥ルニ至リ甫メテ醫治ヲ乞フモノ多シ、破潰ノ初期ニアリテハ微毒性初期ノ硬結又ハ蠶蝕性潰瘍ト外見上何等選ム所ナク、切除セル切片ニ就キ鏡檢の診斷ヲ下スノ外ナシ、而シテ漸次廣汎ナル潰瘍性破壊ヲ來シ惡臭ノ分泌物ヲ漏泄シ陰核ニ觸接スベキ陰唇部又ハ他側ノ陰唇ニ自家接種ヲナシ此處ニ潰瘍ヲ生ズ、鼠蹊腺ハ比較的初期ニ浸潤セラル、外見上該腺ノ腫脹ナキモ鏡檢上癌腫變性ヲ來セシコト尠ナシトセズ、晚期ニ當リテハ癌腫性浸潤ノ尿道及ビ腔周圍・會陰等ニ及ブコトアリ。

症候 初期ニハ甚ダ輕度ニシテ單ニ搔痒灼熱ノ感アルニ過ギズ、斯ノ如キ自覺的症狀ハ屢々老婦ニ認ムル所ニシテ從テ觀過セラルルコト亦尠ナシトセズ、鼠蹊腺ハ漸次腫脹シテ疼痛ヲ起シ潰瘍ハ臭氣アル分泌ヲ伴ヒテ出血シ歩行ノ際灼熱疼痛甚シク排尿ニ際シテ膨滿ノ感ヲ訴フルニ至ル、此部ニ於ケル癌腫ハ殊ニ悪性ニシテ一度鼠蹊腺ノ犯カサルヤ再發ナクシテ治癒ヲ遂ゲタル例甚ダ稀レナルガ如シ。

療法 可成初期ニ根治の手術ヲ行ハザルベカラズ然レドモ再發ヲ防グコト甚ダ難シ、從來ノ統計ニテハ手術後五年以上再發ナキモノハ僅カニ五%ニ過ギズト云フ、レントゲン放射療法及ビ「ラヂウム」メソトリウム療法ハ手術後療法トシテ再發防禦ノ效果著明ナリト云フ、然レドモ施術スルコトナク單ニ此等ノ療法ノミニ委スル時ハ多ク其ノ目的ヲ達シ得ザルモノナリ。

(二) 陰門肉腫 Das Sarkom der Vulva. 癌腫ニ比シ一層稀レナリ、而シテ有色痣 Naevus pigmentosus ヨリ黑色素肉腫 Melanosarcome ノ發生ヲ見ルコトアリ、極メテ悪性ニシテ殆ンド治癒ノ望ミナシ、初期ニアリテハ移動シ易ク周圍ノ浸潤ナク良性腫瘍ト思考セラルルコトアリ、故ニ若シ此種ノ者ト思ハル場合ニ於テモ直ニ組

織的検査ヲ行ヒ以テ初期ニ治療ヲ試ムベシ、又潰瘍ヲ形成スルニ於テハ蠶蝕性潰瘍或ハ破潰セル纖維腫ト誤診スルコトアリ。

(三) 陰門血腫 Haematoma vulvae. 主トシテ墜落・交接等ノ外傷又ハ會陰ノ裂傷ヲ來セシ時ニ起リ、或ハ又血管ノ脆弱ナル場合ニ輕微ノ外傷又ハ咳嗽・腹壓等ニヨリテ之ヲ形成スルコトアリ。

陰唇内ノ結締織内ニ出血シ陰唇ハ腫脹増大シ著色ス、以上ノ徵候ハ以テ診斷ヲ容易ナラシム、小ナル血腫ハ全ク扁平ニシテ單ニ著色ヲ來スニ過ギザルコトアリ。

療法トシテ醋酸礬土ノ濕布ヲ施シ安靜ヲ命ズルトキハ速ニ吸收スベシ、化膿セバ切開排膿スベシ。

薦骨痛 Die Coccygodynie.

薦骨部域ニ於ケル疼痛ニシテ殊ニ起居ニ際シ其ノ感ヲ深カラシム、稀ニ歩行・排便・交接等ニ伴ヒ、亦時々不快ノ感ヲ覺エ或ハ疼痛甚ダシクシテ特異ノ體勢ヲ取ルニ至ル。

原因 多クハ「ヒステリー」・神經衰弱ノ一症候タリ、或ハ分娩殊ニ鉗子分娩等ニ因ル薦骨關節ノ異常ニ起因スルコトアリ。

療法 一般ニ頑固ニシテ難治ノモノトス、然レドモ時々何等ノ治療ヲ加フルナク能ク自然治癒ニ赴クコトアリ、又神經衰弱其ノ原因タレバ之ニ對スル治療ヲ講ズベク、榮養不良ノモノニハ轉地ヲ命ジ榮養ノ増進ヲ圖リ傍ラ臭素劑ヲ投ズベク、又局所療法トシテハ直腸按摩法ノ如キ或ハ感傳電氣ノ使用又ハ三%石炭酸阿列布油一—二ccヲ薦骨部皮下ニ反復注射スル等ニヨリ時ニ效ヲ奏スルコトアリ、内服ニハアスピリン・ピラミドンヲ投ジ疼痛ノ輕減ヲ圖ルベク、其他外傷の原因ニヨルモノハ皮下ニ於テ軟部ヲ薦骨ヨリ剝離スルノ法及ビ時々

薦骨切除法ヲ行フコトアリ然レドモ其ノ效果ニ至リテハ確實ナルモノナシ。

第二章 腔ノ疾病 Erkrankungen der Vagina.

第一節 腔ノ畸形

(一) 腔ノ缺損

(二) 腔ノ閉鎖 Atresia vaginalis.

先天性或ハ後天性ニ來ル、先天性腔閉鎖ハ多クハ子宮モ共ニ其ノ發育不全ナルヲ以テ經血ノ貯溜スルコト少シ、反之子宮ノ發育適度ナルニ於テハ、無月經症ナラザル限り、破瓜期ニ至レバ經血腔内ニ蓄積シ、腔血腫 Hamatokolpos ヲ形成シ膀胱・直腸ヲ壓迫シ次デ續發症狀ヲ起スモノナリ、其ノ甚ダシキニ至リテハ子宮血腫・喇叭管血腫ヲ見ルコトアリ。

後天性腔閉鎖ハ產褥潰瘍又ハ分娩ニ因ル深キ損傷或ハ組織ノ壞疽ニヨルモノナリ。

診斷 腔ノ閉鎖ヲ發見スルニアリ。

療法 閉鎖部ヲ切開シテ血液ヲ流出セシメ以テ閉鎖ノ再發ヲ防止スルニアリ。

閉鎖部ガ腔下端ノ一部ナルカ或ハ比較的薄キ膜様物ナルトキハ之レヲ十字形ニ切開シテ徐ロニ血液ヲ流出セシムベシ、但シ此際消毒ハ極メテ嚴ナルヲ要ス然ラザレバ時ニ傳染ノ危險アリ、又大部分ニ亘リテ閉鎖スルトキハ其ノ手術極メテ困難ナリ、先ヅ肛門ト尿道トノ中間ニ注意シ淺キ横切開ヲ加エ、之レヨリ鈍ク剝離シツツ深部ニ入り血腫壁ニ達シ、爰ニ穿刺ヲ行ヒ血液ヲ流出セシメ後チ沃度仿謨ガーゼ」ヲ強ク挿入シテ癒著ヲ防グベシ、斯クスルモ尙ホ再ビ閉鎖ヲ免レザルコトアリ、故ニ其目的ヲ達シ得ザリシ時ハ遂ニ子宮剔出ヲ行

フノ止ムナキニ至ル、造陰術ノ如キモ未ダ理想的ノ方法トハ云ヒ難カルベシ。

(三) 一側陰 *Vagina unilateralis*

一側ノミユルレル氏管ノ發育シタルモノニシテ形態上陰ノ半ヲ存スルモノト云フベシ。

(四) 雙陰 *Vagina duplex* 中隔陰 *Vagina septa*

ミユルレル氏管ノ癒合スルヤ次デ其ノ中隔ト共ニ上方ヨリ下方ニ向テ漸次消失スルモノニシテ、普通胎生第十二週ニ於テ完全ニ消失スルモノナルモ、中隔陰ハ此中隔ノ全部若シクハ一部殘存セルモノナリ、又雙陰ニアリテハ通常處女膜モ重複スルモノナリ。

療法 交接及ビ分娩ニ障礙アルトキハ中隔ヲ切除スベシ。

第二節 陰炎 *Die Entzündungen der Scheidenschleimhaut: Les inflammations du Vagin. Vaginitis, Kolpitis (vaginosis)*

陰粘膜及ビ粘膜下結締織ヲ犯スモノニシテ主トシテ結締織中ニ炎症ヲ起スモノナリ、鏡檢上充血・上皮ノ腫脹・結締織中ニ於ケル圓形細胞浸潤著明ニシテ上皮層ニハ限局性又ハ廣汎性ニ圓形細胞ノ輕度ナル浸潤ヲ見、深層ニ於ケル浸潤ノ境界ハ明カナラズ、炎症高度ニ達セバ上皮ハ諸處ニ破壊セララルニ至ル、炎症ノ種類ハ甚ダ多様ナルモ原發性淋疾性陰加答兒ハ比較的稀ナリ、何ントナレバ酸性陰分泌物竝ニ強固ノ多層上皮ハ淋菌發育ニ適セザレバナリ。

故ニ幼兒ニテ上皮未ダ薄弱柔軟ナルモノニアリテハ淋毒性陰加答兒ヲ見ルベシ、又淋毒性頸管加答兒ニテ分泌物ノ爲メニ陰上皮一度軟化シ上層ノ浸漬セララルヤ淋菌性陰加答兒ヲ起スコトアリ、然レドモ一般ニ稀レ

ニシテ尿道淋或ハ頸管淋毒症ト合併セル陰加答兒モ葡萄狀菌又ハ連鎖菌ノ混合感染ニヨルコト多シ、殊ニ妊娠中組織ノ軟化粗介、血液ノ多量ニナリシ場合又ハ心臟・腎臟・肝臟ノ疾患或ハ手淫等ニヨル鬱血ハ以テ陰加答兒ノ原因トナルベシ。

一般ニ廣汎性炎症ハ稀レニシテ局處ノ疾病ガ急性時期ニ當リ單ニ廣大スルニ過ギズ、要スルニ陰加答兒ハ單獨ニ起ルコト比較的少ナシト云フベシ。

急性瀰漫性炎症ニテハ全粘膜ハ腫脹・發赤・天鵝絨様外見ヲ呈シ出血易ク皺襞ハ分泌物ヲ以テ覆ハル、時期ノ經過ニヨリ又ハ初メヨリ部分的ニ同様ノ變化ヲ呈スルコトアリ、汎發性炎症ハ幼女又ハ老婦ニ見ル所ニシテ、老婦ニアリテハ上皮ハ化角シテ蒼白色ヲ呈シ汎發性炎症ヲ來スベキ傾向ヲ失フト雖モ、乳頭ハ浸潤ニヨリ肥大シ之ヲ覆ヘル上皮層ハ爲ニ稀薄トナリ、時ニ一部ハ上皮ノ缺損ヲ招キ爰ニ蒼白色ヲ呈セル粘膜ノ間ヨリ針頭乃至、レンズ大ニ至ル赤色ノ斑點ヲ現ハシ全腔粘膜ハ蚤嚙痕ノ外見ヲ表ハス、觸診上老年性ノモノニアリテハ何等顆粒様物ヲ觸知セズト雖モ幼女又ハ妊娠中ノモノニアリテハ顆粒狀突起ノ發生ヲ觸知シ得ベシ。

顆粒性陰炎 *Kolpitis granulans (vaginiae granulose)* ハ其經過緩慢ニシテ淋毒ニ固有ノ所見ナク上皮ハ菲薄トナリ又ハ遂ニ消失シ一局部或ハ全部ニ互リ粘著シ腔管ノ閉鎖ヲ來スコトアリ之ヲ癒著性陰炎 *Kolpitis veritabilium adhaesiva* ト稱ス。

總テノ種類ノ陰炎ヲ通シ患者ノ自覺的症狀ハ帶下ニシテ、輕度ノ際ニハ溷濁セル漿液性分泌物ヲ漏泄シ、之ニ剝脫セル上皮・破壊セル膿球ヲ交ヘ乳白色又ハ黃色ヲ呈ス。

疼痛ハ慢性ノ經過ヲ執ルモノニアリテハ全ク缺如スルモ、之ニ反シ急性期ニアリテハ灼熱・壓感・重感ヲ伴ヒ、尙ホ屢々尿意頻數・裏急後重等ノ症狀ヲ呈ス、急性時期ニハ適當ノ處置ニヨリ速ニ輕快スルモ、慢性ニア

リテハ一時輕快スルモ同時ニ頸管淋疾等ノ合併セルヲ以テ再發ヲ來スコト多シ、其他異物ニヨルカ或ハ急性傳染病ニ伴ヒタル場合ノ如キハ比較的治癒ニ趣キ易シ。

療法 交接ヲ禁ジ爾後ノ傳染ヲ防禦スルニアリ、局處ニハ弱キ收斂劑ヲ用フベシ、グリセリン單保ハ水分ヲ吸收シ日ナラズシテ輕快セシム、淋毒性ニハ次方ヲ用フルヲ可トス。

- カンフル 一〇〇
- アルムノール 一〇〇
- 硼酸 一〇〇
- グリセリン 一〇〇

佛國ニ於テ單保トシ使用セラレツツアル處方左ノ如シ。

- (一)ワゼリン 一八〇
- ラノリン 一二〇
- 酸化亞鉛 一〇〇
- カンフル 二〇
- (二)ワゼリン 二五〇
- 安息香 各二—五〇
- 燕澄茄 各二—五〇
- カンフル 各二—五〇
- (三)ワゼリン 一八〇
- ラノリン 一二〇
- コロラルゴール 五〇

近時乾燥療法トシテ白陶土ヲ撒布ス、又沃度イヒチオールヲ混ジタル硫酸鹽類ヲ用フルコトアリ、洗滌トシテハ低壓ノ下ニ過滿俺酸加里ノ稀薄液又ハ二%硼酸水或ハ醋酸礬土水ヲ用フ、重症ニテ膿汁分泌ノ激シキモノニアリテハ過酸化水素ヲ用フ、又上皮ノ損傷或ハ潰瘍アルモノニハ沃度丁幾又ハルゴール氏液ヲ塗布ス、洗滌ハ初期ニハ毎日一回宛トシ分泌減少セバ之ヲ隔日ニ行フモ可ナリ、淋毒性ノモノニアリテハ三—五%ブロタルゴール硝酸銀、二—三%ゾフォール等ヲ用フ、膣球トシテハ明礬又ハ單寧一—〇・五、カカオ酪二—〇

ヲ使用ス、合併症殊ニ頸管加答兒・內膜炎等ヲ發見セシ時ハ是等ノ治療ヲ加フルトキ膣加答兒ハ自然輕快スルモノナリ。

第三節 氣腫性膣炎 Die Kolpitis emphysematosa. (La

vaginite emphysematuse)

全ク特種ノ炎症ニシテ殆ンド妊娠中ニ限レルガ如シ、産褥期ニ入レバ自然消失スルモ稀レニ産褥中ニ起ルコトアリ、其症狀ハ單ニ白帶下ノ増加ニ過ギザレバ觀過セララルコトアリ、精細ニ檢スルトキハ内診上手指ニ柔軟ナル「レンス大ノ隆起ヲ觸知シ壓迫ニ應ジ消失ス、膣鏡ニテ檢スルトキハ紫暗色ナル粘膜ノ基底上ニ白色ノ斑點ヲ透視スベシ、屢々多發性ニシテ一見小ナル囊腫ノ存在ヲ疑ハシム、之ヲ穿刺スレバ瓦斯ノ逸出スルヲ見ル、即チ本症ハ瓦斯發生菌ニヨリテ起レル炎症ニシテ誘因トシテ妊娠ノ如キ組織内ノ充血・組織ノ粗介ハ該菌ノ發育ニ機會ヲ與フルモノナルベシ、本病ニ對シテハ特別ノ療法ヲ要セズグリセリン單保ノ如キハ治癒ノ時期ヲ速カナラシム。

第四節 急性熱性傳染病ニヨル膣炎 Die Kolpitis bei akuten

Infektionskrankheiten.

麻疹・猩紅熱・實扶的里・室扶斯・天然痘・虎列拉等ニヨル膣炎ハ比較的稀レナリ、多クハ格魯布性炎症ニシテ被膜形成ヲ伴ヒ一部或ハ全部ヲ被覆スルニ至ルコトアリ。以上ノ疾病ニテハ膣炎ノミニシテ既ニ發熱・骨盤内ニ於ケル疼痛・骨盤底筋ノ痙攣ヲ起シ粘膜下組織ノ腫脹・

膿汁分泌ヲ來ス、被膜剝離後ハ腔壁殊ニ上部ノ癒著ヲ來タシ遂ニ腔穹窿部ノ消失ヲ招クコトアリ、又實扶的里ニアリテハ咽頭實扶的里ノ經過中ニ起ルコトアリ。

産褥熱ニテ屢々腔炎ヲ起シ被膜ノ形成ヲ見ル、又矯正器ノ爲メニ壓迫壞疽ヲ來スカ又ハ癌腫ノ破壊セシ場合ニ被膜ヲ形成スルコトアリ、嚙口瘡モ亦腔粘膜ニ來ルモノナリ。

療法ハ主トシテ原因ニ對シテ施スベク眞ノ腔實扶的里ニハ血清ヲ使用スベシ、局處ニハ沃度了幾ヲ反復塗布シ被膜剝離シ潰瘍トナリシモノニアリテハキセロフォルム「ガーゼ」ヲ插入シテ癒著ヲ防グコトニカムベシ。

第五節 慢性刺戟症狀 *chronische Reizzustände durch*

mechanische Schädigung.

本症ハ反復性或ハ持續的ニ行ハルル機械的ノ刺戟ニヨリ腔ニ續發性傳染ヲ來セシモノナリ、即チ手淫・過度ノ交接・陰莖ト腔ト不權衡ノ場合又ハ矯正器ニヨリ刺戟・腔脫ニヨリ腔粘膜ノ變化等ニシテ局部發赤シ有臭ノ帶下ヲ來ス、高度ノ腔脫ニアリテハ粘膜ハ脆弱トナリ乾燥シテ彈力ヲ失ヒ腔部ノ近方ニ於テ強度ニ緊張セラル、此部ニ機械的刺戟アラバ粘膜ニ裂傷ヲ來シ壓迫性潰瘍或ハ緊張性潰瘍ヲ發生ス、若シ腔脫ヲ整復シ緊張ヲ弛緩セシムルトキハ數日ニテ治癒ニ趣クモ眞ノ壓迫ニヨリ潰瘍ニアリテハ頗ル頑固ナルモノナリ。上皮ノ一度壓迫ニヨリテ壞疽ニ陥ルヤ潰瘍ハ深部ニ進行シ治癒ヲ妨グルモノナリ。療法 主トシテ原因ヲ除去スルニアリ。

第六節 腔及外陰部結核 *Die Tuberkulose der Vagina und Vulva.*

(Tuberculose du vagin et de la vulve)

原發性ノモノハ勿論外界ヨリ侵入シ來ルモ、多クハ近隣臟器・子宮・膀胱・直腸・腔瘻・痔瘻又ハ糞尿中ニアル結核菌ヨリ傳染ス、或ハ又血行ニ由ルコトアリ、腔ニハ淺クシテ銳キ邊緣ヲ有スル潰瘍ヲ形成シ且ツ其緣ハ處處鋸齒狀ヲナシ表面ハ不潔ノ色ヲ呈ス、痛又ハ微毒ト異ナリ周圍ニ粟粒結核ヲ見ル、鏡檢上巨大細胞又ハ結核菌ヲ證明シ得ベシ、外陰部ノ結核ハ小兒ニ見ルコトアルモ甚ダ稀レニシテ多クハ續發性ナリ、症候トシテ灼熱ノ感ヲ來シ帶下之ニ伴フ、腐蝕藥ヲ用フルモ其效少ナシ。

第七節 腔周圍炎 *Parakolpitis.*

腔周圍ノ蜂窩織炎ニシテ自然分娩又ハ機械的途婉ニヨリ損傷部ニ續發性ニ感染セルモノナリ、或ハ又外傷後ニ屢々遭遇ス、殊ニ人工墮胎ニヨリ外傷ニ基因スルモノハ最モ惡性ニシテ他ノ骨盤結締織ヲ犯シ遂ニ腹膜ニ及ビ膿毒症或ハ稀レニ敗血症ヲ來シ死ノ轉歸ヲ執ルコトアリ、又稀レニ腔ノ實扶的里ニテ毒力強キカ、生體ノ抵抗力弱キ時又ハ小兒ニテ組織ノ軟弱ナルモノニ之ヲ來スコトアリ、稀レニ腔管ノ一部或ハ全部ヲ排泄セルコトアリ。

豫後 傳染ノ種類・毒力又ハ生體抵抗力ノ如何ニ關ス、潰瘍ヲ生ズル時ハ腔ノ閉鎖ヲ豫期セザルベカラズ。療法 閉鎖ヲ豫防セザルベカラズ、惡性ノモノハ弱キ防腐劑ヲ以テ冷水洗滌ヲ試ミ化膿限局セバ切開排膿シ傍ラ全身療法ニ注意スベシ。

第八節 腔ノ新生物 *Neubildungen der Schiede.*

Tumors du vagin.

(一) 囊腫 Cysten der Vagina (Kystes du vagin) 豌豆大乃至櫻實大ノ如キモノハ比較的屢々遭遇スル所ニシテ
 單獨又ハ多發性ニ來ルコトアルモ鶏卵大ノモノニ至リテハ稀レナリト云フ、多發性ニ來リタル小囊腫ニアリ
 テハ腔腺滯溜ニヨル囊腫性擴張ニシテ、單獨ノモノハ其形狀大ニシテ殊ニ側上部ニ位スルモノニアリテハガ
 ルトネル氏管ヨリ來レルモノト想像セザルベカラズ、然レドモ其發生不明ノモノ亦尠ナシトセズ。

外見ハ内容ノ如何ニ關シ蒼白色・卵白色・帶青色・褐色等ヲ呈シ一様ナラズ、周圍ヨリ著シク隆起シ容易ニ發見
 スルヲ得ベシ、壁ハ菲薄ニシテ時ニ筋纖維ヲ有シ内面ニハ常ニ上皮ノ被覆アリ、一層ノ圓柱上皮又ハ骰子狀
 ヲナシ稀レニ扁平上皮ナルコトアリ、小ナル囊腫ニアリテハ多層扁平上皮ナルコト又ハ内壁平滑ニシテ稀
 ニ乳嚙ヲ有スルコトアリ、内容ノ多クハ漿液性ニシテ時ニ硝子様粘液或ハ血様稀レニ粉瘤ノ如ク糜狀ノコト
 アリ。

療法 小囊腫ナレバ剝離シ創底ヲ縫合シ、大ナルモノニアリテハ囊腫ノ上部ヲ切除シ囊腫ノ邊切線ヲ以テ腔
 ノ粘膜ニ縫合スベシ單純ノ切開ハ再發ヲ來スコト多シ。

(二) 纖維腫 Fibrome et Myome der Vagina 及筋腫 Fibromes vagin et myome du vagin 纖維腫ハ甚ダ稀レニシテ
 後腔穹窿部ニ當リ粘膜直下ニ硬キ腫瘍ヲ生ズ、纖維筋腫又單純性筋腫ハ腔壁ノ筋纖維ヨリ發生ス、大ナルモ
 ノ少ナク多クハ後壁ニ發シ前壁ニ生ズルモノ稀ナリ、粘膜ハ膨隆シ屢々息肉狀ヲ呈シ遂ニ小莖ヲ有スルニ至
 ル、腺性筋腫ハ後腔穹窿部ヨリ發生シ大ナル腫瘍トナルコトアリ、小ナルモノハ敢テ障礙ヲナサザルモ、大
 ナルモノニ至リテハ膀胱・直腸ヲ壓迫シ時ニ惡性變性ノ危険及ビ壞疽ニ陥ルコトアリ。

療法 小ナルモノハ切除シ息肉狀ノモノハ莖ヲ結紮シテ切除スベク、大ナルモノハ剝離摘出スベシ、只腺性
 筋腫ニアリテハ其手術困難ナリ。

(三) 腔癌 Das Karzinom der Vagina (Cancer du vagin) 原發性ノモノハ甚ダ稀レニシテ多ク續發性ナリ、後腔
 穹窿部ニ發生シ殊ニ長時矯正器ノ壓迫ヲ受ケシ部ニ相當シ限局性又ハ廣汎性ニ全腔壁ヲ強固ナル管壁ト化セ
 シムルコトアリ、實質性癌腫ハ多クハ扁平上皮癌ニ屬シ稀ニ腺癌タリ腔腺又ハガルトネル氏腺ヨリ發生スル
 モノナルベシ。

症候 頸部癌ト同ジク交接ノ際ニ於ケル出血或ハ機械的刺戟ニ關係ナク血様・漿液様又ハ腐敗性ノ分泌アリ、
 周圍結締織ヲ犯スニ到レバ激シキ疼痛アリ、豫後甚ダ不良ニシテ截除術ヲ施スモ效少ナキコト多シ、手術後
 適當ニラヂウム療法ヲ施セシモノニアリテハ二年以上再發セザルモノ亦少カラズト云フ。

(四) 肉腫 癌腫ニ比シ一層稀レニシテ多クハ幼婦ニ發ス、葡萄狀ヲ呈シ腔外ニ現ハルモノアリ、多クハ限局
 性纖維腫ノ如キ所見ヲ呈シ時ニ其内容ニ横紋筋纖維ノ混入スルヲ見ルコトアリ或ハ又纖維性若シクハ粘液性
 肉腫ナルコトアリ、幼婦ニ來ルモノニアリテハ混合腫ナルコト多シ、是レ未ダ分化セザル中胚様細胞ニシテ
 後來筋纖維結締織・横紋筋纖維等ヲ化成スルモノナレバナリ。

本症ハガルトネル氏管ノ遺殘ニ關係アルヲ以テ發生部ハ腔前壁ノ上部ニアリ、再發甚ダシト稱セララルモ治
 療ノ目的ヲ達シ得ルコトアリ。

(五) 子宮ニ於ケル惡性絨毛膜上皮腫 Chorio-epitheliomes du vagin. ハ早期ニ腔壁ニ轉移スルノ傾向アルモノナリ。

第九節 腔 瘕 Vaginismus. Vaginisme.

不隨意ニ又ハ意識的ニ腔括約筋及ビ骨盤底筋殊ニ肛門舉筋・肛門括約筋等ノ疼痛ヲ伴フ痙攣性收縮ニシテ重
 症ノモノハ軀幹並ニ四肢ノ筋モ亦痙攣ニ關與スルコトアリ、佛ノフオール氏 Faure ハ次ノ如キ定義ヲ下セリ

Le vaginisme est une contraction spasmodique douloureuse du canal vulve-vaginal provoquée par une hyperesthésie toute spéciale des organes génitaux。斯カル症狀ハ陰莖又ハ手指等ノ挿入或ハ單ニ外陰部ニ輕ク觸接スルコトニヨリテ之ヲ惹起ス、甚ダシキハ單ニ交接ヲ想像スルモ亦同様ノ發作ヲ起スニ至ル、此原因ニ關シテハ諸家ノ説未ダ一定セザルモ今日迄原因ト見做サレシハ單ニ誘導タルニ過ギズシテ精神ノ薄弱之ガ誘因トナリ以テ症狀ヲ來スモノトセリ。

要スルニ本症ハ處女膜ノ知覺過敏ニヨルコト多ク第一ノ交接ヲ試ミルニ際シ未ダ快美ヲ感ズルニ至ラザルニ疼痛激シキガ爲メ交接不能ニ終リ、爾後男子ハ益々之ヲ遠グントシ婦人ハ其都度疼痛ヲ感ジ自己ノ陰具ノ完カラザルヲ憂ヒ遂ニ男子ノ近接ヲ厭フノ念ヲ起シ交接ニ際シ容易ニ上記ノ發作ヲ來スニ至ル、或ハ腔口ノ狹隘或ハ處女膜ノ硬靱ノ爲メ交接困難ナル者或ハ尿道口少シク下方ニ偏シ處女膜線ニアルガ如キ者ニアリテモ亦同様ノ症狀ヲ起スコトアリ、其他外陰部ノ損傷或ハ炎症性刺激ニヨリ感受性増進シ疼痛ハ以テ反射的ニ其原因トナルコトアリ。

診斷 手指或ハ腔鏡ノ挿入又ハ單ニ腔入口ニ觸ルルニ際シ劇痛ノ下ニ以上記載ノ症狀發作ヲ見レバ診斷容易ナリ、斯カル場合ニ當リテハ處女膜ニ知覺過敏ノ部分アルヤ又ハ創傷其他ノ炎症アルヤ否ヤヲ檢シ、更ニコカインヲ塗布シテ同様ノ試驗ヲ行フベシ、然レドモ斯カル方法ヲ行フテ何等發作ヲ見ザレバトテ輕々シク腔瘻ニアラズトノ診斷ヲ下スベカラズ、何ントナレバ甲ノ男子ニハ腔瘻ヲ來シ乙ノ男子ニ對シテハ何等故障ナク交接ヲ遂ゲ得ルガ如キ精神作用ノ存ズル事アレバナリ。

療法 若シ原因トナルベキ所見アルトキハ先ヅ交接ヲ避ケシメ此部ノ知覺ヲ鈍麻シ漸次腔口腔腔ノ擴張ヲ試ムベシ、斯クテ腔口腔腔ヲ擴張スルトモ全然疼痛ヲ感ゼザルニ及ンデ甫メテ交媾ヲ許可スベキモノナリ、或ハ甚ダシク高度ノ場合ニハ處女膜ノ知覺過敏ナル部ヲ基底ヨリ截除スベシ、之レニテ尙症狀去ラザルトキハ剪刀ヲ以テ處女膜ヲ全部基底ヨリ切除シ數個ノ縫合ヲナスベシ、又神經過敏ノ婦人ニアリテハ精神上ノ安靜ヲ主トシ滋養ニ富メル食餌ヲ與へ、山間閑靜ノ地ニ轉居セシメ臭素劑ヲ投ズ、水治療法ヲ行フモ亦可ナリ。

第十節 腔排氣響 Garrulitas vulvae.

腔ヨリ一種ノ音聲ヲ以テ空氣ノ排泄セラルル狀態ヲ云フ、特ニ治療ヲ要スルモノニアラザルヲ以テ茲ニ述ベズ。

第五編

第一章 子宮疾患 Maladies de l'utérus.

一 子宮悪性腫瘍ノ診断及療法 Diagnose und Therapie der

malignen Geschwülsten des Uterus.

第一節 子宮癌 Karzinoma des Uterus. Cancer de l'utérus.

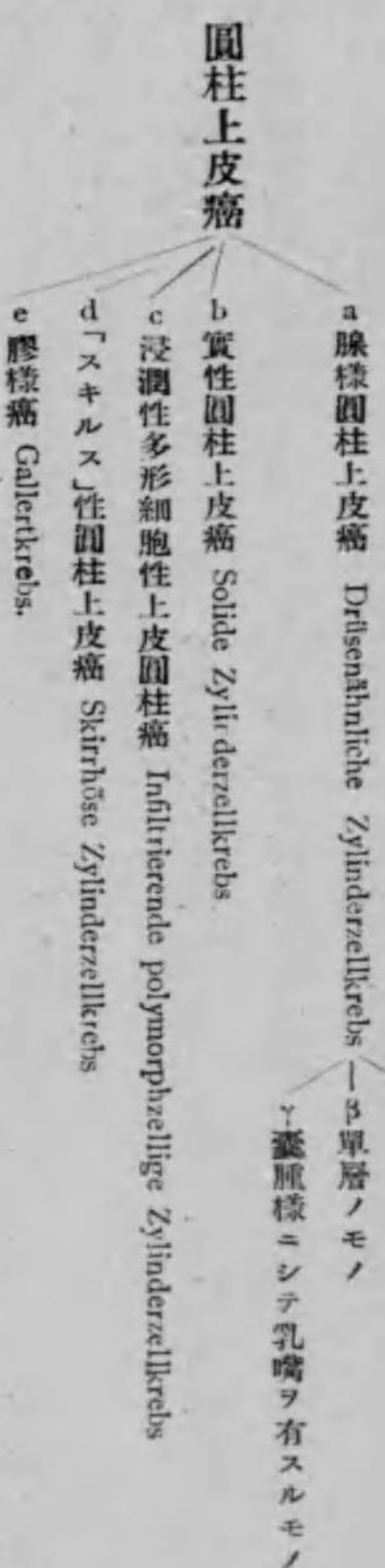
子宮癌腫ハ比較的屢々遭遇スル疾患ニシテ其頻度ニ關スル統計ハカンベルマン氏 *Campermann* ニ據レバ總テノ婦人病ノ四%ニ當リ、京都大學ニテハ三%、大阪醫科大學ニ於テハ外來患者一萬人中癌腫患者二百八十八名即チ二・八%ノ割合ヲ示セリ。

子宮癌腫ハ其發生ノ部位ニヨリ之ヲ頸部癌 *Carcinoma colli* 竝ニ體癌 *Carcinoma corporis* トニ區別ス、而シテ此兩者中體癌ハ頸部癌ニ比シ發生率甚ダ少數ニシテ諸氏ノ調査セル癌腫百分率ハ次ノ如シ、即チゲブハルド氏 *Gebhard* ハ六%、キュストネル氏 *Kischer* ハ九・四%、ホーフマイエル氏 *Hofmeister* ハ一%、コブランク氏 *Koblanc* ハ一〇・四%、ベンケル氏 *Henkel* ハ一二%、シャイプ氏 *Schib* ハ一三%、ウイルケンス・スタインマン氏 *Wilens u. Steinbach* ハ一〇—一二%、ショットレンデル氏 *Schottlander* ハ一〇%、カンベルマン氏 *Campermann* ハ約一六%ナリト云フ。又我が大阪醫科大學ニテハ頸部癌二五六ニ對シ體癌八名即チ三・二%ヲ算セリ。

頸部癌ハ多産婦ニ多ク不妊婦ニ少ナシ、而シテ總テノ頸部癌ノ不妊率ハ、クレームル氏 *Kremer* ハ一・七七%、ゴブランク氏ハ四・六%、タイルハーベル及エデルベルグ *Thirhaber u. Edelberg* ハ二・九%ヲ算セリ、反之頸部癌患者ノ平均分娩回数ニ就テハグッセルロー氏 *Gusserow* ハ四回五、タイルハーベル及エデルベルグ氏ニ據レバ四回八ヲ示シ、大阪醫科大學ニテハ四回、英國ニ於ケル統計ハ五回五八ノ割合トナレリ。

頸部癌ハ又之ヲ腔部癌及ビ真正頸部癌トニ區別スルモ、臨牀上之ヲ確定スルコト困難ナル場合尠ナカラズ、是レ畢竟病竈既ニ擴延シテ原發部位ヲ判定スルコト難キコトアルガ故ナリ。

癌腫ノ分類 リッペルト氏 *Rippe* ハ上皮ヨリ起原スルモノヲ(一)扁平上皮癌 *Plattenepithelkrebs*、(二)角質ナキ腺樣皮膚癌(昔時内皮腫ト稱セルモノニシテクロムペツヘル氏 *Krompecher* ハ之ヲ基底細胞癌 *Basalzellcarcinom*、ホルマン氏 *Bornmann* ハ眞皮膚癌 *Coriunkrebs* ト稱セリ)、(三)圓柱上皮癌 *Zylinderepithelkrebs* 及ビ(四)腺細胞癌 *Drüsenepithelkrebs* トニ別チ、更ニ圓柱上皮癌ヲ左ノ如ク細別セリ。



オルト氏 *Orth* ハ之ヲ(一)扁平表皮細胞癌 *Das Carcinoid* (一)悪性腺腫 *Das maligne Adenom* 及ビ(三)癌腫 *Das Cancer* ニ分類シ、ルーバルシュ氏 *Lubarsch* ハ(一)被覆上皮癌 *Deckepithelkrebs* 及ビ(二)腺癌ノ二ニ分チ、更ニ被覆上皮癌ヲ a) 扁平上皮癌 *Plattenepithelkrebs* (b) 圓柱上皮癌 *Zylinderepithelkrebs* ニ區別シ、又腺癌ヲ三別シ

テ(a)腺型 Drüsenypus (b)實性癌 Solide Krebs (c)混合型 Mischformen トナセリ。

シヨットレンデル及ビケルマウネル Kermanner 兩氏ハ原發性實性腫瘍ト原發性腺樣腫瘍ト兩者ノ混合型トノ三型ニ別テリ、而シテ此腺樣性腫瘍ヨリ續發的ニ實性腫瘍ヲ構成スルコトアリ、又實性ノモノハ或ハ扁平上皮ヨリ或ハ子宮腔ニ於ケル變性上皮ヨリ或ハ又腺上皮ヨリ起原ス、從テ從來ノ分類法ニヨル扁平上皮癌・腺上皮癌・又髓樣癌・單純癌・被覆細胞癌等之ニ屬ス。

子宮ノ癌腫 Karzinom des Uterus ハ其發生ノ部位ニヨリ(甲)腔部癌、(乙)子宮頸部癌、(丙)子宮體部癌ニ區別ス。

(甲)腔部癌腫 Karzinom der Porto vaginalis. 子宮ノ癌腫中頸部ニ次ギ屢々來ルモノニシテ總テノ子宮下部ノ癌腫中、頸部癌ハ其六二%、腔部癌ハ二四・三%ニ當レリ、初メ子宮腔部ヨリ起リテ腔腔内ニ及ビ此處ニ腫瘍ヲ構成スルカ又ハ子宮腔部ノ組織内ニ竄入シ腔部ニ浸潤ヲ來シ早晚破潰シ潰瘍ヲ形成ス、從テ其時期ニヨリ外見上種々ナル形態ヲ呈スルモノナリ。

(一)子宮腔部ニ於ケル茸腫性癌 Das polypöse Karzinom an der Porto vaginalis. 腔部癌ノ大多數ハ此種ニ屬シ子宮腔部ノ表面ニ腫瘍ヲ形成シ所謂翻花狀ヲ呈ス、其發生部ハ兩唇又ハ一唇或ハ一唇中ノ一部分ヨリ殊ニ兩唇ノ連合部ヨリ發スルコト多シ、腫瘍ノ基底ハ廣ク腔部ノ表面ニ互ルコトアリ或ハ有莖ナルコトアリ。

腫瘍ハ大小種々ニシテ胡桃大乃至拳大ニ達シ、大ナルモノハ腔腔ヲ充タシ健康ナル腔部ハ翻花狀腫瘍ニ被ハレ容易ニ發見シ難キニ至ル、腫瘍ノ表面ハ平滑ナラズ顆粒狀凹凸不平ニシテ多クハ石盤樣色ノ壞疽ニ陥レル物質ヲ以テ被ハル。

(二)浸潤性癌腫 Das infiltrierende Karzinom. 子宮腔部ノ肥大・肥厚・硬結ヲ來タシ全腔部ヲ犯スコトアリ或ハ僅カニ一唇又ハ一唇ノ一局部ニ限局スルコトアリ、浸潤ハ諸處ノ遠隔部ニ侵入シ稀ニ腔壁ノ子宮附著部ヲ越ユ

ルニ至ル、其表面ハ多少組織ノ缺損ヲ來タシ稀レニ粘膜ノ健康ナルコトアリ。

(三)癌腫性腔洞 Die karzinomatöse Hohlle. 癌組織ノ壞疽ニヨリ腔部ハ破壞シテ不規則ノ底面ヲ有シ漏斗狀ヲ呈スル潰瘍ヲ形成ス。

(四)癌腫性潰瘍 Das karzinomatöse Geschwür. 腔部ニ於テ表在性潰瘍即チ所謂蠶蝕性潰瘍ヲ形成スルモノニシテ深部ニ進ムノ傾向少ナク且ツ多クハ一唇ニ限局スルモノナリ。

癌腫ノ蔓延 子宮腔部ノ癌腫ハ殆ンド總テ腔穹窿部ニ向ツテ蔓延シ次第ニ腔壁ニ及ブモノニシテ頸管粘膜ニ蔓延スルハ比較的稀レナリ、彼ノ翻花狀癌・蠶蝕性潰瘍ハ腔壁殊ニ腔壁ノ表面ニ蔓延スルノ傾向ヲ有シ且ツ罹患腔部ノ前唇又ハ後唇ニ一致シ之ニ隣接セル腔部ニ及ブモノナリ、之ニ反シテ腔部ノ組織内ニ浸潤セル癌腫ハ腔壁ノ粘膜下組織ニ竄入シ初メ表面ハ粘膜ヨリ被ハレツツ次第ニ下行シ遂ニ陰門ニ達ス、時ニ腔粘膜下ニ轉移性ニ癌腫性結節ヲ生ズルコトアリ、其他稀レニ觸接セル部分ニ當リ所謂觸接性癌腫ノ發生ヲ見ル。

頸管組織ヘノ蔓延ハ最モ屢々浸潤性癌ニ見ル所ナルモ子宮内口ニ及ブコト甚ダ稀レナリ、連續的ニ或ハ時トシテ散在性ニ頸管粘膜ヲ犯カスコトアリ、末期ニ於テハ腔部ヨリ頸管ニ及ビ更ニ宮體ニ蔓延スルコト尠ナカラズ、稀レニハ宮體ニ轉移スルコトアルモ粘膜ニ來ルコトハ未ダ嘗テ實驗セラレズト云フ、尙ホ宮體ヲ犯スハ總テ淋巴管系統ニ由ルモノナリ。

骨盤結締組織ハ腔穹窿部ヨリ又ハ頸部ノ腔上部周圍ヨリ侵入シ來ルモノニシテ淋巴管間隙ニ於ケル癌腫ノ蔓延ハ骨盤結締組織ノ構造ニ關係ス、殊ニドウグラス皺襞ノ側方及ビ前方ニアル側骨盤結締組織ノ後部ヨリ骨盤壁ニ至ル部分ハ最モ屢々癌腫ノ侵襲ヲ受クルモノニシテ只膀胱ノ前方及ビ側方ハ殆ド總テノ場合其侵襲ヲ免ル、頸部ト膀胱トノ間ニアル薄キ結締組織及ビ後方ニテ頸部ト腹膜トノ間ニハ癌ノ蔓延ニ餘地ナキモノナリ、骨盤結

縮織ニ於ケル癌腫ノ蔓延ハ總テ連續的ニ行ハル、即チ初メ腔部ニ接近セル部分ニ浸潤シ遂ニ腔ニ向ツテ破壊シ腔洞ヲ形成ス、時トシテ骨盤結締織内ニ大腫瘍ヲ形成シ或ハ又淋巴管中ニ及ビ爰ニ淋巴管ノ硬結ヲ見ルコトアリ、膀胱ハ比較的末期ニ前腔穹窿部ヨリ又ハ頸部ノ前壁ヨリ犯カサルモノニシテ、直腸ハ比較的晩期ニ當リ後骨盤結締織ヨリ侵襲セララルモノナリ。

腹腔内ヘノ連續的蔓延ハ是レ亦比較的晩期ニ見ルモノニシテ、腔部癌腫ノ際犯サルベキ淋巴腺ハ骨盤上口ノ直下ニアアル内外兩腸骨腺及ビ時トシテ薦骨腺ニシテ骨盤結締織ノ浸潤セル場合ノ二五%ニ來ルト云フ、尙ホ甚ダ稀レニ肺及ビ肝臟ニ轉移スルコトアリ。

(乙)頸部癌腫 Carcinoma Cervicis 頸管ノ粘膜炎若シクハ粘膜炎下組織ヨリ發生スルモノニシテ、頸部組織中ニ於ケル發育最ニ浸潤或ハ破壊ノ如何ニヨリ種々ノ状態ヲ呈スルモノナリ。

(一)浸潤性癌腫 Das infiltrierende Karzinom 全子宮頸部又ハ壁ノ一部ノ肥大肥厚ヲ來タシ或ハ頸部内ニ結節ヲ構成シ初メハ潰瘍ヲ形成セズ、結節ハ健康ナル粘膜炎ヨリテ被覆セララルモ粘膜炎ハ次第ニ菲薄トナリ遂ニ破壊スルニ至ル。

(二)腔洞ノ構成 Die Karzinomatöse Hohle 浸潤性癌腫ノ外方ニ向ツテ破壊スルカ或ハ表面ヨリ深部ニ侵入シ遂ニ破壊セルモノニシテ、腔洞ハ頸部ニ存在シ頸管又稀レニ腔壁ニ交通スルモノナリ、尙ホ宮體癌腫ノ轉移ヲ受ケタル際ニハ其上縁常ニ浸潤シ破潰シテ腔洞ヲ形成ス、其他轉移性ニ子宮體實質内又ハ粘膜炎上ニ癌腫ノ發生スルコト稀レナラズ、腔洞ノ内面ハ乳嘴ノ増殖結節狀肥厚侵蝕ニヨリ粗糙ニシテ、壁ハ浸潤ノ如何ニヨリ肥厚ト硬度ヲ異ニス。

(三)頸管内ニ於ケル癌腫性潰瘍 Die Karzinomatöse Ulceration im Cervikal Kanal 全頸部ノ粘膜炎ヨリ同時ニ起リ深部ニ進ム傾向少ナク早期ニ破壊スルモノニシテ、頸管ヲ擴大セシメ頸管壁ハ菲薄トナリ又ハ浸潤シテ肥厚スルコトアリ。

蔓延ノ徑路 頸管癌腫ノ表面性連續的蔓延ハ主トシテ子宮體ニ向ツテ進行スル傾向ヲ示シ時トシテ全子宮内面ノ癌腫トナルコトアリ、然レドモ下方子宮外口ヲ越ヘテ腔ノ粘膜炎及ビコト殆ンド絶無ナリ、之ニ反シテ末期ノ頸部癌腫ニアリテハ腔粘膜炎下結締織中ニ亦之ヲ發生シ之ヨリ下方ニ進ムコトアリ、腔壁ノ粘膜炎ニ於ケル轉移ハ稀レナリ、骨盤結締織ニハ頸部ノ周圍ヨリ滲浸スルモノニシテ、癌腫ノ最深ク侵入セル部ニ一致シ末期ニ至リ甫メテ粘膜炎及ビモノトス、骨盤結締織中ニ於ケル蔓延ノ状態ハ腔部癌腫ト異ナルナシ。

膀胱ハ比較的晩期ニ犯カサルモノ、直腸ハ骨盤結締織内ニ病竈滲浸セル際甫メテ犯サルモノニシテ、腹膜腔ハ疾病ニ對シ比較的長時抵抗ス、淋巴腺癌ハ第一ニ腸骨腺ヲ犯シ内臟ニ於ケル轉移ハ稀レナリ。

(丙)子宮體癌 Carcinoma Corporis 常ニ粘膜炎ヨリ起ルモノニシテ原發部域ノ如何ニヨリ臨牀上三形態ヲ區別ス。

(一)瀰漫性癌腫 Das diffuse Karzinom 全粘膜炎平等ニ犯スモノニシテ、粘膜炎ハ結節狀肥厚又ハ棘狀ノ増殖ヲ來タシ壁ハ浸潤シ炎症性ノ反應ニヨリテ全子宮壁肥厚シ、子宮ノ表面ハ遂ニ結節狀ヲ呈スルニ至リ且ツ新生物ノ破壊ニヨリテ子宮腔ノ擴大ヲ來スモノナリ。

(二)限局性癌腫 Das zirkumskripte Karzinom 子宮壁ノ一部分ニ限局シ他ノ部分ハ全ク健康ナルコトアリ、不規則ナル顆粒狀ノ表面ヲ有スル結節狀ノ腫瘍ヲ構成スルカ或ハ限局性ノ潰瘍ヲナシ周圍ニ浸潤ス。

(三)茸腫樣癌腫 Das polyposöse Karzinom 甚ダ稀レニ來ルモノニシテ常ニ續發性ナリ、全ク限局性ニ莖ヲ以テ子宮壁ヨリ茸腫ヲ形成シ子宮腔ヲ充實シ之ヲ擴大セシムルコトアリ、茸腫ハ其質柔軟・脆弱且ツ表面破潰シ深部ニ進入スルコト少ナシ、他部ノ粘膜炎健康ナルモ時ニ炎症ニヨリテ表面ノ破壊スルコトアリ。

蔓延ノ徑路ハ主ニ子宮壁若シクハ子宮腔ニ局限ス、子宮腔ニ向テ發育スベキ傾向ヲ有スル癌腫ニ在リテハ其部ニ新生物ヲ構成シ、壁ニ浸潤ヲ來スコト稀ニシテ表面ニ蔓延スルノ傾向亦強カラズ、只原發性瀰漫性癌腫ハ時トシテ子宮内口ヲ越ヘテ頸管ニ及ブコトアルモ多クハ子宮内口ヲ以テ其境界トナスガ如シ、深部ニ對スル侵入力ハ比較的緩慢ニシテ全子宮壁ヲ犯スニ稍々長時ヲ要ス、而シテ屢々轉移性ニ腔ノ犯サルコトアリ。癌腫ガ子宮ノ周圍ニテ側方ニ達スルカ或ハ子宮筋層ヲ越ヘテ腹膜ノ粗鬆ニ附着セル部分ニ達スル時ハ骨盤結締織ヲ犯スモノナリ、然レドモ骨盤結締織ノ深部ハ頸管ノ癌腫ニヨリテノミ犯サルモ、癌腫ノ一度腹膜ニ達スルヤ子宮體ヲ被覆セル腹膜ハ忽チ罹患シ網膜・腸・腹壁・腹膜トニ癒著シ遂ニ腸ニ穿孔スルコトアリ、要スルニ膀胱ト腸トハ比較的晩期ニ犯サルモノナリ、宮體癌腫ニヨリテ犯サルル淋巴腺ハ脊柱ノ上部ニシテ大動脈ノ周圍ニアル腰部淋巴腺ニ多ク稀レニハ晩期ニ於テ圓形帶ト共ニ鼠蹊管ヲ通過シ鼠蹊淋巴腺ノ犯サルルコトアリ、内臟轉移ハ多クハ末期ナルモ卵巢ニ於ケル早期轉移ハ敢テ稀レナラズ。

子宮癌腫ノ診斷並ニ鑑別 Diagnose und Differentialdiagnose des Uteruskrebses.

子宮癌腫ニ對スル根治法ハ現時ノ學術程度ニ於テハ之ヲ手術ニ訴フルノ外ナク從テ手術ノ完全ヲ期セザルベカラズ、故ニ其初期診斷ヲ下スニアラザレバ以テ其目的ヲ達シ難シ、然ルニ之ガ初期診斷ハ甚ダ難事ニシテ其漸ク判明スルヤ病勢既ニ進行シ如何ニ巧妙ナル手術モ亦時ニ多クハ再發ヲ見ルコトアリ、サレバ初期ニ於テ確實ナル診斷ニ力メ同時ニ完全ナル手術ノ療法ヲ施シ以テ後年再發ノ憂ヲ防グニカムベキナリ果シテ再發ヲ遏止シ得ルヤ否ヤハ之レヲ保シ難キモ初期ノ手術ニヨリテ多クハ其目的ヲ達シ得ベシ、佛ノ Des que le diagnostic est nettement établi, une intervention chirurgicale simple, et celle-ci sera d'autant plus efficace quelle sera plus précoce ナル記載ハ甚ダ味フベキ辭句アリトス。

癌腫ノ診斷ニ際シテハ第一他覺的検査ヲ要ス、癌腫ニハ所謂癌腫徵候ナルモノアリ、若シ此徵候ヲ認ムル時ハ恐ラク癌腫ナラントノ想像ヲ起サシムベシ。

- (一) 交接後ノ出血。組織ノ機械的破壊或ハ交接時ニ起ル鬱血ノ結果血管ノ破裂ニ因テ來ルモノニシテ、此徵候ハ最も屢々腔頭部ノ癌腫ニ來ルガ故ニ斯カル患者ニハ頸腔部癌ノ疑ヲ置キ精細ノ検査ヲ要ス、然レドモ同様に徵候ハ茸腫或ハ出血性子宮内膜炎ニモ亦之レヲ見ルコトアリ。
- (二) 經期ノ出血。經期ノ後數日ニ互ル出血ハ筋腫・茸腫・血管ノ疾病其他非常ニ菲薄ナル粘膜炎ニ於テ屢々見ルコトアルモ、要スルニ大多數ハ子宮癌腫ニ基因スルモノトス。
- (三) 月經ニ關係ナキ不規則ノ出血。癌腫ニ屢々來ル徵候ナルモ亦他ノ疾病ノ徵候トシテ見ルコトアルガ故ニ是レ亦精密ナル検査ヲ要スルモノナリ、患者老年ナレバ殊ニ癌腫ニ疑ヲ置カザル可カラズ、尙ホ腐敗性血液様且ツ組織片ヲ混ゼル分泌物ハ破潰セル癌腫ノ症候ナルモ癌腫初期ノ診斷ニハ價値少ナキモノナリ。

子宮腔部癌ノ診斷 Die Diagnose des Portio-krebses (一) 翻花狀癌腫 Die Blumentholgewächse 腔部ニ於ケル變化

ハ觸診シ得且ツ子宮鏡ヲ以テ檢知シ得ルヲ以テ其診斷比較的容易ナリ、即チ息肉増殖シ表面既ニ破潰シ粗鬆ニシテ其質脆ク指壓ニ應ジテ壓迫セラレ消息子ヲ容易ニ其質中ニ侵入セシムルコトヲ得ルガ如キ場合ニ於テ然リ、其他腔部ノ表面ニアリテ其平面ヲ越ヘテ増殖セシ場合ハ何レモ疑ヲ癌腫ニ存スベシ、然レドモ未ダ固有ノ變化ヲ來サザル以前ニ於テハ其診斷容易ナラズ、所謂浸潤性癌腫 Das infiltrierende Karzinom トシテ破潰セザル間ハ腔部中ニ健康組織ト異リテ軟骨硬度様ノ硬結ヲ表ハシ腔部ハ其形ヲ變ジ増大シ且ツ不正形ヲ取ルニ至ル、斯カル變化ガ一部分ニ局限シ他部ノ健康ナル場合ハ容易ニ其變化ヲ認メ得ベシ。

要スルニ癌腫ガ比較的的健康粘膜炎ヲ以テ被覆セラルル間ハ其診斷頗ル困難ナリ、腔部ニ於テ腔洞ヲ構成シ壁ハ

不滑澤ナル粗糙面ヲ有シ且ツ截裂シテ周圍ノ組織浸潤シ其質硬キモノハ癌腫固有ノ潰瘍ニシテ腔部癌腫性潰瘍 Die karzinomatöse Ulceration ト稱スルモノ是レナリ。

大ナル腔洞ヲ形成セザルニ當リ腔部ノ平滑ナル粘膜面ニ鋭キ鋸齒狀ノ屢々黃色ノ汚穢邊縁ヲ有スル裂傷ヲ生ズルカ、又ハ健康ナル子宮外口ノ代リニ鋸齒狀ノ潰瘍緣ヲ表ハス時ニハ未ダ深部侵蝕性破潰ヲ見ザルモ、此部分ニ指尖ヲ以テ加壓スルカ或ハ消息子ヲ用フル時ハ容易ニ組織内ニ刺入セラレ又ハ「キュレット」ヲ用フル時、容易ニ組織片ヲ離脱セシムルコトヲ得ベシ、斯クノ如ク容易ニ組織ノ破潰スベキ性質ハ是レ癌腫ノ特有性ヲ示スモノナリ、又深部ニ侵入セル潰瘍ヲ形成スルコトナク扁平ノ潰瘍ヲ形成セシ場合ニ於テハ其診斷亦困難ナリ、是レ扁平潰瘍ハ癌腫ノ潰瘍ノミナラズ他ノ疾病ニモ亦屢々發生スルモノナレバナリ。

癌腫特有ノ潰瘍ハ其邊縁峻銳ニシテ所々鋸齒狀ヲ呈シ深赤色ナリ、破潰セルトキハ黃灰色ナル輕度ノ凹凸不

平面ヲ呈シ稍々深キ組織ノ缺損アリ且ツ其基底ノ浸潤著ルシ。

(二) 浸潤性癌腫 Die infiltrierenden Karzinome 頸部ノ實質炎ト誤ルコトアリ、然レドモ炎症性ノモノハ全頸部ヲ犯スモノニシテ癌腫ニ於ケルガ如ク軟骨様ノ硬度ヲ有セズ、且ツ弾力性ニ乏シク表面ハ平滑ナル粘膜ヲ以テ被ハル、只ダ多數ノ擴張セル濾胞ノ腔部ヲ充タス時ハ腔部ハ濾胞ノ突起ニヨリテ結構様ニ觸知シ浸潤性腔部癌ト誤ルコトアルモ、子宮鏡ヲ以テ檢スル時ハ平滑ナル粘膜ヲ以テ被ハレ所々ニ濾胞ヲ透視シ之ヲ穿刺セバ粘液ヲ出ダスヲ見ル、若シ疑シキ場合ニハ鏡檢ヲ要ス。

(三) 扁平癌腫性潰瘍 Die flachen karzinomatösen Geschwüre 若シ之ニ浸潤ナキトキハ他ノ潰瘍ト誤ルコトアリ疑シキ時ハ顯微鏡ノ力ヲ藉ラザルベカラズ、最モ誤リ易キハ糜爛ニシテ炎症性ノ硬キ基底上ニ肥厚セル乳嘴ヲ生ジ粗糙ナル結構様ノ表面ヲ有セル時ハ癌腫性潰瘍ニ類似スルモノナリ、然レドモ子宮鏡ヲ以テ精査スル

時ハ糜爛ハ主ニ子宮外口ノ周圍ニ均等ニ發生シ上皮ノ被覆ヲ有スルヲ以テ外見上一種ノ光輝アリ、且ツ眞赤色ナルモ、癌腫ニアリテハ表面ニ組織ノ缺損アリテ光輝ナク其面粗糙ナリ、且ツ糜爛ニ於テハ周圍ノ境界明カナラズシテ漸次健康組織ニ移行シ、其他表面ニ屢々上皮ノ島嶼及ビ濾胞竝ニ濾胞性潰瘍ヲ見ル、若シ上皮剝離シ表面ニ於ケル化膿性炎症アル場合ハ其鑑別甚ダ困難ニシテ顯微鏡的診斷ヲ要スルコトアリ。

初期ニ於テハ殊ニ其診斷ノ困難ナルモノアリ、此際ニハ疑シキ部分ヨリ組織ノ一片ヲ切除シ組織學の檢査ヲ施スベシ、診斷的切除ハジモン氏子宮鏡ヲ以テ腔部ヲ現ハシ腔部ノ健康部ニミゾー氏鉗子ヲ懸ケ之レヲ固定シ疑シキ部分ヲ尖刀ヲ以テ楔狀ニ切除スベシ、截切部位ニハ二三ノ腸線縫合ヲ行ヒ沃度フルムガーゼヲ單保ヲ施スベシ、又試驗的切除器ト稱スル至便ノ器具アルモ組織片過少ノ爲メ時ニ病變ヲ確實ニ診斷シ難キ場合アリ、故ニ余ハ前述セル方法ニヨリ成ベク大ナル組織片ヲ切除シ以テ確診ヲ得ルニ力メツツアリ。

鑑別 Differentialdiagnose 繡花狀癌ニアリテハ診斷比較的容易ナリ、何トナレバ他ノ疾病ニテハ腔部ニ茸腫様増殖ヲ來スコト稀レナレバナリ、然レドモ茸腫ハ屢々頸管ヨリ發生スルコトアリ故ニ此際發生セル茸腫ハ果シテ子宮腔部ノ表面ヨリ發生セシカ又ハ頸管ノ粘膜ヨリ來リシ者ナルヤヲ確メザルベカラズ。

(一) 頸管ノ筋腫 Cervixmyom ガ茸腫様ニ發生スル時ハ腔部ノ癌腫ト誤リ易キモ、筋腫ニアリテハ平滑ナル粘膜ノ表面ヲ以テ被覆セラル、時トシテ表面ノ壞疽ニ陥ルコトアルモ腫瘍ハ硬固ニシテ消息子ヲ用フルトモ癌腫組織ト異リ深ク其侵入ヲ許サザルモノナリ。

(二) 濾胞性腔部ノ肥厚 folliculäre Hypertrophie der Portio vaginalis ハ腔部ニ於テ限局性大腫瘍ヲ構成ス、然レドモ癌腫ニ於ケルガ如ク粗糙ナル表面ヲ有セズ且ツ其質鞏固ニシテ癌腫組織ノ如ク脆弱ナラズ、表面ハ平滑ナル粘膜ヲ以テ被覆セラレ時トシテ擴大セル濾胞ヲ透視ス、時ニハ濾胞破裂シテ表面ニ不規則ノ凹陥ヲ生ジ

圖 八 十 六 第



癌 部 頸 宮 子

圖 九 十 六 第



癌 部 腔 頸 宮 子

組織ハ脆弱ニシテ「キュレット」ヲ以テ容易ニ之レヲ破壊セシメ得ベク且ツ微力ニテ大ナル組織ヲ破壊セシム、只診斷困難ナルハ頸部ノ一部分或ハ全頸部ヲ浸潤セル浸潤性頸部癌腫ノ場合ニシテ健康粘膜ニ被覆セララルヲ以テ只頸部ノ變形ト其硬度ノ強キトニ依リテ診斷ヲ下スノ外ナシ、此際頸部ハ膨大シ罹患側肥厚シ頸管ハ他方ニ壓排セララルコトアリ、軟骨様ノ硬度ニシテ弾力性ヲ有シ肛門ヨリ觸診セバ腔上部ノ浸潤ヲ知ルコトヲ得ベシ、若シ頸部ニ發生セル癌腫ニシテ腔部ニ接近シ來ル時ハ腔部粘膜ハ明カニ青色ノ光澤ヲ呈シ破潰セル癌巢ニ一致シ黃色ノ點ヲ透視セシム、又屢々腔部粘膜ハ眞紅色ヲ呈シ固有ノ光輝ヲ失フ、而シテ癌腫ハ益々粘膜ニ接近シ遂ニ粘膜ヲ破壊シテ外面ニ癌組織ヲ現ハシ腔部癌腫ノ如キ外觀ヲ呈ス、斯カル浸潤性癌腫ニアリテハ初期ノ診斷困難ニシテ顯微鏡ノ力ヲ藉ラザルベカラズ、殊ニ子宮外口ノ閉鎖シタル場合又ハ浸潤ナクシテ頸管内ニ潰瘍ヲ形成セル場合ノ如キハ臨牀的診斷ハ不可能ニシテ「キュレット」ニヨリテ組織ノ一片ヲ取り鏡檢シ以テ診斷ヲ下スノ外ナキコトアリ、此際體癌ノ存在スルヤモ亦保シ難キヲ以テ宮體粘膜ヲモ共ニ搔爬シテ之ガ健否ヲ檢セザルベカラズ。

鑑別 ヲ要スルモノハ浸潤性腔部癌腫ト實質炎及ビ濾胞性肥厚等ナリ、腔部癌腫ノ場合ニ於ケルト同様ナル鑑別法ニ注意スベシ、又頸部ノ壁ニアル間質性筋腫ト誤診スルコトアルモ筋腫ハ一部ノ球形肥厚ヲナシ其境界明カニシテ柔軟ナル組織ニヨリ圍繞セララル、反之癌腫ハ炎症反應ニヨリテ周圍トノ境界明乎ナラズ、且ツ潰瘍アル時ハ癌ノ診斷ヲ下シ得ベシ疑シキ場合ニハ鏡檢ヲ要ス、破潰セル粘膜癌腫ノ浸潤著ルシカラザルモノハ觸診上老婦ノ頸管加答兒ニ類似セリ、頸管加答兒ハ腺ノ侵入ト腺間組織ノ肥厚トニヨリテ粘膜ハ凹凸不滑澤且ツ粗糙ニシテ結節狀ヲ呈スルモ腔鏡ニテ檢スレバ粘膜ニ光輝アリ、且ツ「キュレット」ニテ搔爬スルニ癌腫ナレバ大ナル組織片ヲ採取シ得ルモ加答兒ニ於テハ僅カニ組織ノ小片ヲ搔爬シ得ルニ過ギズ、尙ホ其破

片ヲ鏡檢スル時ハ其診斷容易ナリトス。

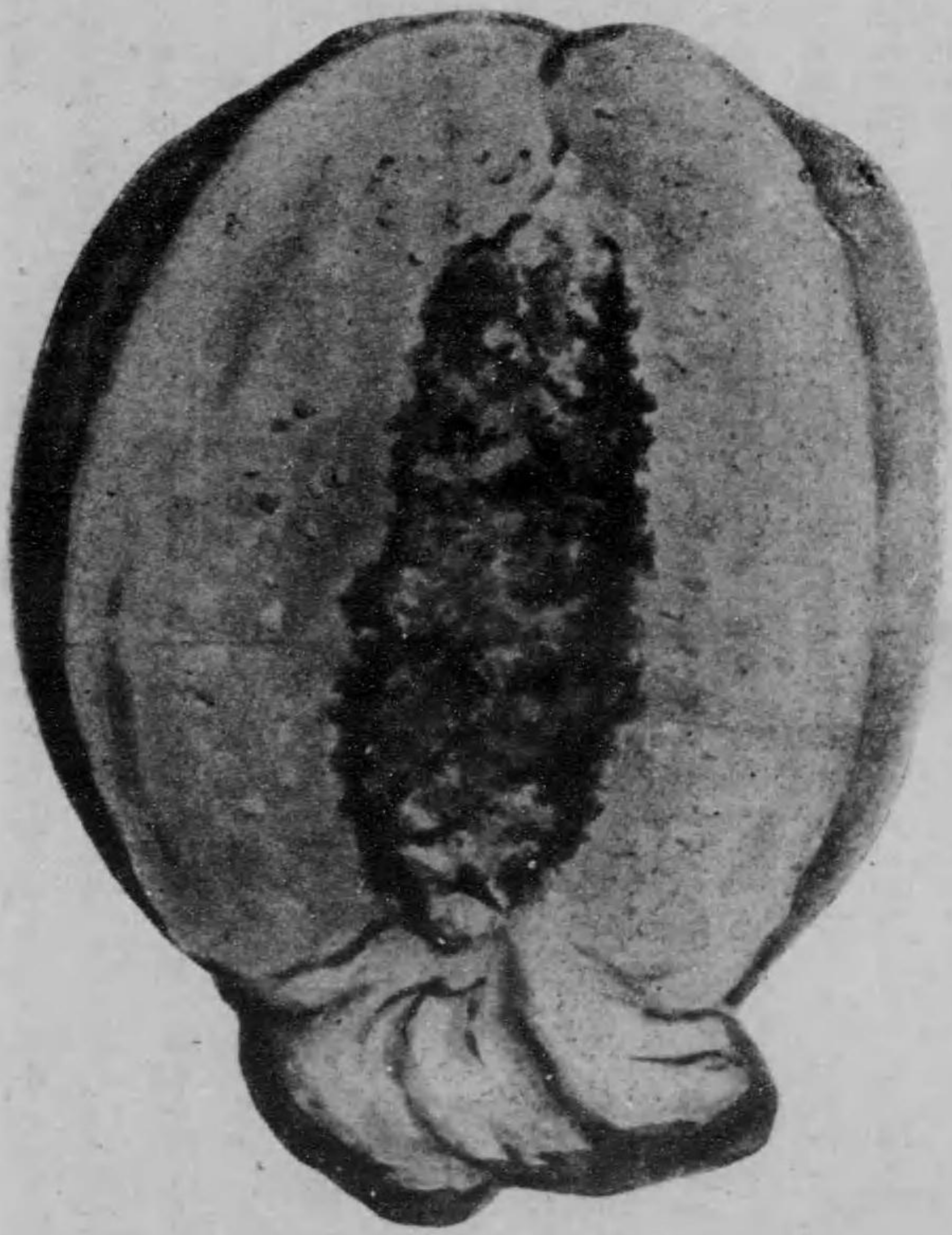
子宮體癌ノ診斷 Die Diagnose des Corpuskrebases.

多クハ老年ニ來リ且ツ頸部痛ニ比シテ比較的稀レナリ、臨

子宮體癌腫

牀上ニハ經歇期後
不規則ナル子宮出
血ヲ來シ初メハ漿
液性血樣ノ分泌物
アリ、末期ニ至レ
バ臭氣ヲ放ツ、尙
ホ規則正シク一定
時ニ反復シ來リ且
ツ數時持續スル陣
痛樣疼痛アリ、是
レ所謂ジムブソン
氏疼痛 *Simpson'sche*
Schmerzen ニシテ
之ニ由リ疑ヲ宮體
癌腫ニ置クニ足ル
ベシ、體癌ニ於テ

第七十圖



ハ雙合診上固有ノ所見ナク且ツ初期ニテハ其大サ普通ニシテ晚期ニ至リ甫メテ肥厚肥大且ツ緊張シ明カニ結
節樣ノ狀態ヲナスモ、觸診上漿液膜下筋腫又ハ實質炎トノ區別ヲナスコト難シ、只體癌ニ於テハ子宮腔ノ檢
査ニヨリテ其診斷ヲ下シ得ルモノトス。

子宮消息子ヲ用フレバ内部ニ限局性粗糙面ヲ觸知ス、脫落膜ノ遺殘又ハ増殖性内膜炎ニ於テモ子宮内腔ノ不
滑面アルモ其質柔軟ニシテ癌腫ノ如ク硬カラズ且ツ亦脆弱ナラズ。

體癌ハ其質硬ク結節樣ノ隆起ヲナシ且ツ所々ニ凹陷部アルノ感アリ、若シ内膜平滑ナルトキハ癌腫ナラザル
コト殆ンド確實ナリト云フベシ、兎ニ角子宮粘膜炎ニ粗糙面アル時ハ常ニ鏡檢シテ其診斷ヲ確メザルベカラズ、
宮體癌腫ニ於テ子宮口外ニ癌腫性固有ノ組織現ハルルカ又ハ頸管廣潤ニシテ管内ニ手指ヲ挿入シ癌固有ノ所
見ヲ觸知シ得ルトキハ其診斷確實ナルモ、一般ニ體癌腫ノ疑ヒアル場合ニハ試驗的搔爬ヲ行ヒ子宮粘膜炎全部
ヲ搔爬シ、其破片ヲ精査セザルベカラズ。

末期ニ於テ子宮腔ヲ觸診スルコトヲ得バ比較的確實ノ診斷ヲ下シ得ベシ、即チ限局的又ハ瀰漫性ニ結節樣ノ
粘膜炎厚ヲ見ルカ又ハ潰瘍ノ邊緣及ビ基底硬ク且ツ浸潤シ絨毛狀乳嘴性ノ増殖ヲ以テ腔内ヲ充タサレ或ハ粗
糙面ヲ有シ且ツ脆弱ナル腫瘍ヲ認ム、若シ頸管狹隘ニシテ管内ヲ檢知シ得ザルトキハ初メ試驗搔爬ヲナシ其
破片ヲ鏡檢シ以テ其診斷ヲ下スベキモノナリ。

鑑別 ヲ要スルモノハ多クハ鏡檢上ニ屬ス、只觸診上ニテハ粘膜炎腫・破壞セル筋腫・粘膜炎腫・流産後ノ遺
殘物トノ鑑別ヲ要ス。

子宮惡性疾患ノ鏡檢診斷 (一)子宮腔部癌 種々ノ組織的構造ヲ有ス即チ組織學上三形態アリ、最モ普通ナル

ハ腔部ヲ被覆セル上皮細胞ヨリ椎狀體ヲ構成シ組織ノ深部ニ侵入セルモノナリ、椎狀體ハ其幅狭キコトアリ

又比較的大ナルコトアリ、此上皮椎狀突起ハ深部ノミナラズ凡テノ方向ニ蔓延スルモノニシテ腔部癌腫ノ多數ハ之ニ屬ス。

腔部癌ハ主ニ二種ノ状態トナリ現ハル、即チ一ヲ扁平上皮癌 Der Plattenepithelkrebs 特ニ扁平表皮細胞癌(類癌) Das Carcinoi トモト、一ヲ圓柱上皮癌 Der Cylinderepithelkrebs ト稱ス。

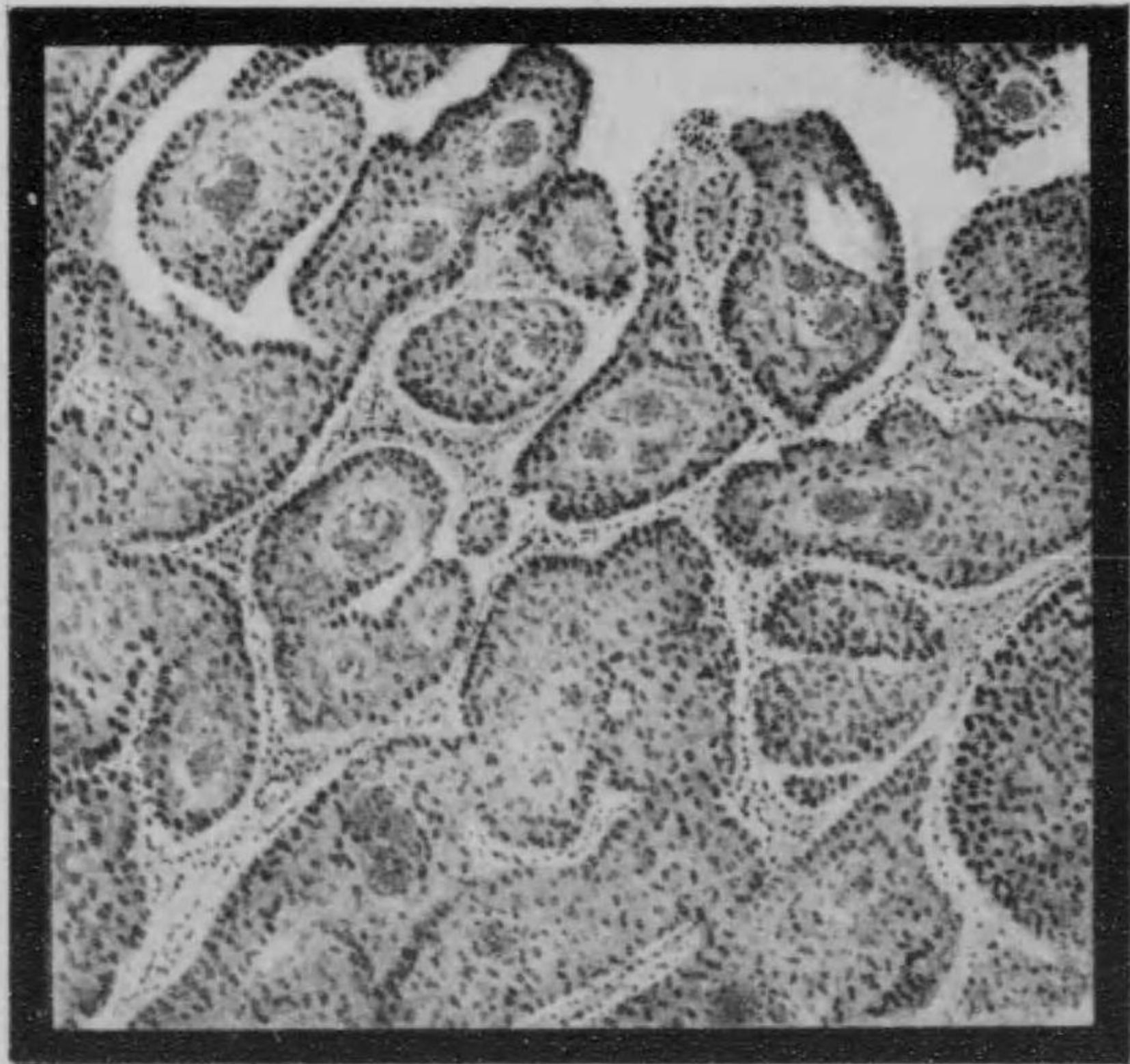
(一)扁平上皮癌ハ腔部癌ノ大多數ヲ占メ腔部ノ扁平上皮ヨリ或ハ新生セル扁平上皮ヨリ發生スルモノニシテ、又時トシテハ腔部ノ多層上皮急ニ稀薄トナリ突然上皮層ヲ失ヒ之ヨリ截裂シ肉芽組織トナリテ癌椎體ヲ發生シ椎體ノ表面ハ壞疽ニ陥レル組織又ハ圓形細胞ノ浸潤セル纖維ヲ以テ被ハル、他ノ場合ニ於テハ上皮ハ同ジク腫瘍ノ表面ヲ被覆シ其列及ビ其形ニ於テ何等變化ナク只其層ハ稀薄トナリ、圓柱層ト角質層ト接觸スルニ至リ上皮ト關聯シテ癌腫椎體ハ共ニ組織ノ深部ニ竄入ス、而シテ前者ハ母組織ト全ク何等ノ關係ナキガ如クニ發生スルモ、後者ハ常ニ表皮ト一定ノ關係ヲ以テ乳嚢間ニ大ナル且ツ分岐セル癌椎體ヲ送ル。

新生物ノ深部ニ於テハ多クノ場合胞巢狀造構ヲ呈シ、胞巢ハ往々非常ニ大ナルコトアルモ多クハ比較的小ナリ、殊ニ類癌ニ於テ然リトス、時トシテハ同腫瘍ニシテ一方ニ大ナル胞巢ヲ形成シ其周圍ニ幅狭キ上皮索ヲ發見スルコトアルヲ以テ、恰モ現存セル淋巴管中ニ癌細胞ノ侵入セルガ如キ感アラシム、胞巢ノ形狀ハ多クハ圓柱狀ヲナシ其大ナルモノハ徑路不規則ナルモ小ナルモノハ多クハ腫瘍ノ遊離面ニ垂直ノ方向ヲ取ルモノナリ、且ツ大ナル胞巢ヨリ殆ンド直角ノ方向ヲ以テ更ニ小ナル上皮索ヲ發生シ小ナル胞巢ヨリハ之ニ銳角ヲ以テ多クノ分岐ヲ出スモノナリ、癌ノ細胞形ハ胞巢ノ邊緣ニハ外層トシテ美麗ナル圓柱上皮ヲ以テ被覆セラレ其長軸ハ常ニ胞巢周圍ノ結締織壁ニ垂直トナリ、核ハ色素ニ濃染セララル性質ヲ帶ブ、之ヨリ中央ニ至ル時ハ大ナル細胞ニテ核ノ染色力弱ク長形ヲナシ其長軸ハ中心ニ向テ放射狀ニ列セリ、之ヨリ更ニ中央ニ進ム時ハ

表 六 十 第



扁平上皮癌



類癌(カンクroid)

細胞ハ原形質ヲ増加シ核ハ蒼白トナリ、細胞ノ長軸ハ胞巢壁ニ並行ノ列ヲナス。

中心ニ於テ化角セル細胞ヲ以テ扁平上皮癌ニ固有ナル表皮癌珠 Carcinoidperlen oder Zwiebeln ヲ構成ス、細胞ハ變性ノ結果破砕性乾燥ノ外見ヲ呈シ強ク光ヲ屈折セシメ核ハ多クハ消失ス、若シ核ノ存在セル際ト雖モ其幅狭ク殆ンド杆狀トナリ細胞ノ求心性彎曲ニ應ジ多少ノ弓形ヲナス、時トシテハ化角セル細胞核ノ強ク染色セラルルコトアリ是レ「クロマチン體組織ノ壓迫ノ爲メ密集セラルルニヨルナリ、然レドモ腔部扁平上皮癌ニアリテハ癌珠ヲ認メザルコト甚ダ多シトス。

腔部類癌ニテハ結締織ノ變化ハ受働的ニシテ屢々圓形細胞ノ浸潤ヲナスコトアリ、又結締織ガ新生物ニ參與シ増殖スルコトアリ、結締織ノ表皮中乳嚢性増殖ヲナシ尖性贅肉ノ外見ヲナスモノアリ之ヲ乳嚢性癌腫 (Cystoma papillomatsum) ト稱ス。

贅肉トノ區別ハ贅肉ニテハ主トシテ乳嚢増殖シ上皮ハ受働的ナルモ反之癌腫ハ主トシテ上皮ノ増殖及ビ肥厚アリ、而シテ此上皮ハ乳嚢ヲ被覆シ且ツ又組織ノ深部ニ上皮索ノ新生アリ。

稀レニ廣汎性潰瘍トシテ現ハルルコトアルモ之ハ深部ニ侵入スル新生物ニアラズシテ寧ロ表在性ニ蔓延スルモノナリ、其表面ハ壞疽ニ陥レル組織ヲ以テ被ハレ癌椎體ハ僅カニ腔部組織内ニ侵入シ健康組織ニ對シテハ圓形細胞ノ浸潤著ルシク癌珠ノ構成ナシ。

(二)圓柱上皮癌。腔部ハ健康狀態ニテハ扁平上皮ヲ以テ被覆セラルルモ、糜爛ヲ生ズルトキハ上皮ハ圓柱上皮トナリ頸管腺型ノ腺ハ深ク組織内ニ竄入ス、而シテ此糜爛ニ伴フテ癌腫ヲ發生ス、其發生ハ表面ノ圓柱上皮若シクハ腺上皮ヨリス。

(イ)表面上皮ヨリ發生セル圓柱上皮癌ハ組織學上大胞巢性癌腫ニ屬シ、新生物ノ部域ニ於テハ圓柱上皮其形ヲ

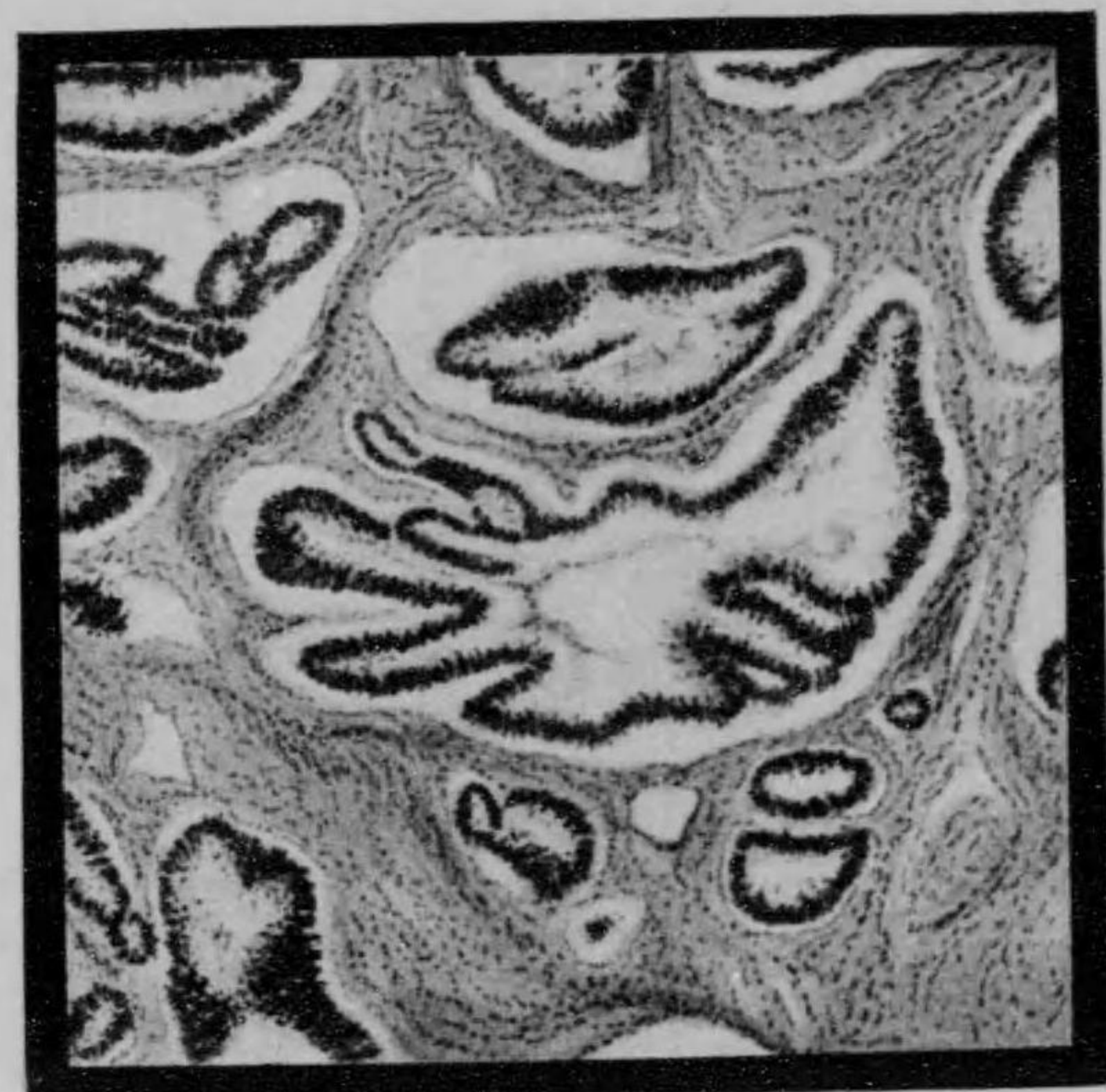
變ジテ多層トナリ之ト同様ニ實質性上皮椎體ハ腺内ニ侵入シ腺ノ上皮ハ爲メニ提擧セララルニ至ル。

右ノ所見ハ一見糜爛ノ治癒ニ趣ク状態ニ類似スルモ、癌腫ニ於テハ上皮椎體ハ單ニ腺腔ヲ充實スルニ止マラズ、進ンデ腺間結締織中ニ増殖シ遂ニ腺ハ從來ノ大サヨリ長幅共ニ著シク増大スルモノナリ、其他表面ヨリ從來腺ノナキ場所ニ於テ上皮索ヨリ分岐ヲ起シ又腺腔ヲ充タセル新生細胞ノ集合部ヨリモ更ニ分岐ヲ出ダス、此際腺細胞ハ全ク受働的ニシテ腺ノ周圍ガ癌腫結節ニテ圍繞セララルル場合ニ於テモ腺細胞ハ何等變化ヲ認メザルコトアリ。

殊ニ腫瘍細胞ト腺細胞ト觸接スルニ至リテモ屢々腺細胞ハ其固有形態ヲ維持セルヲ見ル稀レニ腺ノ此變化ニ與カルコトアリ、癌胞巢ニ近接セル腺ノミナラズ之ヨリ隔リタル腺ニ於テモ尙ホ上皮ノ變化ヲ來スコトアリ、即チ腺細胞ハ其原形質ヲ増加シ圓柱形ヲ失シ扁平上皮ノ形ヲ取り不規則ニ列スルニ至ル即チ癌腫性ノ病的化生ヲナセシモノナリ。

α) 腺癌 Das Drüsenkarzinom der Portio vaginalis ハ腔部ニハ比較的稀レナルモ圓柱上皮癌ト共ニ來ルコトアリ、腺若シ癌腫性トナレルトキハ不規則ナル細胞ノ増殖ヲ來タシ新生セル子細胞ハ母細胞ノ間ニ列スルノミナラズ遂ニハ母細胞上ニ列スルニ至ル、斯カル腺細胞ノ多層構成ハ腺癌固有ノ組織ナリトス、良性ノ細胞増殖ニテハ分裂軸ハ常ニ腺壁ニ竝行ナルヲ以テ分裂ニヨリ生ジタル子細胞ハ横列ヲナスモ、悪性増殖ノ際ハ核分裂軸ハ腺壁ニ垂直或ハ傾斜角ヲナスヲ以テ子細胞ト母細胞トハ互ニ層重スルニ至ル、即チ細胞ハ放線狀ニ長軸ヲ中心ニ向ツテ列スルヲ見ル、新生細胞蔓延ノ状態ハ腺ノ長軸ニ於テナスノミナラズ寧ロ外部腺外ノ結締織中ニ増殖スルノ傾向ヲ示ス、故ニ癌腫性變化ヲ受ケタル腺ハ上皮未ダ全ク腺腔内ヲ充タサザルニ先ダチ既ニ普通腺ニ比シテ著シク増大セリ、腺癌ノ場合ニ胞巢ヲ充タセル細胞ハ比較的少ニシテ原形質多カラズ核

表 七 十 第



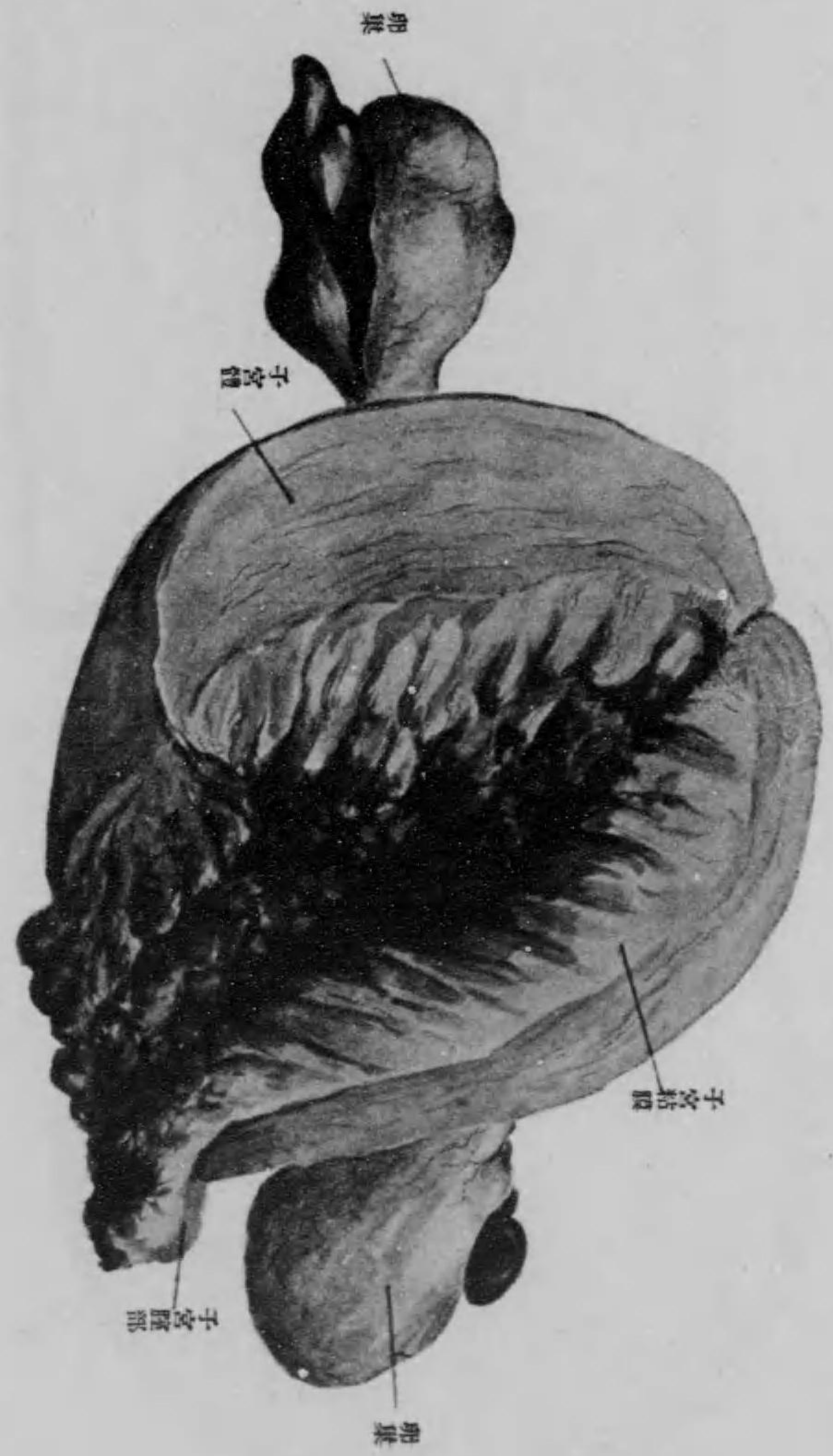
腺
癌



惡
性
腺
腫



表 八 十 第
癌 腺 宮 子



ハ卵圓形ヲナシ其長軸ヲ中心ニ向ケ密集セリ。
 胞巢ハ場合ニヨリ空隙ナルコトアリ、或ハ圓形細胞或ハ類敗物ヲ以テ充タサルコトアリ、病變ノ稍々進行
 セル際ニ於テモ上皮索ハ尙ホ狹長ナル形態ト分岐トヲ示シ以テ腺ヨリ發生セシコトヲ想ハシム。
 以上ノ記載ハ腔部癌ノ模範的型態ナルモ時トシテハ扁平上皮ヨリ發生セシカ或ハ表面ノ圓柱上皮若シクハ腺
 上皮ヨリ發生セシカ不明ノ場合亦尠ナカラズ。

以上ノ方法ニ依リテ鏡檢スルモ亦之ヲ誤マルコトアリ即チ生理的ノ状態ヲ癌腫ト思ハシムルコト是レナリ、
 又糜爛漸次治癒ニ趣キ表皮化生ノ際、腔部ノ贅肉發生ト誤ルコトアリ、腔部ハ元來多層扁平上皮ナルモ圓柱
 上皮トナリ且ツ深部ニ侵入シテ糜爛腺ヲ形成ス、而シテ此圓柱上皮ハ初メ層重シテ二層又ハ三層トナリ骰子
 狀形ニ變ジ次第第二扁平トナリ周圍上皮ノ厚サニ至ル、斯クシテ糜爛腺ノ上皮ハ變化シ是レ迄一層ノ上皮ヲ以
 テ被覆セラレタル腺ハ今ヤ多層上皮ニテ充實セラレ實性椎狀突起トナリ、次デ漸次縮小シ遂ニ上皮ト同等
 トナリ而シテ治癒ニ趣クモノナリ。此多層上皮ノ椎狀突起ハ縱斷面ニ於テ組織學上特ニ惡性癌腫ノ實性椎體
 突起ト誤解セラルルコトアリ、又橫斷面ニ於テモ之ニ應ゼル一定ノ組織ノ間隙ニ實性ノ組織集落アリテ恰モ
 癌胞巢ノ如キ觀ヲ呈ス。

最モ注意スベキハ糜爛ノ治癒ニ際スル退行機變化ナリ、癌腫ニ於テハ無限ノ増殖ヲ示スモノニシテ其上皮ハ
 非常ナル不規則形ヲナシ大小不同ノ核ヲ有シ尙ホ組織ノ深部ニ上皮細胞椎狀突起ノ竄入ヲ見ル。
 糜爛ハ完全治癒ヲ營ムモノト或ハ深部ニ腺ノ殘存ヲ見ルコトアリ、即チ腔部上皮ガ扁平上皮トナリ其下ノ深
 部或ハ淺部ニ頸管腺ニ一致スベキ圓柱上皮細胞ヲ以テ被覆セラレタル腺ハ分泌物及ビ營血ニ依リテ囊腫狀ニ
 變化セリ、糜爛ニ於テハ組織内ニ深ク進入セル糜爛腺ニ於ケル圓柱上皮ノ多層ニナルコトハ決シテ深部ニ行

ハレザルモノニシテ、之ヨリ更ニ深部ニアル腺ニモ行ハレザルコト勿論ナリ、實際上癌爛ノ不全治癒ニ於テハ癌爛腺ハ癌腫變性ニ類似シ其鑑別甚ダ困難ナリ、而シテ腔部ニ來ル癌腫ハ之ヲ四種ニ區別ス、(一)單純性腺癌(二)類癌(三)糜爛性癌即チ腺癌(四)惡性腺腫(稀レナリ)即チ是ナリ。

(二)子宮頸部癌 (一)單純性ノモノハ頸管圓柱上皮ハ自己ノ性質ヲ失ヒテ多層ノ上皮トナリ腺ハ周圍的ノ増殖ニヨリ大小不同ナル圓柱上皮ノ數層トナリ場所ニヨリ或ハ薄ク或ハ厚シ、腺樣構造ヲ與フル胞巢ノ内腔ハ時ニ上皮ニヨリテ充實セラレ以テ大ナル實性椎狀突起ヲナス、其他粘膜ノ深層ヨリ癌發生ヲナスコトアリ、斯カ

ル場合ニハ癌腫ハ健康ナル粘膜ニヨリテ被覆セラル。
(二)表面上皮ハ厚キ多層ノ上皮ニ變化シ、厚キ幅廣キ椎狀突起ヲ組織ノ深部ニ竄入セシム、是等ノ椎體ハ非常ニ大ナルコトアリ、而シテ尙ホ腺樣ノ造構ヲ呈ス、斯カル表面上皮ノ變化ト共ニ從來存在セル頸管腺ハ外見上何等ノ變化ナク此巨大腺ノ近方ニ殘ルコトアリ。

(三)惡性腺腫 Das maligne Adenom ハ表面上皮ノ變化ナク且ツ一層ノ上皮細胞ニテ被覆セラレタル無限ノ腺増殖ナリ、全頸部ハ腺ニヨリテ犯サレ腹膜ニ達スルコトアリ、腺ハ無數ノ分岐ヲ出シ腺間組織ノ存在ヲ認メ難キニ至ル。

(四)癌腫ノ淋巴管内ニ侵入セルモノニシテ淋巴管系統ニ從テ不規則ナル網狀ノ外見ヲ呈ス、時トシテハ淋巴管擴張シ管内ニ癌腫細胞充實シ蟲喰狀ノ狀態ヲ呈スルコトアリ、淋巴管中ニ發生セル癌腫ハ其基源ヲ健康ナル組織下或ハ既ニ變化セル上皮ノ直下ニ發ス、管ニハ固有ノ内皮細胞アリテ管腔ハ癌腫細胞ニヨリテ充實セラ

ルヲ見ルベシ、
クルレン氏 Cullen ハ頸腔部癌腫百四十七例中十九例、ツモール氏 Tumor ハ一三%、ケルンマウチル氏

Kerlmanner ハ百十七例中十一例即チ九%ノ腺癌、又 Prof. W. ハ百三十六例ノ根治療法中十例ノ腺癌ヲ見タリ、右統計ニヨリテ見ルモ頸腔部癌ノ大多數ハ扁平上皮癌ニシテ腺癌ハ二〇%以下ニ相當スルモノトス。

(三)子宮體癌 第一種即チ胞巢癌ニアリテ子宮内膜腺ノ上皮増大シ且ツ多層トナルヲ普通トス、圓柱上皮ノ多層トナレルトキハ從來ノ形狀ヲ失ヒ不規則トナル、是ニ由リテ實性癌腫性胞巢ヲ形成シ或ハ腺樣ノ造構ヲ呈シ多少ノ間腔ヲ中央ニ遺スコトアリ是レ所謂腺癌ナリ、而シテ表面ノ上皮ハ全ク健康ナルコトアリ、腺固有膜ノ消失必ズシモ癌腫タルコトヲ意味スルニアラズシテ腺上皮ノ増殖又ハ腺壞疽ニ於テモ共ニ其固有膜ノ破滅ヲ見ルモノナリ。

第二種ノモノニアリテハ子宮體ノ全面或ハ子宮體ノ大部分ハ肉眼的ニ灰白色ヲ表ハシ其周圍ハ健康ナル蓋蓋色ヲ呈シ且ツ柔軟ナル粘膜ニヨリテ圍繞セラレ其質硬固トナリ鏡檢上纖弱ナル一層ノ圓柱上皮ハ厚キ多層ノ上皮層ニ變化セルヲ見ル、上皮椎體ハ此層ヨリ組織ノ深部ニ進入シ遂ニ子宮體部ヲ通シテ侵入スルニ至ル、普通子宮腺ハ消失シ稀レニ癌椎體ノ間ニ健康ナル腺ノ殘存ヲ見ルコトアリ、斯カル場合腺ハ癌腫變性ヲ受ケズ多クハ受働的ニ消滅ニ歸スルモノナリ。

第三種ノモノハ子宮粘膜ノ類癌ニシテ表面ノ上皮ハ肥厚多層ノ上皮トナリ、之ヨリ實性椎體組織ノ深部ニ侵入ス、小ナル椎體ニ於テモ(球葱根ノ殼ニ酷似ス)亦瘤珠ヲ形成ス、之ハ表皮ノ類癌ト全ク同ジキモノナリ。
第四種ニ屬スルモノハ腺ノ造構ヲ現ハスモノニシテ更ニ二別スルコトヲ得ベシ(一)腺癌(二)惡性腺腫即チ是レナリ。

(一)腺癌ニ於テハ腺ノ上皮増殖シ腺腔ノ擴張増大ヲ來ス、上皮ノ増殖ハ腺ノ全腔ニ平等ニ行ハルルニアラズ、從テ上皮ハ腺腔ニ突起ヲ生ジ相對向セル腺壁又ハ突起ハ相互ニ連絡ヲ來スニ至ル、然レドモ是レ亦癌腫性變

化ヲ受ケテ増大セル腺ノ總テニ行ハルルニアラズシテ時トシテ腺壁ノ一部分ハ外見上健康上皮ヲ有スルモノアリ、變化ノ起リシ細胞ト否ラザル細胞トハ核ノ變化並ニ染色力ニ差異アルモノトス、如上ノ變化ハ粘膜ノ表面ニ行ハルルコトナク組織ノ深部筋層内ニ於テノミ行ハルルモノナリ、即チ最モ明瞭ニ圓柱上皮ノ病的化生ヲ來シ扁平上皮トナルノ状態ヲ呈ス、初メ核及ビ原形質ハ短方形トナリ次ニ不規則トナリ遂ニ角化スルニ至ル、癌變性ノ場合ニハ單ニ増殖スルノミナラズ又剝脫ヲモ來スモノナリ、斯ノ如キ者ハ上皮ノ増殖ニヨリ胞巢ヲ充タシタル所謂癌胞巢ノ構造ヲ見ルコトナシ。

(二) 惡性腺腫ハ腺ノ無限増殖ニシテ腺ヲ被覆セル上皮ハ一層ナルモ上皮ノ増殖激シキヲ以テ單ニ腺腔擴大セラレ腺壁ノ面積ヲ擴大スルニ止マラズ、更ニ腺腔内ニ棘狀ノ突起ヲ出シ或ハ周圍ニ向テ乳頭狀ノ突起ヲ出スモノトス。

上述ノ如ク不規則ナル形態ヲ呈スルモ之ヲ被覆スル上皮ハ常ニ單層ナリ、又細胞ノ増殖激甚ナルガ爲メ恰モ多層ノ如キ外觀ヲ呈スルコトアルモ狭キ基底ヲ以テ相互ニ併行シ必ズ一層ニヨリ被覆セララルモノナリ、而シテ上皮ハ甚ダシキ増殖ニヨリテ狭小トナリ、核モ亦狭長トナリ細胞ハ瀰漫性ニ染色セラル、然レドモ細胞固有ノ變化ニ至リテハ之レヲ述ブルコト甚ダ難クシテ自己ノ經驗ニ徴スルノ外ナシト雖モ、健康上皮ニ比スレバ稍々瀰漫セリ、斯ノ如ク上皮細胞ノ著シキ増殖ニヨリ固有ノ子宮粘膜炎ハ消失シ、病的ニ増殖セル腺ニヨリ全組織ヲ埋ラレ殆ド間質ヲ認メザルニ至ル。

惡性腺腫ハ子宮體ニ最モ多ク、頸部ニモ亦稀ニ來ルモノナレドモ腔部ニ於テハ極メテ稀ナリ。近時ニ於ケルシヨットレンデル・ケルンマウネル氏等ノ分類法ニ從ヒ組織的關係ヲ記スレバ、一般ニ頸部ニアリテハ原發性實性癌多ク、子宮體ニテハ原發性腺癌其多數ヲ占ム、氏等ノ統計ニ據レバ百四十例中二十五例

(一七%)ニ原發性腺癌ヲ、百五十五例中八二・九%ニ原發性實性癌ヲ實驗シ、又京都大學婦人科教室山田氏ノ報告ニ據レバ五十例中何レモ皆實性癌ナリシト云フ、余ガ最近ノ調査ニ於テハ實性癌約八〇%ニ對シ腺癌二

〇ノ比ヲ示セリ、又初メハ腺癌ニシテ續發的ニ實性癌ノ所見ヲ示スニ至ルモノ亦少ナカラズ。發生部ハ余ガ從來ノ檢索ニアリテハ頸部若シクハ腔部ニ起原スルモノ稀ニシテ、頸部ト腔部トノ境界部ヨリ

起始セリト思考スベキ場合及ビ糜爛ニ一定ノ關係ヲ有スルモノ最モ多シ。シヨットレンデル・ケルンマウネル兩氏ハ之レヲ構成セル細胞ノ形態ニ從ヒ成熟・半成・未熟ノ三者ニ分類シ、

又大胞巢癌・小胞巢癌及ビ兩者ノ混合型トニ區別セリ、其他間質僅微ニシテ一見肉腫ニ類スルガ如キモノヲ瀰漫性癌ト稱シ、之ニ反シ間質非常ニ多キモノヲ「スキルス」Skirhus・硬性癌 Carcinoma durum ト稱セリ。實性癌ニシテ上皮ノ更ニ分種セラレタルモノハ圓柱細胞・有棘細胞並ニ化角細胞ノ三層ヲ有シ、此胞巢ヲ橫斷

スルトキハ所謂癌珠ノ構造ヲ示スモノナリ、是レ即チ成熟癌ニシテ化角ハ通常胞巢ノ中心ニ於テ行ハルルモ稀レニハ周邊ノ細胞化角スルモノアリ、斯カル成熟癌ハ一見恰モ表皮ニ髣髴タルヲ以テ之レガ鑑別ノ要點トシテ、シヨットレンデル・ケルンマウネル兩氏ハ基底細胞層ノ不規則ナルヲ指摘シ、リッペルト Ribbert ハ

細胞著色力ノ如何ニアリトセリ。半成癌ハ時ニ化角細胞ヲ發見スルコトアリト雖モ、細胞ハ不透明寧ロ同質ニシテ核ハ圓形又ハ橢圓形ヲ呈シ其ノ配列不規則ナリトス。不熟癌ト稱スルモノハ甚ダ屢々頸部癌ニ實驗スル所ニシテ、胞巢中ノ細胞ハ一般ニ小且ツ境界全ク明瞭ナラズ形態ノ如キモ亦種々ナルモノナリ。

京都大學婦人科教室山田氏ノ調査報告ニ據レバ四十八例中成熟三例(六・三%)、中度成熟二十七例(五六・三%)

%)未熟十八例(三十七・六%)ナリシト云フ。其基底細胞癌 Basalzellenkrebs ハクロムベツル Krempcher 氏ニヨリ唱導セラレシモノニシテ主トシテ基底細胞ノ増殖ヲ云フ、即チ癌細胞中ニ角化細胞・有棘細胞ヲ缺如シ、主トシテ柱狀又ハ紡錘形細胞所謂マルビギー氏層ノ細胞形ヲ有スル細胞ヨリ成ル、然レドモ此分類ノ賛否ニ關シテハ未ダ學者間ノ一致ヲ見ルニ到ラズ。

癌細胞間ニハ屢々巨大細胞ヲ發見ス、而シテ該細胞ノ起原タルヤ時ニ上皮性ナルコトアリ或ハ間質性ノコトアリ、屢々癌細胞ノ邊緣ニ當リ「クロマチン」ニ富メル大ナル分葉核ヲ有スル巨大細胞ヲ見ル、該細胞ハ又胞巢間ノ間質中ニモ之ヲ見ルモノニシテ成熟癌及ビ半成熟癌中ニ於テモ亦之ヲ發見ス、是レ多核巨大細胞ニ對シ多形性巨大細胞 Polymorphkerige Riesenzellen ト稱スルモノナリ。

癌細胞核ノ構造ニ關シテハアマン・ツムン 氏ノ研究アリ、即チ扁平上皮癌ニアリテハ多數ノ巨大核絲分裂アリ普通ノ核分裂ニ比シ「クロマチン」ニ富ミ、且ツ多極性分裂ヲ營ミ、又圓柱上皮癌ニアリテハ不規則ニ配列セラレタル分裂軸ニ從テ分裂ス、「ピクノローゼ」空洞形成及ビ「クロマチン」ノ變化等ハ靜止期ニ於ケル癌細胞特異ノ像タリト、シヨットレンデル氏ハ「クロマチン」網ノ粗糙ナル點及ビ暗色ヲ呈セル不規則ノ「クロマチン」塊ヲ見、分裂ノ不平等ナルハ病的ノモノナリトセリ。

癌ノ浸潤ニヨル間質ノ變化ニ就テ述ブレバ、癌細胞ノ小ナル索條體又ハ樹枝狀ヲナジ周圍組織ニ浸潤セル場合ニハ浸潤力速カナルガ爲メ反應的變化ノ起ラザルニ先立チ早クモ周圍ノ組織ニ侵入スルヲ以テ何等ノ反應ヲ見ザルモノナリ、之レニ反シ比較的大ナル胞巢ヲ以テ侵入セル場合ニ於テハリグネル Langer 氏ノ說ノ如ク淋巴細胞・エオチン嗜好細胞・プラスマ細胞等ノ群簇ヲ見ルモノニシテ、シヨットレンデル氏ハ之ヲ反

應性炎症トナセシモ是レ恐ラク眞ノ炎症ニハアラザルベシ。

間質ノ結締組織ニ於テハ硝子樣變性ヲ見ルコト稀レナラズ、血管ノ彈力纖維ハ永存スルモノナレドモ、若シ癌病竈ガ組織ノ全部ニ瀰漫スル時ハ之ガ消失ヲ來スモノトス。

胞巢ノ中心ニ於ケル細胞ハ屢々壞疽ニ陥ルコトアリ、而シテ之レヨリ周邊ニ波及シ石灰ノ沈著ヲ來ス、又癌細胞ガ硝子樣變性ヲ來シ瀰漫性ニ著色セル角質樣物質ト化シ恰モ「シンチチウム」細胞樣ノ外觀ヲ呈シ又粘液樣又ハ膠樣性變性等ヲ來スコトハ往々腺癌ニ於テ實驗スト云フ。

原發性腺樣癌 Primär drüsiger Krebs ハ多クハ子宮體ニ來リ被蓋細胞及ビ腺上皮ヨリ發生ス頸部ニハ比較的稀レナリ、頸部ニアリテハ固有ノ被蓋細胞及ビ腺上皮ヨリ發生シ或ハ糜爛ノ發生ニ伴ヒテ頸部上皮ヨリ來ルモノトス。

惡性腺腫 Malignes Adenom ハ腺ノ異常増殖ニシテリ、リット Ribbert 氏ハ之ヲ管狀癌 Carcinoma tubulare トシテ記載セリ、該腫ハ癌腫ニ屬スベキモノニシテ、腺ハ定型性ノ形狀ヲ有シ、細胞ハ矩形又ハ圓筒形ヲナシ且ツ單層ニシテ腺腔ニ對シ境界明瞭ナリ、而シテ腺ハ相互ニ密接シ間質ハ甚ダ僅微ニシテ全ク存在セズ、各腺恰カモ相接著セルガ如キ外觀ヲ呈セリ、リット・ベルト 氏ハ惡性腺腫ニアリテハ全視野ニ亘リテ、如上ノ所見ヲ呈スルナク、他部ニアリテハ細胞ハ不規則ノ形狀ヲ取り、核ハ強ク著色セラレ且ツ腺細胞ハ二層又ハ多層トナリ恰モ腺癌ニ類似セルモノアリト云ヘリ、シヨットレンデル・ケルン・マウネル 兩氏ハ惡性腺腫ヲ以テ腺癌ノ移行型トナセリ。

腺癌ニアリテハ腺壁ハ多層ノ上皮細胞ニ依リテ被覆セラレ、而シテ壁ノ細胞層ハ均等ナルコトアリ、或ハ壁ノ部分ヨリ差異ヲ生ジ、時トシテハ一局部ニ當リ細胞著シク増殖シテ腺腔内ニ突起ヲ生ズルコトアリ、細胞

ハ其形狀不規則ニシテ初メ腺腔ニ對シ境界明劃ナルモ遂ニハ不明トナリ且ツ著色不同トナル、核ハ「クロマチン」粗糙ニシテ不規則ノ分裂ヲナシ腺管密接ス、又本來ノ腺壁ヨリ外方ニ娘子腺ヲ形成シ或ハ腺腔内ニ中隔ヲ生ジテ腺腔不規則トナリ且ツ腺壁ヨリ細胞芽ヲ生ジ實性ノ椎體トナリテ間質中ニ侵入ス、是等ノ變化ニヨリテ原發性腺癌ハ遂ニ續發的ニ實性癌ノ狀態ヲ呈スルニ至ル。

第三型トシテシヨットレンデル・ケルンマウネル兩氏ニヨリテ記載セラレタルモノハ、腺管擴大セラレ腺腔内ニ皺襞ヲ生ジ、癌細胞ハ小ニシテ單層或ハ時ニ多層トナリ、核ハ大ニシテ細胞ノ全容積ヲ占メ且ツ石灰ノ沈著稀レナラザルノ型ナリ。

子宮癌ノ療法

近時子宮癌ニ對スル療法トシテ新タニ光線療法・電氣療法・血清ワクシン療法等ノ報告アルモ未ダ以テ豫期ノ好結果ヲ得ルニ至ラザルガ如シ、故ニ現時ノ學術程度ニ於テハ初期ニ診斷シ手術的療法ヲ施スヲ以テ満足セザル可ラズ、而シテ手術的療法ニ就テハ能、不能ノ判定必要ニシテ其主眼トスベキハ骨盤内結締織ガ尙ホ柔軟ニシテ健全ナルカ、或ハ其一側又ハ兩側共ニ浸潤セルヤ否ヤヲ知ルヲ要ス、此疑問ヲ解決スルニハ往々麻醉ヲ要スルコトアリ、或ハ單ニ直腸診ニヨリテ知ルコトアリ、骨盤内結締織ノ健全ナル間ハ根治的手術ヲ實行シ得ベシ、骨盤内ノ浸潤硬クシテ結節狀及ビ隆起ヲ呈セル時ハ之ヲ癌腫性ト思考スルモ敢テ大誤ナキニ似タリ、既ニ癌ニ犯カサレタル腸骨腺ノ腫脹甚シキニ際シテハ只腹壁枯瘦セル者ニ限り腹壁ノ後方ニ當リ骨盤入口平面上ノ後半輪ノ起始點ニ於テ之ヲ觸知シ得ベシ。
腹壁ノ肥厚セルモノニアリテハ麻醉ヲ施シ該側ノ脚ヲ強ク屈曲スル時ハ觸診ヲ容易ナラシメ、腹部大動脈上部或ハ其側部ニ往々腫脹セル淋巴腺ヲ觸知シ得ベシ。

ウキンテル Winter 及ビツアングマイステル Nangmeister 氏ハ腔部及ビ頸部癌腫ニ手術シ得ベキヤ否ヤノ疑問ニ對シテ膀胱鏡的所見ヲ應用セリ、是レ絶對的ノ價値アルモノニアラズ、縱令膀胱ノ一部犯カサレタリトテ手術全ク不可能ナラザレバナリ、然レドモ只手術後ノ豫後ヲ定ムルニ根據トナルコトアリ、癌腫ノ膀胱壁ヲ犯スヤ膀胱加答兒ノ症候ヲ來シ尿ハ血尿トナリ其他膀胱ノ障礙ヲ起シ遂ニ穿孔スルニ至ル、初期ニ於テ癌腫ガ外部ヨリ膀胱ニ近接シツツアルヤ否ヤヲ知ルニハ膀胱鏡検査ヲ要スルモノナリ、而シテ膀胱鏡ニ依リテ認識シ得ベキ變化ハ概ネ次ノ如シ。

即チ三角部ノ近方ニテ下方膀胱底ニ粘膜腫脹肥厚セル横行隆起ヲ來シ此粘膜皺襞ハ次第ニ膨大シ皺襞ノ間ニ大ナル谷ヲ形成シ粘膜ハ浮腫狀或ハ泡狀トナリ上皮ハ提擧セラレ泡狀水腫ノ狀態トナル、斯ク高度ノ變化アルニ係ハラズ膀胱加答兒ノ症狀ヲ全ク缺如スルコトアリ、是レヨリ粘膜ノ上ニ「レンス大」ノ結節ヲ生ズルカ或ハ扁平ノ膨隆ヲ來シ髓樣ノ外見ヲ呈シ固有ノ光輝ヲ有シ一見癌腫タルコトヲ知ラシム、其表面ニハ血管ノ經過スルヲ見ル、進ンデ潰瘍トナル時ハ結節ノ表面粗糙トナリ、白色ノ多少固著セル組織ノ碎片ヲ以テ被覆セラル、此際多クハ膀胱加答兒ノ症狀ヲ現ハスモノトス。

若シ骨盤内結締織浸潤セル時ハ根治的療法既ニ絶望ニシテ吾人ノ施スベキハ只ダ對症療法ノ一アルノミ。
今骨盤結締織ノ癌腫浸潤ヲ蒙レル場合ノ諸氏ノ統計ヲ擧グレバ、

クランドラート Krunder 氏

五五・〇%

パンロウ Pankow 氏

六八・六%

ブルネット Brunet 氏

六三・〇%

シャイブ Skib 氏

四三・六%

ニシテ京都大學ニ於ケル調査ニテハ外來癌腫患者ノ七八%ニ見タリト。局所ニ於ケル腺轉移ノ頻度ニ關スル統計ハ以上ノ統計ハ

リーグ子ル <i>Legner</i> 氏	三〇・〇%
シヨットレンデル・ケルンマウネル <i>Schottlander u. Krummauer</i>	七二・七%
ウエルトハイム <i>Wirthheim</i> 氏	三五・八%
ホッハイゼン <i>Heckstein</i> 氏	二七・〇%
フンケー <i>Funk</i> 氏	三五・八%
デーデルライン <i>Dederlein</i> 氏	二二・八%
ブラウ <i>Brau</i> 氏	三三・三%
グワイフェル <i>Greif</i> 氏	二四・〇%
シャイズ <i>Schäfer</i> 氏	三一・四%
ブルネワト <i>Brunow</i> 氏	五一・〇%
ケルンマウネル・ラメリー <i>Krummauer u. Lamerli</i> 氏	五七・五%
ロストホルン <i>Rosthorn</i> 氏	五七・七%
ウイリヤムス <i>Williams</i> 氏	七二・〇% (屍體ニヨル)
シヨットレンデル・ケルンマウネル <i>Schottlander u. Krummauer</i> 氏	四三・八%
リーグネル <i>Legner</i> 氏	五五・五%

以上ノ統計ハ頸腔部癌ノ場合ニシテ體癌ニアリテハ腺ノ轉移ハ比較的稀ニシテワイベル *Wibel* 氏ハ只一六%ニ於テ之ヲ見タリト云フ。手術ノ能不能ハ術者ノ技術如何ニ關スルモノニシテ、甲者ノ不能ナリシ際、乙者ノ以テ可能トスル場合取テ

妙ナカラズ。

手術可能ノ子宮癌ノ療法

癌性子宮ノ全摘出術ハ既ニ一千八百十三年ランゲンバク *Langenbeck* 氏千八百二十二年ザウテル *Sauer* 氏ニ依テ行ハレ其後諸氏ノ報告アリシモ、千八百七十八年ニ至リウエー、アー、フロインド *W. A. Freund* 氏ハ新手術法ヲ報告シ次テ直チニチエルニー *Carny* 氏ノ報告アリ、同氏ノ手術式ハ一時子宮癌根治療法ニ對シ模範的ノ手術ト稱セラレタリ。

(一)腔式子宮全摘出術 子宮移動シ易ク且ツ腔腔ノ廣キ者ニハ之ヲ行フコト困難ナラザルモ、腔腔狭小ナル者又ハ宮體ノ増大セル者ニハ屢々困難ヲ感ズルモノナレバ余ハホーフマイエル *Hofmeister* 氏法ヲ少シク變更セル方法ヲ執レリ、本法ハ他氏ノ方法ニ比シ初學者ニ於テモ亦比較的容易ナルモノナリ、即チ手術前腸ノ内容ヲ排泄シ術前三時間及ビ三十分ノ二回ニシユナイデルリン 氏スコボラミン液ノ皮下注射ヲ行ヒ、更ラニ手術直前トロバコカイン又ハストバイン液ノ腰椎注射ヲ併用ス、腔式手術ニハ同麻酔法殊ニ適當スルモノノ如シ、手術ヲ行フ際ハ腔内ヲ豫メ石鹼ト温湯ニテ、次ギニ石炭酸ヲ以テ充分洗滌シ最後ニ五〇%アルコホルヲ濕シタル綿紗ヲ暫時腔内ニ挿入シ、後手術ヲ行フベシ。

患者ハ尾軀脊位ヲ取ラシメ半溝鏡及ビ保護器ヲ送入シテ腔部ヲ露出シ前唇ニミゾー氏鉗子ヲ掛ケ可及的陰裂間ニ持チ來シ之ヲ成ルベク會陰ノ方ニ牽引スル時ハ前腔穹窿部ヲ陰裂間ニ現ハスコトヲ得、茲ニ於テ前腔穹窿部ニ於テ子宮ニ對スル腔ノ附著部ニ當リ横切開ヲ行ヒ、粘膜下組織ハ曲剪ニテ分割シ以テ子宮頸部ト膀胱トノ間ヲ剝離シ、遂ニ膀胱子宮腹膜皺襞ニ達シ之ヲ切開スルトキハ、子宮ノ前面ニ達スルコトヲ得ベシ、斯クノ如クシテ子宮腔部ニ子宮外口ヨリ左右二個ノセゴン氏鉗子ヲ懸ケ腔部ヲ固定シ、子宮頸管中ニ直剪ノ一枝



圖一十七第



ヲ入レ前面ニ沿フテ縦ニ截割シ、截割創ノ最深部ニ更ニ第二ノセゴン氏鉗子ヲ左右ニ懸ケ之ヲ牽引スル時ハ子宮體下部ノ前面又モ陰裂間ニ現ハル、爰ニ於テカ更ニ前面ニ沿フテ切截ヲ加ヘ尙ホ以上ノ方法ヲ反復スル時ハ子宮ハ翻轉シテ陰裂間ニ其底部ヲ表ハスニ至ル、乃チ先キニ掛ケタル鉗子ヲ除キ今ヤ牽引セラレタル子宮ニ於テ、先ヅ一側ノ廣韧带ノ附著部ヲ現ハシ喇叭管及ビ卵巢ヲ腔内ニ露出セシメ、之ヲ

薦骨漏斗韧带ノ上ニ順次結紮シ圓韧带ノ上ニモ亦結紮ヲ施シ、子宮側ハコッヘル氏動脈鉗子ニテ出血ヲ止メ之ヲ離断シ、漸次ニ子宮下部ニ結紮ヲ施シ子宮動脈ヲ結紮シテ之ヲ切斷シ、他側ニモ同様ノ結紮離断ヲ行フ時ハ遂ニ子宮ハ纒カニドウグラス氏腹膜皺襞及ビ後腹壁ニ依リテ連結セララルルニ至ル、爰ニ於テ是等ノ結合ヲ鉗子ニテ挟ミ切斷スル時ハ全子宮及ビ附屬器ヲ抽出シ得ベシ。腔壁ノ切斷端ハ縫合閉鎖スルモ可ナリ、又ハ腔壁ノ切斷端ヲ「カットグット」ニテ連字縫合ヲナシ創縁ハ開放ノ儘ニテ單ニ沃度防護ガーゼ」ヲ挿入シ置クモ可ナリ、後療法トシテハ施術後靜臥セシメ場合ニ依リテハ下腹部ニ氷罨法ヲ施スベシ、排尿困難ナレバ導尿ヲ行フ、以上ノ麻酔法ニテハ通常嘔吐・嘔氣等ナキモノナレバ翌日位ヨリ重湯・牛乳・スープ等ヲ與ヘ第三日位ニテ「ガーゼ」ヲ交換スベシ、此日迄便通ナクンバ浣腸ヲ行ヒ十日以後ニハ離床シ得ラルベシ。猶ホ從來種々ノ術式ニ依リテ抽出セラレタル腔式子宮癌手術成績ノ大略ヲ記シ以テ其成績如何ヲ論ゼント

ス、之ニハ先ヅ直接及ビ永久的結果ノ二項ニ分ツテ便トス、直接ノ結果ニ就テハ例之バ愛ニーノ手術式現レタリトセヨ最初ハ直接ノ死亡甚ダ多シ、チルニー氏創メテ腔式抽出法ヲ報告セシ時ニ於テハ實ニ三〇%ノ死亡率ナリシモ現今ニテハ僅ニ八%位トナレリ、又腔式手術ノ可能ナルカ又ハ不可能ナルカノ見解モ亦大ナル關係ヲ有ス、例ヘバ甲ノ手術家ガ以テ手術不可能トナセシ患者モ乙ハ未ダ可能ノ者トナシテ手術スルコトアラン、然ラバスカル二名ノ手術家ニ於テハ甲ハ勿論手術ノ成績佳良ナルモ、乙者ハ甲ニ比シテ比較的困難ナル場合ニ於テモ手術ヲ施スヲ以テ從テ其手術ノ成績悪シカルベキハ論ヲ俟タズ、其永久的治療ノ成績ニ至ツテモ同ジク術者ト之ヲ選ブノ材料トニヨリテ著シキ差ヲ生ズルヲ以テ一概ニ腔式全摘出術ノ成績如何ヲ論ジ難シ、單ニ各個手術家ニヨリテ自信ノ術ニ訴ヘテ其成績ヲ見以テ治療ノ目的ヲ達セシメンコトヲカムレバ可ナリ、從來腔式ニ於ケル癌腫手術ハ手術其者ニ於ケル危険ハ著シク減シタルモ未ダ満足ナル結果ヲ見ルニ至ラズ、是ニ於テ諸學者ノ研究ニヨリ癌腫腔式手術ナル術式表ハレタリ、本法ハ最初フロインド氏ニヨリ行ハレシ者ニシテ其後ワイト、L. 氏ハ此式ニヨリテ四例ノ手術ヲ行ヒタルモ總テ再發又ハ手術直接ノ結果トシテ一モ其好結果ヲ擧ゲザリキ、一千八百八十六年ニ至ル迄ニハ此式ニ依レル手術ニ六七・〇%ノ死亡率ヲ示シ其後フロインド氏ノ行ヒタル二十七例ニ於テハ其死亡率三三・%トナレリ、然レドモ未ダ腔式手術ノ死亡率ニ比シ難シ、其後腹式手術ノ改善ニヨリテ其死亡率ハ漸次減少シ次第ニ腔式手術ノ死亡率ニ近接セリ、一千八百八十二年フロインド氏ハリケンヘルド、Lichenheldt氏ヲシテ骨盤結締織及ビ淋巴腺ヲ抽出セシコトヲ報告セシメタリ、同時ニフロインド氏ハ腹式手術ニヨリテ子宮體癌腫ニテ多數ノ腫大セル腹内淋巴腺・腸骨腺ヲ抽出セシコトヲ報告セリ、一千八百九十九年ニ於ケル「リテラツール」ニヨレル子宮癌二三五七人ノ腔式全摘出術ノ死亡率ハ八・九%ニ當レリ。

手術後ノ永久的成績ニ對シテハ他部ノ癌腫ト同ジク尙ホ未ダ佳良ト言難シ、縱令子宮ヲ摘出シタリトスルモ比較的短時日ニシテ再發ヲ來スモノニシテ總手術ノ三分ノ二ハ再發ヲ免レザルノ比ヲ示セリ。尙ホ子宮頸部癌腫ト體部癌腫トノ手術成績ヲ比較セバ左ノ如シ。

氏名	頸部癌腫ノ 治癒セシ者	體部癌腫ノ 治癒セシ者
オルスハウゼン <i>Oelshausen</i> 及ビシュレーデル <i>Schuler</i> 氏	三〇%	五三・三%
レオポールド <i>Leopold</i> 氏	五〇%	一〇〇%
フリツチユ <i>Fritsch</i> 氏	三四・三%	一〇〇%
ファンネンヌチール <i>Fanonenstierl</i> 氏	四五%	八六・六%
ツワイフェル <i>Zweifl</i> 氏	三四・七%	陸部四一・六 六六%
カルテンマン <i>Kaltenbach</i> 氏	二二%	頸部三五・三
クロバーク <i>Chrobak</i> 氏	三一・五%	七五%
クロバーク <i>Chrobak</i> 氏	二五%	七六・四%
ランダー <i>Landau</i> 氏	二二%	一〇〇%
デーテルライン <i>Deutelin</i> 氏	二八・五%	一〇〇%
キュストネル <i>Kiuser</i> 氏	三一・五%	八三・三%
シヤウタ <i>Schuda</i> 氏	二六・四%	七五%
フエーリング <i>Fehling</i> 氏	二二%	七五%
フエーリング <i>Fehling</i> 氏	二六・二%	七五%
フエーリング <i>Fehling</i> 氏	二九%	陸部四七・一 頸部二八・一
ウインテル <i>Winter</i> 氏	二九%	五九%

全治癒トハ少ナクモ手術後五年以上再發ナキモノヲ云フモノニシテ、ウインテル *Winter* 氏ニ從ヘバ全別出

數ヨリ手術ニ因スル死亡數、偶發症ニテ死亡セル數及ビ生死不明ノ數ヲ減ジ其殘數ト再發セザリシ者ノ數トヲ比較セルモノナリ。

A. Le Dentu et P. Delbet Nouveau traité de Chirurgie, Gynécologie 1916ニ癌腫ノ治癒率ニ關スル計算式ノ記載アリ、

ウインテル氏計算式 *La formule de Winter*
 絕對治癒率 = $\frac{(\text{手術率}) \times (\text{永久治癒率})}{100}$

此公式ニヨルトキハウエルトハイム氏ノ治癒率ハ二四・九%トナリ、又

ワルドスタイン氏計算式 *La formule de Waldstein*
 絕對治癒率 = $\frac{(\text{手術率}) \times (\text{永久治癒率}) \times 100 - (\text{手術ニヨル死亡率})}{100}$

此公式ニヨルトキハウエルトハイム氏ノ治癒率ハ一八・六%トナル、又千九百十二年ベルンニ於ケル産婦人科學會ニテ發表セラレタル成績ハフランツ氏ノ二七%ヲ以テ最高率トセラレタリ。

ワルドスタイン *Waldstein* 氏ニ從ヘバ手術ニ因スル死亡數ヲ減算セズ總テ死亡者ヲ計算セシモノナリ、クルッケンベルグ *Krukenberg* 氏ハ二百人ノ手術患者中一年內ニ八十二名、二年目ニハ八十八名中二十三名、三年目ニハ四十七名中六名、四年目ニハ二十八名中四名、五年目ニハ九名中一名再發セルヲ見、フロムメル *Frommel* 氏ハ手術後一年以内ニ三五・六%ノ再發ヲ見、ツワイフェル *Zweifl* 氏ハ手術後半年中ニ六九・八四%ノ再發ヲ見、フリツチユ氏ハ總テノ再發ノ四分ノ三ハ一年以内ニ來レルモノトセリ。

再發ニヨリ死亡セル統計ヲブレスラウヨリフリツチユ氏ノ公ニセシモノハ左ノ如シ。

年目ニ死セシモノ	一六・二八	六二・五%	三年目	二二・〇七	五年目	三・八
二年目	四四・二三	六二・五%	四年目	九・六	六年目	二・九

即チ二年以内ニ手術患者ノ六一・五%ハ再發ヲ見ル割合ナリ。

以上表示セルガ如ク其多クハ初メ二三年中ニ再發ヲ見ルモノナルヲ以テ、五年ヲ經過スルニアラザレバ確實ニ治療ノ目的ヲ達セシモノトハ言ヒ難シ、而シテ五年後ニ於テ甫メテ再發ナキモノニ近シト雖モ其後亦稀レニ再發ヲ見ルコトアリ、クルッケンベルク氏ノ例ノ如キハ手術後十七年間注意セシニ五年後七名ノ再發患者ヲ見タルモ之ハ其以前ノ者ニ關係ナクシテ原發性ニ發セシ者ナルガ如シト。

腔式手術後一年ニテ再發セシ癌腫患者ノ腸骨淋巴腺ヲ摘出シテ手術ノ進歩ヲ示セルハ實ニリース (Riss) 及ビルムプ (Rumpf) 氏ノ功トス、兩氏ハ一千八百九十五年四月—六月ニ於テ單獨次ノ方法ヲ癌腫ニ行ヘリ、即チ初メ精系動脈ヲ結紮シ次ニ廣韌帶ノ後葉ヲ開キ骨盤結締織中ニ入りテ輸尿管ヲ現ハシ且ツ其全徑路即チ腰筋ヨリ膀胱ニ至ル迄ヲ充分ニ露出セシメ、斯クテ子宮動脈ヲ分離結紮シ輸尿管ヲ兩側ニ壓排シ然ル後骨盤結締織ヲ除去シ最後ニ腸骨動脈ノ兩側ニアル灰白赤色ヲ呈セル腫脹腺ヲ摘出シ、又直腸ヨリドウグラス窩ノ皺襞ヲ剝離シ子宮周圍ニアル結締織ヲ除去セルナリ。

(二)子宮及ビ附屬器ノ全剝出術(ウエルトハイム及ビブナム氏術式) Die erweiterte Totalexstirpation des Uterus und seiner Adhese (nach Wertheim und Bann) 本手術ノ目的ハ全内生殖器ノ剝出ニシテ單ニ子宮及ビ其附屬器ノミナラズ之ト連結アル淋巴腺竝ニ結締織ヲモ除去スルニアリ。

準備的手術トシテ手術ニ關係ナキ助手ヲシテ腔内ヲ洗滌セシメ更ニスブラミン又ハズブラミンアルコホルヲ以テ消毒ス、腔部及ビ頸部癌ニアリテハ腔部ヲ露出セシメ銳匙ヲ以テ癌組織ヲ除去シ且ツ之ヲ燒灼シ沃度ヲ幾ヲ充分ニ塗布シ沃度仿護ガ―ゼヲ以テ腔管ヲ填塞ス。

第一、患者ノ位置。骨盤高位ヲ取ラシメ以テ腸ヲ手術區域ヨリ驅除スベシ、水平位ニアリテハ深ク骨盤内ニ

侵入スルコト能ハザルガ故ニ到底理想的手術ヲ遂行セシムルコト困難ナリ、腹壁ノ切開ハ縱切開横切開ノ孰レヲ選ムモ一ニ術者ノ隨意タルベキモ癌腫手術ニ於テハ縱切開ニ據ルヲ便ナリトス。

注意。元來手術部域ノ無菌的ナルハ論ヲ俟タザル處ナルモ癌腫ニアリテハ然ラズ、往々種々ナル細菌ノ組織内ニ潛存スルコトアルハ既ニ人ノ知ル所ナリ、フロンメ氏ハ淋巴腺ノ切片染色ニ依リ又リフマン氏ハ骨盤結締織内ニ連鎖狀菌ヲ證明セリ、ハンネス氏ハ手術後ニ於ケル死亡ノ直接原因ハ骨盤結締織内ニ存在スル連鎖狀菌ニ基因スルモノトシ手術部域ノ開放ヲ主張セリ。

第二、操作手術部域ノ開放。手術ヲ行フニハ手術部域ヲ充分開放スルノ必要アルヲ以テドアイヤン又ハフリ

ツチ氏ノ腹壁固定器ヲ用ヒテ腹壁ヲ開放シ置クベシ、余ハ豫メ腹膜ヲ左右ノ腹壁皮層ニ縫合シ然後固定器ヲ用ヒテ腹壁ヲ固定ス、之ニ先ダチ腸内容ヲ充分排除シ麻酔モ亦完全ナルヲ要スルコト勿論ナリ、斯カル場合余ハ從來腰麻酔ヲ用ヒシモ近時聊カ考フル所アリ癌腫手術ニ限リバントホン・スコボラミン注射ニ酸素瓦斯、エーテル・クロロフォルム麻酔ヲ併用ス、手術部域ニハ細菌既ニ存在シ將來感染ノ虞レアルモノト見做シ腸管ハ充分「ガーゼ」ヲ以テ被覆シ次デ子宮及ビ骨盤結締織・ドウグラス氏窩・膀胱・輸尿管ヲ觸診シ、更ニ骨盤壁及ビ脊柱ノ大血管ニ沿ヘル淋巴腺ノ状態ニ注意シ以テ手術ノ能・不能ヲ判定スベシ、若シ硬キ大ナル癌腫淋巴腺ノ脊柱ニ癒著スルヲ見バ手術ハ無論不可能ナルモノニシテ、斯カル場合ニウエ、エル、ブリオール W. R. Pryor 及ビクレーニヒ Kröning 氏ハ内腸骨動脈及ビ卵巣血管ヲ結紮シ癌ノ榮養ヲ妨ゲ以テ其發育ヲ防止シ傍ラ止血ノ目的ヲ達セリト云フ、余ハ屢々之ヲ行ヒシモ未ダ其成績ノ賞スベキモノナシ。

手術ノ一般方式。卵巣血管・圓韌帶動脈・子宮動脈ノ結紮・輸尿管ノ遊離・淋巴腺ノ摘出・骨盤結締織ノ除去、及ビ子宮ノ摘出ニアリ、其他腔ヲ切開スルニ當テハ癌潰瘍ノ防禦又淋巴腺ノ摘出ノ際ハ之ヲ破壞セザル様注意スベシ、然ラザレバ後來恐ルベキ傳染ヲ來スコト尠ナカラズ。

第三、輸尿管ノ遊離及ビ輸入血管ノ結紮 第十九表第一圖ノ如クキユストナル氏ノ有窓無鉤腫瘍鉗子ヲ以テ子宮底ヲ挟ミ子宮ヲ前上左方ニ牽引スルトキハ、ドウグラス氏窩ノ腹膜緊張シ脂肪ノ多カラザル人ニアリテハ腹膜ヲ通ジテ輸尿管ヲ透視シ得ベシ、該鉗子ハ無鉤ナルガ故ニ子宮實質ヲ損傷スルコトナク從テ内容ノ漏出スル虞レナシ、次ニ輸尿管ノ剪線部ヲ提舉スルトキハ骨盤漏斗形ヲ緊張スベク之レニヨリ靱帶ト殆ンド平行ニ走レル輸尿管ヲ遠クコトヲ得ベシ、次デ此ノ靱帶ノ成ベク剪線部ニ近ク壓搾子ヲ掛ケ更ニ少シク隔テテ第二ノ壓搾子ヲ掛ケ此ノ間ヲ切斷ス、此際注意セズンバ輸尿管ヲ壓搾又ハ切斷スルコトアリ、靱帶ノ末端ハ結紮シ結紮絲ハ之ヲ長クシ後ニ檢査ノ用ニ供ス、次ニ圓靱帶ヲ其腸骨部ノ中央ニ一本ノ壓搾子ヲ掛ケ中央ニ偏シテ切斷ス、通常圓靱帶ハ中央切斷端ヨリハ出血ナキモノナリ、若シ出血スルトキハ更ニ結紮ヲ施スベシ、爰ニ於テ前後ノ切開點ヲ連絡スベキ切開ヲ腹膜ニ加フレバ第十九表第二圖ニ示セルガ如キ切開口ヲ得ルヲ以テ、兩手ノ示指ヲ切開口ニ入レ廣靱帶ノ兩葉ヲ靜ニ前後ニ剝離ス、然ルトキハ大血管及ビ輸尿管ヲ被覆セル相鬆ナル結締織ヲ現出ス、乃チ之ヲ剝離スルトキハ第二十表ニ示スガ如ク内外兩腸骨動脈・輸尿管ヲ遊離露出セシムルヲ得ベシ、若シ以上ノ切開ニテ手術部域尙ホ狹小ナルトキハ切開口ヲ上方ニ擴張スベシ。

輸尿管ハ時ニ腹膜下ニ透見シ得ルコトアリ、而シテ初メ總腸骨動脈ニ直角ニ其上ヲ越ヘテ卵巢血管ト平行シ、廣靱帶ノ後葉ニ沿テ頸部ヨリ約一—五cmノ間隔ヲ以テ膀胱ニ入ル、第二十表ニ示セルガ如ク切開口下縁ガ輸尿管ト交又スル所ニ當リ總腸骨動脈ハ内腸骨動脈ト外腸骨動脈トニ分岐シ其間ニ淋巴腺介在セリ。

子宮動脈ノ探知 之ハ兩側ヨリ探求スルヲ便トス、即チ一方ハ内腸骨動脈ノ徑路ヲ追ヒ他方ハ輸尿管ノ徑路ヲ露出スルトキハ子宮動脈ハ内腸骨動脈ヨリ起リ輸尿管上ヲ越ヘテ交又スルヲ見ル、而シテ多クハ二個ノ靜脈之ニ伴ヒ一ハ輸尿管ノ上ヲ一ハ輸尿管ノ下ヲ通過セリ、子宮動脈ヲ結紮スルニハ可成内腸骨動脈ヨリノ起

點ニ近ク行フベシ、然レドモ上膀胱動脈ニ注意シ其ニ結紮スルガ如キコトアルベカラズ、子宮動脈ノ結紮ヲ終レバ中央端ハ壓搾子ニテ挟ミ第二十一表ノ如ク之ヲ靜カニ中央ニ牽引シ、閉鎖セル曲剪ヲ以テ子宮動脈ヲ輸尿管ヨリ分離セシメ次ギニ子宮ヲ強ク左上方ニ牽引スルトキハ右側ノ骨盤結締織緊張シ輸尿管ヲ膀胱ニ至ル迄分離セシムルコトヲ得ベシ、若シ此際靜脈ヨリ出血スルトキハコアグレンヲ殺菌ガゼニ潤ホシ暫時壓迫スレバ容易ニ止血スルモノナリ、次デ同様ノ術式ニヨリ左側モ亦血管ノ結紮及ビ輸尿管ヲ遊離セシメ第二十表ノ如ク子宮ヲ後方ニ牽引シ左右ノ圓靱帶切斷點ヲ連結セル切開ヲ子宮外膜ニ加フルトキハ子宮頸部及ビ腔上部ヲ膀胱ヨリ剝離シ得ベシ、時ニ膀胱ノ頂點ニテハ靜脈ヨリ出血スルコトアリ。

以上ノ如ク前方ノ連絡ヲ斷チタル後子宮ヲ前方ニ牽引シ第二十三表ノ如ク廣靱帶ノ後葉及ビ薦骨子宮靱帶ヲ緊張シ左右ノ薦骨子宮靱帶ヲ壓搾子ニテ挟ミ其中央部ニテ切斷シ且之ヲ結紮ス此際亦輸尿管ニ注意スベシ、之ヨリ左右ノ切開點ヲ連ネ上方弓形ヲナセル切開ヲ腹膜ニ加ヘ腹膜創縁ニハ多數ノ壓搾鉗子ヲ掛ケ後方ニ牽引シツツ靜カニ剝離スル時ハ子宮頸部腔上部ノ後壁ヲ直腸ヨリ遊離セシムル事ヲ得ベシ(第二十四表)、而シテ是迄ノ操作ハ無菌的ナルモ腔ヲ開クノ瞬間ヨリ傳染ノ機會ニ遭遇スル者ナリ、次ニ子宮ヲ薦骨岬ニ向テ牽引シ輸尿管ハ膀胱ニ至ル迄全徑路ヲ露出セシメ成ルベク健康組織ヲ隔テテ上下二箇所ニテ腔管ヲ閉鎖スベシ。

ブナム氏ハ直角ニ曲ガレル鉗子ヲ用ヒ癌腫ノ位置ヲ成ルベク隔テテ腔管ヲ閉鎖シ其下部ニテ腔トノ連絡ヲ離斷シ以テ不潔物ノ腹腔内ニ入ルヲ防グリ、リーブマン氏ハ第二十五表ノ如ク鉗子ノ代リニ太キ絹絲ヲ以テ假リニ上下二様ニ腔管ヲ閉鎖シ其間ヲ烙白金ヲ以テ燒灼離斷セリ、而シテ第二十六表第一圖ニ示スガ如ク後方ニ鈍鉤ヲ入レ子宮ヲ側上方ニ提舉スルトキハ輸尿管ヲ其下層ヨリ充分遊離セシムルコトヲ得ベシ、爰ニ於テ鈍鉤ヲ以テ輸尿管ヲ反對側ニ輕ク牽引シ骨盤結締織及ビ腔周圍結締織ヲ共ニ切除ス、腔管ヲ豫メ結紮スルト

キハ出血著ルシカラズ、靜脈出血ハ單保ニテ止血スルコトヲ得ベシ、時トシテハ上膀胱動脈ノ小枝ヨリ出血スルコトアリ、此場合ニハ分離結紮ヲ要ス、斯ク骨盤結締織及ビ腔周圍結締織ヲ廣ク切除スルハ此手術ノ主眼ニシテ且ツ眼ニ觸ルベキ淋巴腺ハ盡ク除去セザルベカラズ、淋巴腺ハ大血管ニ沿フテ存スルヲ以テ血管ヲ損傷セシメザル様注意シ且ツ淋巴腺ノ輸入血管ハ一々結紮スベシ、而シテ成ルベク手指ヲ以テ剝離抽出シ腺質ノ破損ヲ防グニカムベシ、大血管ノ損傷ヲ來セシトキハ豫メ手指ヲ以テ強壓ヲ加ヘ止血ノ後細針ヲ以テ血管縫合ヲ行フ、血管壁ニ小孔ヲ生ゼシトキニハ絹絲ニヨル圍繞結紮ニテ可ナリ、又腺ノ抽出後其底部ヨリノ出血ハ單保ニテ止血シ得ルモノナリ。

腹腔内ノ創面ハ凡テ腹膜ヲ以テ被覆スベシ、第二十六表第二圖ノ如ク腔管ノ上部ヲ閉鎖セル絹絲ヲ切斷シ切断端ハ壓搾鉗子ヲ以テ固定シ、腔ノ切断端ノ前方ハ膀胱腹膜ヲ以テ、後方ハ直腸腹膜ヲ以テ被覆シ左右骨盤腔ハ一度沃度丁幾ヲ塗布シ腔ノ左右ハ楔狀ニ切除セラレタルヲ以テ其儘縫合シ左右ノ骨盤腔ノ排膿ニ經路ヲ與フ、次デ骨盤漏斗帶ノ結紮絲ヲ牽引シ腹膜ノ創縁ニ連字縫合ヲ施スベシ、最後ニ腔管中ニハミクリツ氏ノ「ドレナージ」ノ如ク沃度仿讀ガーゼ」又ハキセロフォルムガーゼ」ヲ以テ「ドレナージ」ヲ行ヒ、腹壁ヲ縫合シテ術ヲ終ル。

腹式竝ニ腔式全摘出術ニ對スル手術ノ成績ハ左ノ如シ
 擴大セル子宮癌ノ腹式手術ニ於ケル直接ノ死亡率

ブンム Bumm 氏	二五・七%
ウエルトハイム Werhlim 氏	一八・六%
デーデルライン Döderlein 氏	一八・三%
クレーニヒス Krause 氏	二五・四二%

フランク、クラインハンズ v. Franke, Atchauer 氏	一九・八%
フランツ Franz 氏	二一・〇%
ホーフマイエル Hofmeister 氏	二五・九%
ツワイフェル Zweifel 氏	一四・〇%
ロストホルンクラーム Rosthorn-Kraume 氏	一三・六七%
亞米利加 America	一五・七%
英國 England	一一・五%
佛蘭西ニ於ケル統計ハ其ノ數少クシテ特別ニ記載ノ要ナキモゴツチ、Nélat 氏ニ據レバ(四年間三十四例ニ於テ)二六%ナリ。	

擴大セル子宮癌ノ腔式手術ニ於ケル成績左ノ如シ

シャウタ Schauta 氏	八・九%
トルン Thonn 氏	五・五%
スタンド Standt 氏	二〇・〇%
ポッチ Pouch 氏	一五・〇%

擴大セル子宮癌腫ノ腹式手術ニ於ケル成績

手術者	手術能率	完全治癒	比較的治癒
ツワイフェル Zweifel 氏	五一・八%	二三・四%	四五・二%
デーデルライン Döderlein 氏	五九・七%	一七・〇%	二八・三%
ブンム Bumm 氏	六〇・九%	一六・〇%	二六・三%
クレーニヒス Krause 氏	七八・九五%	二五・三三%	三二・二%
ウエルトハイム Werhlim 氏	五〇・〇%	一八・三%	四二・四%
シャイブ Schatz 氏	三〇・〇%	四・五%	—

擴大セル子宮癌腫ノ腔式手術ニ於ケル成績

シャウター Schauta 氏	五一・三%	一六・四%	三四・五%
スタンド Standt 氏	七〇・七%	二〇・〇%	三〇・〇%
トルン Thonn 氏	四四・二%	一九・三%	四三・七%

英國ニ於テバーケレー、ボンネー Berkeley and Bonney 氏最近三年間ノ統計ニ依レバ百十二例ノ頸部癌中七十一名ヲ手術シ、手術能率

六三%、直接死亡二二・五%、三年後ニ至リ再發セザルモノ二六%ナリト。

トームス、ウイリソン Thomas Wilson (Birmingham) 氏ハ九十八名中三十二名ヲ手術シ手術能率三二・五%内九名死亡二八・%、五年後一〇%ノ全治ヲ見タリ。

高山博士教室ヨリノ報告(明治四十三年九月)

明治三十九年十一月ヨリ同四十二年十二月ニ至ル三年ニテケ月間ニ京都帝國大學婦人科外來患者總計七千三百二十人中子宮癌腫患者三三二名即チ罹病率ハ四・五%ナリ内根本的手術ヲ行ヒタル者一〇八名内四名ヲ除キ他ハ悉ク頸部ノ癌腫ナリシト、而シテ手術ニ因スル死亡數二三・一%ニ當リ二年後ウイリソン氏ノ治癒率ニヨルトキハ五五・五%ニ相當シワルドスタイン氏ニ從フトキハ三七%トナレリ大正七年八月二十日京都帝國大學岡林氏ノ報告ニテハ手術率八一・八ナリトス然レドモ未ダ之レニ對スル死亡率及ビ永久治癒率ノ報告ナシ

木下博士ノ教室ヨリノ報告(明治四十五年三月)

明治三十三年五月ヨリ同四十三年十二月ニ至ル十年七ヶ月間ニ於ケル東京帝國大學婦人科ニ收容セラレタル子宮癌腫患者四〇八人中三十名ノ外ハ盡ク頸部癌腫ナリシト(内腹式子宮全別出術三〇七、腔式三九)、而シテ手術ニ直接並ニ間接ニ起因セル死亡率ハ二五・五%ニ當レリ、ウイリソン氏ニヨル持續的治癒率ハ五六・三%ニシテワルドスタイン氏ニヨレバ三六%トナレリ

再發ハ一年以内ニ起ルモノ最モ多ク約半數ニ及ビ之ヨリ漸次再發比率ヲ減ゼリ
今淵博士教室ヨリ報告(大正二年七月)

明治四十一年ヨリ大正元年十一月ニ至ル五ヶ年間九州帝國大學婦人科教室ニ於テ手術ヲ行ヒタル子宮癌腫患者總數二二二名中腹式全別出術ヲ行ヒシ者百七十一回内死亡二五人即チ手術ニ直接並ニ間接ニ起因スル死亡率一四・六%ニ當レリ余ガ教室ニテハ子宮癌腫ニ根治的手術ヲ試ミタルモノ百名中完全ニ手術ヲ遂行シ得タルモノ五十四名即チ手術可能率ハ五四%ニシテ、術後死亡セシモノ十八名即チ總手術者ノ一八%ナリキ、而シテ術後經過ノ明カナリシモノ三十八名中二十三名ハ三年以上健康ヲ保持セリ、又五年以上ノ者十九名アリ、全治癒率ハ尙數年ノ經過ヲ見ルニアラザレバ知リ難キモノトス。以上示セルガ如ク現今ノ婦人科手術成績ハ子宮癌ニ對シテ未ダ良好ノ域ニ達シタリト言フヲ得ズ、然レドモ

卑見ヲ以テセバ恐ラク手術式ハ之レ以上ニ進歩スルコト難カルベク、要ハ只術者ノ熟練如何ニアルベシ、近來マッケンロート氏ニヨル腹膜外子宮摘出術發表セラレタルモ未ダ之ニ對スル經驗ナシ。

ウエルトハイム氏法ノ如キハ殆ンド理想ニ近キ術式ナリ、今後癌腫ニ對シ絕對的新療法ノ發見セラレザル限リ吾人ハ少ナクモ初期ニ診斷シ之ヲ手術ニ訴フルコトニ依リテ満足セザルベカラズ、然ラバ民間ニ癌腫ノ如何ニ恐ルベキ疾病ナルヤヲ知ラシメ、普通子宮癌病ナリトシテ之ヲ輕視シ醫ノ診察ヲ耻ヂ可惜時日ヲ費シ生命ヲ失フコトナカラシムベシ、又醫ヨリ初期癌腫ト診斷セラレタルトキハ速カニ専門醫ノ手術ヲ受クルコトニ猶豫ナカラシメ、又全科醫ハ癌腫ノ疑アラバ直チニ専門醫ニ送ルコトニ努力セバ手術成績ノ遙カニ好結果ヲ擧ゲ得ルコト疑ナシトス、然レドモ民間未ダ本病ニ對スル智識ニ乏シク生殖器疾病ノ診斷ヲ受クルヲ耻辱トシ苦痛激シキニ及ビ遂ニ耻ヲ忍ンデ醫ノ門ヲ叩クニ至ルモノ比々皆然リ、從テ時既ニ遅ク如何トモスベカラザル場合多シ、故ニ醫ハ可成的癌腫ノ初期診斷ニ力メ患者ニ癌腫ノ何タルヲ說キ患者自己ハ信ヲ醫ノ言ニ置キ俗間ノ浮説ヲ信ゼズ躊躇セズシテ専門醫ノ處置ヲ受ケンカ癌腫手術ニ對スル成績尙ホ見ルベキモノアルハ勿論ナルベキモ、民智低クシテ醫ノ命ニ從ハザルモノ多ク亦如何トモスベカラズ豈悲マザルベケンヤ。最近ニ至リクレーニヒ及ビデーデルライン氏ハ光線療法ヲ癌腫ニ應用シテ其效果見ルベキモノアリトノ報告ヲ公表シ且ツアショッフ氏ノ病理組織檢索ニヨリ癌細胞ノ破壊セラレルコトヲ證明セラルルニ至レリ(一九一三年)、然レドモ未ダ以テ癌ノ全治ヲ見タルニアラズ又再發ノ憂ナキニアラザルハ勿論ナルモ、最新療法ノ一トシテ見ルベキモノナレバ今爰ニ其概略ヲ說カント欲ス。

之ヨリ先キガウス氏ハ強力ノ深透レントゲン放線ヲ應用シテ筋腫ガ比較的短時ニ消退セルヲ證明シ、在來ノ光線療法ニ比シ其效果ノ著シキコトハ多數ノ學者ノ認ムル所トナレリ。

此際皮膚ノ損傷ヲ避ケ、成ルベク強力ノ放射線ヲ臟器ニ集注セシメンガ爲メ多數ノ場所ヨリ照射セシムベシ。

本法施行ノ際ハ豫メ三密迷ノ厚サヲ有スル「アルミニウム」ニテ皮膚ヲ覆ヒ以テ皮膚ノ損傷ヲ避ケ、然ル後直徑二〇センチメートルノ「レントゲン管球」ヲ用ヒ約二〇〇ボルトノ電流ヲ通ジ焦點距離ヲ一八仙迷トシキーンベック氏「クワンチメートル」ヲ以テ表面放射量ヲ二〇Xニ達セシメ一回ニ二十一箇所位ヨリ放射セシム、更ニ近來該X放線療法ニラヂウム及ビメソトリウム Mesothorium ヲ兼用シテ好成績ヲ得タル報告相踵デ表ハルルニ至レリ。

デーデルライン氏ハ子宮癌ニ「レントゲン線」五—一〇〇〇〇キルベック量並ニメソトリウムノ一萬乃至五萬耗瓦ヲ應用セシニ脆弱ナル癌組織ハ消失シ硬固ナル結締織之ニ代リ出血腐敗性分泌ハ消退シ全治癒ノ希望ヲ懷クニ至レリト、ブナム氏モ亦略ボ同様ノ成績ヲ得タリト云フ、アシヨッフ氏ハ深部ニ互リ癌細胞ノ破壊セラルルコトヲ證明セリ、クレーニヒ氏ハ癌腫ニ對スル光線療法トシテ次ノ結論ヲ下セリ。

皮膚表層ニ限レル線ノミナラズβγ線モ共ニ生物的ノ働キアリ殊ニγハ其働キ著シク且ツ健康組織ヲ害セズ。

癌腫ニアリテハ「レントゲン線」ハ中心直達部ニ於テノミ其働キ有スルモメソトリウムニアリテハ總テノ方向ニ均等ナリトシ且ツ亦メソトリウムモαβ兩線ハ之ヲ通過シ遮斷シ獨リγ線ノミヲ濾過セシムベシ、尙ホ治療ニ必要ナル量トシテハ八〇〇—一二〇〇ミリグラムナリトセリ。

上述セル如ク癌腫ハ其ノ初期ニ當リテ完全ナル手術的療法ヲ遂行スルニアラズンバ、恐ラク其ノ目的ヲ達シ得ザルモノト云フベシ、然レドモ既ニ非手術的療法ノ報告セラレタルモノ敢テ尠ナカラズ、是等ハ未ダ諸學者ノ確實ナル承認ヲ經ルニ至ラザルモ、今左ニ重要ナル二三ヲ摘録シ以テ諸士ノ參考ニ供セントス。

十二指腸ニハ癌腫甚ダ稀有ナリトノ解剖的所見ニ基キシャウ・マッケンデー Shave-Mackenzie 氏ハトリブシ

ン Trypsin ヲ使用セリ、又之ト期ヲ同ウシテペアード Beard 氏ハトリブシンハ普通健康組織ニ於ケル場合ト異リ癌組織ニ對シ特異ノ作用アルモノトナシ、之ヲ内用トシ或ハ皮下注射ヲ試ミ或ハ局所療法ニ使用セラレタリ、其後シヨウ Schanz 氏ノ實驗ニテハ癌組織ヨリ或ル一定距離ヲ隔テトリブシンヲ注入スル時ハ血液ニ抗トリブシン現ハルルモ癌自己ニハ何等ノ影響ヲ與ヘズ、之レニ反シ癌組織内ニ注入スルトキハ疼痛甚ダシト云フ、ワリス R. C. Wallis ハ七例ノ癌腫患者ニ約三ヶ月ニ亘リトリブシンヲ試ミタルモ何等ノ效ヲ認メ得ザリシト云フ、其他酵素或ハ「ホルモン」ノ試ミラレタルモノ左ノ如シ。

Amylopsin, Papayotin, Erepsin, Placental tryptic ferment

コリン Cholin ハハイデルベルクノウエルネル H. von 氏ニ依テ應用セラレタリ、氏ハコリン、ホーラド一%ノモノノ二—三ccヲ取り之ヲ二〇ccニ稀釋シ三—四週間毎日一回靜脈内ニ注射シ、次テ四—六週ノ間隔ヲ以テ反復シ其ノ間ラヂウム水ヲ以テ洗滌シ傍ラアルセニツクヲ内服セシメ之ニ由リ癌腫ノ消失セルモノ五例ヲ實驗セリト、然レドモ氏ハ之ヲ以テ未ダ完全治癒トハ見做サザリキ。

血清及ワクチン療法トシテドワイヤン Doyen 氏ハヘイン、モルガン Printz, Morgan 兩氏ニヨリ發見セラレタル Micrococcus neoformans ヲ馬ニ接種シ之レヨリ得タル抗毒血清ヲ使用セリ。

シユミード氏ノ血清及ワクチンハ一時所々ニ於テ使用セラレシガ Middelsex-hospital ニテハ效果ヲ認メザリシト云フ、余モ亦二、三ノ患者ニ試ミ一例ハ稍々反應ヲ見タルモ他ハ凡テ何等ノ影響ヲ見ザルヲ以テ之レヲ廢止セリ、近時佛國ニテハセレニウムヲ使用シ效果アリトノ報告アルモ、未ダ確定セラレタルニアラズ(シロカ-Silicium 錠トシテ Firma Bark, Stuttgart ヨリ販賣セラル)。

モーゼチヒ、モールホーフ Moseitz-Morphof 氏ハ二百倍位ノヒオクタニン液又ハメチール或ハ純アルコホル

ヲブラウーツ氏注射器ニヨリ癌組織内ニ注射シ、其ノ周圍ニ於ケル組織ノ萎縮ヲ促シ以テ出血ヲ減少セシメ得ベシト云ヘリ、其他腔部及ビ頸下部ノ癌腫ニアリテハ「レントゲン」ラチウム又ハ「フインゼン」光線等ヲ用ユルノ士アリ、又フルグラチオンヲ用キ或ハラチウムノ粉末ヲ腔部癌ノ組織内ニ注入シテ一定ノ效果ヲ見タルノ例アルモ、要スルニ吾人ハ未ダ十分ニ其ノ目的ヲ貫徹スル能ハズ未ダ五里霧中ノ裡ニアリ。

既述ノ方法一ツトシテ未ダ確實ナラズ、故ニ若シ手術シ得ザル場合ニアリテハ、吾人ハ對症療法ヲ以テ満足セザルベカラズ。

出血及ビ惡臭アル分泌物ニ對スル處置 癌腫ハ表面ヨリ持續的ニ壞疽ニ陥リ組織先ヅ破潰セラレ、次デ血管ニ及ボシ遂ニ出血ヲ來スモノナリ、此際新生組織ヲ除去スル時ハ比較的長時ニ亘リ止血ノ目的ヲ達シ得ルモノアリ。尙遺殘セル母組織ニ強キ腐蝕液ヲ使用スルトキハ結締組織ハ癩痕組織ノ收縮ニヨリ一時癌組織ノ發育ヲ防禦シ、出血次第ニ減少シ惡臭分泌物モ亦著シク減少シ患者ハ一時的食慾ノ増進及ビ榮養ノ恢復ヲ見ルモ、多クハ短時ニシテ再ビ出血及ビ分泌物増加シ榮養亦障害セラレ遂ニ鬼籍ニ入ルモノナリ。

燒灼法 繡花狀癌又ハ頸下部ニ増殖セル癌ニ對シ剪刀ヲ以テ除去シ得ベキ主要部分ヲ切除シ、球形燒灼器ニヨリ努メテ深部ヲ燒灼シテ癌腫性組織ヲ全ク破潰スルニアリ、若シ隆起ノ度僅微ナルカ或ハ崩壞既ニ進捗セル時ハ銳匙ヲ以テ充分搔爬シ烙鐵ヲ以テ出血面ヲ燒灼ス、烙鐵ヲ用フル際ハ流水冷却装置ヲ有セル子宮鏡ヲ用フベシ、燒灼セル面ハ組織破片ヲ全ク洗去シ、創面ヲ充分清拭乾燥セル後沃度仿讓又ハデルマトール或ハアイロールヲ撒布シ一日乃至二日間沃度仿讓ガ―ゼ―ヲ以テ固ク填塞スベシ。



圖三十七 第
水流冷却装置ヲ有セル子宮鏡

搔爬ハ暫時膿分泌ヲ防遏ス、若シ再ビ膿分泌ヲ始ムル時ハ二三日毎ニ沃度仿讓・デルマトール・單仁・之ニ同量ノ撒里矢兒酸ヲ加ヘタルモノヲ潰瘍面ニ撒布シ或ハ時々沃度丁幾ヲ塗布シ、又ハ増殖セル癌組織ヲ濃厚ナル石炭酸或ハ發煙硝酸ヲ以テ腐蝕シ若シクハ時々烙鐵ヲ以テ燒灼ス。

腐蝕法 一〇―三〇%格魯爾亞鉛ヲ綿花ニ濕ホシ之ヲ潰瘍面ニ十乃至十二時間放置スベシ、或ハ發煙硝酸ヲ以テ腐蝕スルモ可ナリ。

惡臭分泌物ヲ減少セシムル目的トシテ種々ノ洗滌藥アリ、就中最モ普通使用セラルルモノハ石炭酸水・アセト・シリゾフォルム・過酸化水素・過滿俺酸加里等ニシテ此中〇・五%過滿俺酸加里液最適當ナルモノノ如シ。

乾燥療法 フリッヂユ及クローバク氏ハ沃度フォルムニ單仁ヲ混ジタルモノヲ撒布シ更ニ木炭末ヲ混合スルコトアリト、然レドモ之レニ由テ惡臭ヲ除去シ難シ、又黑砂糖ヲ以テ腔内ヲ充填シ數時間ノ後ヲ洗滌シ、反復之レヲ施行セバ一時潰瘍面清潔トナリ從テ惡臭分泌物ヲ減少セシメ得ルコトアリ。

疼痛ノ療法 癌腫ノ一定度迄進行セル者ハ疼痛アリ、而シテ疼痛ハ漸次増強シ睡眠ヲ妨碍シ急ニ衰弱ヲ促ス者ナリ、此疼痛ハ甚ダ頑固ニシテ鎮靜ノ目的ヲ達スル事困難ナリ、鎮靜藥トシテハ最初ハ成ベク作用緩和ナルアンチピリン・アンチチルビン・ヒラミドン等ヲ處ス、然レドモ此等ハ次第ニ習慣性トナリ遂ニ奏效セザルニ至ル、ヘロインハ種々ノ藥劑中量モ有效ナル者ニシテ少量ニテ克ク其目的ヲ達シ得ルノミナラズ習慣性トナル事比較的少ナシ、バンドボン・ナルコボン・鹽酸モルヒネ等モ屢々使用セラル、特ニ鹽酸モルヒネハ成ベク末期ニ用ユルヲ可トス、又漢藥ニシテハフ草ト稱スル煎劑ヲ用ヒテ時ニ多少ノ一時的輕快ヲ見ルコトアリ。

亞砒酸ハ内服或ハ皮下注射トシテ用ユ、余ハ嘗テ子宮癌全剔出後ノ患者ニホウレル水ノ少量ヨリ始メ漸次増量シツツ約二ヶ月ニ亘リ隔日注射ヲ試ミシガ、其ノ效果ニ至リテハ之ヲ確定シ能ハザリキ、然レドモ曩ニ東

京醫科大學ニ於テハ腹膜癌腫ニ多量ノ亞硫酸療法ヲ行ヒテ漸次輕快シ、其後患者ハ數年ニ亘リ健康ヲ保持セリトノ例證アリ。

輸入血管ノ結紮 根治手術不能ノ患者ニ屢々施行セラルル手術的療法ニシテ、開腹後左右ノ卵巢動脈及ビ下腹動脈ヲ結紮スルノ法ナリ、京都醫科大學婦人科教室ヨリノ報告ニ依レバ該手術ヲ施セシ患者ニシテ克ク數年間健康ヲ保持セルモノアリト云フ、然レドモ余ガ從來ノ經驗ニヨレバ短時止血ノ目的ヲ達シ得タルモ幾許モナクシテ症狀再現セリ、殊ニ最近該手術後三週ヲ經タル者ニ再ビ開腹ヲ施セシニ、第一回ノ際ハ未ダ膀胱ニ於ケル癌著ノミナリシモノガ此際骨盤ノ大半浸潤ニヨリテ充實セルヲ實驗セリ、由是觀之癌腫自己ノ發育ハ瞬時モ防止シ能ハザルモノト云ベシ。

ラヂウム療法 クレーニヒ氏其效果ヲ唱道シ、ア・ヨッフ氏亦病理組織的検査ノ結果癌腫ニ一定ノ效果アルヲ立證セリ、然レドモ癌ノ永久治愈ニ對シテハ未ダ確報ナシ、英國ニ於テハラヂウムニヨル子宮癌ノ治愈率ハ僅カニ八%トナシ、佛國亦其ノ使用甚ダ盛ナリト雖モ左ノ記載ニヨリ推考セバ未ダ以テ手術的療法ノ右ニ出ヅルコト能ハザルナリ。

La radiothérapie n'a donné jusqu'ici dans le traitement du cancer utérin que des résultats incomplets et discutés. Quoique plus efficace, la radiumthérapie ne saurait être substituée, actuellement, au traitement chirurgical. 余ハ癌腫手術ヲ十分遂行シ得タルモノニ拔絲後ヨリ一五疋ノラヂウムヲ腔内ニ挿入シ、且ツ多量ノテルマトールヲ撒布シタル綿花ヲ以テ腔内單保トナシ、毎日一回交換シツツ一週間持續シ、若シ腔壁ノ異常ナキトキハ更ニ二百時間ヲ持續シ以テ一時療法ヲ中止セリ、テルマトールノ單保ヲ施シ置クトキハ、ラヂウムヲ一週間連用スルモ敢テ腔壁ノ障礙ヲ來スコトナシ、斯ノ如ク手術後一定時比較的少量ノラヂウムヲ用ヒテ後療法ヲ行

フニ至リテヨリ從來ニ比シ著シク再發率減少セリ、是レ余ガ實驗ノミナラズ、英佛諸學者モ亦同様ノ記載ヲナセリ、殊ニ扁平上皮癌ニ對シテ效果顯著ナルガ如シ。

余ハ完全ニ手術ヲ遂行シ得タル者七名及手術ノ不全ナル者八名都合十五名ニ就キ術後前記ノ方法ニヨリラヂウムヲ貼用セシニ内經過ノ不明ノ者二名、胃癌ニテ死亡セシ者一名、他二一名再發セシ者ヲ除キ残り十一名ハ長キハ六年多クハ三年以上再發ヲ見ズ其健康ヲ維持セリ、完全手術ニヨルモ二年以内ニ約半數ノ再發ヲ見ルノ割合ヨリ見ル時ハ其成績ハ甚佳良ニシテ術後ニ於ケラヂウム貼用ノ效價ヲ證明スルニ足ルベキ者ナラン。再發セル癌腫ニ對シテモラヂウム療法ハ時トシテ奏效シ局所ニ癥痕ヲ形成シ榮養ノ恢復ヲ見ル事アリ。

手術不能ノ癌腫ニ對シ該療法ノ結果如何ハ大ニ研究ヲ要スベキ問題ニシテ、余ガ現時使用シツツアル一〇〇疋ノ範圍ニテハ未ダ確言シ能ハザルモ多クハ一時的效果ヲ見ルニ過ギザルモノノ如シ、尙ホ余ノ調査ニヨレバ扁平上皮癌ニ對シテハ比較的著效アルモ、腺癌又ハ腺細胞癌ノ如キモノニアリテハ不成功ニ終ル場合尠ナカラズ、之レヲ要スルニ局所ハ漸次清潔トナリ分泌ハ減少又ハ消失シ癥痕ヲ形成シテ恰モ治癒ノ傾向ヲ示スモ、癌腫ノ種類ニヨリテハ局所ハ清潔ナルニ拘ラズ周圍ノ浸潤漸次増加シ一般症狀亦佳良ナラズ全身ノ衰弱ヲ來スコトアリ、斯カル際ニ若シ多量ヲ使用セント欲セバ須ラク十分ノ注意ヲ要スベク、寧ロ五〇疋以下ヲ成ベク連用セル方刺戟症狀ヲ見ザルモノトス、尙ホ此場合ニモ勿論テルマトール單保ヲ用ユルヲ良トス。手術可能ノ場合ニラヂウム療法ヲ行フノ可否ハ大ニ考慮ヲ要スベキ問題ナリ、余ハ從來ノ經驗ニ徴シ斯カル際ハ寧ロ手術的療法ヲ施スヲ以テ合理ナリト信ズルモノナリ。

然レドモ若シラヂウム療法ヲ試ミント欲セバ其ノ使用量及ビ時間トハ藥劑療法ト等シク術者ノ經驗ニ俟タザルベカラズ、多數ノ實驗ト長時ノ經過觀察ト且ツ組織的研究ト相俟テ始メテ此問題ヲ解決シ得レバナリ、故

ニ余ハ此等ノ諸點ニ就キ不斷ノ研究ヲ重ネツアルヲ以テ他日詳述スルノ期アラントス。

第二節 悪性脈絡膜上皮腫 (Chorionepithelioma malignum uteri.)

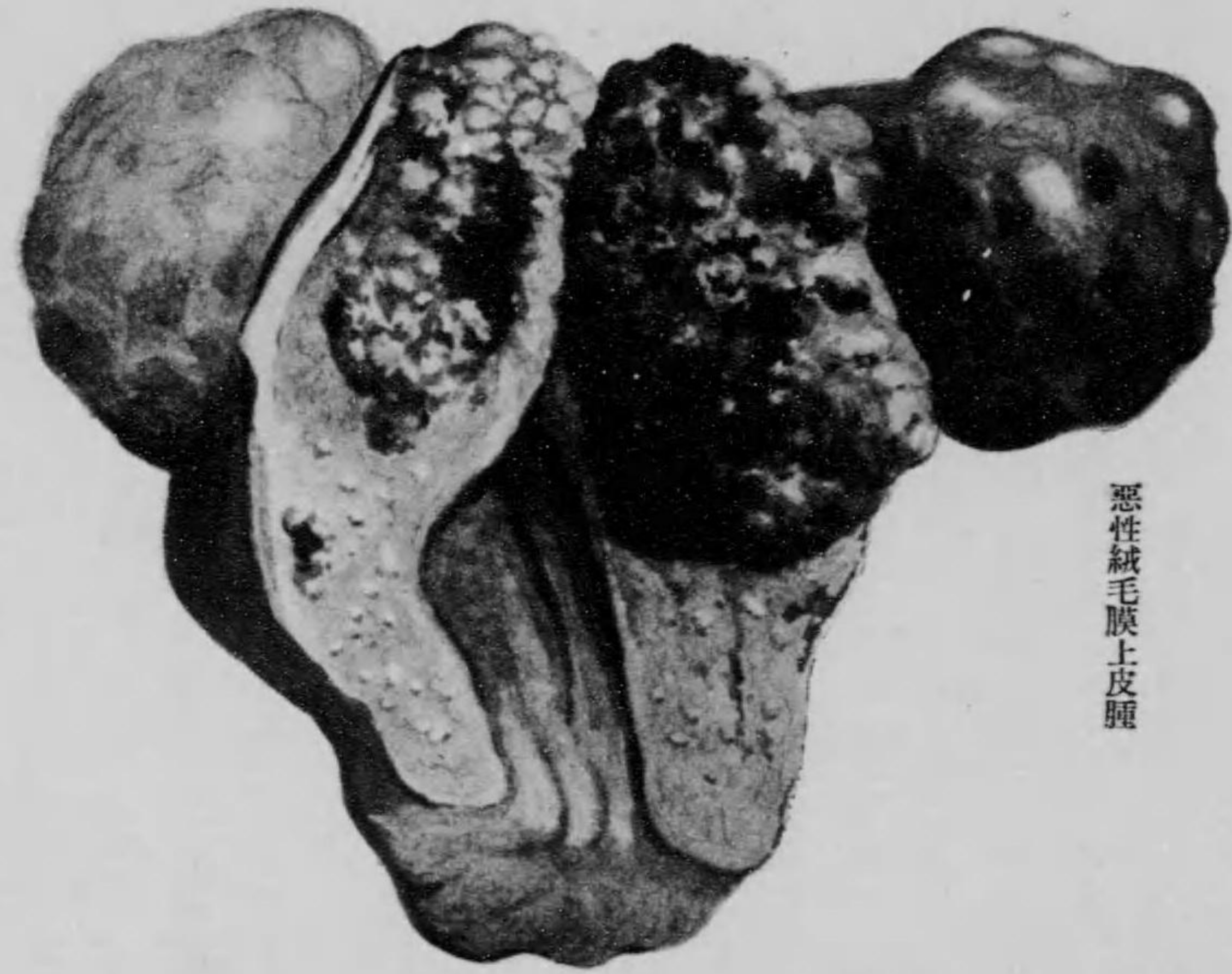
(Synctyoma malignum.)

肉眼の所見 悪性絨毛膜上皮腫ハ多クノ場合胎盤ノ附著部ヨリ發生シ子宮腔ニ向テ結節狀ノ腫瘍ヲナシ、或ハ扁平ノ廣キ基底ヲ以テ發育ス、通常抵抗ノ最モ少ナキ子宮腔ニ向テ増大スルモノナルモ亦圖ニ示スガ如ク筋層内ニモ侵入スルノ傾向アリ、其發生ノ初期ニアリテハ淺紅色ヲ帯ビ其質柔軟ナリ、稍々舊キモノハ褐色ヲ呈ス、出血ハ本腫瘍ニ特有ニシテ時々之ヲ反復スルヲ以テ所々ニ凝血アリ、而シテ出血ノ新ラシキ部分ハ赤色ヲ帯ビ稍々舊キハ黒褐色ヲ呈ス、腫瘍ト健康組織トノ境界ハ時ニ明乎タルモ亦不明ナルアリ、硬度ハ柔軟弱ニシテ時ニ大血管中ニ腫瘍ノ侵入セル部ヲ發見スルコトアリ。

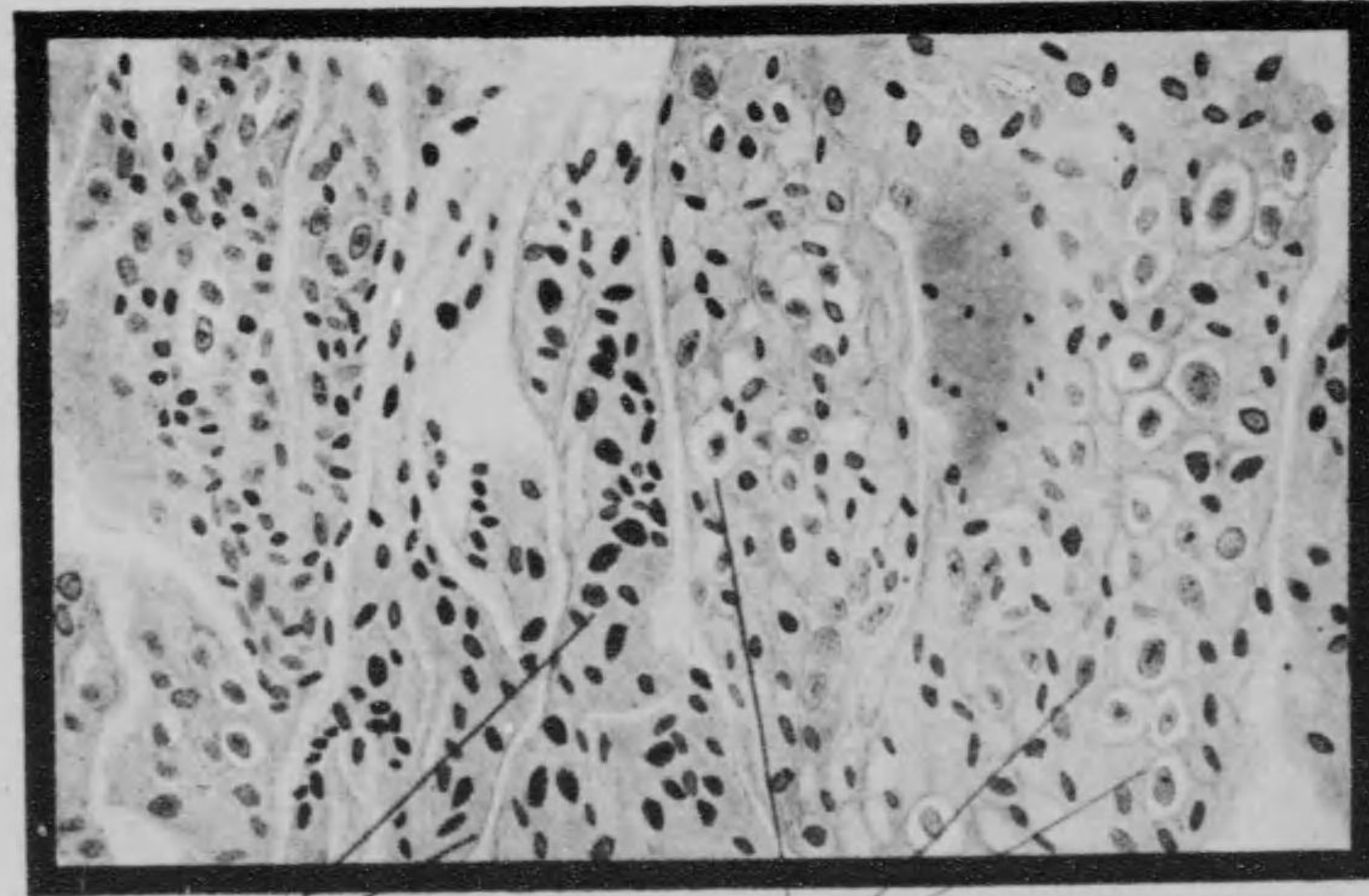
本腫瘍ハ筋層ヨリ更ニ進ンデ漿膜ヲ犯シ遂ニ子宮外膜ヲ破壊シ大出血ヲ來スコトアリ。
組織的所見 本腫瘍ハラングハンス氏細胞ト「チンチウム」塊トヨリ成リ絨毛ハ原發病竈及ビ轉移ノ場所ニ於テ時ニ之ヲ證明ス、然レドモ腫瘍ノ構成立ニ悪性ニ關シテハ特殊ノ意義ヲ有スルニアラズ、尙ホ精細ニ檢索スルトキハ腫瘍細胞ニヨリ血管ノ破壊セラレツツアルノ像ヲ發見シ得ベク、又腫瘍片ノ血管内ニ侵入スルヲ見ルモ之レガ爲メ血液ヲ凝固セシムルコトナク能ク流動性ヲ維持シ腫瘍片ハ其ノ中ニ浮遊ス、其他本腫瘍ハ血管竝ニ筋纖維ニ對シ破壊性ヲ有スルモノナリ。

ミノート *Minor*・ルーゲー *Ruge*・マルシヤン *Marchand*・アシホフ *Aschoff*ノ諸氏ハ腫瘍ノ構成ニ參與セルラングハン氏細胞及チンチウム核ハ本來單一ニシテ胎兒ノ外胚葉ヨリ發生スルモノナリト云ヒ、余ノ親友

表 七 十 二 第



悪性絨毛膜上皮腫



悪性絨毛膜上皮腫

胞細ムウチンヂ

胞細氏スンハグンラ

渡邊純一郎氏ハ近來ノ研究ニヨリ、チンチウムハ血管内皮細胞ナリトセリ、余ハ兩者孰レガ眞ナルヤヲ知ラザルモ、多數ノ場合數量上チンチウム塊ハラングハンス氏細胞ニ比シ勝レルヲ知ル、又ラングハンス氏細胞ハ大サ比較的大且ツ其境界明瞭ニシテ、核ハ著色著シク分裂亦明カニシテ原形質中ニハグリコーゲンノ多量ヲ含有ス、之レニ反シチンチウム塊ハ各細胞ノ境界不明ニシテ原形質ハ不正形ヲナシ、且ツ空胞ヲ有シ核ハクロマチンニ富ミ、直接分裂ヲナシ多數ノ核所々ニ散在ス、前述セル如ク血液ハ本腫瘍ノ構成ニ際シ必要缺クベカラザルガ如ク組織的検査上其ノ大部分ニ出血竈ヲ見ルモノナリ。

悪性脈絡膜上皮腫ハ絨毛ノ上皮タルラングハンス氏細胞 Langhans'sche Zelle 及チチンチウム Syncytium ノ異常増殖ニシテ卵ノ子宮内ニ附著スルコトヲ特有トシ、妊娠・流産・普通妊娠ニテモ何レモ一度妊娠經過ニ附帶シテ起ルモノナリ、殊ニ葡萄狀モトレノ經過後ニ最も多ク實驗ス、本腫瘍ハ卵自己ヨリ發生スルモノニアラズシテ絨毛上皮ヨリ起原スルモノナルヲ以テ卵ノ排出後子宮粘膜炎ニ子宮壁ニ遺殘セル絨毛上皮ヨリ起ルモノナリ、腫瘍ノ細胞ハ子宮内ノ靜脈管壁ヲ破壊シ血管内ヲ充實シ進ンデ先ヅ腔壁ニ轉移ス、尙ホ下大靜脈内ニ入り、之ヨリ肺ニ轉移シ更ニ腦・肝臟・脾臟等ニ轉移スルコト亦尠ナカラズ。

以上ハ普通屢々吾人ノ遭遇スル處ナレドモ、余ハ嘗テ葡萄狀鬼胎娩出後約一年ヲ經テ眼瞼結膜及ビ鼻粘膜炎ニ轉移セル興味アル一例ヲ實驗セリ、即チ左眼瞼ニ小鶏卵大ノ腫瘍ヲ生ジ鼻粘膜炎ニ於ケル轉移腫ハ漸次増大シテ鼻腔ヲ閉鎖シ、時々大出血ヲ伴ヒ遂ニ鼻翼ノ外面ニ表レ、次テ左肺ハ打診上一般ニ濁音ヲ呈シ呼吸音ヲ聽取シ能ハズ、右肺モ亦上葉ニ於テ等シク打診上ノ濁音及ビ呼吸音ヲ缺キ時々咯血ヲ伴ヒ遂ニ鬼籍ニ入レリ、之ヲ剖見セシニ左肺ハ全部腫瘍ノ犯ス所トナリ、右肺ノ上葉亦同一ノ所見ヲ示シ、子宮ニハ拇指大ノ腫瘍ノ存在ヲ證明セリ又鏡檢上子宮ニ於ケルモノハ悪性絨毛膜上皮腫ニシテ轉移腫瘍モ亦母腫瘍ト同様ノ所見ヲ呈セ

リ。

葡萄狀鬼胎トノ關係 クレーメル Krömer 氏ハ葡萄狀鬼胎ノ三三%ハ惡性絨毛膜上皮腫ニ變化スト云ヒ、

ヒュッティマン・クリストフオレチ Hirschmann, n. Cristofolini 氏ハ其ノ七・五%ニ該腫瘍ノ發生ヲ見タリト、

余ノ教室ニ於テハ五%以下ニ其發生ヲ證明セリ。

診斷 流産又ハ葡萄狀モーレノ娩出後或ハ稀レニ正規分娩後ニ來ル生殖器ノ大出血ハ其主要ナルモノナルガ故ニ、大出血ヲ見バ須ラク本腫瘍ニ疑ヲ置キ顯微鏡的検査ニヨリ其診斷ヲ確メザルベカラズ、然レドモ妊娠經過後ニ來ル彼ノ脱落膜性子宮内膜炎ニ於テモ其搔爬ニヨリテ得タル材料ノ鏡檢上ノ所見ハ本腫瘍ニ甚ダ酷似シ稍々モスレバ誤診スルコトアリ、殊ニ本腫瘍ノ搔爬ニテ治療ニ趣キシ報告例ノ如キハ多少疑ナキヲ得ズ、惡性脈絡膜上皮腫



圖四十七第

要スルニ脱落膜性内膜炎ニアリテハ、細胞ハ總テ退行狀態ニアルモ、本腫瘍ニ於テハ反對ニ細胞ハ無限増殖ノ狀態ヲ示シ屢々血管ヲ破壊シ血管内ニ侵入スルノ像ヲ發見スルモノナリ。

症候 臨牀上妊娠經過後ニ來ル不規則ノ大出血或ハ水様血液ノ分泌物アルトキハ疑ヲ本腫瘍ニ存シ周密ナル注意ヲ要ス、殊ニ分娩後ニ來タル咯血ハ屢々本腫瘍ノ肺轉移ナルコトヲ想起セザルベカラズ。

頸管ノ閉鎖セル場合ニハ局部ノ所見全ク陰性ニシテ子宮ノ硬度ハ柔軟ニシテ増大シ、卵ノ一部ノ殘遺セル狀態ト大差ナシ、頸管開大セル時ハ子宮腔内ニ柔軟ナル腫瘍ヲ構成シ子宮壁ト廣キ基底ヲ以テ或ハ息肉ノ狀態ヲ以テ結合セリ、其表面ハ平滑葉狀結節様ヲ呈シ海綿様ノ硬度ヲ有シ其質脆弱ニシテ屢々胎盤組織ノ殘遺ト思ハルコトアリ、故ニ顯微鏡下ニ胎盤組織ノ有無ヲ檢スルノ要アリ。腔ニ轉移スルトキハ容易ニ診斷シ得ルモノナリ、初メ粘膜炎下ニ「レンズ大乃至鶏卵大」ノ腫瘍ヲ構成シ紫色ニ透視セラル、若シ粘膜炎破潰セバ潰瘍ヲ構成ス。

本腫瘍ハ分娩ト關係ヲ有スルト雖モ而カモ分娩ト腫瘍發生トノ時期ニ非常ナル差違アルコトアリ、普通葡萄狀モーレノ娩出後數週又ハ數月後ニ發生ヲ見ルモノナレドモ、時ニ數年後即チ九年ヲ經テ發生セル例アリ。療法 可及的初期ニ全摘出ヲ行フベシ、然レドモ多クハ再發ヲ免レズ且ツ亦不幸ノ轉移ヲ執ルコト尠ナカラズ、稀レニハ自然治癒ヲ營ムモノアリト云フ、又原發腫瘍ノ除去後肺轉移ノ治癒セシ例アリト。

第三節 子宮肉腫 Sarcoma uteri.

筋腫及ビ癌腫ハ屢々子宮ニ發生スルモノナルモ肉腫ニアリテハ其例稀レナリ、方今顯微鏡的検査ノ完全ナルニ至リシヨリ其發見セララルコト往時ニ比シテ稍々多クグスネル Gussen 氏ノ統計ニ徴スレバ尙ホ子宮癌腫四〇ニ對シテ肉腫一ノ比ヲ示シ、パスノー Passo 氏ハ子宮結締織性腫瘍一〇五例中肉腫五・七%ヲ實見シエックレル Eckler 氏ハ筋腫ノ肉腫變性ヲナスモノハ二%ナリトシ、フランク Franke 氏ハ三・六%ナリトセリ、ガウス Gaus 氏ハ摘出セル筋腫ノ四百五十例中二%ノ肉腫ヲ、クライン Klein 氏ハ四百九十一例中十三例即二・六%ヲ、マッケンロート Mackenrodt 氏ハ四%ヲ、ワルトハルド Waltheil 氏ハ二十例ノ筋腫中五回ヲ、ウエ

ルネル *Renner* 氏ハ七十八回ノ筋腫中九%ヲ、ブナム *Bunam* 氏ハ一〇%ヲ證明セリ、我國ニ於テ子宮肉腫ノ報告セラレタルモノヲ求ムレバ

- 一、後藤 暲 平氏(三十三年) 子宮ニ初發シタル圓形細胞肉腫一例
 - 二、河野 衛氏(三十四年) 子宮纖維肉腫ヲ腔内竝ニ腹式手術ニヨリテ摘出シ得タル一例
 - 三、田中苗太郎氏(三十六年) 子宮纖維肉腫ノ「デモンストラチオン」
 - 四、磐瀬 雄一氏(三十八年) 子宮肉腫ノ一例
 - 五、木下 正 中氏(四十一年) アチソン氏病ニ子宮肉腫ヲ併發セル一例
- 等ノ如シ

甫メテ子宮肉腫ニ就テ記載セルハウキルヒヨウ *Vickars* 氏ニシテ、氏ハ一八六〇年カルル、マイエル *Carl Ma-*
ty 氏ノ手術シタル「ボリー」状態子宮肉腫ニ就テ報告シ、翌一八六一年ロキタンスキ *Rockinsky* 氏ハ子宮筋腫ノ肉腫性變性ノ稀レナラザルコトヲ説ケリ、ウキルヒヨウ氏以前ニ於テモ今日子宮肉腫ノ名稱ヲ附セラル可キ腫瘍ニ對シレ *Velvet* 氏ハ纖維形成腫瘍 *fibroblastic tumor* トシテ記載セリ。

爾後ウキルヒヨウ氏ハ一八六四乃至六五年ニ自著腫瘍論ニ肉腫ニ就テノ詳細ナル説明ヲ公ニシ、續テ一八六七年グ、ワイト *G. Witt* 一八七〇年グ、セロウ *Gasserow* 一八七一年エーガール *Legar* 一八九〇年 *Trillon* 一八九九年グ、スネル *Gasser* 及ビゲブハルド *Gebhard* 氏等ニヨリテ盛ニ研究セラレ漸ク世人ノ注意ヲ喚起スルニ至レリ、肉腫ハ幼若ナル結締細胞ヨリ形成セラレタル腫瘍ニシテ結締細胞ト纖維トヨリ組成セラレ其質軟、管壁ノ不完全ナル血管ニ富ミ主ニ血管ヲ傳ハリテ轉移腫ヲ發生スル頗ル悪性ノモノナリ、子宮ニ於テハ粘膜炎及ビ子宮壁ヨリ發生ス、ウキルヒヨウ氏ハ前者ヲ粘膜炎 *Schleimhautsarkom* 後者ヲ子宮壁肉腫 *Wandungssarkom* ト云(ルモグ、セロウ氏ハ前者ヲ瀰漫性肉腫 *diffuse Sarkom* 後者ヲ纖維性肉腫 *Fibro-*

sarkom ト稱セリ、而シテ兩者發生ノ多寡ニ就キルンゲ *Kunze* 氏ハ粘膜炎肉腫ハ筋壁肉腫ニ比シ遙カニ屢々發生スト言ヒ、エム、ヘンケル *M. Henkel* 氏モ亦之ニ一致セルモ、ワイト *Witt* 氏ハ之ニ反シ筋壁肉腫ハ非常ニ多ク粘膜炎肉腫ノ三例ニ對シ實ニ二十七例ヲ見タリト云フ、又ビカン *Dyband* 氏ハ一七四ノ筋壁肉腫ニ對シ九七ノ限局性粘膜炎肉腫、五四ノ瀰漫性粘膜炎肉腫ヲ實驗シ、其他一般多數學者ノ認ムル所ハ粘膜炎肉腫ハ筋壁肉腫ニ比シ約一倍半ヲ算スルノ點ニ一致セリ。

頸管及ビ體部何レニ多ク發生スルヤニ就キ諸大家ノ研究ニヨレバ、ボッシュヤマン *Peschmann* 氏ハ五對一一、クルーケンベルグ *Krukenberg* 氏ハ一對一八、グ、スネル *Gasser* 氏ハ一對一八、ワイト *Witt* 氏ハ一對一九、フランク *Franke* 氏ハ二對一三、ノ比ニシテ何レモ頸管ヨリモ體部ノ多發ニ一致セリ、之ヲ要スルニ本症ノ最モ多キハ子宮體ノ粘膜炎肉腫ナリ。

本症ハ年齢ニ關セズ何レノ時期ニ於テモ發生ス、統計上粘膜炎肉腫ハ幼者ニ多クグ、スネル *Gasser* 氏ハ五歳以下ニ五例ノ粘膜炎肉腫ヲ見、クローバック *Klobuck* 氏ハ二十歳ノモノニ筋腫性肉腫ノ發生ヲ見タリ、然レドモ四十乃至六十歳就中五十歳前後ニ最モ多ク發生シ七十歳以上ニ於テハ稀レナリ、而シテ分娩ハ其發生ヲ媒介スルモノニアラズ、月經モ決シテ閉止セズシテ不規則ナル出血ヲ來タスモノナリ。

甲 子宮粘膜炎腫

瀰漫性 *diffuse Form* 及ヒ息肉樣 *polypose Form* ノ二者ニ區別ス、多クハ結節狀・葉狀或ハ乳嘴狀ヲ呈シ其他細莖アル結節ガ表面滑澤ナル手拳大ノ腫瘍トナリテ現ハルモノ尠シトセズ、概シテ其質軟ニシテ切割面ハ一樣ニ白色髓樣又ハ豚脂樣ヲ呈シ濕潤セリ、且ツ此新生物ハ生氣ナク癌腫ノ如ク破潰スルモ其破潰作用遲ク

殊ニ茸腫様粘膜炎ノ如キハ破壊ノ傾向少ナシ、然レドモ肉腫性茸腫摘出後ノ如キ場合ニハ其發育甚ダ速カニシテ、結締織ノ過多ナル時ニハ其質硬ク切割面ハ線狀ヲ呈シ時ニハ其内ニ軟化或ハ囊狀ノ間腔ヲ呈セルコトアリ、色ハ帶黃色ニシテ屢々出血セリ。

ヘルフ *Helf* 氏ハ子宮體粘膜炎ノ葡萄狀肉腫ヲ記載セシガ頸管ニ於テモ亦甚ダ稀レニ之ヲ見ルコトアリ、屢々茸腫狀ヲナシ腔内ニ下垂シ全ク葡萄狀鬼胎ノ如キ構造ヲ呈シ無數ノ小ナル茸腫様ノ増殖ヲ現ハシ水腫様ニ浸潤シテ柔軟トナリ基底ノ組織ヨリ容易ニ剝離ス、大ナルモノハ時トシテ全ク腔ヲ充填スルコトアリ、斯ノ如キ場合ニアリテハ其診斷容易ナリ、而シテ葡萄狀肉腫 *traubenförmiges Sarkom* ト命名セシハ實ニスビーゲル *Belg Spiegher*・フアンネンステール *Pymanstiel* 氏等ナリ。

頸管ニ於ケル原發性肉腫ハ多クハ粘膜炎ニ多發シ筋間質ヨリスルモノ殆ンド稀レナリ、之ニ比シ多キハ體粘膜炎肉腫ニシテ其原始ヲ粘膜炎若シク粘膜炎下ノ結締織ヨリ發シ茸腫狀或ハ瀰漫性ノ發育ヲナシ速カニ子宮腔ノ表面ニ擴延ス、又特ニ注意ス可キハ瀰漫性ノモノニシテ好ニ深部ヨリ發生シ表層ハ尙ホ良性ノ性質ヲ有セルモノ多シ、然レドモ徐々ニ筋層内ニ侵入シ初メ肥厚セル筋層モ終ニハ貫通セラレ腹膜ニ及ビテ腸管ト癒著シ一様ニ浸潤シ瘻管ヲ形成シ或ハ腹腔内ニ穿通シ時トシテハ骨盤結締織内ニ侵入増殖スルコトアリ、是等ハ極メテ稀レナルモ膀胱或ハ直腸ニ瘻管ヲ形成スルコトナシトセズ、又茸腫性腫瘍ハ遂ニ子宮腔ヲ充填スルニ至ル、茲ニ注意ヲ要スベキハ初メ良性ナルモノガ後ニハ中心ニ肉腫性變性ヲ起スコトアルノ點ナリ、斯ノ如キハ時トシテ惡性ノモノニアラズト誤診スルコトアルヲ以テ各茸腫ハ顯微的檢案ヲナサザル可カラズ。

子宮粘膜炎ノ肉腫ハ屢々間質性肉腫 *interstitielle Endometritis* ニ續發ス、初メ不明ノ刺戟間質結締織ニ加ハリ爲メニ組織ノ成形機亢盛シ遂ニ無制限ニ増殖スルモノニシテ組織學上身體他部ニ發スル肉腫ニ同ジク、多ク

ハ圓形細胞肉腫及ビ紡錘形細胞肉腫ニシテ屢々兩者混合ス、其他大細胞肉腫・小細胞肉腫ヲ發見スル事アリ、時トシテハ巨大細胞ヲ見ル、横紋筋纖維竝ニ瘤子様軟骨ハ原發性頸部粘膜炎肉腫ニ認ムルコト多シ (*Chondrosarkom*)。

肉腫ハ時ニ癌腫ニ移行スルコトアリ殊ニ閉經期ニ多シ之ヲ癌腫性肉腫 *Karzinom* ト云フ、又頸部ノ粘膜炎肉腫ニ癌腫ノ合併セル者ハ唯アマン *Amann* 氏ガ子宮頸管ノ肉腫性膠様腺瘤 *Adenocarcinoma gelatinosum Sarcomatodes Cervicis uteri* トシテ記載セル一例アルノミ、ゴットシャルク *Gottschalk* 氏ノ記載セシ絨毛肉腫 *Sarcomachori* ハ若キ婦人ニ於テ妊娠及ビ殊ニ屢々葡萄狀鬼胎ノ際ニ起ルト言フモ、フォン・マルシヤン *Von Marschan*、ロスマン *Rosmann* 氏等ノ最近ニ於ケル檢査ニヨレバ却テ *Carcinoma Syncyti* ト稱ス可キ者ニシテ絨毛上皮ノ癌腫變性ヲ呈セルモノナリト。

主症狀ハ出血及ビ水様血性帶下ナリ、若シ腫瘍ノ浸潤増殖シテ小骨盤ニ存スル神經幹ヲ壓迫スルカ或ハ之ヲ破壊スル時ハ疼痛ヲ來タス、故ニ疼痛ハ多クノ場合比較の末期ニ表ハルル者ニシテ初メハ陣痛様ナルモ後ニハ持続性トナル、又一般狀態ハ比較の遅ク犯カサレ羸瘦ノ如キハ末期ノ徵ナリ、故ニ一般營養狀態ハ初期ニ於ケル本腫瘍ノ診斷上大ナル價値無シト雖モ遂ニハ惡液質ヲ呈スルニ至ル、之ニ反シ水様血性帶下ハ多クノ例ニ於テ甚ダ價値アル者ナリ、腐蝕作用ハ癌腫ノ如ク甚シカラズ且ツ稀レナリ、從テ帶下ハ癌ノ如キ刺戟臭ヲ有セズ。

其他時トシテハ肉腫塊ノ爲メニ頸管閉鎖セラレ子宮内經血蓄積 *Haematometra* 及ビ子宮内蓄膿 *Pyometra* ヲ起スコトアリ、又腫瘍塊ガ頸管ヲ通ジテ出ヅル際トシテ子宮内膿ヲ來タスコトアリ。

診斷 臨牀上ニ於テハ本腫瘍ヲ確診シ得ル場合甚ダ少ナク其多クハ唯惡性腫瘍ヲ想像セシムルニ過ギス、肉

腫及ビ癌腫ハ症候的ニ區別スルコト實ニ困難ニシテ觸診上組織ノ破碎シ易キコト而カモ癌腫ノ如ク硬ナラザルコトニ注意スベシ、頸管ニ於テハ屢々開大シ指ヲ以テ直接ニ肉腫性結節ヲ觸レ其一部ヲ破碎シ、或ハ軟ナル腫樣ノ瀰漫性肉腫ヲ觸知スルヲ得バ其診斷稍々確實ナルモ多クノ場合顯微鏡的検査ヲ行ハザルベカラズ。

鑑別 鏡檢上肉腫性變性ヲ呈セルモノモ初期ニ於テハ腺管ノ存スルヲ以テ間質性内膜炎 interstitial Endometritis ト誤診スルコトアリ、チエ、ルーゲ C. Ruge 氏ノ明言セル如ク兩者ノ鑑別ハ時トシテ甚ダ困難ニシテ組織學的検査ヲ行フモ尙ホ一定期間其經過ニ就テ臨牀的觀察ヲ要スルコトアリ、間質性内膜炎ト鑑別ヲ要スル者ハ圓形細胞肉腫ニシテ此者ハ肉腫中發育最モ速カニ且ツ轉移性最モ著シク極メテ悪性ノ者ナリ、此場合ニ於テハ子宮腔ヲ擴大シ觸診スベシ、其他顯微鏡下ニ於テハ細胞稠生シ細胞ニ必ズ多少ノ細胞纖維ヲ存シ細胞ハ其大サ及ビ形狀甚ダ不正ナリ、又多數ノ核分裂像アリ、腺管ハ排斥セラレ、廣キ區域ニ於テ殆ンド發見シ得ザルニ至リ、全視野肉腫性變性ヲ呈シ筋壁ニ對スル境界ニハ圓形細胞ノ滲潤アリ。

圓形細胞肉腫ハ圓形細胞、滲潤ト誤マルコト無キニアラザルモ後者ハ細胞窳狀ヲ呈シ大小形狀殆ンド同一ナリ又小圓形細胞肉腫ト普通ノ間質組織トノ鑑別困難ナルコトアリ、是レ細胞ノ大サ殆ンド同一ナレバナリ、然レドモ各細胞ハ多形ヲ呈シ其他肉腫組織ノ中央ニ於テ管壁不完全ナル營養血管ノ經過又ハ各細胞ノ種々ナル著色性ノ差異ニヨル斑紋様ノ外觀トニヨリ普通間質ヨリ區別スルヲ得ベシ。

流産後ノ遺殘物ニヨリ不規則ナル出血持續シ臨牀上ヨリ惡性腫瘍ト誤マルコトアリ、又鏡檢上ニ於テモ殊ニ大圓形細胞肉腫ト誤マルコトアリ、然レドモ流産ノ際ニ於テハ絨毛上皮細胞・オービッツ氏ノ妊娠腺・腺管ハ増殖シ高度ニ擴大シ縱斷面ニ於テハ鋸齒狀ヲ、橫斷面ニ於テハ星芒狀ヲ呈シ且ツ脱落膜細胞存在セリ、肉腫細胞ハ其形狀及ビ核ノ不規則ナルニヨリ脱落膜細胞ヨリ區別ス。

又結核性内膜炎 Endometritis tuberculosa ヲ巨大細胞肉腫ト誤マルコトアリ、サレド前者ハ結核病竈ノ中央ニ於テ邊緣ニ多數ノ核ヲ有スル巨大細胞アリ、後者ハ反之細胞ノ中央ニ多數ノ胞核集合セル巨大細胞アリ、之ニ由リテ兩者ヲ區別ス。

癌腫及ビ肉腫ハ臨牀上區別困難ナルノミナラズ鏡檢上亦常ニ容易ナラザルコトアリテ唯單ニ惡性腫瘍ノ診斷ニ止マルコトアリ、而シテ惡性ナルコトハ普通組織ニ比シ大ナル不齊形狀ヲ呈スル細胞、不定型ノ核分裂像ヲ呈スルニヨリ之ヲ知り得ベク、其他肉腫ニ於テハ粘膜長時其上ヲ蔽ヒ腫瘍ノ甚ダ廣ク進ミタル時ニ潰瘍ヲ形成スルモノニシテ此點ハ癌腫ニ對スル鑑別診斷ニ利用スルコトヲ得ベシ。

其他頸管粘膜ヨリ生ズル葡萄狀肉腫ト葡萄狀モトレト誤ルコトナキニアラズ、葡萄狀肉腫ニ於テハ月經閉止スルコトナク却テ不規則ナル出血アリ、且ツ多量ノ水樣血性ノ帶下アリ、軟ニシテ容易ニ破壊スルモノ多ク子宮鏡ニテ肉腫上區別スルコト難カラズ、時トシテ横紋筋竝ニ硝子樣軟骨ヲ認ムルコトアリ、極メテ惡性ノ葡萄狀肉腫ハ二三歳ノ小兒ニ又高年者ニモ發生スルコトアリ。

之ニ要スルニ子宮肉腫ノ診斷ハ非常ニ困難ニシテ正確ニ決定シ難キコトアリ、是レ臨牀上一ツノ確徵ヲモ有セザルニ因ル、然レドモ高度ノ變化ヲ有セルニ於テハ惡性腫瘍ノ形成アルコトヲ診斷スルコト敢テ難カラズ水樣竝ニ血性水樣ノ分泌物アル時ニハ多クハ肉腫ニ疑ヲ置クモ其判定ハ臨牀的症狀竝ニ鏡檢的所見ヲ綜合シテ十分ナル注意ヲナスニアラズンバ誤診ニ陥ルコトアリ。

經過 グスネル氏ニヨルニ本症ノ持續ハ二―三年ナリ、然レドモ茸腫性ノモノハ一般ニ徐々ニ發育シ經過久シキニ互ル。

死因ハ惡液質竝ニ新生物ノ侵蝕ニヨレル敗血性穿孔性腹膜炎・腎臟炎・吐衄症及ビ轉移等ナリ、轉移ハ多クハ

肺腫ニ來リ呼吸困難・チアノーゼヲ來タシ或ハ腹膜ニ肉腫性ノ増殖ヲナシ爲メニ腹水ヲ來スコトアリ、其他腰腺ノ侵サルルコトアリ。

豫後 不良ナリ。

療法 合理的處置トシテ可及的速カニ子宮全摘出ヲ行フベシ、然レドモ之ニ由テ幾何ノ生命ヲ延長セシメ得ルカ或ハ治療セシメ得ルカノ問題ニ至リテハ之ニ關スル材料少ナキヲ以テ確實ナル判定ヲ下ス能ハズ。

出血ハ頸管癌腫ニ於ケルガ如ク初期ニ起ルガ故ニ、患者ハ屢々初期ニ増殖尙ホ未ダ擴延セザル時既ニ醫治ヲ受クルモノ多キヲ以テ手術後ノ治療ハ頸管癌腫ニ比シ好果ヲ得ルコトアリ、既ニ轉移セルモノハ癌腫ニ於ケルガ如ク單ニ對症的療法ノ一アルノミ。

乙 子宮壁ノ肉腫

子宮筋層ノ組織ヨリ生ズル肉腫ハ粘膜肉腫ニ比シ稀レナリ、或ルモノハ此處ニ原發シ或ルモノハ筋腫ノ惡性變性ニヨリテ生ズ、ヘンケル Hénkel 氏ニヨレバ變性ヲ來タスハ筋腫ノ一乃至三%ニシテ四%ヲ越ヘズト云フ、變性ノ理由ニ就テハ或ハ之ヲ榮養障礙ニ歸スル人アルモ未ダ明ラカナラズ、筋腫ノ肉腫變性ハ間質結締組織ニ筋細胞自己モ亦關係スル者ナラン、臨牀的ニハ殊ニ經期ノ婦人ニ於ケル筋腫ノ急ニ發育セル場合、筋腫除去ノ後直チニ再發セル時若シハ筋腫ノ發育増大甚ダ急速ナル場合ニ於テハ本腫瘍ニ疑ヲ存スベシ、變性ハ屢々筋腫ノ中央ニ始マルモノナリ、斯ノ如キ場合ニ於テハ髓様ノ外觀ニヨリ時トシテハ既ニ肉眼的ニ筋腫ノ變性ヲ認ムルコトアリ、子宮壁肉腫ハ粘膜下ニ生ジ茸腫狀ヲ呈スルコト稀レナラズ、又漿液膜下及ビ實質間ニモ存在シ其質柔軟、剖面ハ無組織ニシテ濕潤光澤アリ、時トシテ著シク子宮腔ニ發育シ腔内ニ達スルトアリ、然レドモ頸管肉腫ノ如ク破壊性ナラズ且ツ長時高度ノ出血ヲ缺キ只帶赤色ノ帶下ヲ出スニ止マル、

肉腫ハ癌腫ト合併スルコト屢々之アリ、此際ニハ癌腫性ノ腺周圍ニ肉腫變性ヲ呈セル結締組織アリ、又新生セル惡性細胞ノ血管外膜周圍ニ排列セルヲ認ムルコトアリ、而シテ之ガ爲メニ榮養ノ障礙ヲ來タシ到處高度ノ硝子樣變性ヲ惹起セシメ、或ハ此腫瘍細胞殊ニ血管外層ノ部位ニ近ク存セル際ニハ血管外層ハ腫瘍發生ノ起點ト認メラル、其他淋巴管外層ヨリ發スルコトアリ。

症狀 筋腫ニ類似ス、筋腫ノ肉腫性變性ヲナセルモノハ甚ダ高度ノ増殖ヲナシ殊ニ閉經期後ニ於テ著明ナリ、此際ニハ再ビ出血シ腫瘍ハ弾力性ニ緊張シ、隣部臟器ノ壓迫・腹水等現ハル、其他破壞作用及ビ惡液質ヲ來タシ粘膜下ニ來タル壁肉腫ハ容易ニ破壊シ屢々新生物ノ大ナル組織片ノ排出セラルルコトアリ、筋壁肉腫ハ比較的良性ニシテ崩壊スルコト少ナキヲ以テ腐敗ヲ起サズ且ツ筋腫ニ存スル被囊ニヨリテ圍繞セラレ轉移ヲ起スコト緩徐ナリ、然レドモ勿論例外アリ、即チ筋壁肉腫ハ摘出スルモ好ンデ再發ス、晚發性ノ轉移ハ殊ニ肺臟及ビ肝臟ニ於テ見ルコト多シ。

診斷 出血・帶下・子宮體ノ肥大等ニ加フルニ貧血ヲ呈スルコトアラバ惡性腫瘍ナルコトヲ推知シ得可シ、筋腫ノ肉腫變性ハ觸診ノミニテハ満足ナル診斷ヲ得ルコト難シ、唯其變性ノ徵トシテ腫瘍ノ急激ナル増大發育・出血性帶下・惡液質・利尿困難等總テ嫌惡ナル症狀ニヨリ總カニ之ヲ推測シ得ルノミ確實ナル診斷ハ顯微鏡檢査ノ結果ニ依ラザルベカラズ、然レドモ紡錘形細胞肉腫ト滑平筋腫トハ其區別甚ダ困難ニシテ屢々確定シ難キモノアリ又癌腫トノ區別困難ナル場合少ナシトセズ。

滑平筋細胞ハ長桿狀ノ核ヲ有シ細胞ハ長紡錘形ヲ呈スルモ、肉腫ニ於テハ細胞並ニ細胞核ハ前者ニ比シテ短ク且ツ肥大ス、盛ニ核分裂ヲ呈シ其他細胞ノ形狀大小甚ダ不同ニシテ惡性腫瘍ノ徵候ヲ認ム、斯ノ如キ固有ノ筋壁肉腫ノ他ニ又常ニ筋組織間ニ肉腫性ノ圓形細胞浸潤アリテ圓形細胞肉腫ノ狀ヲ呈シ稀レニハ銳角周圍

ノ筋組織ヨリ限局セルコトアリ、一般ニ紡錘形細胞肉腫ハ發育稍々緩慢ニシテ甚ダ悪性ナラズ、要スルニ癌腫・肉腫ノ區別ハ元來其發生ノ起點ヲ異ニセルヲ以テ其區別容易ナルガ如キモ時ニ誤診スルコトアリ、肉腫ニ於テハ健康組織ニハ徐々ニ移行シ、銳キ境界無ク殊ニ筋壁肉腫ニ於テハ之ノ移行著明ナリ、然レドモ癌腫ニ於テハ初期ニ於テモ到ル所、結締織性組織ニヨリ圍繞セララル、癌胞巢或ハ腺ノ境界著明ナルヲ見ル。

豫後 著シキ變性ヲ呈セルモノニアリテハ手術スルモ其豫後疑ハシ是レ再發スルコトアルガ故ナリ。

療法 筋腫ニシテ肉腫性變性ノ疑ヒアルトキハ之ヲ摘出セザル可ラズ、筋腫性子宮ノ一部ニ肉腫性變性アルモノハ筋腫ト同様ナル手術ヲ行フ、又腫瘍ノ全部若シクハ其大部分肉腫狀トナルトキハ腫瘍ハ容易ニ破壊スルヲ以テ手術困難ナリ、軟ナル腫瘍ニシテ大血管ニ富メルモノハ患婦ハ手術臺上ニ於テ大出血ヲ來タスコトアリ。

余ハ當科藤村助教論ニヨリテ報告セラレタル一編ヲ抄録シ以テ子宮肉腫診斷ノ參考ニ資スル所アラントス。

實驗例

(一) 大阪市〇區〇〇橋筋〇丁目 電氣販業妻某 四十九年
 血族 遺傳ノ證明ス可キ無シ
 幼時ノ狀況及ビ他病ノ特記ス可キモノ無シ
 月經 初潮十六年二月、最近四十三年六月二十日
 最終分娩後本年六月迄ハ正調ニシテ三日間持續ス、量少量、月經中自覺的障礙無シ
 帶下ハ今日迄極メテ少量ナリキ
 結婚 十四年九月
 分娩及ビ産褥 分娩七回、最終分娩三十六歳

表 八 十 二 第



子宮肉腫
 ヘマトキシリン、エオジン染色
 ライツ氏顯微鏡
 接眼レンズ6



子宮肉腫
 ヘマトキシリン、エオジン染色
 ツアイス氏顯微鏡、石油浸液置
 接眼レンズ2

分娩ハ毎回異常ナク産褥ノ経過亦極メテ佳良ナリ一男一女健存シ三男二女夭折ス

主訴及ビ現病歴、昨年七月十日排便ノ際認ム可キ原因ナク突然稍々多量ノ子宮出血ヲ來タセリ、其後出血ハ止ミシモ頭痛・胸内苦悶・心悸亢進ヲ覺ヘ尙ホ胃部停滯ノ感アリ、時々嘔吐ス、食慾ナキニアラザルモ惡氣アルヲ以テ食ヲ好マズ

七月十日以後全ク子宮出血無カリシモ十二月下旬ヨリ時々少量ノ子宮出血起レリ、一月十四日午前十時頃急ニ不快ノ感ヲ覺ユルト同時ニ非常ニ烈シキ陣痛様ノ下腹痛ヲ以テ高度ノ子宮出血ヲ起シ遂ニ人事不省ニ陥リ午後四時頃漸ク人事ヲ辨ズルニ至レリ、其後再び斯ノ如キ大出血無キモ中等量ノ持續性子宮出血アリ且ツ汚穢時黑色不快ナル臭氣ヲ帶ブル稍々多量ノ子宮分泌物アリ醫治ヲ受クルモ止血セズ漸次貧血羸瘦衰弱スルヲ以テ二月一日來院診察ヲ乞ヘリ

大便ハ便秘、五六日目ニ一回位ノミ、サレド便中一ノ寄生蟲卵ヲ認メズ

排尿ニハ自覺的障礙ナク尿ニハ他覺的検査ニ異常ナシ

現症ハ體格中等・栄養稍々不良・皮膚蒼白貧血ヲ呈ス、脈細小頻數九十至正調僅カニ舌苔アリ口腔・咽頭著變ナシ乳房ハ萎縮シ乳嘴乳暈ノ著色・胸部靜脈ノ怒張ヲ認メズ

心臓濁音界變化ナク心悸亢進・肺動脈第二音ノ旺盛ヲ認ム

兩肺炎及ビ兩肺背面ノ上部呼吸延長ス水泡音ヲ聽カズ右肺背面下部打診上僅カニ抵抗アリ呼吸音微弱ナリ

腹部ハ少シク膨脹シ腹壁弛緩シ腹壁ヲ認ム、胃部僅カニ膨滿シ鼓音ヲ呈ス、銳利ナル肝臟ノ下緣僅カニ觸知ス、脾臟ヲ觸レズ、兩側腎臟部壓痛ナク、兩腸管高及ビ恥骨上部變化ナク、腫物ヲ觸レズ壓痛ナシ、下肢浮腫・知覺異常・腓腸筋壓痛等ナク、膝蓋腱反射僅カニ亢進ス内診上ノ所見、子宮ハ前傾前屈ノ生理的位置ニアリ少シク腫大シ子宮内腔ノ長サ九仙迷、形狀少シク球形ヲ帶ブ、硬度稍々軟、壓痛甚ダシカラズ、ヨク移動ス、ヘガール氏症狀ヲ認メズ、子宮附屬器及ビ隣接臟器ノ炎術其他變化ナシ、子宮腔部ノ形狀大サハ通常ニシテ糜爛「ボリープ」等ナシ硬度軟ナラズ、腔部ニ著色ナシ、子宮外口約〇・五仙迷橫橢圓形ヲ呈ス、子宮腔ヨリ血性漿液性ノ稍々多量ナル分泌物アリ初メ既往症ニヨリテ今迄正調ナリシ月經ノ閉止及ビ陣痛様ノ疼痛ヲ以テ起ル子宮出血ニヨリ或ハ流産若シクハ子宮外妊娠ノ破裂ニ起因スルモノナランカト想像セシモ内外診上ノ所見ニヨリ妊娠ノ不確微・疑微乏シク経過一般狀態及ビ年齢ニヨリ察スルニ寧ロ子宮癌腫ノ如キ

第四節 子宮肉腫

五二六

モノナランカト思惟シ直チニ之ガ檢索ヲ試ミントセシモ患者ノ事情ニヨリ對症療法ヲ行フノ止ヲ得ザルニヨリ左ノ處方ニヨリ其後ノ経過ヲ觀察セリ

一、ステプチン錠 四個

右朝夕二個ツツ食前一時間服用

二、麥角浸(五・〇)一〇〇・〇

右一日五回分服

此他エルゴチン〇・五、鹽化アドレナリン溶液一・〇ヲ數回反復注射セシモ寸效無ク斯ノ如クシテ一週間治療ヲ加ヘシモ依然出血スルヲ以テ患者遂ニ入院シ試驗的搔爬ヲ行ヒ鏡檢上惡性腫瘍ニ因スル出血ナルヲ確定セシヲ以テ九日遂ニ腔式子宮摘出ヲ行ヘリ

子宮全摘出後出血全ク止ミ術後ノ経過極メテ佳良ニシテ榮養モ漸次快復シ三月二十三日全治退院スルニ至レリ

子宮肉腫上ノ變化ハ子宮體部僅カニ腫大シ約小莖形ヲ帶フ蒼白色ニシテ壁頗ル脆ク爲メニ摘出甚ダ困難ナリキ、子宮粘膜炎一般ニ肥厚増殖シ厚サ約四ミリメートルヲ算ス、子宮底及ビ之ニ近ク前壁ノ粘膜炎ヨリ腐キ穿ツ有スル約拇指頭大、暗赤褐色極メテ破碎シ易キ二個ノ「ボリープ」狀物質ノ子宮腔ヲ充填スルヲ見ル、頸管及ビ腔部ニハ特記スベキ變化ヲ認メズ

顯微鏡的所見 該子宮ヨリ「ボリープ」狀物質、子宮體及ビ頸部ノ子宮粘膜炎ニ子宮壁ヨリ數個ノ小片ヲ採取シアルコホル硬化、チエロイヂン包埋、「ミクロン」ノ切片ヲ作りヘマトキシリン・エオジン染色、ヘマトキシリン・ワンギーソン氏染色、メチルグリーン・ピロニン(Cauché's Fast Violet)染色、ボリクローム・メチレンブラウ染色等ヲ行ヒ之ヲ檢査セシニ次記ノ如キ結果ヲ得タリ

一、ボリープ狀物

子宮粘膜炎著シク肥厚シ腺管ニ乏シク且ツ腺ノ擴大(Crossenmann's 蛇行 Schlegel's 腺壁ノ鋸齒狀 Antralung 或ハ膠出 Antraktion 等ヲ呈スルモノ殆ンドナク腺腔ハ中央ニ近ク好熱性ノ核ヲ有スル一層ニ排列セル低キ圓錐狀ノ上皮細胞ヲ以テ掩ハル、之ニ反シ間質細胞ハ極メテ高度ノ變化ヲ呈ス即チ其形狀、大小甚ダ不齊ニシテ或ルモノハ圓形細胞ニ近ク或ルモノハ紡錘狀ヲ呈シ且ツ諸處ニ散在シテ一個ノ核ヲ有スル極メテ大ナル多型ノ細胞アリ、又稀レナルモ中央ニ多數ノ核ヲ有スル所謂巨大細胞ヲモ認ム、其他核分裂ヲ呈セル細胞アリ各細胞間ニハ大ナル結締組織存在ス、尙ホ管壁不完全ナル構造ヲ有スル稍々多數ノ血管ヲ認ム、表面ヲ蔽ヘル上皮ノ大部ハ既ニ剝脱シ表面ニ近ク散在性ニ多數ノ出血斑ヲ認ム、尙ホ一部分ニハ硝子樣變性ヲ呈セルヲ見ル、プラスマ細胞ハ之ヲ發見セズ、此部分ハ殆ンド前記ノ如キ變化ヲ呈シ只ダ僅カニ一部分ニ於テ普通ノ間質組織ヲ見ルノミ

二、子宮體部筋層

平滑筋細胞ハ稍々長キ桿狀ノ核ヲ有スル長紡錘形細胞ニシテ認ムベキ變化ヲ呈セズ、特ニ注意ヲ要スルハ筋層内ニ於テ擴大セル出血斑ノ散在及ビ腺管ノ潜在ニシテ恰モ Atonomyum ノ如キ觀ヲ呈シ「マスト」細胞多數存在ス

三、子宮體部粘膜炎(ボリープ以外ノ部ニ於ケル)

粘膜炎ノ一部ハ著シク萎縮シ腺管ハ表面ニ對シテ稍々斜メニ走り萎縮シテ内腔狹ク、間質細胞ハ長紡錘形ヲ呈シ萎縮性・老人性子宮内膜炎ノ觀ヲ呈ス、他ノ一部ハ粘膜炎厚スルモ一般ニ腺管ニ乏シ、反之間質組織ハ著シク増殖シ其細胞ノ形狀大小極メテ不齊ニシテ諸處ニ散在性ノ出血斑ヲ認ム

四、子宮頸部

粘膜炎及ビ筋層共ニ特記スベキ變化ヲ認メズ

診斷 子宮體粘膜炎、圓形細胞肉腫

一部ハ紡錘形細胞肉腫、一部ハ大細胞肉腫

終リニ臨ミ本腫瘍ノ診斷ニ對シ佐多博士ノ懇篤ナル示教ヲ謹謝ス

(一服〇チ〇 五十九歲

初經 十六年、最終月經明治四十四年ノ春、初經ヨリ爾後月經正調持續三日乃至四日

婚嫁 十八年三ヶ月

分娩 三回、分娩產褥ニ異常ナシ

主訴 明治四十四年十月ヨリ少時ノ間歇ヲ以テ子宮出血反復セリ然レドモ自覺的症狀著シカラズ食氣普通、尿及ビ便通ニ異常ナシ

現症 體格營養中等・顔面蒼白・貧血高度・乳房ノ發育ハ佳且ツ懸垂ス、脈搏小ニシテ頻數、心音不純ナルノ外脚脈等ニ異常ヲ認メズ、腹壁脂肪多ク僅カニ緊張ス、腹腔ニ腫瘍ヲ觸知セズ、内診上子宮腔部ハ既ニ破壊セラレドウグラス氏高ニ於テ浸潤アルヲ認メタリ、子宮體ハ前屈肥大セリ

附屬器ニハ著變ナシ

臨牀上子宮腔部縮トシテ大正二年六月十日全摘出ヲナセリ

組織的検査ヲ行ヒシニ頸部粘膜炎ハ非常ナル肥厚ヲナシ頸管腺ハ之ヲ見出シ難ク間質ハ大小不同ノ細胞ヲ以テ充實セラレ諸處ヨリ血管ヲ中心トシ血管外膜ヨリ細胞ノ不規則ナル増殖ヲナセシ觀アリ

以上ノ所見ニヨリ頸部ノ粘膜炎腫ナルコトヲ知レリ

(三)大阪府東成郡住吉村 A T 四十二歳

血脈 何等遺傳ヲ證明セズ

幼時ノ狀況及ビ他病 特記スベキモノナシ

月經 初潮十六年ニシテ最近月經ハ本年六月上旬ナリ、爾來今日迄少量ノ出血持續セリ、五月迄ハ整調ニシテ約七日間持續ス、量ハ中等ナリ、月經時下腹部ノ疼痛ヲ訴フ、白帶下ハ中等度ナリ

婚嫁及ビ産褥 一男一女ヲ擧ゲ共ニ健存ス、二回共分娩ニ異常ナク産褥經過モ亦極メテ佳良ナリシト

主訴及ビ現病歴 最近月經以後ハ下腹部ニ疼痛ヲ訴ヘ緊張ノ感アリ、本年六月十四日來院診察ヲ乞ヘリ

現症 體格營養中等・皮膚蒼白・高度ノ貧血ヲ呈シ乳房ハ懸垂シ可ナリ其ク發育シ乳頭乳暈著色著シカラズ、之ヲ壓スルモ初乳及ビ乳汁ヲ漏ラサズ、脈搏正、數八十性實小、舌ハ白苔ヲ被リ口腔咽頭ニハ著變ヲ認メズ、心臓濁音昇變化ナク貧血性雜音著明ナリ、右肺炎ハ呼吸延長スレドモ水泡音ヲ聞カズ、其他聽診打診上ニ變化ヲ認メズ、腹部ハ少シク膨滿シ肝臟・脾臟・腎臟ヲ觸レズ、是等臟器ノ部域ニ於テ疼痛ナク下腹部即チ恥骨結合上部腹腔内ニ小兒頭大ノ可ナリ硬ク且ツヨク移動シ易キ圓形腫物ヲ觸ル之ヲ壓スルニ少シク疼痛ヲ訴フ、下肢ニ浮腫・知覺異常・膀胱筋痙攣等ナク膝蓋腱反射ハ普通ナリ、食慾普通、便秘・檢尿セシモ何等ノ病理的異常ヲ認メズ

内診上ノ所見 子宮ハ前傾後屈ノ位置ニアリ手拳大トナル、子宮ノ前壁ヨリ又手拳大ノ凹凸不正ナル硬固ノ子宮ト共ニヨク移動スル腫物ヲ觸ル、子宮附屬器及ビ隣接諸臟器ノ炎症其他ノ變化ナク子宮腔部ハ其大サ小ナルモ他ニ何等ノ異常ヲ認メズ、子宮口ヨリ漿液血性ノ液ヲ漏出ス、以上内外ノ所見ニヨリ間質性子宮筋腫ト診斷シ、子宮摘出ノ手術ヲ患者竝ニ患家ニ諭セシニ其後二日ヲ經テ入院セリ

入院後再三診察セシモ筋腫ト診斷シ身體ニ手術ニ對スル禁忌モ認メザレバ越ヘテ六月二十日余執刀開腹術ヲ行ヒ次デ子宮腔上部切斷術ヲ行ヒ之ヲ摘出セリ、此時骨盤内ノ臟器ニテ右方輸尿管ハ小指大トナリ右方子宮周圍ノ血管ハ擴張シ血栓ヲ以テ充塞セラレタリ、術後ノ経過普通ニシテ何等ノ異常ヲ認メザリシガ二十五日ニ至リ右下肢腫脹シ脈ハ細小頻數百三十乃至七十ナリ體温ハ三十七度八分ヨリ三十七度五分ノ間ニ弛張シ言語ハ次第ニ明瞭ヲ缺キ重聽ノ感アリ、視線ハ常ニ頭部上方ニ向ヒ心音ハ純ニシテ亢進シ呼吸音ハ一般ニ微弱トナリタルモ水泡音ヲ聽取セズ、打診上著變ヲ認メズ腹部ハ陥没シテ弛緩シ一般狀漸次不良トナリ越ヘテ二十七日ノ朝遂ニ不寐ノ轉機ヲ取レリ

摘出子宮ノ所見

肉眼的所見 子宮ハ小兒頭大トナリ表面滑澤ニシテ凹凸ヲ見ル殊ニ前壁ノ膨隆甚ダシ、前壁ヲ切斷スルニ筋層中ニ於テ大ナルハ雀卵大ヨリ小ナルハ粟粒大ノ表面膨隆セル灰白黃色ノ柔軟ナル圓形結節ノ多數ヲ認メタリ、更ニ所々膨隆スル部分ヲ切斷スレバ大小不同ナレドモ右同様ノ結節ヲ認ム、粘膜炎ハ少シク充血スレドモ肥厚セズ、前壁右側ノ子宮體内面ノ中央ヨリ小指大ノ「ポリープ」十個發生セリ、此「ポリープ」ハ一般ニ黒赤色ヲ呈シ尖端ニ於テ其ダシク之ヲ切斷スレバ黒赤色無構造ノ觀ヲナシ壓迫ニヨリ同色ノ血液標ノモノヲ出ス、此「ポリープ」ノ莖根部ヨリ右外方ニ子宮壁ヲ通ジテ制膜スレバ粘膜炎ノ内方約一仙迷内部ノ筋層ニ鳩卵大ノ纖維性組織ニテ包圍サル白黃色ノ周圍組織ヨリ少シク隆起セル圓形柔軟ノ腫物ヲ認ム、以上述べタル腫物ノ外子宮壁ハ一般ニ其性質硬クシテ纖維腫ニ觸ルルガ如シ

顯微鏡的所見 該子宮ヨリ「ポリープ」子宮體粘膜炎肉眼的變化ヲ認メザル部分・肉眼的變化ヲ認ムル部分・筋腫ノ疑ヒツ有セル部分ヨリ十數個ノ小片ヲ取り、チエンケル氏液硬化・チエロイチン包埋・十乃至十五ミクロンノ切片ヲ作り「マトキシリン」・エオジン染色、ヘマトキシリン・ワシキーン染色、アイゼンヘマトキシリン、フクシン、マロリー氏液染色等ヲ行ヒ検査スルニ次ギノ如シ

(一)粘膜炎 子宮粘膜炎ハ肥厚著シラカズ腺管ニ乏シク腺ト腺トノ距離遠ク表面ニ近キ腺腔ニハ血液ヲ含有シ腺ハ蛇行、腺壁ハ鋼鐵狀或ハ膠出

等ヲ呈スルコト殆ンドナク、腺細胞腔ニ粘膜上皮細胞ハ中央ニ濃染セル核ヲ有シ一層ニ排列スル低キ圓柱狀上皮細胞ヲ以テ掩ハル、間質組織中ニ圓形細胞浸潤ハ稀レニシテ間質組織細胞ハ粘膜表面ニ近キ所ニ於テハ細胞少シク大トナリ「プロトプラスマ」ニ富ミ筋層ニ近ヅクニ從ヒ次第ニ小トナル、表面ニ於テ出血瘻ヲ見ル

(二)「ゴリア」 根莖部ト尖端ニ近キ部ト中央トヲ鏡檢スルニ何レモ圓形或ハ泡狀ノ「プロトプラスマ」ニ富メル一調ノ核ヲ有スル細胞ニシテ各細胞間ハ中間組織ヲ以テ取り圍マレ所々ニ特ニ尖端ニ於テ出血甚ダシク血管壁ハ極メテ薄クシテ其多數ニ存在スルヲ見ル、管腔中ニ血液ヲ有ス

(三)子宮壁 肉眼上殆ンド病變ト認メザル部ニ於テモ周圍ト境界明瞭ナレドモ被囊ヲ有セザル圓形細胞集ヲ見ル、既ニ肉眼上病變部タルノ疑ヒヲ有セル部ニテモ前者ヨリ大ナル細胞集ヲ見ル、細胞ハ大小圓形ニシテ互ニ混入シ稍々大ナル集ニ於テ薄壁ノ血管ヲ認メ細胞間ニハ纖維ヲ存ス、更ニ筋層ヨリ續發ノ疑ヒヲ有セシ部ヲ檢スルニ周圍ハ核ニ乏シキ大ナル紡錘狀細胞ハ束狀ヲナシテ被囊ヲ作り明カニ子宮筋層ト區別サル、腫物ノ外部即チ被囊ニ近キ部分ハ小圓形ノ細胞密集群ニシテ輪狀トナリ中央ニ向ヒテ密集セル小圓形細胞ノ突起ヲ出ス、而シテ各細胞間ニ纖維ヲ證明シ又薄壁ノ小血管ヲ見ル、中央ニ於テ小圓形細胞突起間ニ狹長ニシテ兩端鈍ナル濃染核ヲ有セル細胞ノ密接セルヲ見ル、各細胞群ノ方向ハ一定セズ腫物ハ被囊ヲ有シ細胞ノ形狀排列等ニヨリテ筋層ヨリ肉腫變性ヲ來セシモノト想像スサレバ其肉腫變性ハ筋層ノ如何ナル組織ヨリ發生セシヤ、初メ説明ヲ與ヘシハ「Virchow」氏ニシテ氏ハ一定ノ部位ニ於テ細胞間質ノ増殖ニ起始セルモノトセリ、*Brech-Hirschfeld* 氏モ亦肉腫組織ヨリ發生スルモノナリト云ヘリ、*Kahn* 氏ハ血管ノ周圍ヨリ發生スルト云ヒ、*Kaylitz* 氏ハ筋腫細胞ガ直接ニ肉腫細胞ニ移行スルヲ見タリト云フ、氏ハ筋腫細胞ガ直接其形ヲ變ジ短圓形トナリ次デ鈍圓ヲ呈セル細胞ニ變ズルモノナリトセリ、*Warrack* *William* 氏ハ筋腫細胞設ニ贅スレドモ *Kaylitz* 氏ガ云フガ如ク著明ニ證明セラルルモノニ非ラズシテ筋腫細胞ハ何處ニ始マリ、肉腫細胞ハ何處ニ終ルヤハ多クノ場合ニ於テ明言シ得ザルモノナリト云ヘリ、*Virchow* 氏ハ非常ニ緻密ナル觀察ト研究ニヨリテ筋腫細胞設ニ服從セリ、其後 *Conner*、氏等ニヨリテ折衷說出テ一部ハ筋細胞ヨリ一部ハ間質組織ヨリ變性シ來ルモノナリトセリ、今余等ノ得タル例ニ於テハ何レノ說ニ服從スベキモノナルヤ淺學素ヨリ之ヲ列ズル事能ハザルモ腫瘍細胞ノ群集セル周圍ノ胞集ハ筋纖維ト何等全ク關係ナキガ如ク筋纖維ハ全ク周圍ニ壓迫セラレタルノ惑アリ、各個筋纖維ノ腫瘍細胞ニ移行スルノ狀態ヲ見出サズ筋纖維ハ全ク

健全ノ狀態ヲ呈セリ、而之ナラズ所々ニ筋纖維ノ間質中ニ於テ間質細胞ノ變形狀態ヲ見ル、以上ノ所見ヨリ考フレバ吾人ノ實驗セシ場合ハ間質組織ノ變性ニヨルト見ルヲ以テ適當ナランカ

子宮ノ腫瘍ニテ全抽出ヲ施セシ者ノ中ヨリ七十例ノ組織的検査ヲ行ヒ以上三例ノ肉腫ヲ證明セリ即チ約四〇ノ肉腫ヲ發見セルノ比ヲ示シ泰西諸家ノ報告ニ略ボ一致ス亦以テ本腫瘍ノ甚ダ稀有ナル腫瘍ニ屬スベキモノニアラザルヲ想像スルニ難カラズ

婦人科診斷及治療學 前編索引

い、る	陰核腫	三〇、三六	は	培養基ノ定性法	二四
一ミリグラム分時	陰門肉腫	四九二	漏莖	培養基ノ製法	二二
一ミリグラム分時	陰門癌腫	四九〇	漏斗骨盤腔帶	敗血性穿孔性腹膜炎	五三
一個腔	陰門結核	四四四	蕁麻疹	排出口	三
一H	陰門血腫	四四三	ロキタンスキー氏	發育濾胞	三三
一X	陰門硬變症	四四六	ロストホルン氏	麥角	四三、四四
所謂ワクチン療法ノ原理	陰門瘻痔症	四四六	ローゼンタール氏	麥角越費斯	四三、四四
所謂慢性質質炎	イトロール	四四六	ロイコフェルマンチン	包埋法	一六、一八
特瀨博士	イチホ類	四四三		繃帶	一六
今瀨博士	イワギク	四四三	巴豆油	繃帶材料	一六
池田長太郎氏	イヒチオール	四四三	場所ノ撰定	防菌藥	一六
陰核	イスチチン	三九五	破傷風血清	防護室	二一
陰核包皮			激疣	膀胱	二一
陰核動脈	ろ		激毒ニ關スル血清反應	膀胱知覺過敏症	二一
陰核繫帶	濾胞症	三七	激毒ニ關スル血清診斷	膀胱腔靜脈叢	二一
陰核深部動脈	濾胞液	三七	激毒ニ關スル血清診斷及其療法	膀胱ノ疾病	二一
陰核脊側動脈	濾胞莖	三七	一般	膀胱子宮窩	二一
陰核脊部靜脈	濾胞性腔部ノ肥厚	三七	激毒性陰門炎	膀胱靜脈叢	二一
陰核脊部靜脈	濾胞性肥厚	三七	激毒性潰瘍	膀胱軟膏	二一
陰核神經	濾胞性肥厚	三七	胚胎	硼砂	二一
陰核神經知覺鈍麻法	濾胞分析	三七	胚胎腺及其排泄管ノ發生	硼砂カルミン	二一
			胚胎腺ノ原基	放線狀冠	二一

婦人科診斷及治療學索引

ツワイフェル氏	四九六、四九七	内陰部靜脈	五七	卵巣ノ位置	三	ラヂオゲンコンプレツセ	二九〇
ツアンゲマイステル氏	四九一	内陰部	六九七	卵巣ノ組織的構造	三	ラヂオゲンシユラム	二九〇
ツモール氏	四八四	内精系動脈	三	卵巣高	三	ラミナリヤ杆	七九
熱氣療法装置	二五九	内生殖器ノ双合接離法	二九三	卵巣固有靭帯	三、六	無蛋白質培養地	一一四
熱性灌漑注法	二五九	内精	三	卵巣炎喇叭管炎	三〇	無痛恒毒	四四〇
熱性洗滌注法	二五九	中島精夫氏ノ製品タル「グア	三	卵巣提昇靭帯	三〇	無月經	四四〇
尿防腐藥	三八二	ルチン	四〇	卵巣靜脈	三	無傳染	四四〇
尿ニヨル妊娠診斷法	三三六	軟球管	二六五	卵巣靜脈	三	無刺戟的温度	三三三
尿道下裂及尿道上裂	三三六	軟性下垂	四〇、四一	卵巣培養基	一三	ムスカリン	三三三
尿管	三三六	軟線	二六五	卵巣周圍腔	三	雨浴	三六、三三
年齢ニヨル輸卵管ノ變化	四	ナイセル氏	二六五	卵巣	三	ウイリヤムス氏	三六
結膜肉腫	五七、五七	ナンネス氏	二六五	卵巣	三	ウイルクケンス氏	四九一
結核菌染色法	四九	ナルコボン	二六五	卵巣	三	ウインテル氏計算式	四九七
結核菌染色法	四九	ナルコチン	二六五	卵巣	三	ウインテル氏	四九七
ネオカイン	三九	痲疹菌染色法	一三	卵巣	三	ウキルヒヨウ氏	五九
ネオサルヴルサン	三九	喇叭管靭帯	四	卵巣ニ於ケル神經	三	ウキルデルリッヒ氏	二八
ネオサルヴルサント其使用	三九	須瘻	四	卵巣内ノ神經節細胞	三	ウキルデルリッヒ氏	二八
ネオサルヴルサンノ副作用	三九	卵巣	三	卵巣内ノ神經節細胞	三	ウキルデルリッヒ氏	二八
内陰部動脈	五、五	卵巣ニ於ケル神經	三	卵巣内分細胞染色法	一六	ウオルフ氏管	四八
		卵巣動脈	三			ウオルフ氏管ノ排液管	四八
		卵巣内ノ神經節細胞	三			ウエルトハイム氏	四九、五〇
		卵巣内分細胞染色法	一六			ウエルトハイム氏及アンム氏	四九、五〇

手術	四七	過敏性及アナフィラキシー	四三	頑固ノ子宮出血	二五、二七	タモール消毒法	二八
ウエトハイム氏治療率	四七	腔洞ノ構成	四六	緩下劑	三七		
ウエルネル氏	五〇、五二	空氣及點滴傳染	一九	管狀瘻	四六		
ウエーネルト氏電度計	二二	外陰部	一	クロバツク氏	四六、五六		
ウエーネルト氏電流斷續	二二	外陰部ニ於ケル皮膚病	四三	クロックネル氏	四六		
器	二七	外陰部動脈	四	クロムベツヘル氏	四六		
ウンナ、パッペンハイム氏法	九	外陰部象皮病	四八	クロムベツヘル氏	四六		
ウンナ氏染色法	一〇	外陰部ノ疾病	四八	クロマフキネ組織	一〇		
ウロトロピン	三六、三二	外陰部ノ腫瘍	四八	クリストフォレッツ氏	五二		
ウワウルジ葉	三〇	外陰部紅門完全閉鎖	四八	クルレン氏	四八		
ウエロナル	三六	外陰部炎及バルトリン腺	四三	クルーケンベルグ氏	四七、五七		
ウエロナルナトリウム	三六	炎	四三	潰瘍	五七		
の		外陰部瘻痒症	三七八	クレーニヒ氏	一四三		
囊腫	四九、四〇	外陰部畸形	四三	クレーデル氏	四六		
ノイロチール	三九	外陰部慢性潰瘍	四七	クレイメル氏	五二		
ノウオカイン	三九	外陰部皮膚ノ消毒	一九三	グッセロウ氏	五二、五七		
く		外尿道括約筋	五	グライン氏	五二		
喀癆仿謨	二六	外陰部動脈	四	グラム氏染色法	一三、二三		
顆粒層	三	外陰部瘻	五	ランドラット氏	四九		
顆粒膜	三	外陰部瘻	五	クロロフォルム	三九		
顆粒性肺炎	四三	外陰部瘻	五	クロロエチール	一六、三七		
臥浴	三三	外陰部瘻	五	クロロエチール	一六、三七		
過マンガン酸加里溶液	三六	外陰部瘻	五	グリコノール	二六、二八		
		外陰部瘻	五	グリコノール	二六、二八		
		外陰部瘻	五	クレゾール	四三		

吸入麻酔薬	五七九	悪性腫瘍ノ「レントゲン」放	四五〇	アロイ	四三三	産褥子宮壁血管一般所見	二七
球海綿體筋	五三	悪性腫瘍ノ「ラヂウム」メソ	四五一	アニリン水、フクシン液ト「エ	二〇〇	櫻根博士	三〇四
球管防護箱	三七二	射療法	四五一	オレット液	二〇〇	ザイフェルト氏	三〇四
球管調節装置	三七〇	トリウム「療法」	四五一	アニリン水、フクシン液ト「エ	二〇〇	ザウナル氏	三〇四
球狀前庭動脈	五七	悪性絨毛膜上皮腫	四二二	アニリン水色素液	二一九	サリチル酸ナトリウムカフ	三〇三
丘疹性潰瘍	五七四	悪性腫瘍	四二二	アペリール	三〇三	エイジ	三〇三
急性陰門炎	四七	浅田氏補綴法	三八	アトロヒネ	三〇三	サリチル酸ナトリウムカフ	三〇三
急性陰門炎ノ療法	四七一	聖法	三七	アトロヒネノ腸管ニ於ケル	三〇三	オプロミン	三〇三
急性レントゲン皮膚炎	四七一	安息香酸ナトリウムカフエ	三七	作用	三〇三	サリチル酸フェノステグミ	三〇三
急性熱性傳染病ニヨル陰炎	四七二	イン	三七	アドレナリン	三〇三	サルベルサン療法	三〇三
急性子宮内膜炎	三九	按摩法	二九	アチエトン	三〇三	サビナ	三〇三
急性子宮實質炎	三九	アルベルス、シエーンベルグ	二九	アルコホル	三〇三	サビナ	三〇三
急性瀰漫性陰炎	四七	氏法	二七	アダリン	三〇三	サビナ	三〇三
キユーネ氏石炭酸メチーレ	一九	アルフェルド氏ノ熱湯ア	二七	アダモン	三〇三	サビナ	三〇三
ンブラウ液	一九	ルコホル消毒法	二八	三酸液染色法	三〇	サビナ	三〇三
キエストネル氏	四六、四六	アマン氏	二八				
ギムザ氏法	三三	アデルハルデン氏	二八				
ギムザ氏染色法	三三	アデルハルデン氏妊娠診	二八				
キーンベック氏	三七	斷法	三一				
キーンベック氏配量計	三七	アショッフ氏	三一				
キユリト	二二	アスコリ氏	二七				
キセロフォルムガーゼ	二八	アンドレルソン氏	二二				
輸入股管ノ結紮	五〇						

輸尿管	五二、五三	ミユルレル、フオルモール液	五	子宮腔部ノ組織	九
輸卵管漏斗部	四	ミユルレル氏液	五	子宮腔靜脈叢	九
輸卵管腹股部	四	ミリキユリ	二八	子宮及陰壁ニ於ケル神経節	三
輸卵管峽部	四			子宮及附屬器ノ全別出術	四九
輸卵管子宮部	四			子宮附屬器ノ慢性炎症性腫	二〇
輸卵管前線部	四			子宮活胎	一〇
癒着性陰炎	五五			子宮下部	一四、一七
有痛性陰毒	五五			子宮痛	四四
有色瘰	四一			子宮痛腫ニ根治的手術	五〇
	四一			子宮痛腫ノ診斷及ニ鑑別	四七
	四一			子宮ヨリノ靜脈	五
	四一			子宮體	八、二四
	四一			子宮體痛	四六、四八
	四一			子宮體痛ノ診斷	四六、四八
	四一			子宮體ノ組織	五八
	四一			子宮體ノ粘膜	二〇
	四一			子宮體部ノ粘膜	二
	四一			子宮體部ノ肉腫	一一
	四一			子宮粘膜ノ肉腫	五七、五八
	四一			子宮粘膜ノ週期性變化	二二
	四一			子宮内蓄膿	五九
	四一			子宮内經血蓄積	五九
	四一			子宮運動	三六

子宮運動ト藥物トノ關係	四〇	子宮鏡ノ使用	七二	手術ニ對スル一般ノ準備	一八五	神經節纖維	三六
子宮ノ二分法	一四一	子宮峽部ノ閉塞	一八	手術ノ乾燥不充分ナル場 合ニ於ケル創傷部ノ排膿 裝置	二〇六	神經節細胞染色法	一〇五
子宮ノ組織	九	子宮筋腫	二七	手術部域ノ開放	一九	神經節前纖維	三六
子宮ノ擴張及癒診	七九	子宮緊縮藥	四二	手術不能ノ癌腫ニ對シ該療 法	二九	浸潤性潰瘍	四〇
子宮ノ癒診	五〇	子宮疾患	四四	手術後ニ來ル肺炎ノ豫防 ニ療法	二二	浸潤性多形細胞性上皮圓柱 癌	四七
子宮外妊娠ノ破裂	一九	子宮實質炎	三七	手術後ニ來ル膀胱炎ノ豫防	二二	深浸會陰橫筋	四七
子宮外妊娠ノ流産	一九	子宮靜脈	三九	手術後ノ疼痛	二二	植物性下劑	三五
子宮外胎炎	二九	子宮消息子	四九	手術前ニ於ケル患者ノ準備	二八	植物性神經系統 植物性神經系統ト藥物	三五
子宮外胎炎性及ビ骨盤蜂窠	二九	處女及未產婦子宮血管ノ一 般所見	四六	種々ノ濃度ノ「アルコホル 製法	二八	食鹽泉	三〇
織炎性滲出ノ吸收期	二六	處女膜	四四	絨毛肉腫	二八	觸診	三〇
子宮腔	二六	處女膜瘻	四四	絨毛上皮ノ癌腫變性	二八	上下膀胱脈	三〇
子宮頸部痛	二六	實性癌	四六	眞菌體	二八	上下腎神經節	三〇
子宮頸管ノ肉腫性膠樣腺癌	二六	實性癌	四六	眞正癩癬症	二八	上部脊髄硬膜外腔ニ於ケル 麻醉法	三〇
子宮頸管ノ粘膜炎	二六	實性癌	四六	人體局所皮膚ノ堪ヘ得ベキ 空氣ノ最高溫度	二八	上肢尿管動脈	三〇
子宮頸管痛	二六	實性癌	四六	人工カルス泉鹽	二八	上下下血腫	三〇
子宮頸部神經節	二六	實性癌	四六	腎臟炎	二八	昇膿灌注法	三〇
子宮交感神經	二六	實性癌	四六	神經軸染色法	二八	笑氣	三〇
子宮後部ノ血腫	二六	實性癌	四六		二八		三〇
子宮底	二六	實性癌	四六		二八		三〇
子宮惡性疾患ノ鏡檢診斷	二六	實性癌	四六		二八		三〇
子宮惡性腫瘍ノ診斷及療法	二六	實性癌	四六		二八		三〇
子宮三分法	二六	實性癌	四六		二八		三〇

訂正 婦人科診断及治療學 前編 正誤表

頁	行	誤	正
四〇	九	Hymen semihians 成熟濾胞中ニヨリテ	Hymen semihians 成熟濾胞中ニアリテ
四一	三	囊腫及ビ血腫ヲ有スル Epoothoron, Nebenstocck	囊腫及ビ血腫ヲ有ス Epoothoron, Nebenstocck
四二	一〇	Glykogenfarbung	Glykogenfarbung
四三	七	フクシシ液ハエールリッヒ氏液 之ヲ酒精ニテ温メ	フクシシ液ハエールリッヒ氏液 之ヲ酒精ニテ温メ
四四	一五	アニリン水、色素液染色法 スピロヘーテ、パルリダ	アニリン水色素液染色法 スピロヘーテ、パルリダ
四五	二	生理的食鹽水ノ一仙米突ヲ 少量ノ鹽類ヲ投ジ	生理的食鹽水ノ一〇〇〇ccヲ 少量ノ鹽類ヲ投ジ
四六	九	外生殖器及ビ子宮ニ分佈ス 自律神經系統ニ對シテ	外生殖器及ビ子宮ニ分佈ス 第二外ノ自律神經系統ヲ總括シテ
四七	一〇	僅カニ肝臓 皮膚ニ於ケル腺及ビ血管ニ	僅カニ肝臓 皮膚ニ於ケル五毛筋及ビ内臓ノ血管ニ
四八	一〇	熱性腫注法ハ	熱性腫注法ハ
四九	一四	白金	白金
五〇	一五	金	金
五一	一五	此ハ厚サ ^{5/10} mmノ銀 容レタル ^{5/10} mm厚ノ銀管	此ハ厚サ ^{5/10} mmノ銀 容レタル ^{5/10} mm厚ノ銀管
五二	一五	殺菌セ共口ル燻ニ入レ	殺菌セ共口ル燻ニ入レ
五三	二	更ニ〇・五%ノ石炭酸ヲ通シ 全量約五〇〇立方仙送突トシ	更ニ〇・五%ノ石炭酸ヲ通シ 全量約五〇〇立方仙送突トシ
五四	一六	最小限量ハ〇・一mgニシテ	最小限量ハ〇・一mgニシテ
五五	一六	パルリダ	パルリダ
五六	一六	得ベシト	得ベシト
五七	一七	第六十三圖ノ如キ Kolpitis (Vaginitis)	第六十四圖ノ如キ Kolpitis (Vaginitis)
五八	一〇	藤村元張氏ニヨリテ	藤村元張氏ニヨリテ

明治四十四年十月十八日初版印刷
 明治四十四年十月二十一日再版發行
 大正二年十二月十五日三版發行
 大正五年七月三日第四版印刷
 大正八年九月十一日第四版發行
 大正八年九月十五日第四版發行

婦人科診斷前編奧附

正價金六圓

著者 緒方十右衛門

東京市本郷區龍岡町三十四番地

發行者 鈴木幹太

東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

印刷者 加藤晴吉

右同所

印刷所 正文舍

電話小石川三六五〇番



發行所

東京市本郷區龍岡町三十四番地
 電話下谷四六一三八番
 振替東京六三三八番

南山堂書店



2. 4/05
70

✽ 肆 書 捌 賣 ✽

本郷區湯島切通坂町
日本橋區通リ三丁目
本郷區春木町二丁目
同 春木町三丁目
同 龍岡町
同 湯島切通坂町
神田區鍛冶町
本郷區本富士町
同
同 龍岡町
同
同
同 湯島切通坂町
同
神田區表神保町
京橋區元數寄屋町
同 尾張町
芝區愛宕町
千葉縣千葉町
同
同
大阪市心齋橋筋一丁目

南江堂書店
丸善書
半田屋支店
南江堂支店
吐鳳堂支店
金原書
朝香屋支店
克誠堂支店
文光堂支店
朝陽堂支店
根津書
文榮堂支店
宮澤書
富倉書
東京堂支店
北隆館支店
東海堂支店
明文館支店
明文館支店
松田屋支店
寶文堂支店
松村九兵衛

大阪市博勞町
同 中之島玉江町
同 西區江戸堀南三丁目
名古屋市中區榮町
同 中區老松町
同 中區三藏町四丁目
京都市寺町通
同 寺町通
同 三條通
同 丸太町通
長崎市引地町
熊本市新二丁目
同 洗馬町
鹿兒島市仲町
岡山市東中山下三丁目
同 中山下
福岡市博多上西町
金澤市片町
同 廣坂通
同
仙臺市國分町
新潟市古町通

丸善書
角屋書
荒木書
丸善書
大竹書
三輪書
南江堂支店
若林茂一郎
九善支店
國井書
集榮堂支店
長崎次郎
芹川書
谷村書
文江堂支店
渡邊書
丸善書
宇都宮書
いろみや書
内田書
丸善支店
萬松堂支店